博多 192

― 博多遺跡群第213次調査報告 ―

２０２３

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1480集

博多 192

― 博多遺跡群第 213 次調査報告 ―

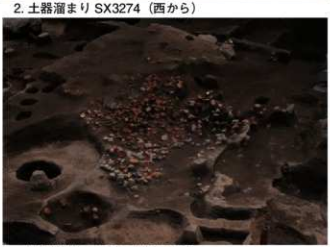
2023

福岡市教育委員会

1. 窯跡検出状況（西から）

2. 土器溜まり SX3274（西から）

3. 基壇遺構 SX2487 検出状況（西から）



4. 基壇遺構 SX2487（北東から）

5. 基壇遺構土層断面（西から）

図 24-146

図 55-397

図 50-247

図 86-1

図 88-4

図 88-5

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。そのため市内には、数多くの歴史的な遺産が存在します。しかし、近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、ビジネスホテル建設にともなう博多遺跡群第213次発掘調査について報告するものです。今回の調査では古代・中世の遺構をはじめ、幕末～明治にかけて博多人形の源流をつくった「中ノ子家」の窯跡を検出することができました。これらは博多遺跡群における各時期の集落の形成や広がりを知る上での手がかりとなるとともに、博多の伝統工芸の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、ダイワロイヤル株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長　石橋　正信

例　言

1. 本書はダイワロイヤル株式会社が実施した博多区冷泉町68番1、75番3、75番4、76番、77番、78番、79番、114番、114番2におけるビジネスホテル建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成29・30年度に実施した博多遺跡群第213次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位はすべて座標北である。
3. 調査は4面設定し、検出した遺構については1面が1001～・2面が2001～・3面が3001～・4面が4001～から始まる通し番号を付した。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は欄列をSA、建物をSB、住居をSC、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、墓SO、悪桓をST、不明遺構をSXと略号化している。
4. 本書で使用した遺構実測は松﨑友理、加藤良彦、坂口剛毅、名取さつき、藤野雅基、熊埜御堂早和子（当時山口大学）が作成した。
5. 本書で使用した遺物実測は松﨑、加藤、神啓崇、三浦慈奏、佐藤浩司、山崎龍雄、井上加代子、大庭智子、熊埜御堂和香子、平川敬治、山本麻里子が作成した。
6. 製図は松﨑、加藤、佐藤、山本による。
7. 本書で使用した遺構および遺物写真は松﨑、加藤、佐藤、熊埜御堂が撮影した。
8. 本書の執筆・編集は松﨑、加藤、佐藤が行った。「博多213次出土の近世窯業関連遺物について」は太宰府市教育委員会の山村信榮氏にご寄稿頂いた。窯跡や人形の年代観等に関しては本文の記載と依拠する資料が異なるため統一していない。
9. 本書に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理されるので活用されたい。
10. 中ノ子喜重氏・基高氏をはじめ中ノ子家の方々には調査中に窯や人形、中ノ子家の歴史についてご教示頂いた。
また、以下の方々には調査・整理の際にご指導、ご協力頂いた。（五十音順・敬称略）
井形進・江上智恵・木立雅朗・木村純也・鳴谷和彦・杉山富雄・田中克子・永見秀徳・山村信榮・山本信夫

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査組織 …… 1
Ⅱ．立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 4
　1．調査の概要 …… 4
　2．遺構と遺物 …… 20
　　（1）近世・近代 …… 20
　　（2）中世 …… 51
　　（3）古代 …… 83
　　（4）古代以前 …… 96
　　（5）特殊遺物 …… 107
Ⅳ．まとめ …… 113
博多213次出土の近世窯業関連遺物について …… 119

挿 図 目 次

図1　博多遺跡群内調査地位置図（1/8,000） …… 3
図2　第213次調査地点位置図(1/2,000) …… 5
図3　各調査区配置図(1/200) …… 6
図4　土層断面模式図（1/40） …… 7
図5　Ⅰ区北東隅壁面土層図（1/40） …… 7
図6　近世・近代遺構配置図（1/200） …… 9
図7　中世Ⅰ期遺構配置図（1/200） …… 12
図8　中世Ⅱ期遺構配置図（1/200） …… 13
図9　中世Ⅲ期遺構配置図（1/200） …… 14
図10　中世Ⅳ期遺構配置図（1/200） …… 15
図11　古代遺構配置図（1/200） …… 17
図12　古代以前遺構配置図（1/200） …… 19
図13　検出窯跡配置図（1/150） …… 21
図14　窯7実測図（1/40） …… 22
図15　窯8実測図（1/40） …… 23
図16　窯4実測図（1/40） …… 25
図17　窯1実測図（1/40） …… 26
図18　窯2実測図（1/40） …… 27
図19　窯3実測図（1/40） …… 28
図20　窯5実測図（1/40） …… 29
図21　窯関連遺物実測図（1/3、1/4） …… 31
図22　人形廃棄土坑出土遺物実測図その1(1/4) …… 32

図 23　人形廃棄土坑出土遺物実測図その 2(1/3、1/4) ……34
図 24　土坑、井戸出土遺物実測図その 1(1/4) ……36
図 25　土坑、井戸出土遺物実測図その 2(1/4) ……38
図 26　土坑、井戸出土遺物実測図その 3 (1/2、1/4) ……40
図 27　土坑、井戸出土遺物実測図その 4 (1/2、1/4) ……41
図 28　溝出土遺物実測図 (1/4) ……42
図 29　灰原、鋤取り時、撹乱土坑出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……43
図 30　包含層及び出土位置不明の遺物実測図 (1/4) ……45
図 31　表土及び出土位置不明の遺物実測図 (1/3、1/4) ……46
図 32　ガラス製品実測図 (1/1、1/2) ……47
図 33　SE2129・2448・3132 実測図 (1/80) ……51
図 34　SE2129・2448・3132 出土遺物実測図 (1/4) ……52
図 35　SK2001・2048・2060・2070・2091・2232・2443・3198・3322 実測図 (1/50) ……53
図 36　SK2001・2048・2060・2070・2091 出土遺物実測図 (1/4・1/3) ……54
図 37　SK2232・2443 出土遺物実測図 (1/4・1/5) ……56
図 38　SR2005 実測図 (1/40) ……57
図 39　中世Ⅰ期出土遺物実測図 1 (1/4) ……58
図 40　中世Ⅰ期出土遺物実測図 2 (1/4・1/3・1/5) ……59
図 41　SE2189・2199・2257・2331・2063 実測図 (1/80) ……61
図 42　SE2189・2199・2257・2331 出土遺物実測図 (1/4) ……62
図 43　SK2010・2049・2317・3030 実測図 (1/50・1/80) ……63
図 44　SK2010・2049・2063・2317 出土遺物実測図 (1/4) ……64
図 45　SD1320 下包含層出土遺物実測図 (1/4) ……65
図 46　中世Ⅱ期出土遺物実測図 (1/5・1/4・1/3) ……66
図 47　SE2178・2221・2381・2393・2464 実測図 (1/80) ……68
図 48　SE2178・2221・2381・2393・2464 出土遺物実測図 (1/4・1/5・1/3) ……69
図 49　SK2026・2084・2085・2125・3387 (1/80)・2089・2335・2371 (1/50) 実測図 ……70
図 50　SK2026・2084・2085・2089・2215 出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/5・1/8) ……71
図 51　SK2335・2371・2457 出土遺物実測図 (1/4) ……73
図 52　SX2487 (2586)・2457・SA2593・SD1320・1398・2451 実測図 (1/100・1/200・1/80) ……74
図 53　SD1320 出土遺物実測図 1 (1/4・1/5) ……76
図 54　SD1320・1398・2451 出土遺物実測図 (1/4) ……78
図 55　中世Ⅲ期出土遺物実測図 (1/4・1/3) ……80
図 56　SE2382 実測図 (1/80) ……81
図 57　SK2059・2147・2201 実測図 (1/50) ……81
図 58　SK2059・2147・2201・SE2382 他出土遺物実測図 (1/4・1/5・1/3) ……82
図 59　SK4110・4087 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4) ……83
図 60　SC3210 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) ……84
図 61　SC4137・4163・4177 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) ……85
図 62　SE3058・3059 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) ……86
図 63　SE3063・3004 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4・1/3) ……87

図 64　SE3034・3166 実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）……88
図 65　SK3091 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……89
図 66　SK3227 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……90
図 67　SK3229 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……90
図 68　SK4064・4115 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……91
図 69　SK3047・3048 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……92
図 70　SK3182・3274 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……93
図 71　SK3259・3260・3342 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……94
図 72　SO2136 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……95
図 73　古代出土遺物実測図 1（1/4）……96
図 74　古代出土遺物実測図 2（1/4・1/2）……97
図 75　SK4062 実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）……98
図 76　SK4077・4130・4114 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……99
図 77　SP4005・SD4017 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……99
図 78　古墳時代出土遺物実測図 1（1/4）……100
図 79　SC3230・4070 実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）……101
図 80　SK4085・4144 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……101
図 81　SK4026・4031・4055・4053・4060・4113 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）‥102
図 82　ST4143・ST3055 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）……103
図 83　弥生時代・縄文時代出土遺物実測図（1/4）……105
図 84　古代以前出土石製品実測図（1/3）……106
図 85　古代以前出土玉製品実測図（1/1）……106
図 86　薩摩塔実測図（1/3）……107
図 87　おはじき状土製品実測図……108
図 88　青銅製品および鉄製品実測図（1/1・1/2・1/3）……109
図 89　出土銅銭 X 線写真（1/1）……111
図 90　窯 4 復元模式図（1/60）……113
図 91　窯跡変遷想定図……114
図 92　調査区Ⅲ期と 172 次第 1 面全体図（1/400）……115
図 93　古代特殊遺物出土分布図……117
図 94　弥生時代出土遺物分布図……118

表　目　次

表 1　出土遺物観察表……48~50
表 2　出土銅銭一覧表……112

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	第 213 次	遺跡略号	HKT-213
調査番号	1710	分布地図図幅名	49　天神	遺跡番号	0121
申請地面積	1138.78㎡	調査対象面積	1,000㎡	調査面積	871㎡
調査地	福岡市博多区冷泉町 68 番 1、75 番 3、75 番 4、76 番、77 番、78 番、79 番、114 番、114 番 2			事前審査番号	28-2-718
調査期間	平成 29（2017）年 6 月 5 日～平成 30（2018）年 6 月 5 日				

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、ダイワロイヤル株式会社より申請された福岡市博多区冷泉町68番1、75番3、75番4、76番、77番、78番、79番、114番、114番2におけるビジネスホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年11月21日付で受理した。申請面積は1138.78㎡、受付番号は28-2-718である。

申請地は博多遺跡群の南側に位置する。当地は中世の集落跡が広がる場所であると同時に、幕末～明治にかけて博多人形の源流をつくった「中ノ子家」の地所にあたる。そのため、埋蔵文化財課事前審査係は試掘調査を実施し、地表面下約145cmで遺構面が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される1000㎡を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査はダイワロイヤル株式会社と福岡市との間で委託契約が締結され、平成29年6月5日に着手、平成30年6月5日に終了した。資料整理および報告書作成については令和元～4年度に行うこととなった。

2. 調査組織

調査委託　ダイワロイヤル株式会社

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：平成29・30年度　整理報告：令和元～4年度）

調査総括	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	常松　幹雄（平成29年度）
			大庭　康時（平成30年度）
			菅波　正人（令和元～4年度）
		調査第1係長	吉武　　学（平成29～令和2年度）
			本田浩二郎（令和3・4年度）
	文化財活用課	管理調整係	松尾　智仁（平成29・30年度）
			松原加奈江（平成31～令和2年度）
			井手　瑞江（令和3年度）
			内藤　　愛（令和3・4年度）
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎（平成29～令和2年度）
			田上勇一郎（令和3・4年度）
		主任文化財主事	池田　祐司（平成29年度）
			田上勇一郎（平成30～令和2年度）
			森本　幹彦（令和3・4年度）
		文化財主事	中尾　祐太（平成29年度）
			朝岡　俊也（平成30～令和元年度）
			山本　晃平（令和2・3年度）
			三浦　悠葵（令和4年度）
発掘調査	埋蔵文化財課調査第1係	文化財主事	松﨑　友理
			加藤　良彦

Ⅱ．立地と環境

博多遺跡群は玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東には江戸時代に開鑿された石堂川（御笠川）、南は石堂川の開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画される。博多遺跡群の立地する砂丘地形は南から「博多浜」と「息浜」に分けられ、博多浜はさらに二列の砂丘に分けられる。

博多遺跡群内では博多浜の南側の砂丘で検出された弥生時代前期後半の集落、甕棺墓が遺構の初現例である。古墳時代には集落が砂丘面上に広範囲に展開をみせ、前方後円墳や方形周溝墓が出現している。5 世紀代には集落の規模が縮小するが、6 世紀代に集落は再び盛行を見せる。古代に入ると、九州の政治・軍事的中心地となる大宰府が設置され、博多湾岸には対外交渉の拠点として筑紫館、鴻臚館が設置された。大宰府から水城を通る二本の官道が整備され、西側の官道は鴻臚館へ、東側の官道は博多へと繋がっていた。博多遺跡群内に官衙が設置されたという記録は認められないが、博多浜の南側の砂丘では石帯・銅製帯金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝銭・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が出土し、正方位を採る方形の区画溝が規格性をもって検出されることから大宰府関連の官衙域が想定される。平安時代後期になると対外貿易の管理は中央政権の直接的なものではなく、大宰府を通じての管理へと移行する。11 世紀には宋商人らの居留が本格的に始まり、「博多津唐房」の形成が始まる。11 世紀後半には埋め立てによって居住域が拡大し、貿易陶磁器などが多数出土することから貿易の流通形態が確立したことがうかがえる。12 世紀末から 13 世紀前半にかけては、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人の援助のもとに、相次いで建立され、周辺の都市化が急速に進行する。鎌倉時代には、1274（文永 11）年の文永の役、1281（弘安 4）年の弘安の役という二度にわたる元寇により、博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、息浜には防塁が築かれ、博多浜には鎮西探題が設置される。これにより博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。13 世紀末から 14 世紀初めには、博多の町中では道路の整備が行われ、必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、博多の街区の整備が進められている。

室町時代に入ると幕府による九州探題の設置と勘合貿易が開始され、博多には商人たちによる自治都市が形成される。勘合貿易は大きな利潤を生み出し、諸大名の支配権争奪のための戦乱が繰り返され、度重なる戦火に見舞われる。この時期に比恵川を石堂川として付け替え、比恵川の旧河道は房州堀として整備され、博多は周囲から独立した防御性の高い都市になった。1586 年には薩摩の島津氏によって博多の町は焼き払われてしまうが、その翌年に豊臣秀吉によって復興する。豊臣氏の太閤町割によって鎌倉時代以降続いていた博多の街区や道路はほぼ廃止され、長方形街区と短冊形地割で再整備される。この段階で中世都市博多から近世都市博多として再生された。日本最大の国際貿易都市として繁栄していた博多であったが、江戸時代の鎖国政策により国際貿易都市としての役割は長崎へ移り、一城下町・商業都市博多として明治を迎える。

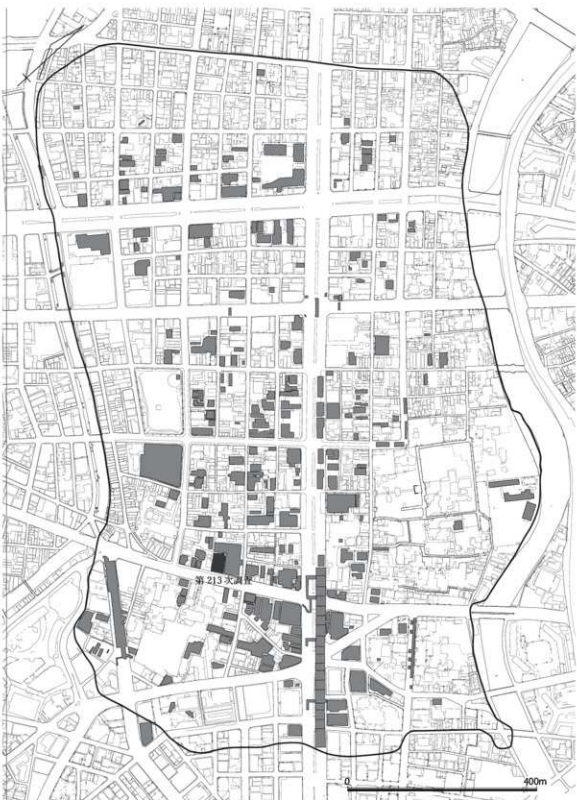


図1　博多遺跡群内調査地位置図（1/8,000）

Ⅲ．調査の記録

1. 調査の概要

本調査地は博多遺跡群の範囲の南西に位置し、調査地の南側は国体道路に面する。博多遺跡群の立地する砂丘地形は南から「博多浜」と「息浜」の２つに分けられ、「博多浜」はさらに２つの砂丘列に分けられるが、本調査地はこの「博多浜」の南側砂丘列の北西側に位置する。本調査地の現地表面の標高は5.0~5.2m 前後であり、北側にかけて緩やかに傾斜している。本調査地の東隣では第172次調査が行われており、遺構面の設定など参考にした。

ビジネスホテル建築にともなう発掘調査は平成29年６月５日に着手し、５日~10日に表土の掘取りを行った。６月５日にはシートパイルを打ち込む際に見つかった暗渠の全形を検出し、写真での記録を残した。調査は排土置き場の関係上、３転して行うこととし、調査地北側の約600㎡をⅠ区、南東側約200㎡をⅡ区、南西側約200㎡をⅢ区と設定した。本調査地は幕末から昭和初期にかけて博多人形の本流を作った「中ノ子」の地所であったことが知られており、表土剥ぎの初日から素焼き人形の破片やその型が出土し、Ⅰ区西側では焼土の広がりが確認された。調査地の現状が平面駐車場であり、高層の建築物による破壊を受けていないことから、「中ノ子」家の窯跡が残存している可能性が想定された。そのため、Ⅰ区西側は焼土の確認面で掘取りを中止し、それ以外の北側と東側は試掘の段階で確認された暗褐色土を第１面として調査を開始した。暗褐色土の検出面の標高は約 4.0m である。

窯跡は調査地全体で計７基検出された。構造が不明な窯跡もあるが、畦とロストルを有する窯の土台部分が残存していた。第１面では窯跡の他にも素焼き製品や窯道具を廃棄した大型の土坑や灰原などが検出された。第１面においても廃棄土坑に削平されず残存していた中世の遺構が検出されていたが、中世遺構の本格的な検出は第２面目以降であり、第１面は「中ノ子」家に関連する遺構が大多数を占める。素焼き製品や素焼き人形を焼いたとみられる近世の窯跡が検出されたのは市内で初めてのことであり、６月28日には博多人形商工業共同組合の方々に向けて窯跡や素焼き人形の説明会を開催した。また、７月26日には報道関係者に向けた説明会を行い、29日に一般に向けての現地説明会を開催した。窯跡については永見氏の協力のもと３次元計測を行い、その他に35㎜カメラおよび６×７判カメラ、デジタルカメラによる撮影と実測作業による記録を残した。なお、第１面ではⅡ区の東側で噴砂の痕跡が認められた。Ⅰ区とⅡ区の境界の土層で確認したところ、第１面の包含層を切るため、江戸時代後半以降の地震痕跡と考えられる。

第２面は標高 3.8m 前後の暗褐色砂質土で設定した。第１面で掘削できていなかった近世・近代の遺構も検出されたが、主体は中世の遺構である。第３面は標高 3.5m 前後の暗褐色砂で設定した。第２面目とは異なり、炭化物や焼土はほぼ含まない。古代の遺構を中心に古墳時代・弥生時代の遺構もわずかに認められ、第２面で検出しきれなかった中世の遺構も多く検出された。第４面は標高 3.0m 前後の黄褐色砂で設定した。この砂層は博多遺跡群の基盤層である。第４面では第３面で検出しきれなかった古代の遺構と古墳時代・弥生時代の遺構を検出した。各面の遺構掘削に際し、調査区際で検出された土坑や井戸など、掘削深度が深いと想定される遺構については安全面を考慮し、完掘していない。なお、基盤層である黄褐色砂の検出面から 1.5m ほど掘り下げた標高 1.5m 前後で湧水が認められた。

発掘調査は平成30年6月5日に終了した。調査面積は875㎡で、近世～近代の「中ノ子」家関連の遺物も含め、パンケース800箱以上の遺物が出土した。特殊な遺物としては、第1面目で薩摩塔、第2面目で硯・白磁犬人形・小札片、第3面目で丸鞆・青銅製銙尾などが出土した。本調査地で検出された遺構の中で最も古いものは弥生時代前期後半に推定される土坑であるが、遺物としては古代の井戸から縄文土器が出土しており、縄文時代に遡る遺物も認められる。

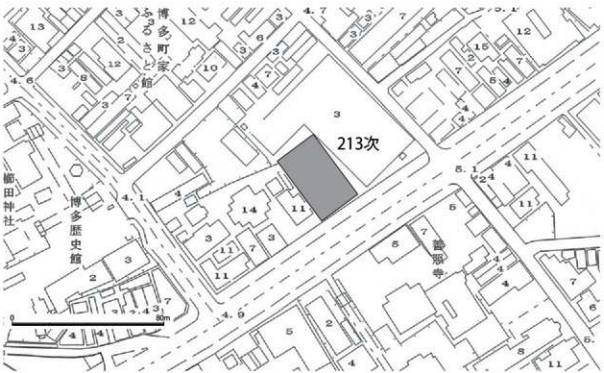


図2　第213次調査地点位置図（1/2,000）

写真1　表土鋤取り時人形検出状況（南西から）

写真2　窯1・4検出状況（西から）

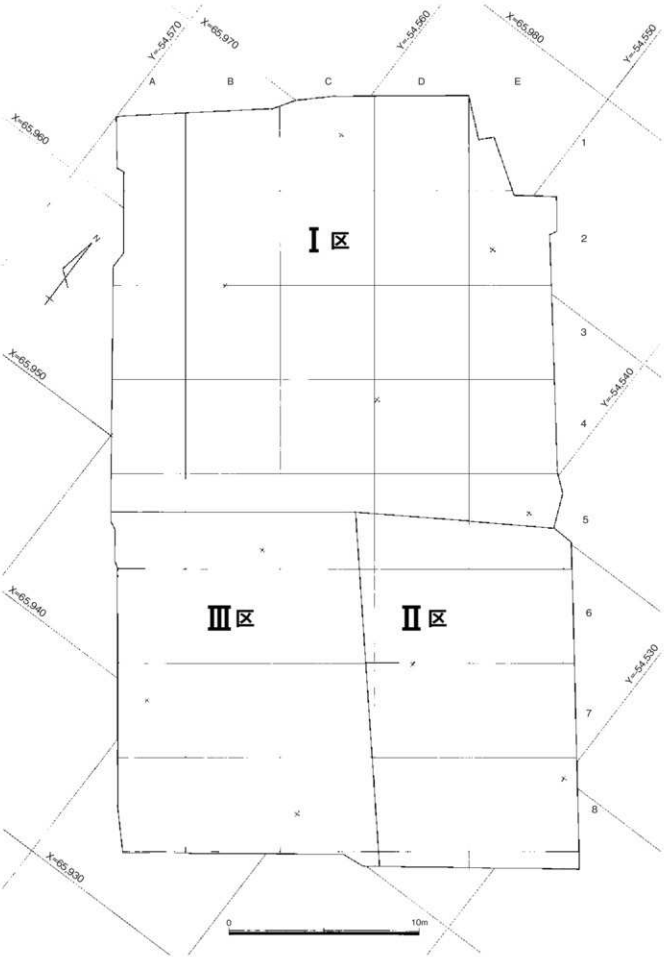
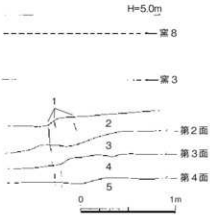
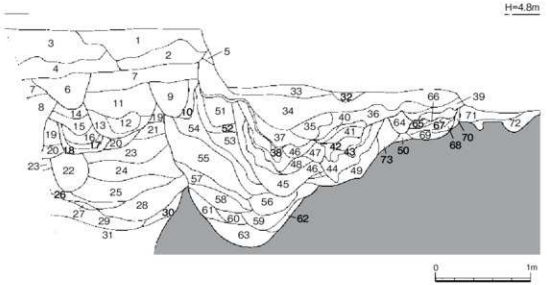


図3　各調査区配置図（1/200）



1層：灰黄褐色土（3Ma10YR6/2灰黄褐）
やや目の粗い砂層。噴砂
2層：暗褐色土（3Ma7.5YR3/3暗褐）
粗砂が混じる軟質土層。細かな炭化物や焼土片、土器片などを多く含む。中世の土器片などを多く含む整地層であり、耕作土である。
3層：暗褐色土（3Ma7.5YR3/4暗褐）
砂が混じる軟質土層。2層に比べて砂質で、細かな炭化物や焼土片の混じ味少ない。
4層：暗褐色土（3Ma7.5YR4/4褐）
砂質土。炭化物や焼土の混じ味はない。
5層：黄褐色土（3Ma10YR6/3にぶい黄褐）
目の細かな砂層。炭化物や焼土の混じ味はない。

図4　土層断面模式図（1/40）



1層：タイマン層土
2層：暗褐色土（3Ma10YR3/3暗褐）
3層：黄褐色土（3Ma10YR5/3黄褐）
砂質土の細かな粒子。炭化物が…
4層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
砂質土の細かな粒子。2層よりも炭化物が…
5層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
タイマン細かな粒子。細かな粒子は少ない。
6層：暗褐色土（3Ma10YR3/3暗褐）
砂質土の細かな粒子。2層よりも炭化物が…
7層：暗褐色土（3Ma10YR4/3にぶい黄褐）
やや粘土。
8層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。2層よりも炭化物が…
9層：暗褐色土（3Ma10YR3/3暗褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
10層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子。
11層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。しまりやや大きい。炭化物が…
12層：暗褐色土（3Ma10YR3/3褐）
2層に粒子の粒子。やや粘土。
13層：暗褐色土（3Ma10YR3/3褐）
2層に粒子の粒子。やや粘土。
14層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。炭化物が…
15層：暗褐色土（3Ma10YR3/3褐）
2層に粒子の粒子。やや粘土。
16層：暗褐色土（3Ma10YR3/3褐）
細かな粒子の粒子。しまりやや大きい。炭化物が…
17層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子の粒子。やや粘土。
しまりやや大きい。
18層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
19層：暗褐色土（3Ma10YR3/3褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
20層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
21層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
22層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
23層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
24層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
2層に粒子の粒子。やや粘土。
25層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
26層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
27層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
28層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
29層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
30層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
31層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
32層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
33層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
34層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
35層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
36層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
37層：暗褐色土（3Ma10YR3/3にぶい黄褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
38層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
39層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
40層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
41層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
42層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
43層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
44層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
45層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
46層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
47層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
48層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
49層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
50層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
51層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
52層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
53層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
54層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
55層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
56層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
57層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
58層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
59層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
60層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
61層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
62層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
63層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
64層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
65層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
66層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
67層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
68層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
69層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
70層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
71層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
72層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。
73層：暗褐色土（3Ma10YR3/4褐）
細かな粒子の粒子。やや粘土。
炭化物を含む。

図5　Ⅰ区北東隅壁面土層図（1/40）

（1）近世・近代（図6）

第1面では、窯跡7基と多数の人形廃棄土坑、灰原と考えられる灰層の広がり、土坑、井戸、溝、柱穴などが激しく重複しながら検出されている。また、それらを壊して築かれた近代以降の攪乱土坑も各所に存在していた。図6の遺構配置図には攪乱土坑を破線プランで示したほか、遺構間の切り合い関係と覆土中出土遺物をもとに、まず近世と近代の遺構を分別した。また、灰原の灰層の広がり7か所と、人形廃棄土坑11基をそれぞれ別のアミカケで区別している。

近世の遺構としては博多遺跡群で今回初めてその存在が確認できた窯が7基ある（窯1~5、窯7、8）。しかし、その操業時期は近世後期～近代にまたがっており、文献資料によれば一部の窯は戦前まで継続していたとされることから、調査当初の段階では江戸期に操業を終える窯が存在するものかどうかの判断はつかなかった。人形廃棄土坑は図に示すように、窯の近隣とくに北西部中心に密集して築かれており、一部は窯とも切り合っている。

一方、灰原では灰層と焼土が一定範囲に広がっていたが、その中に人形の破片や窯道具、陶磁器類の出土はほとんどなかった。そのほか多数の近世土坑群や井戸、溝も検出されており、本来下層に存在する中世遺構群とも激しく切り合っていたが、調査進行上、検出された順番に遺構番号を付している。よって最初の遺構面である第1面にも、中世、近世、近代の遺構が同居することとなっている。

なお、例言にも示したように、基本的に第1面で検出した遺構は1000~、第2面で検出した遺構は2000~から始まる4桁の通し番号を付しているが、各面ではその後の検討で遺構とは判断できないものや同一遺構番号でも下層で中世遺構と重複したものもある。また、アミカケのない番号のみの遺構はすべて近世に属する土坑で、出土遺物を掲載した土坑と溝、井戸にはそれぞれSK、SD、SEの略号を頭に付した。

さらに、調査区東側では6.3mにわたって南東から北西にむかう噴砂が検出されているが、層序からの検討で近世に属するものと判断できた（図4）。

以下、各遺構の内容と出土遺物について記述していく。

写真3　Ⅲ区1面全景写真（西から）

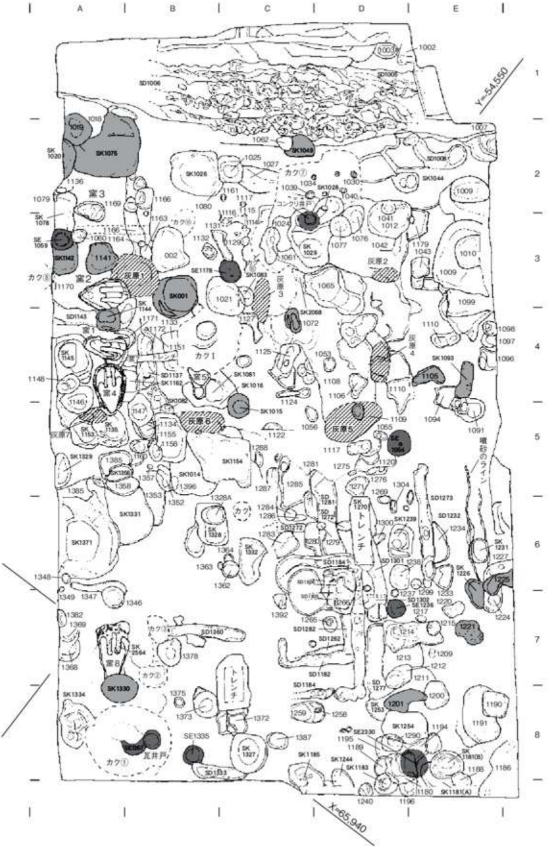


図６　近世・近代遺構配置図（1/200）

（2）中世（図7～10）

中世の遺構は第1面から第4面までの全面で検出される。時期的には、第1・2面で15・16世紀代の遺構を、第2面から第3面にかけては12世紀後半から14世紀前半の遺構を、第3面から第4面にかけては11世紀後半から12世紀前半の遺構を中心に検出される。今回の報告は同時期遺構が多面にわたり、調査面ごとの報告では煩雑となるため時期ごとに纏めて報告を行った。時期設定は、中国製白磁が卓越する11世紀後半～12世紀前半期を中世Ⅰ期、龍泉窯青磁碗Ⅰ・Ⅱ類を指標とする12世紀後半～13世紀前半期を中世Ⅱ期、龍泉窯青磁碗Ⅲ・Ⅳ類、口禿の白磁皿Ⅸ・Ⅹ類を指標とする13世紀後半～14世紀中頃を中世Ⅲ期、14世紀中頃は1基のみで14世紀後半の遺構は検出されない。龍泉窯系青磁碗Ⅴ類、明青花・半島粉青沙器等を指標とする15世紀～16世紀を中世Ⅳ期とした。

中世Ⅰ期（図7）は、第3・4面を中心に検出される。一見西部が薄い様に見えるが、後代の攪乱の多さのためで、さらに数は増す。検出した主な遺構は井戸11基・土坑165基・土壙墓1基・溝2条等である。井戸は木桶を積み上げた井側が殆どで、他に方形の井側SE3369が、土坑では土器多量廃棄のSK2232・2452・3322、陶器壺廃棄のSK2091、白磁碗廃棄のSK2070等がある。柱穴を除く遺構全体の30%を占め、Ⅱ期と合わせ、鴻臚館廃絶後、宋人を中心とした貿易の中心地として繁栄した「宋人百堂」の時期に該当する。「七綱」等の墨書陶磁の多出、磁州窯陶枕・絞胎碗・白磁唐子水滴等の出土もこれを裏付けるが、北東隣地の第172次調査区の様に数十点の白磁が一括投棄される遺構は当該地では十数点程度で、中心地からははずれている。ガラス製品・製造具も少量出土するが中心地は172次調査区にある。地形が砂丘北西側の緩斜面にあたり、調査区北西端が砂丘間の鞍部となっており、Ⅱ期と近世には区画する大溝が配置されるが、当期ではまだ設けられていない。

中世Ⅱ期（図8）では主な遺構は井戸18基・土坑219基・溝9条等で、第2・3面を中心に検出される。遺構全体の40%を占め、最盛期を示している。井戸は中央部に集中する傾向がある。北東鞍部には区画溝SD3001・3052・1049が改削されながら継続して設けられている。土坑では土器大量廃棄のSK1309・1318・1397、獣骨廃棄のSK2317が、また、地下倉SK3030も検出される。遺物ではガラス製品・製造具がⅠ期の5割増し出土するが、172次調査区調査区出土量には遠く及ばない。

中世Ⅲ期（図9）は、多くが13世紀末から1333年の鎮西探題存続期と重なる。検出した主な遺構は井戸16基・土坑149基・溝6条等で、第2・3面を中心に検出される。遺構全体の28%を占め、Ⅰ期と同程度の検出をみる。井戸は南側にまとまる傾向にあり、主要な遺構は稜線寄りの東半部に集中する。土坑は土器多量廃棄のSK1322・2422・2553・2570、獣骨廃棄のSK2357・3387、石廃棄のSK2508等があり、溝は東の稜線部寄りに地形に沿った「L」字の区画溝SD1320・1398があり、さらに東端に同方向の柵列SA2593がある。特記すべきはSX2487・2457の2基の基壇状遺構の検出で、土器の大量廃棄もあり（SX2578）、祠堂等の祭司関係の遺構と考えられる。遺物としては白磁犬人形・華南二彩壺・茶入・灯盞等の希少品嗜好品と瀬戸焼・東海系土師器坏・石硯・仕上げ砥石のまとまった出土、北条氏一門の家紋である揚羽蝶文の飾金具の出土は172次調査区の遺構の在り方、同じく北条氏一門の家紋である三ッ鱗文土製品合わせて鎮西探題の故地である証左をより強めている。また、鎌倉後期に比定される、箱崎遺跡84次調査に次ぐ発掘調査3例目の薩摩塔片が出土している。

中世Ⅳ期（図10）は、14世紀後半の遺構を欠き、15・16世紀は遺構数も激減する。検出遺構は井戸1基・土坑13基で、第1・2面を中心に検出される。遺構全体の約2%を占めるのみで、区画溝も検出されず、過疎地となっている。

写真４　Ⅰ区第２面全景（西から）

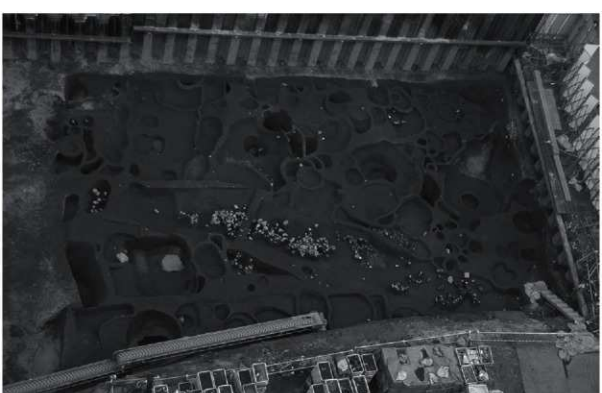


写真５　Ⅱ区第２面全景（西から）

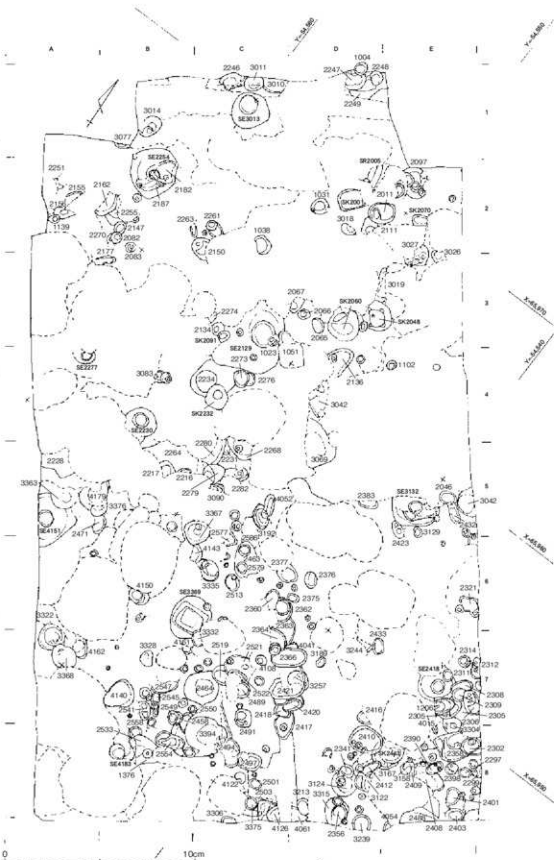


図7　中世Ⅰ期遺構配置図（1/200）

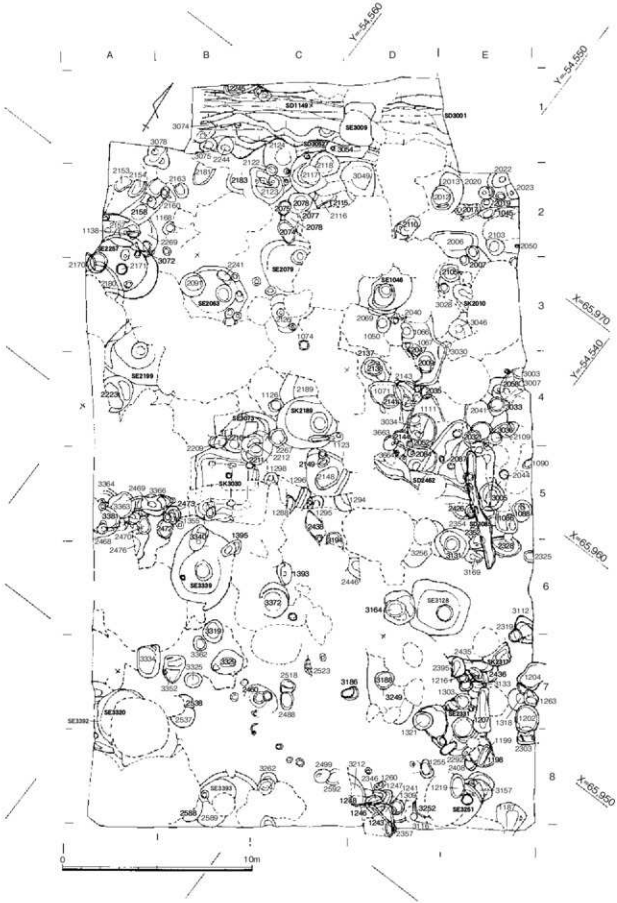


図８　中世Ⅱ期遺構配置図（1/200）

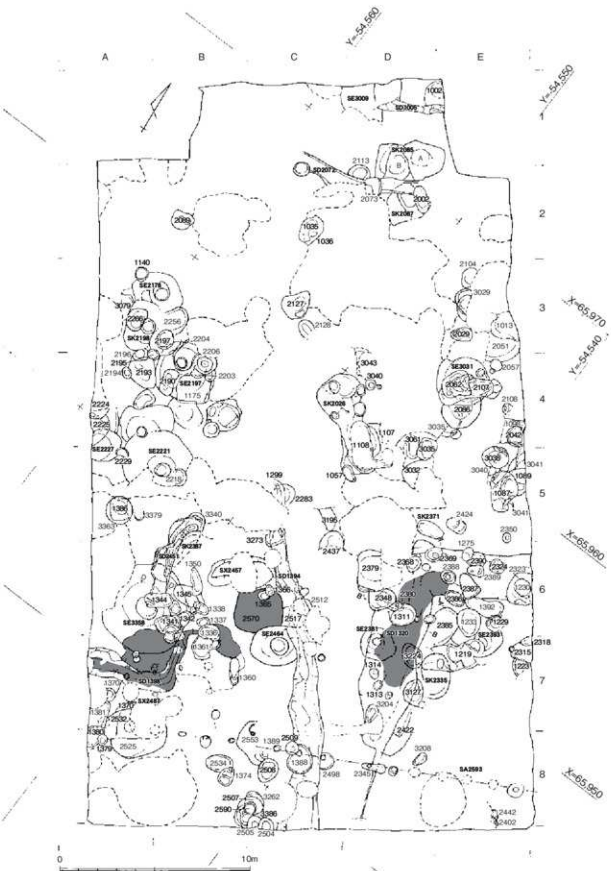


図9　中世Ⅱ期遺構配置図（1/200）

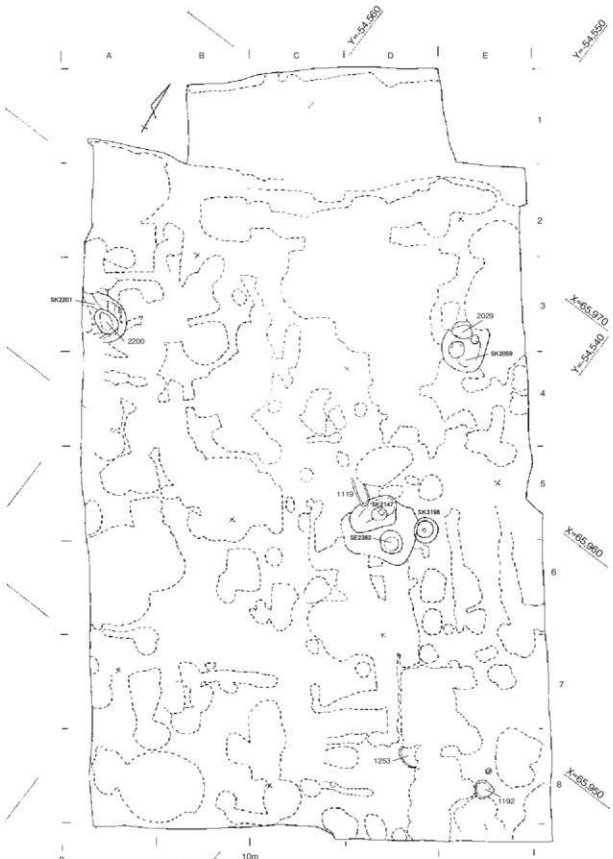


図 10　中世Ⅳ期遺構配置図（1/200）

（3）古代（図11）

古代の遺構は第2面で検出されたSO2136を除き、第3面と第4面で検出され、検出時の面に合わせて3000番台と4000番台の番号を付した。時期としては8世紀代の遺構が多く、7世紀代の遺構はわずかに検出されたのみである。7世紀代の遺構として注目されるのがSO2136である。SO2136は箱式石棺などの石材を転用した小石室とみられ、石室の床面直上で検出された須恵器の年代から7世紀前半に推定される。削平されたとみられる石室の西側では土師器や黒色土器が重ねられた状態で検出されたことから10世紀後半~11世紀初頭の段階に石室が削平され、その後禁祀が行われた可能性が考えられる。

8世紀後半~末に推定される遺構は、上面の井戸などにより大きく削平される調査区中央・南西・北西側を除き、調査区全体に広く分布が認められる。検出された古代の住居跡4軒のうち、3軒は8世紀後半~末に推定され、本調査地では弥生時代後期後半に推定されるSC3230・4070以降、調査区内に明確な住居跡が認められない。井戸も8世紀後半~末の時期に推定されるものが多いことから、本調査地の範囲ではこの時期に居住域が拡大したものと推定される。

調査区南東側では8世紀代の土坑やピットが多く検出され、墨書須恵器、墨書土師器といった墨書土器も多く出土した。調査区全体では墨書土器の他に、丸鞆や皇朝十二銭、円面硯など一般集落にはみられない特殊遺物も検出され、本調査の東側に推定される官衙域との関連性がうかがえる。

9~11世紀前半に関しては遺物が出土しているものの、明確な遺構はほぼ検出できていない。9世紀代に推定される長沙窯系水注をはじめ、越州窯系陶磁器や緑釉陶器などが出土した

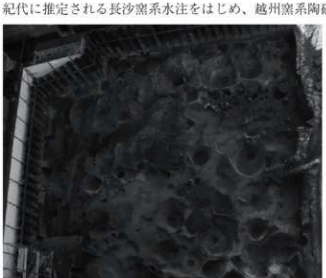


写真6　Ⅰ区第3面全景写真（西から）

写真8　Ⅲ区第3面全景写真（西から）

写真7　Ⅱ区第3面全景写真（南から）

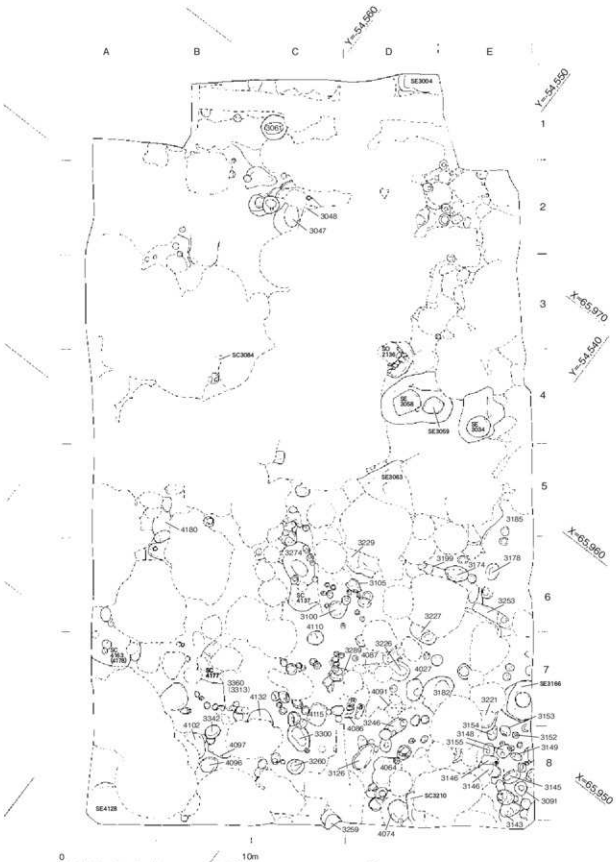


図 11　古代遺構配置図（1/200）

（4）古代以前（図 12）

古墳時代および弥生時代の遺構はⅡ・Ⅲ区の第3面と第4面で検出され、検出時の面に合わせて3000番台と4000番台の番号を付した。第3面で検出された遺構はわずかで、ほとんどが第4面の砂丘上での検出である。古代以前の遺構はⅠ区ではほぼ検出されず、本調査地の中央～南側に集中して認められる。

古墳時代は前期と後期の二時期の遺構が検出され、古墳時代前期に推定される土坑では土師器の甕や製塩土器などとともに完形のタコ壺が出土した。古墳時代後期の土坑は調査地の中央より南側に分布している。特徴的な遺物としては、円筒埴輪や形象埴輪など古墳に由来する遺物の他に、軟質土器や陶質土器、瓦質土器といった朝鮮半島系の遺物も多く出土しており、当該期の朝鮮半島との交流をうかがうことができる。

弥生時代には前期後半に推定される土坑が2基検出され、本調査地で検出された遺構の中で最も古い時期の遺構である。弥生時代前期の遺構は少ないが、包含層や上面の遺構に弥生時代前期の土器片が多く混じることから、削平され消滅した遺構が多いと推定される。また、本来の位置を留めた状態での検出ではないが、弥生時代中期前半～中期後半に推定される甕棺が複数出土していることから、当該期に本調査地の砂丘上に墓地が営まれていた可能性が考えられる。弥生時代後期～終末期にかけての遺構は調査地の南側を中心に分布している。

なお、縄文時代の遺構は検出されていないが、SE3058下層で縄文時代晩期の粗製深鉢片が1点出土した。

写真9　Ⅲ区第4面全景写真（南から）

写真10　Ⅱ区第4面全景写真（南から）

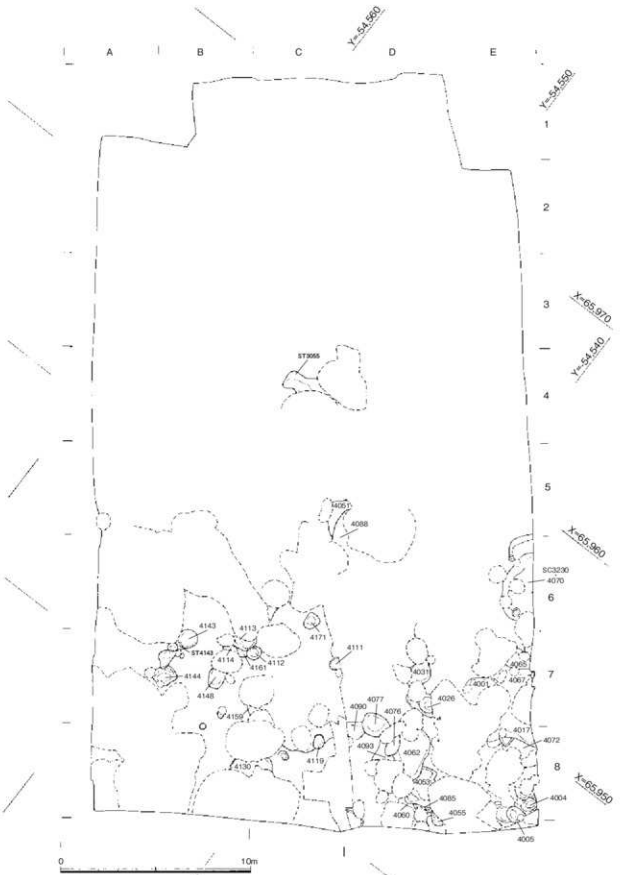


図 12　古代以前遺構配置図（1/200）

2. 遺構と遺物

（1）近世・近代

1. 水路（暗渠）

Ⅰ区 A~D-1 グリッドで検出された石積みの水路である。表土鋤取り段階の標高約 4.2m の地点で約 18m にわたって検出され、東西方向にやや蛇行している（写真 11）。天板は 40 枚残存し、天板一石の長さは約 106cm、幅約 44.5cm、厚さは約 13cmである。天板の下を一部トレンチ状に深堀したところ、三段積みの側石が検出され（写真 12）、その下には盤が敷かれていた。側石一石の長さは約 120~155cm、幅約 21cm、厚さ約 23cmである。天板・側石ともに鑿による調整痕が明瞭に確認できる。水路の高さは側石三段で約 60cm、天板上面まで含めると約 80cmであった。水路の幅は側石の外側で 122cm、内法は約 77cm、中は砂で埋まり、ガラス瓶などが混じっていた。Ⅰ区 A~D-1 グリッドは砂丘背面に形成された谷地形に向かう斜面にあたり、中世以降東西方向の溝が何度も掘り込まれた場所である。今回検出された水路はそれらの溝の最上面にあたり、西端の天板は東端に比べ標高が 10cmほど低く、櫛田神社側に広がる谷地形に沿って東から西に緩やかに低くなっている（写真 13）。本調査地において幕末から明治期にかけて操業していた窯に由来する焼土が水路内で確認されることから同時期から昭和にかけて使用された下水溝とみられる。

写真 11　暗渠検出状況（西から）

写真 12　側石検出状況（南から）

写真 13　櫛田神社に向かう傾斜（東から）

2. 地震痕跡

Ⅱ区 E-5・6 グリッドで長さ約 6m、幅 1~5cmにわたって南北方向にのびる筋状の噴砂が確認された。検出面の標高は約 3.9m で、噴砂は砂層から 80cm以上吹き上がっている。江戸時代後半の陶磁器を含む 1 面目の整地層の上面で検出されたことから同時期におこった地震の痕跡とみられる。

写真 14　Ⅱ区噴砂検出状況（北から）

3．窯跡

調査区の西側は江戸時代に「中ノ子家」の地所であったことがわかっており、中ノ子家の口伝によると1808年（文化5年）に中ノ子安兵衛・吉兵衛親子が素焼き人形の製造を開始したとされている。今回検出された窯跡は計7基で、中ノ子家の地所に推定される調査区西側に集中している。窯跡の周辺では素焼き人形や七輪などの素焼き製品が多く出土している。また、素焼き製品や窯道具、日常的に使用していた雑器などを廃棄した大型の土坑が多数検出されている。

調査区Ⅰ・Ⅱ区において標高約4.3m~4.8mで窯跡を検出した。検出した窯跡は計7基で調査区の西側に集中する。窯跡の切り合いや構造の変化などから7→4・8→2→1の順に築造されたと考えられる。窯の主軸は南北（7・8・4・5）から東西（1・2・3）方向へと変遷したと推定される。なお、調査時に調査区西端の欠板付近で検出していた硬化面を窯6として番号を付していたが、硬化面はわずかに認められたのみで窯の構造を確認できなかったので、欠番とした。

窯7（図14）

Ⅰ区A-4グリッドで検出した。窯の主軸は南北方向に位置し、長軸はN-37°-W、検出面の標高は約4.8m、掘方最深部の標高は約4.4mである。北側を窯1、南側を窯4に切られるため残存状態は悪いが、窯跡の土台の平面形は小判形を呈すると推定される。窯跡の東側に残存する壁体は幅0.25mを測る。内部には瓦が三段確認され、粘土に粗砂を混ぜた土で壁体を構築する際に瓦で補強している。畔は幅0.12mで東側のみ残存する。西側の畔は窯1の構築時に破壊されたと考えられるが、東側の畔は窯7の上に築造された窯1のロストルの傾斜に利用しており、窯7の東側が比較的残存状況が良いことも同様の理由と考えられる。残存する東側のロストルは幅約0.35mで、畔とロストルの残存状態から奥壁へのロストルの傾斜は緩やかであったと推定される。土層N-Mでは操業時の還元作用により硬化した床面が最大6面確認でき、5回以上床の張替えが行われたと考えられる。

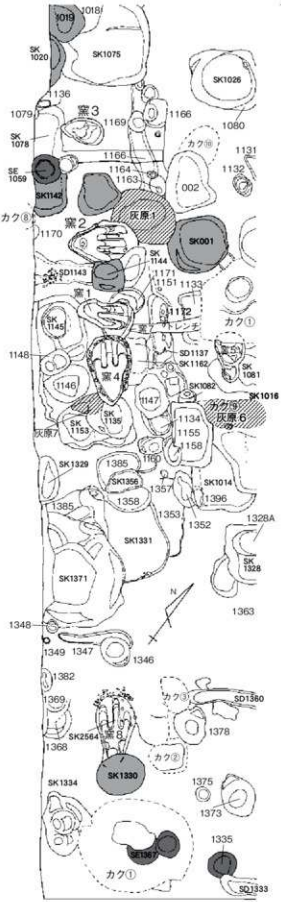


図13　検出窯跡配置図（1/150）

また、土層 I-J において最下硬化面の上に畔がつくられていることから、最初の操業時はロストルを用いない窯であった可能性が高い。ロストルを用いた窯へと窯の構造を変えていることや、窯 1・4 との切り合い関係から、本調査区で検出された窯跡の中で最も古い窯跡と推定される。

窯 8（図 15）

Ⅲ区 A-7 グリッドで検出し、本調査区の窯跡の中で南端に位置する。窯の主軸は南北方向に位置し、長軸は N-37°-W、検出面の標高は約 4.8m、掘方最深部の標高は約 4.25m である。窯の南側が SK1330 によって大きく破壊されているため、焚口が残存していないが、窯の土台の平面形はイチジク形を呈すると推定される。長軸の残存長約 2.55m、短軸の長さは焼成部で約 1.6m、燃焼部で約 0.9m と推定される。西側に残存する壁体は幅約 0.3m で、内部に瓦やシャモット片が 2 段敷かれていた。なお、他の窯跡の壁体にはスサや縄が含まれていたが、窯 8 には含まれていなかった。畔は長さ約 1.0m、幅約 0.2m、高さが約 0.3m 残存し、内部には 20 枚ほどの瓦やシャモット、火鉢片などが充填されていた。焼成部におけるロストルの幅は中央が 0.25m、左右が 0.35m で、3 つのロストルの床面高の差はほぼない。奥壁に向かうロストルの傾斜は窯 7 よりは強いが、窯 1・2・4 に比べて緩い。

窯 8 では最大 5 面の硬化面が認められ、最上硬化面の上に窯を壊した際の壁の土塊や瓦が溜まっていることから、床の張替えが 4 回行われたと考えられる。土層 A-B において焼成部の最下硬化面の上に瓦やシャモット片を含む奥壁が新たに築かれ、燃焼部の土層 E-F においても最下硬化面の内側に新た

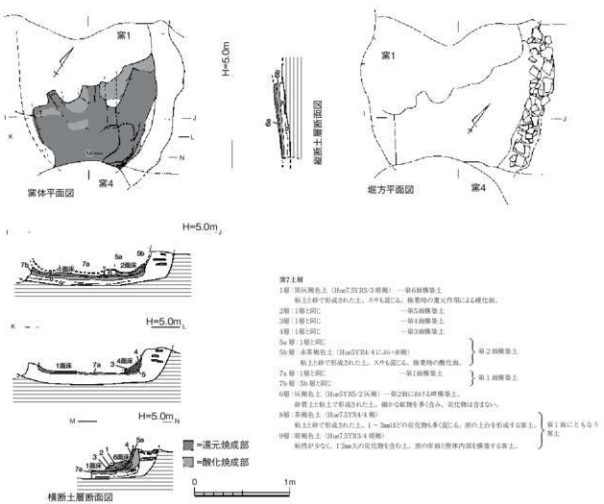


図 14　窯 7 実測図（1/40）

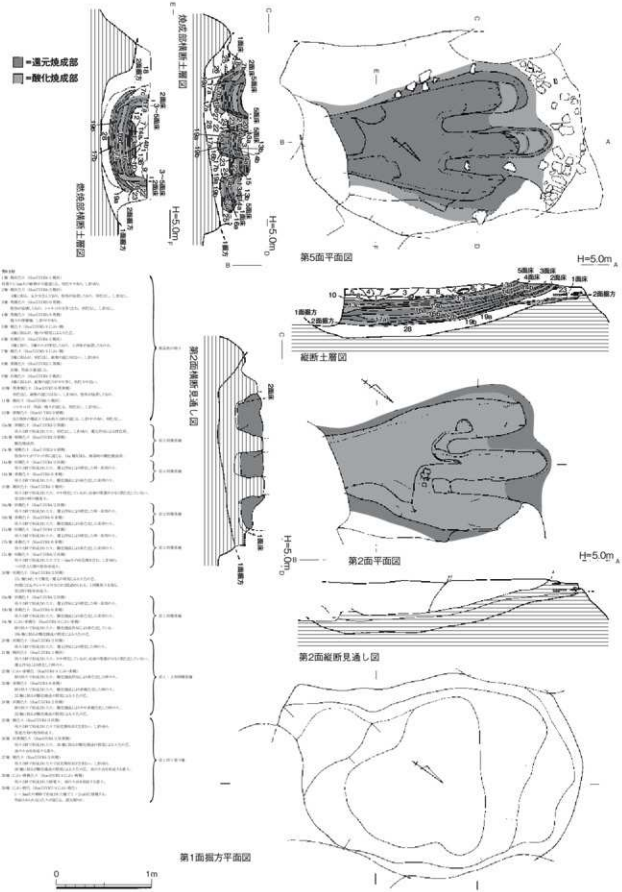


図 15　窯 8 実測図（1/40）

な壁面がつくられている。このことから1回目のつくり替えの際に焼成部の長さと燃焼部の幅を縮小したと考えられる。さらに燃焼部では下から2面目の硬化面の一部が壊され、その内側に新たな壁がつくられていることから、2回目のつくり替えの際に再度幅を縮小したと考えられる。

写真15　窯7検出状況（南から）

窯4（図16）

Ⅰ区A-4・5グリッドで検出した。窯の主軸は南北方向に位置し、長軸はN-40°-W、検出面の標高は約4.65m、掘方最深部の標高は約4.3mである。窯の北側は窯7を切る。窯の土台の平面形はイチジク形を呈し、長軸の長さは約2.8m、短軸の長さは焼成部で推定1.75m、燃焼部で約1.1mを測る。畔の長さは約1.0m、幅は約0.2mで高さが約0.2m残存する。残存する壁体の幅は約0.2mで、壁体および畔の内部には瓦を充填し、補強している。ロストルの幅は中央が0.25m、左右が0.35mである。窯1・2・8に比べてロストルの立ち上がりが早く、最も傾斜が強い。また、窯1・2・8では3つのロストルの床面高がほぼ同じであるのに対して、窯4では中央のロストルが最も低く、左右のロストルはシャモット片を混ぜた土（土層7）を入れて床面を上げている。ロストルの傾斜や床面の高さの調整によって火力を上げたとみられ、窯全体が還元作用を受けて黒色化していた。還元作用による硬化面は1面のみで、硬化面の上に窯を壊した際の壁体の土塊や瓦が溜まっていた状況から、床面の張替えなどは行わないまま操業を停止したと考えられる。

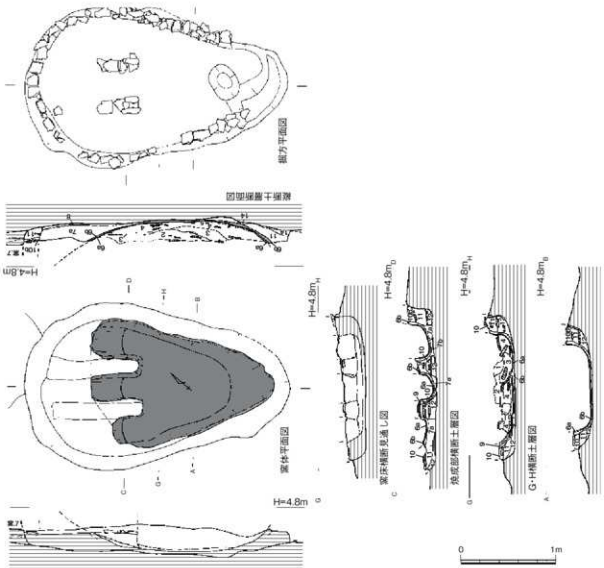
窯1（図17）

Ⅰ区A-4グリッドで検出した。窯の主軸は東西方向に位置し、窯の長軸はN-50°-E、検出面の標高は約4.75m、掘方最深部の標高は約4.4mである。北側を撹乱、南側を窯4に切られる。窯1は東側にあった窯7を壊した上に築造しているため掘方の東側は不明瞭であった。窯の土台の平面形はイチジク形を呈し、長軸は長さ約2.5m、短軸の長さは焼成部で推定1.8m、燃焼部で約0.9mを測る。壁体の残存状態が悪いため、不明確であるが幅は約0.2mと推定される。畔は長さ約1.2m、幅約0.2m、高さが約0.2m残存し、東側の畔では内部にメゲを入れ補強している。ロストルは中央で幅0.3m、奥壁に向かう傾斜は窯2に似る。燃焼部（A-B）の土層では操業時の還元作用による硬化面が最大5面確認できるが、焼成部の土層（C-D・E-F）では、硬化面が少ない。そのため、2回目の張替えの際に一度窯内部の床面を削平し、新たに床面を形成したと考えられる。

写真16　窯8検出状況（南から）

窯2（図18）

Ⅰ区A-3グリッドで検出した。窯の主軸は東西方向に位置し、窯の長軸はN-52°-E、検出面の標高は



窯4土層

1層：茶赤褐色土（Hue7.5YR3/3 暗褐）
　　壁体の土塊や瓦片を多く含み、2mm大の炭化物も混じる。しまりややあり。
2層：灰褐色土（Hue7.5YR4/3 褐）
　　瓦片を多く含み、1mm以下の細かな炭化物も多く混じる。砂質土で粘性なし。しまりややあり。
3層：赤茶褐色土（Hue7.5YR3/3 暗褐）
　　1層に似るが、壁体の土塊や瓦片が2.0多く含まれる。
4層：灰褐色土（Hue7.5YR4/2 灰褐）
　　壁体の土塊や1mm以下の炭化物を含む。
5層：黒茶褐色土（Hue7.5YR2/2 黒褐）一掘業時に堆積した炭層
　　炭がわずかに堆積する。しまりなし。
6a 層：黒灰褐色土（Hue7.5YR4/1 褐灰）一掘業時の重元作用による硬化面。
　　粘土と砂で形成された土。しまりあり。
6b 層：赤褐色土（Hue5YR4/3 にぶい赤褐）一掘業時の酸化焼成面。
　　粘土と砂で形成された土。しまりあり。
7a 層：茶赤褐色土（Hue7.5YR3/4 暗褐）
　　10 層に似るが、シャモット片が2.0多く混じる。
7b 層：黒色土（Hue7.5YR2/1 黒）
　　炭層。
8層：茶褐色土（Hue10YR3/3 暗褐）
　　10 層に似るが、5mm大のシャモット片が混じる。

焼業後の床土

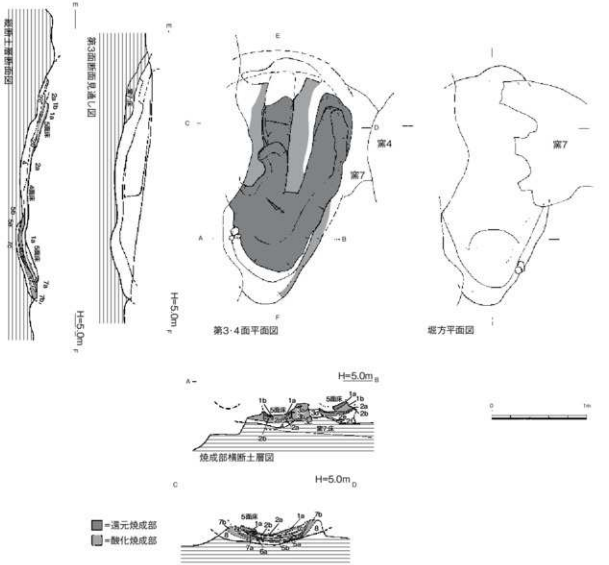
焼成部のロストルに傾斜をつけるために光明された窯土

9層：赤褐色土（Hue5YR4/3 にぶい赤褐）
　　粘土と砂で形成された土。しまりあり。
　　掘業時の酸化焼成作用によって赤色化している。
10 層：黄茶褐色土（Hue10YR4/3 にぶい黄褐）
　　9層の上に1mm以下の炭化物が多く混じる。壁体や床、柱を形成する土。
11 層：茶褐色土（Hue10YR3/4 暗褐）
　　10 層と同じ土。酸化焼成の程度による土色の差。
12 層：茶褐色土（Hue10YR3/3 暗褐）
　　10 層の上に5mm大のシャモット片が混じる。土色は 11 層に似る。
　　酸化焼成の程度による土色の差。
13 層：黄褐色土（Hue10 YR5/4 にぶい黄褐）
　　目の細かな砂質土。1mm以下の小細かな炭化物が少量混じる。
　　焼を築造する際に盛んだ場所を開めた土とみられる。
14 層：黒色土（Hue7.5YR2/1 黒）
　　炭層。

柱・壁体構築土

粘土層下窯土

図 16　窯 4 実測図（1/40）



窯１土層

1a層：灰褐色土（Hue7.5YR4/3 褐）
　　粘土と砂で形成された土でスサを多く含む。しまりあり。還元作用による硬化面。
1b層：赤褐色土
　　粘土と砂で形成された土でスサを多く含む。しまりあり。酸化焼成面。
1c層：灰褐色土
　　粘土と砂で形成された土。1mm大の炭化物が混じる。しまりややあり。
　　やや還元作用を受ける。
2a層：灰赤褐色土
　　粘土と砂で形成された土。しまりあり。還元作用による硬化面。
2b層：黒褐色土（Hue7.5YR4/4 褐）
　　粘土と砂で形成された土。硬化していないが炭素吸着により黒色化している。
2c層：赤茶褐色土
　　粘土と砂で形成された土で粗砂と1～3mm大の炭化物を多く含む。しまりあり。
2d層：茶褐色土
　　粘土と砂で形成された土。ややしまりあり。
2e層：茶褐色土
　　撹拌の土地が多く混じる。
2f層：赤褐色土
　　2e層に似る。しまりなし。

第５面構築層

第４面構築層

焼成部のロストルに傾斜をつけるために充填された客土

3a層：赤褐色土
　　粘土と砂で形成された土でパチ片などを含む。酸化焼成作用により赤色化する。
　　しまりあり。
3b層：赤茶褐色土
　　粘土と砂で形成された土で1mm大の炭化物を含む。酸化焼成作用により赤色化する。
　　しまりあり。
3c層：赤褐色土
　　粘土と砂で形成された土で炭や焼土片を含む。酸化焼成作用により赤色化している。
　　しまりあり。
3d層：暗茶褐色土
　　粘土と砂で形成された土。しまりあり。
4　層：明茶褐色土
　　粘土と砂で形成された土。しまりややあり。
5a層：暗褐色土（Hue7.5YR4/3褐）
　　粘土と砂で形成された土。しまりあり。還元作用による硬化面。
5b層：明褐色土（Hue7.5YR5/6にぶい褐）
　　粘土と砂で形成された土で粗砂を多く含む。しまりあり。酸化焼成面。
6a層：5a層と同じ。
6b層：5b層と同じ。
7a層：5a層と同じ。
7b層：5b層に似るが、炭化物を多く含み、シャモットが小片も混じる。
8　層：暗茶褐色土（Hue7.5YR4/4褐）
　　粘土と砂で形成された土で粗砂を多く含み、1mm大の炭化物もやや混じる。

第４・５面の硬構築層

・・・第4面下客土

・・・第3面構築層

図 17　窯 1 実測図（1/40）

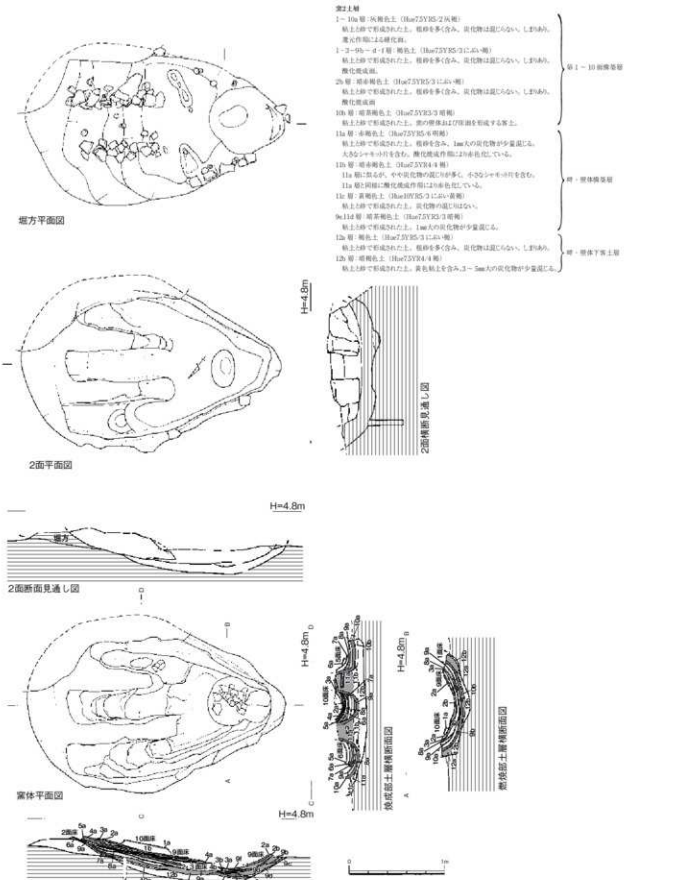


図 18　窯 2 実測図（1/40）

約4.55m、掘方最深部の標高は約4.15mである。窯の土台の平面形はイチジク形を呈する。長軸の長さ約2.7m、短軸の長さは焼成部で推定1.8m、燃焼部で約1.0mを測る。残存する壁体の幅は約0.2mで、壁体および畔の内部には瓦やメゲなどを充填し、補強している。畔の長さは約1.0m、幅は約0.25m、高さが約0.3m残存する。ロストルの幅は中央で約0.3m、左右で約0.35mを測り、ロストルの傾斜は窯1に似る。窯の規模や土台の構造、ロストルは窯1に似るが、窯1に比べて畔がやや短く、燃焼部が広い。窯2では最大10面の硬化面を確認することができる。窯の残存状態にもよるが、今回検出された窯跡の中では硬化面が最も多く、操業回数が多いもしくは長期にわたって操業されていたと考えられる。なお、窯2では杭の痕跡が計8ヶ所確認できる（写真17）。杭の直径は4~10cmで30~40cmほど打ち込まれている。今回検出された窯跡の中で杭の痕跡が認められるのは窯2のみである。窯を築造する際の目印であった可能性が考えられる。

窯3（図19）

Ⅰ区A-2・3グリッドで検出した。窯の主軸は東西方向に位置し、本調査区の窯跡の中で西端に位置する。窯の長軸はN-63°-E、検出面の標高は約4.05m、掘方最深部の標高は約3.9mである。調査区西側の地形の落ちにあたる傾斜地に築造されており、標高は最も低い。長軸の長さ約1.7m、短軸の長さは焼成部で約0.95m、燃焼部で約0.55mを測る。残存状態が非常に悪く、還元作用による硬化面は窯の中央に一部残存するのみで、酸化焼成部が大きく露出した状態であった。畔やロストルは残存していないが、窯の掘方が窯1・2と同様にイチジク形を呈することから、窯1・2より小型の空吹窯であったと推定され、硬化面が2面確

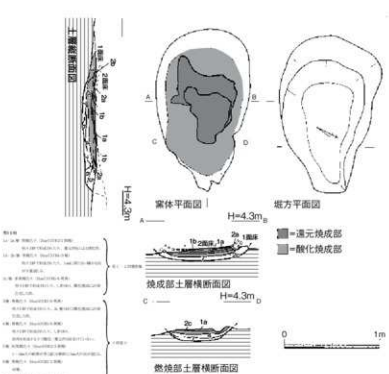


図19　窯3実測図（1/40）

写真17　窯2杭跡検出状況（西から）

写真18　窯5検出状況（南から）

認できることから少なくとも一度は床の張替えを行ったと考えられる。

窯5（図20）

Ⅰ区B-4グリッドで検出し、本調査区の窯跡の中で東端に位置する。窯1~4・7・8はほぼ一直線上に並んでいるが、窯5は東にずれており、窯4とは約3m離れている。窯の主軸は南北方向に位置し、窯の長軸はN-33°-W、検出面の標高は約4.6m、掘方最深部の標高は約4.35mである。窯の北側は攪乱に切られる。長軸の残存長約1.4m、短軸の長さは焼成部で1.05m、燃焼部で約0.65mを測る。窯5は全体的に酸化焼成により赤褐色を呈しており、還元作用による硬化面は認められなかった。焼成部の土層C-Dにおいて2面目の酸化焼成面は1面目より東側に拡張している。また、燃焼部の土層E-Fでは1面目の酸化焼成面より南側に新たな床面が形成されていることから、焼成部だけではなく、燃焼部の規模も拡張してつくり替えたと推定される。窯5は酸化焼成面のみで硬化面が確認できず、畔やロストルも検出されていないことから、他の窯跡とは異なる構造の窯であった可能性が考えられる。

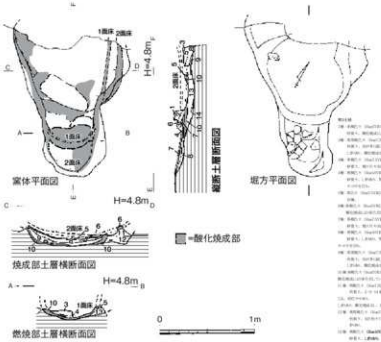


図20　窯5実測図（1/40）

4. 近世・近代の遺物

この時期の遺物はパンコンテナ500箱近くにも及んでいるが、本遺跡を特徴づける江戸後期~明治初期にかけての博多で焼かれた素焼人形窯関連の土人形の製品および破損品、土製の型、各種窯道具類、また人形と同時期あるいはそれ以前より焼造されてきた土師質、瓦質土器類などがある。さらには、生活什器類としての大量の近世・近代陶磁器とともに石製品、金属製品、ガラス製品、銅銭などの特殊遺物も一定量であるが出土している。

それとともに、遺構面として認定する以前の重機による表土剝ぎや鋤取り時、壁面清掃時、また各所で積まれた部分的整地層、攪乱土坑や出土位置不明で採集した遺物中にも、人形窯関連の重要遺物が含まれているため、それらも選別して極力紹介することとした。

特に各窯とその周辺で出土した陶磁器には窯の廃絶時期や存続期間、前後関係を探るうえで指標となりうる広東碗、端反碗、型紙刷りや釉下彩磁器などが含まれており、これらについては小片でも取り上げて図示している。以下、遺構ごとに説明を加えていきたい。

（1）人形窯関連遺物（図21）

窯1（1） 肥前染付碗で小広東碗に近い。18世紀末~19世紀初め。このほか土師質七輪、サナ、メゲ、平瓦片が出土したが、人形や土型はほとんどなかった。

窯2（2~6） 2~4、6は窯内部、5は窯2の遺構検出時に出土した。2は内面の指頭圧痕から土人形で

あろう。3は肥前染付小杯で最下面から出土した。17世紀。4は明の芙蓉手青花皿で16世紀後半。5は土人形で恵比寿。6は土人形の飯事道具蓋で亀甲文の地紋に緑釉を点描する。289と同一タイプであろう。このほか土師質・瓦質火鉢、サナ、瓦片が出土している。

窯3（7） 最下面から出土した。肥前染付皿で輪花か四方皿となる。17世紀後半。このほかわずかに土師質土器片、瓦片が出土したのみである。

窯2、3の間遺構検出時（8~12） 8は肥前染付丸碗で口縁部に銹釉を施す。18世紀末~19世紀。9は肥前染付輪花皿で花籠に桜花を施す。口銹で17世紀末~18世紀前半。10は肥前染付鉢で18世紀中ごろ~末。11は肥前染付皿で内面に花束文を施す。底部蛇の目釉剥ぎで18世紀後半。12は京焼系陶器の平碗で内面に草文を青、緑絵具で上絵付するが風化が激しい。18世紀前半。

窯2、3の間には廃棄土坑（SK1141、1142）が所在しており、これらはそれに所属するものと思われる。

窯4（13~20） 13、14、16は最下層で出土した。13は肥前染付碗で笹文を施すが二次的被熱している。窯1出土の細片と接合している。17世紀中ごろ。14は肥前染付皿で畳付外面は釉剝ぎする。17世紀後半か。16は上野・高取系陶器甕で褐釉と薬灰釉を施す。19世紀。15は肥前染付瓶で頸部に文様描く。17世紀。17、18は土師質土器十能で柄孔は4.5~5.7cmをはかる。19、20は軒平瓦で19は間延びした唐草、20は花文と棘唐草をあしらう。19は18~19世紀、20は19世紀であろう。このほか瓦質火鉢やサナ、円盤状の窯道具が出土している。

窯1、4東側焼土（21~23） いずれかの窯に帰属する遺物と考えられる。21は陶器瓶で濃青釉を施す。外底部に「八海」の墨書あり。一輪差しであろうか。19世紀。22は瓦質のるつぼ、23は陶器土瓶で、口縁部は釉を拭き取る。上野・高取系で19世紀。

窯5（24~26） 24、25は上面から出土した。24は京・信楽系陶器灰釉碗で19世紀。25は関西系の土瓶で鉄砲口をなす。灰釉を施し19世紀。26は窯の下に敷かれた炭層から出土した。土師質の器台状土製品で窯道具と思われる。安定した脚部に二重に開く上部をもつ。在地産か。このほか燃料の燃えカス、木炭、土師質火鉢、サナ、瓦片などが出土している。

窯7（27） 客土中より出土した。染付碗で雨降り文を施す。肥前で18世紀前半。このほか少量のサナ、人形片、瓦片が出土している。

窯8（28~33） 28は畦部内部、29、31は燃焼部上面、30、32は窯上面、33は燃焼部床面下部から出土した。28は陶器碗で内外面に刷毛目を施す。肥前で18世紀前半。29は明の染付碗で泥土がこびりついている。16世紀末~17世紀初め。30は瀬戸・美濃系染付小杯で幕末期~明治初め。31は京焼系筒形碗で、青薬で草花文を上絵付する。18世紀。32は染付碗で端反碗になるものか。19世紀~幕末期。33は筒状銅製品で先は細くなる。孔径は2~3mm。イッチン掛けに使用する施釉道具か。キセルの吸口の可能性もある。このほかサナ、土師質七輪、土師器小皿、瓦片が出土している。

I区窯付近（34~36） 主に窯1周辺で出土しており、人形や土型が一定量みられた。34は青磁染付碗で細かい格子の地紋に洋花を呉須で描く。外底面に「有67」と呉須で書かれており、1941~45年に製造された統制食器である。35は陶器大鉢の頸部片か。外面に青釉を施す。36は陶器小壺で、肩部が大きく張る。内外面褐釉を施すが、外底部付近から露胎となる小倉名物の飴壺であろう。上野焼で19世紀。

以上のように一連の窯跡出土遺物は時期を決定できる遺物が少ないが、江戸後期遺物を主体に明治期以降の遺物も少量含まれる傾向があり、人形師中ノ子家の操業期間に沿うものであろう。

（2）人形廃棄土坑出土遺物（図22、23）

人形廃棄土坑では、多量の人形片が出土しているが、ここでは主に時期決定に関わる遺物を中心に報告し、主な人形については後段の特論でまとめているので参照願いたい。

SK1075 (37~68) 37 は土人形の小槌。型づくりで表面に縞模様をあしらう。上部に吊り下げ孔を穿つ。土鈴の変形か。38 は土人形の土鈴。型づくりで大型品。胴部に突帯を貼り付ける。39 は土人形でご隠居風の人物頭部片。器肉は薄く合わせ型で丁寧なナデ。耳横に双孔がありふくよかな面立ちを呈する。40~42 は円形窯道具で、径 8.5cmの同一企画で調整も同じであるが、40 は脚台状になり、41、42 はほぼ平底をなす。上面はゆるやかな円弧を描き、ロクロ目を残す。瓦質焼成。43 も窯道具か。長楕円形の体部に把手が取りつく。下面はゆるやかにカーブする。側面に合印を刻む。長さ 12.4cm、幅 4.8cmをはかる。土師質焼成。44 は土師質のサナで径 17.2cm、厚さ 1.4cmをはかる。上面は回転工具によるハケメ目を施す。45 は土師質十能の把手部分で、柄孔は径 1.1 × 1.6cm、深さ 8cmをはかる。把手部はケズリののちナデ。焙烙の可能性もあり。46、47 は土師質のトチンで軸部は径 7.7~8.1cm、長さは 46 で 18.7cmをはかる。外面は丁寧なナデ。48 は土師質の脚台付円盤で窯道具の一種か。復元径 26.0cm、高さ 3.2cmをはかる。154 と同一タイプで脚台は 3 か所に取り付くだろう。上面は同心円状の回転ハケメ目、下面はナデで「令」と思われる刻書がある。49~56、58~60 は肥前染付である。49 は蓋付碗で口縁部内面は露胎。秋草、流水文を描く。18 世紀。50~52 は猪口で外面に帯状の文様を施す。19 世紀。53 は小広東碗で梵字くず

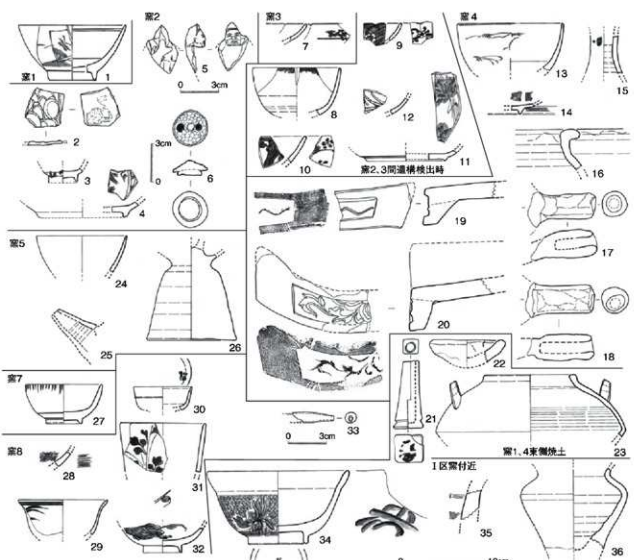


図 21　窯関連遺物実測図（1/3、1/4）

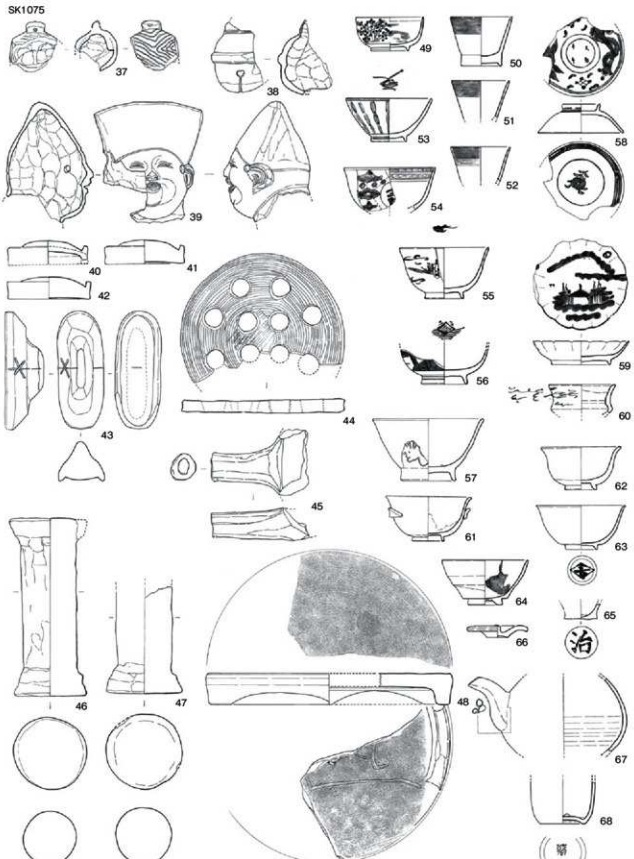


図 22　人形廃棄土坑出土遺物実測図その 1（1/4）

し文様を施す。見込みは昆虫か。18 世紀後半。54、55 は端反碗で 54 は内面に渦繋ぎ文、外面に楼閣風屋根をあしらう。19 世紀前半 ~ 幕末期。55 は雲文がみられる。19 世紀前半 ~ 幕末期。56 は碗で高台が踏ん張る。見込みの幅が広く山水文を施す。端反碗の可能性あり。19 世紀。58 は端反碗の蓋で天井部に「太明年造」の銘がある。外面に宝文と花文内面は雷文帯に花弁文を施す。19 世紀前半 ~ 幕末期。59 は輪花皿で楼閣山水文を施す。口銹とする。19 世紀前半。60 は火入れで外面に飛龍文を線書きで施す。19 世紀。57 は磁器碗で褐釉に白土で花文を描く。内面に目跡あり。広東碗の形態に近い。19 世紀。61~63 は関西系陶器端反碗である。61 は灰釉に緑釉を重ねる。体部に褐釉の端反碗片が溶着している。19 世紀。62 は銅緑釉を施す。19 世紀。63 は灰釉を施し貫入がみられる。底面に墨書で「吉」をひし形で囲う。19 世紀。64 は萩焼の陶器碗で巴高台をなす。内面に褐釉を流し掛けしている。19 世紀。65 は土師質の小壺底部で、糸切り。「治」の墨書を施す。66 は陶器蓋で外面灰釉、内面は露胎とする。上野・高取系で 19 世紀。67 は陶器土瓶で溜め口をなす。外面鮫肌状に仕上げ緑褐釉を施す。上野・高取系で 19 世紀。68 は美濃焼の統制食器で土岐地方で焼かれたことを示す「岐 767」を押印する。戦時下の遺物。

このほか、本土坑からは染付大徳利、陶器擂鉢（上野・高取系、肥前）土師質の窯道具や七輪、灯火具、メゲなども出土している。

SK1078(69~76) 69、71 は白磁の紅皿で、69 の体部は型押しの線文、高台は花形をなす。肥前の 18 世紀。71 は型押しで蛸唐草をあしらう。肥前で 19 世紀。70 は青磁染付の湯呑碗で、内面は雷文帯を設ける。外底部に「紙下」の墨書を残す。内面には朱墨もみられる。焼き継ぎ痕あり。肥前の 19 世紀。72 は染付仏飯器で蛸唐草を描く。肥前の 19 世紀。73 は染付油壷で、肩部に樹枝文を描く。18 世紀の肥前産。74、75 は陶器皿で、内面に唐草と桜花を白土で象嵌している。胎土は褐色系で灰釉をかける。上野系で 18 世紀末 ~19 世紀前半。76 は陶器の灯火具で、碗型の体部内面に芯支えを斜めに立ち上げる。灰緑釉を施す。上野・高取系で 19 世紀。このほか、瓦質火鉢、土師質焙烙、窯道具が出土している。

SK1142（77~83） 77 は肥前型紙刷りの染付碗で明治期前半。78 は肥前の統制食器青磁染付碗で窯付近から出土した 34 と全く同タイプである。統制番号も「有 67」で同一窯で焼かれた製品である。1941~45 年。79 は染付磁器皿で型づくりか。外底部に緑の絵具で「カマヤ陶器」のスタンプ文字を雪の結晶文様で囲っている。肥前有田産で戦時中の製品。80 は陶器灯明皿で灰緑釉を掛け、口縁部のみ拭き取る。上野・高取系で 18 世紀。81 は陶器土瓶の蓋で天井部は褐釉の捻花に緑釉の点描を施す。関西系で 19 世紀。82 は陶器土瓶で鉄鉢口をなす。体部に白土をかけた後、梅枝文を鉄釉で施し灰釉を流す。上野・高取系で 19 世紀。83 は土師器皿で内外底面は中央が黒色（斑雲）を呈する。ロクロケズリを施し SK1331 出土の 196 と同タイプである。19 世紀。このほかしっくいの窯体片、ふいごの羽口が出土している。

SD1143、SK1144 境界付近（84~90） 84 は土人形の帽子形製品で、胎土は赤い。合わせ型で側面に紐風の貼付けが見られる。85 は土人形の型で内裏をあしらう。首部外面には合印が刻まれ、外面中央には「あ」の刻書がみられる。86 は陶器碗で胴部に多条沈線をめぐらす。藁灰釉と黄釉を施す。瀬戸・美濃系で 19 世紀。87 は染付大碗で松樹文を描く。内面には擦痕が顕著。肥前で 18 世紀末 ~19 世紀前半。88 は染付端反碗の蓋で内面に雷文帯と松竹梅文を描く。外面は花樹文か。19 世紀前半 ~ 幕末期。89 は染付大皿で内面に山水文と家屋を描く。外底部にハリ支えが 5 か所みられる。また朱墨で「ヌム 阿月」と記す。肥前塩田窯の製品か。90 は陶器の徳利で外面に童子を描く。磁胎に近い。窯 1 から同一破片が出土している。産地不明。19 世紀。

SD1143 は調査時土坑（SK）としていたが、溝に改めた。人形廃棄土坑の SK1144 と接しており、それに切られているため、これらの遺物は SK1144 に帰属するものと考えている。

図 23　人形廃棄土坑出土遺物実測図その 2（1/3、1/4）

SK1144（91~96） 土坑の内部から出土した一群で、91、92は型紙刷りの染付碗で明治前半の肥前産。93は色絵磁器の筒碗で、朱により折り松葉文を施す。肥前で19世紀か。94は染付小杯で体部中位に突線がめぐる。合成コバルトにより鶴を描く。口縁部は口銹。肥前で明治前半。95は染付端反碗の蓋で細線書きで雷文帯や松竹梅文を描く。肥前で19世紀前半～幕末期。96は陶器土瓶の蓋で赤絵により鋸歯文、捻花を上絵付する。上野・高取系で19世紀。このほか、瓦質蓋や生産用具、火鉢、七輪類が出土している。

SK1145（97、98） 97は染付端反碗で外面は墨弾き技法により全面に菊文を描く。肥前で19世紀前半～幕末期。98は染付皿で口縁部は輪花で口銹とする。山水文と舟、家屋を描く。底部は蛇の目凹型高台となす。19世紀前半の肥前産。このほか、瓦質火鉢、サナ、土師質火鉢、メゲ、丸瓦などが出土している。

SK1329（99~101） 99は陶器碗で体部は有段をなす。64と同一タイプで19世紀の萩焼。100は染付広東碗で体部は立ち上がる。18世紀末～19世紀前半の肥前系。101は染付碗で口縁部は外反する。文様が総柄で植物をあしらう。18世紀末～19世紀前半の肥前系。

SK1330（102~105） 102は染付湯呑碗で雷文帯や文字文を線書きで描く。肥前で19世紀。103は染付端反碗で口縁部は玉縁状をなす。外面に鳥を描く。瀬戸・美濃系で19世紀。104は染付小碗で花文を描く。内面に赤絵具が付着する。18世紀末～19世紀前半の肥前系。105は染付端反碗で体部は墨弾き文様と福寿文字を描く。229とセットになるものか。肥前で19世紀前半～幕末期。このほか、サナ、関西系の土瓶蓋が出土している。

SK1334（106、107） 106は土人形の飯事道具鉢である。型づくりで黄釉に緑釉を点描する。軟質施釉陶器。107は土師器皿で口縁部は溝縁をなす。見込みに4か所胎土目跡があり、肥前陶器溝縁皿に酷似するが、底部は糸切りの平底で底径が極めて小さい。このほか土師器小皿、土師質火入れ、サナ、陶器行平鍋片などが出土している。

SK001（108、109） 108は陶器油差しで、全面に鉄釉を施す。受け部には一孔を設ける。上野・高取系で19世紀。109は瓦質火鉢で高い脚部をもち、口縁部で屈曲する。外面は研磨が行き届き、「斥美」の文字や菊唐草を型押ししている。脚部に一孔を設ける。在地産で19世紀。このほか、ふいごの羽口、土師器灯明皿、土師質十能、有孔ハマ、急須蓋などが出土している。

(3) 土坑、井戸出土遺物（図24~27）

SK1014（110~113） 110は土人形の子供頭部で合わせ型づくり。19世紀の在地産。111は土人形の鶏で合わせ型づくり。キラコを多く塗る。112は土人形の鳩笛で軟質施釉陶器。上面に吹き口あり。黄釉に緑釉を点描する。113は染付碗で草花文を施す。内面には赤色顔料付着。絵付け具として使用か。肥前で18世紀末～19世紀前半。このほか、土師質盤、ふいごの羽口が出土している。

SK1015（114、115） 114は土人形の少女で合わせ型づくり。表面にはキラコを残す。在地産。115は土師器皿で、型づくりで胎土は精良で白い。見込みに火焔宝珠を陽出する。外底部には「博多／楠崎製造」のスタンプあり。19世紀で在地産。252と同一製品。このほか関西系土瓶が出土。

SK1016（116~123） 116~121は肥前染付である。116は丸碗で竹文を描く。18世紀末～19世紀前半。117も丸碗で植物を描く。18世紀末～19世紀前半。118も丸碗で口縁部は褐釉を施す。18世紀末～19世紀前半。119は碗で四方襷文、井桁亀甲文を描く。18世紀後半。120は小杯で笹文を施す。紅皿に使用か。18世紀後半。121は広東碗で花唐草文を描く。18世紀末～19世紀前半。122は陶器の灯明皿で灰釉を施す。18世紀の肥前か。123は上野・高取系陶器甕で褐釉に薬灰釉を流す。19世紀。

SK1020（124~126） 124は土人形の長太郎で、合わせ型づくり。腕は別づくりとなる。胡粉を残す。125は瓦質火鉢か七輪の脚部に貼り付けた鬼面で、器肉は土師質焼成。在地産。126は軒平瓦で唐草は

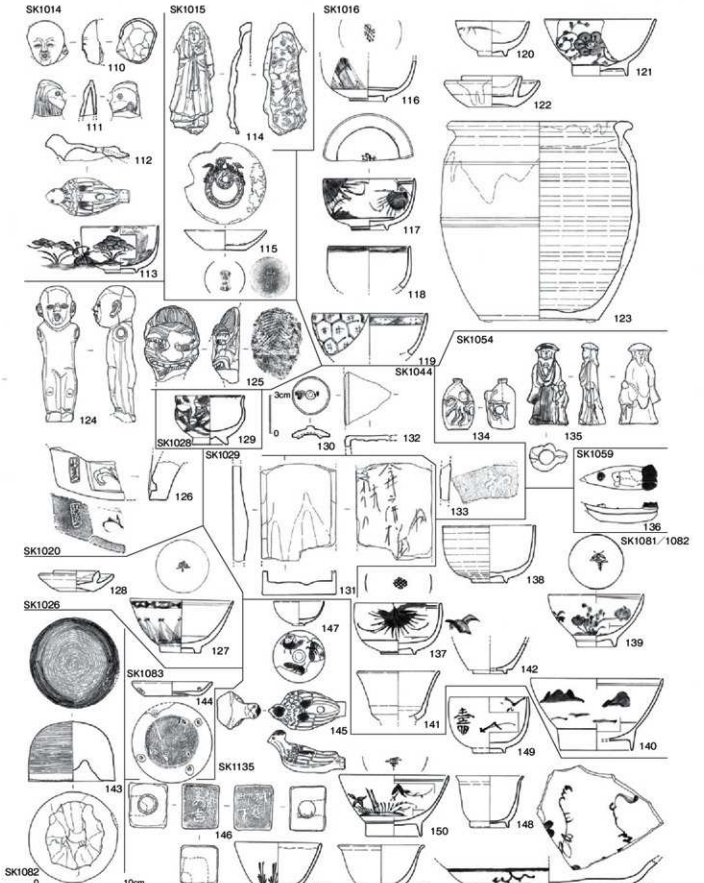


図 24　土坑、井戸出土遺物実測図その 1（1/4）

花形となる。脇区には「新右ェ門」の刻印を施す。

SK1026（127、128） 127は染付碗で土坡に図案化した草文を描く。口縁部外面は三角繋ぎ文を巡らす。18世紀後半の肥前産。128は陶器の灯明皿で底面はロクロケズリ。黄釉をうすく掛ける。軟質施釉陶器である。このほか染付広東碗、青磁染付碗、瓦質小壺、土師質風炉片が出土している。

SK1028（129） 萩焼の陶器碗で、藁灰釉と鉄釉をイッチン掛けする。19世紀。

SK1029（131） 石製方形硯で陸部は大きくくぼみ基部側で薄くなる。裏面には「今井二併松」なる線刻がみられる。内面全面に墨が付着する。天草石（石英粗面岩）か。このほか幕末期の染付皿、端反碗、徳利、サナが出土している。

SK1044（130、132、133） 130は土人形の飯事道具蓋で、黄釉に緑釉を点描する。19世紀。132は土人形の箱物で、合わせ型か。内面は指頭圧痕が顕著である。側面は縁取りされ、黄色絵具で絵付される。胡粉が多い。133は土師質七輪片で文字「鉋」の型押しがみられる。19世紀の在地産。

SK1054（134、135） 134は土人形の蛸壺で合わせ型づくり。表面は丁寧なミガキを施し、蛸を貼り付ける。体部に一孔あり。在地産。135は土人形で子連れの女性である。合わせ型づくりで底面に大きな一孔を有する。このほか土師質のゴマ煎り、窯道具が出土している。

SE1059（136） 土人形の帆掛け舟で貼付け成形。黄釉と緑釉を施す。上面に鉄芯を埋め込んでおり帆掛けに供したものか。舟底は露胎とする。19世紀。

SK1081（137~142） 137は染付丸碗で植物と鳥を描く。見込みは区画文。18世紀末~19世紀前半の肥前産。138は白磁丸碗でロクロ目が顕著。18世紀末~19世紀前半の肥前産。SK1082との境界部分で出土した。139は染付碗で草花文、見込みは昆虫を描く。18世紀後半で肥前産。SK1082との境界部分で出土した。140は染付広東碗で、山水文を描く。大ぶりで18世紀末~19世紀前半の肥前産。141は肥前の京焼風陶器碗で口縁部は大きく外反する。SK1082との境界部分で出土した。18世紀前半。142は信楽系の灰釉陶器碗で19世紀。このほか、土師質サナ、メゲ、ゼーゲル状の土製品、鉄釉擂鉢片などの遺物も出土している。

SK1082（143） 土師質の窯道具の内型である。上面は球形をなし、細かいカキメがみられる。下面は中央部に絞った雑な窪みを有する。直径9.0cm、高さ6.4cmをはかる。太宰府市大町遺跡に類品あり。

SK1083（144） 土師器皿で糸切りをなす。体部の4か所に焼成後の穿孔がある。吊り下げに供したものか。

SK1135（145~157） 145は土人形の鳩笛で、黄釉の地に緑釉、褐釉を点描する。上面に吹き口を設ける。軟質施釉陶器で19世紀。146は方角土製品で、3.9×4.1×4.8cmをはかる。L字形に貫通する2孔を設ける。二つの面に「紙園町下 寿吉」「紙園町下」の刻書を施す。窯道具の一種か。147は色絵磁器の小杯で、昆虫文を三か所にあしらう。18世紀末~19世紀前半の肥前産。148は白磁の小杯で口縁部は外反する。17世紀後半の肥前産。149は染付の丸碗で外面に折り松葉と寿の字を描く。口縁部の欠けた部分に墨が付着している。18世紀末~19世紀前半で肥前産。150は染付広東碗で外面に植物、見込みには昆虫を描く。18世紀末~19世紀前半で肥前産。151は染付皿で口縁部は鍔状に開く。外面に唐草文、内面は蔓草を描く。17世紀末~18世紀前半で肥前産。152、153は京信楽系の碗である。152は灰釉に小杉文を鉄釉で描く。153は灰釉を施すが、内外に貫入が著しい。いずれも19世紀前半。154は土師質の脚台付円盤で48と同タイプである。三か所に低い脚台を有する。下面には「長右ェ門」なる刻書がみられる。在地産。155は瓦質火鉢で109の大型品。口縁部はL字に屈曲し脚部が高い。裾部に宝船と龍を、体部には花唐草文を型押しする。在地産。156は土師質火入れで、高台はアーチ状になる。直立する体部には桜花文のスタンプを施す。157は軒平瓦で、左桟瓦になる。中心飾りは花文をあしらい唐草は2回転する。

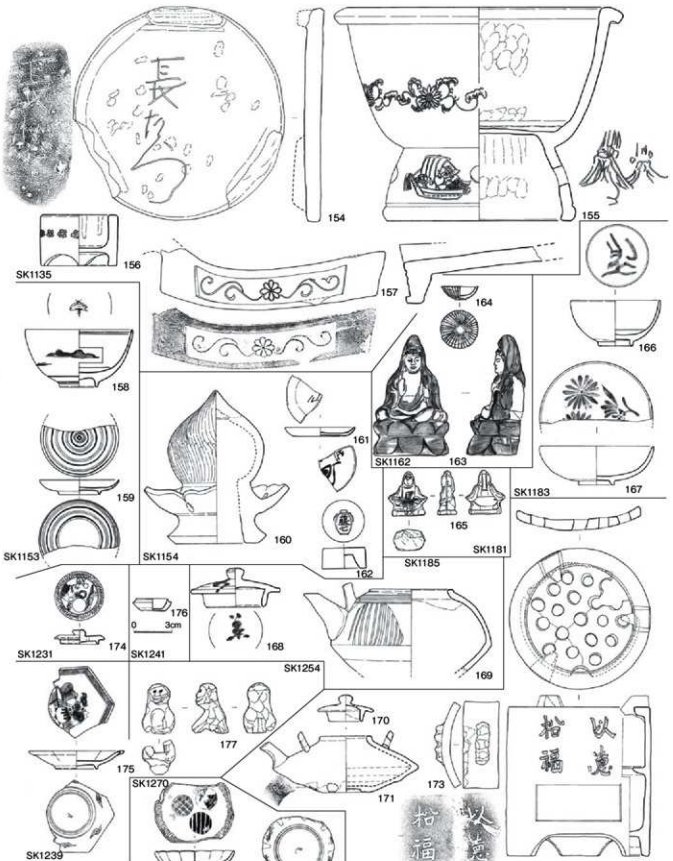


図 25　土坑、井戸出土遺物実測図その 2（1/4）

線は肉細となる。19 世紀。このほか土人形の鳩笛片、関西系の灰釉碗、サナ、土師質大甕が出土している。

SK1153（158、159） 158 は染付碗で山水文、見込みに昆虫を描く。18 世紀後半の肥前。159 は色絵磁器皿で、内外面に赤、黒の同心円文を描く。18 世紀末～19 世紀前半。このほか瓦質火鉢、窯壁片が出土した。

SK1154（160~162） 160 は瓦質露盤で中空をなす。5 弁の受花を有し、その間に 5 孔を穿つ。宝珠の先まで非常に丁寧にヘラミガキされる。在地産か。19 世紀。161 は土師器皿で糸切り。内面、底面に墨書あり。内面は不明だが底面は「祇□町」と読める。19 世紀。162 は土師質円形土製品で脚台をもつ。上面には「藤七」の文字を入れた把手付壺をスタンプしている。在地産か。このほか土師質風炉、染付丸碗片が出土している。

SK1162（163、164） 163 は色絵磁器人形の仏像である。合わせ型でつくり、呉須と褐釉を施す。底面に布目痕あり。肥前産。164 は白磁紅皿で型づくり。貝文を施す。18 世紀の肥前産。このほか、瓦質壺片、土師質瓦塔、サナ、窯道具が出土している。

SK1181（165） 土人形の内裏様で合わせ型の中実。黄釉、緑釉を施す。このほか各種窯道具、スラグが付着した土製品が出土している。

SK1183（166、167） 166 は京焼風陶器碗で見込みに緑釉で文字状文様を施す。肥前で 18 世紀。167 は陶器色絵皿で、灰釉に青と緑絵具で菊文を上絵付する。18 世紀で肥前か関西系。このほか、窯道具に使われた丸瓦片が出土している。

SK1185（168、169） 168 は陶器土瓶の蓋で灰釉と褐釉を流し掛けする。内面は露胎で「いろは」の崩し字を墨書する。肥前で 18 世紀後半。169 は陶器土瓶で鉄砲口をなす。体部に横沈線と縦短線文を刻む。鉄釉を施す。19 世紀の肥前産。このほか、上野・高取系陶器壺、瓦質水差し片、道具瓦が出土している。

SK1226（170~173） 170、171 は陶器土瓶（黒ぢょか）の蓋と身である。蓋は傘形でつまみは丸い。天井部に一孔を設ける。身の体部は扁平で鉄砲口は短く屈曲し三足は接地する。焼成は極めて堅緻で鉄釉は均一で光沢がある。身の体部下半に「長太郎」の刻印がある。黒薩摩指宿の長太郎焼で近・現代の製品。172 は土師質七輪で体部は直立し脚部はアーチ形とする。外面に「以徳招福」の文字を彫り込む。胎土は精良で白い。サナはやや土が粗く湾曲気味である。通風孔の扉 173 ははめ込み式となる。土瓶は七輪にかけられていたものが押しつぶされた状況で見つかった。

SK1231（174） 色絵磁器の蓋で、つまみは瓢箪形とし赤彩する。天井部は瑠璃釉地に金彩で家屋、風景などを描くが殆ど剥落している。大小の三孔を有し香炉の蓋の可能性がある。肥前で 18~19 世紀。

SK1239（175） 型づくりの染付六角皿で内面に鋸歯文帯、宝尽くし文をあしらう。「玩」の銘款あり。細線書きで 19 世紀の肥前。このほか瀬戸・美濃系小杯、染付端反碗の蓋が出土している。

SK1241（176） 白磁の合子で受け部をもつ。18 世紀の肥前産。

SK1254（177） 土人形の猿付土鈴で手づくね成形。

SK1270（178） 染付輪花皿で型づくり。内面に雷文帯と丸文をあしらう。底面には「元」の銘款がある。19 世紀の肥前産。

SK1310（179、180） 179 は土人形の猿付き土鈴で 195 と同一タイプであろう。180 は土人形の猿で耳の脇に双孔を有する。帽子部分に赤色塗彩あり。

SK1327（181~186） 181、182 は土人形のチン抱き人形である。いずれも軟質施釉陶器で 182 の底面に一孔を有する。183 はチン抱き人形の土型で大型品。外面は箱形に成形される。184 は土人形で犬の土型である。183 同様な箱形成形となる。185 も土人形であろう。内面には指頭圧痕が顕著である。貼付

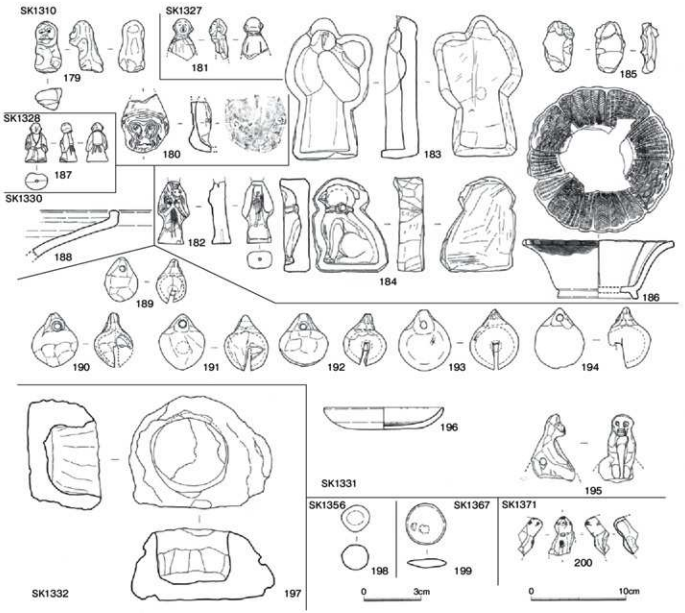


図 26　土坑、井戸出土遺物実測図その 3（1/2、1/4）

け部分が存在する。186 は陶器鉢で輪花の体部内面を 8 等分して微細な文様を型押ししている。全面に薄めの緑釉を施し、口縁部の一部を緑彩とする。讃岐産源内焼で 19 世紀。

SK1328(187) 土人形のおばこであろうか。底面に一孔を有する。キラコを塗る。このほか土師質火鉢、瓦質置物片、陶器灯火具、肥前染付広東碗片が出土している。

SK1330（188） 陶器花生で口縁部は大きく開き端部で直立する。緑褐釉と鉄釉を施す。上野・高取系で 17 世紀後半 ~18 世紀。このほか、土人形、サナ、肥前の染付端反碗、合成コバルトの筒形碗、関西系土瓶蓋が出土している。

SK1331（189~196） 土師質土器の土鈴がまとまって出土した。189 は小型品、他は体部の丸い大型品である。いずれも外面はユビナデで指頭圧痕を残すものが多い。190、194 以外は内部に土玉を残す。色調は肌褐色を呈する。195 は猿付き土鈴で体部に一孔を残すが鈴部分を欠いている。179 と同一タイプ。196 は土師器皿でロクロ成形の糸切り。底面は内外面黒色を呈し、口縁部には油煙が付着する。このほか、サナ、瓦質火入れ、土師器灯明皿が出土している。

SK1332（197）軽石を成形して内面に径7.9cmの円形刺り込みを入れ容器としている。外底面は平底化する。盆栽用に製作したものか。このほか、土師質の窯道具が出土した。

SK1356（198）土師質の土玉で土鈴の玉であろう。外面はナデで径1.7cmをはかる。

SE1367（199）碁石で径2.2cm、厚さ0.5cmのレンズ型をなす。黒玉石を使用する。

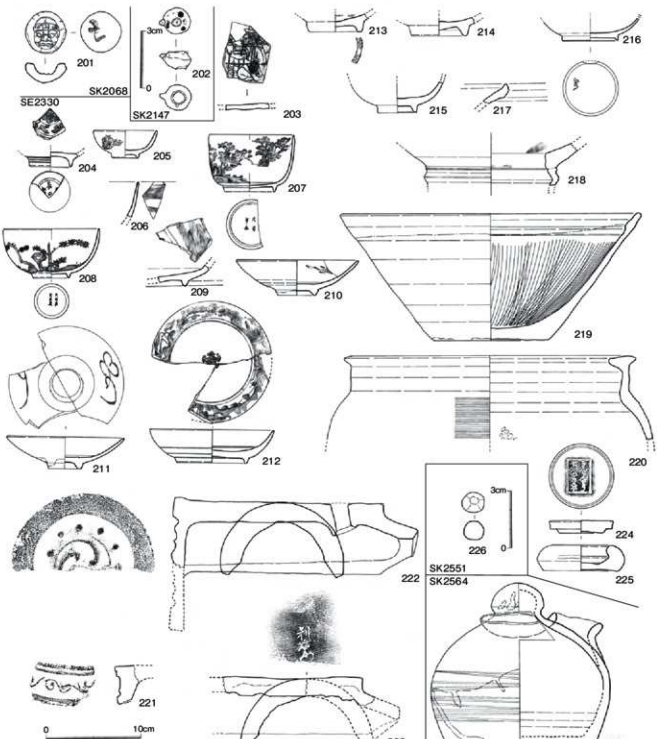


図27　土坑、井戸出土遺物実測図その4（1/2、1/4）

SK1371（200）色絵磁器人形の兎である。頭、ひげ、胸元に赤、黒、褐色の絵具を塗彩する。水滴か。肥前で17~18世紀。

SK2068（201）土人形泥面子の型である。鬼面をあしらう。外面「五」の墨書あり。

SK2147（202）土人形飯事道具の土瓶である。白土で丸文を描く。胎土は赤い。

SK2174（203）土人形でレリーフ状をなす。漁師を型押しする。朱塗りの痕跡あり。

SE2330（204~225）204は明の青花マントー芯の碗で「富貴長春」の銘あり。16世紀。205~212は肥前の染付。205は小杯でコンニャク印判で花車を描く。18世紀前半。206は碗で18世紀。207も碗で外面樹木、底面は「大明年製」の銘あり。17世紀末~18世紀前半。208は丸碗で外面松竹文、底面は「大明成化年製」の銘あり。18世紀前半。209は皿で全面施釉で畳付には離れ砂付着。17世紀前半。210、211は同タイプの皿で見込みは蛇の目釉剥ぎ。波佐見焼で17世紀後半。212も皿で見込みは手書きの五弁花文を描く。周囲は唐草文。波佐見焼で18世紀中葉~末。213~220は陶器である。213は李朝の碗で灰釉を施し砂目がみられる。15~16世紀。214は明の青磁碗底部で細蓮弁タイプか。16世紀初め。215は碗で灰釉を施す。小石原系で17世紀後半。216は京焼風陶器碗で底面に「清水」の銘款あり。肥前で17世紀後半。217は盤で口縁部は三角形に肥厚する。釉薬の溶けが悪い。肥前で17世紀。218は花生で頸部は上下を釉薬で接合する。17世紀後半の肥前。219は擂鉢で口縁部付近のみ鉄釉を施す。底面は糸切り。17世紀後半の肥前。220は甕で口縁部はT字状をなし鉄釉を施す。17世紀後半で肥前。221は軒平瓦で中心飾りは5葉か7葉か。外区は二段となる。16世紀末~17世紀前半か。222は軒丸瓦で三巴文。玉縁側の上面に留め孔を有する。18世紀。223は丸瓦、コビキBで吊り紐痕を有する。上面に「利右ェ門」の刻印あり。224、225は花焼塩の蓋と身である。224は受け部が突出するタイプで型押し後にナデ。天井部径は6.8cmで「なん者（ばん）里う七度やき志本」との刻印が見られる。類例は京都市伏見奉行所、石川県安江町遺跡で出土している。225は口縁部が大きく内湾し器肉が厚い。底面は糸切り後に平滑ナデを行う。底径8.0cm。おおむね18世紀代の和泉地域の所産であろう。

SK2551（226）土鈴の玉で、土師質。表面はナデ。

SK2564（227）陶器尿瓶で体部外面はカキメが顕著である。注ぎ口は楕円形をなす。緑褐釉を施す。上野・高取系で19世紀。

（4）溝出土遺物（図28）

SD1006（228）染付碗で体部は大きく開く。内面に以下の和歌をあしらう。「あわれ□も　いの□□□から　ちの□□□君のなさけを　まつ乃下つゆ」肥前で17世紀後半~18世紀初め。他にガラスのおはじき、瓦質甕片が出土している。

SD1143（229、230）229は染付端反碗の蓋で繁ぎ文と寿福の文字を施す。墨弾き技法がみられる。肥前の良品で19世紀前半~幕末期。SK1330出土の105とセットになるものか。230は土師質七輪で、サ

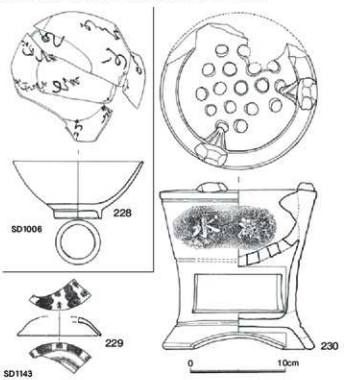


図28　溝出土遺物実測図（1/4）

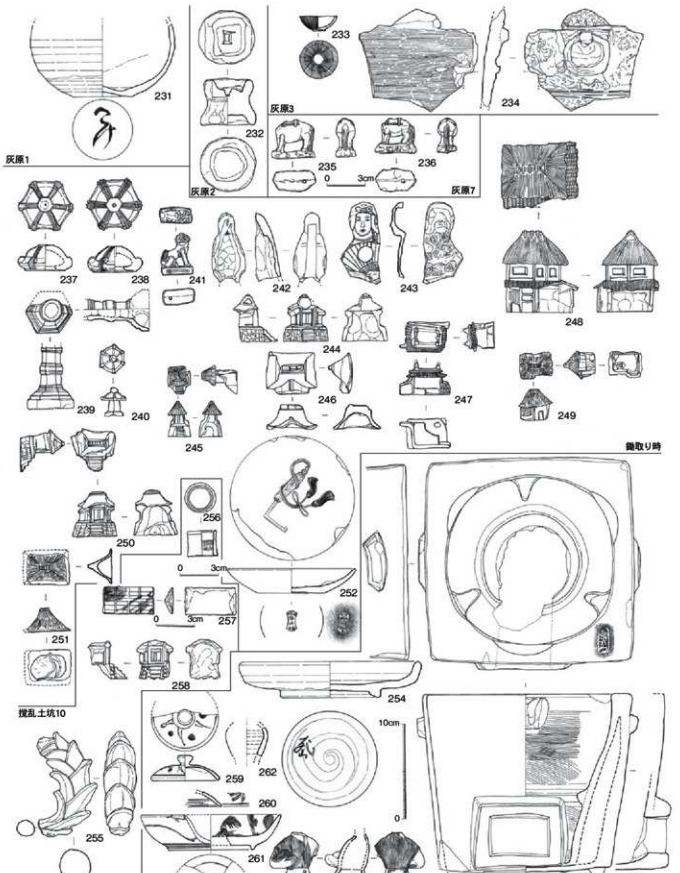


図 29　灰原、鐘取り時、攪乱土坑出土遺物実測図（1/3、1/4）

ナが一体となる。口縁部上面と焚口窓部分に一部ススが付着する。底部はアーチ型に刳りこまれる。白色系の粗い胎土をなす。体部に「湖水」のスタンプあり。19 世紀の在地産。

(5) 灰原、鋤取り時、撹乱土坑出土遺物（第 29 図）

灰原 1（231）陶器土瓶で外面は白土で化粧し、その上に灰釉を施す。体部下半は露胎。内面は底部付近にのみ灰釉を掛けるが、化粧土が垂れている。外底面には「さけ」の墨書がみられる。19 世紀の肥前産か。このほか大量の 19 世紀代陶磁器、また瓦質の角火鉢、窯道具もみつかっている。

灰原 1 出土陶磁器（写真 19）図化できなかったが、江戸後期を中心とする陶磁器が大量に出土している。ほとんどが肥前産染付で一番左列は陶器の碗や土瓶蓋である。

染付は右奥右から段重、波佐見産の瓶（徳利）、型作りの双魚文口銹長皿、その前は右から広東碗、八角碗、筒江窯系の蛇の目凹型高台皿、白磁蛇の目釉剥ぎ輪花皿、その手前には広東碗が 3 点と雪輪文様を並べたハの字高台碗、その手前は広東碗が 3 点と、総柄の端反碗、八角碗片と端反碗である。一番前列は右から広東碗とその蓋、小碗類、白磁丸碗である。

陶器は左列奥から蛇の目釉剥ぎをした上野・高取系灰釉碗、上野・高取系の灰釉土瓶蓋、手前の 4 点は京信楽系の碗で小杉碗もみられる。

これらの陶磁器から、灰原 1 の主たる時期は広東碗を主体に端反碗や関西系の陶器が一定量含まれる 19 世紀初頭 ~ 第 2 四半期とすることができよう。灰原 1 は窯 2 に切られた状態で検出されており、人形窯操業時期の一端を示す良好な資料である。

灰原 2（232）瓦質の窯道具で、臼型の形状をなす。手づくねで調整は粗い。内面には方形の掘り込みがみられる。このほか、上野・高取系の植木鉢片、京焼系陶器、染付広東碗、小丸碗、青磁染付筒碗、蛇の目凹型高台の皿が出土している。

写真 19　灰原 1 出土陶磁器

灰原 3（233、234）233 は白磁紅皿で型づくり。外面は貝文を施す。18 世紀の肥前産。234 は土師質の環付火鉢の体部で、鉄火鉢のような仕上げとする。内面はハケメ目がみられる。在地産。このほか、染付広東碗、端反碗、金彩の仏飯器脚部、肥前系陶器土瓶の蓋、瀬戸・美濃系火鉢が出土している。

灰原 7（235、236）いずれも土人形の馬で、合わせ型づくりのほぼ同じ成形、形状をなす。底面には一孔を設ける。このほか、染付広東碗片、皿、瓦質の植木鉢、トチンが出土している。

鋤取り時（237~252）237~251 は土人形である。237、238 は灯籠の笠、239 は灯籠の軸部である。いずれも型づくりで六角形の笠の頂部には針孔がみられる。また下部には径 2cmの刳り込み孔を設ける。胎土は白いがやや粗い。239 は六角形の台座の上に立つ。胎土は笠と同一であるが、焼成が異なり、やや赤みを有する。底面から中空となす。上部は欠損する。240 は小形の灯籠で、笠部は六角形をなす。胡粉を残しており、本来彩色されていたものと思われる。241 は狛犬（吽形）で合わせ型づくり。底面に一孔を設ける。242 は女性像で、合わせ型づくり。後ろ姿で長髪を表現している。243 は大将をモ

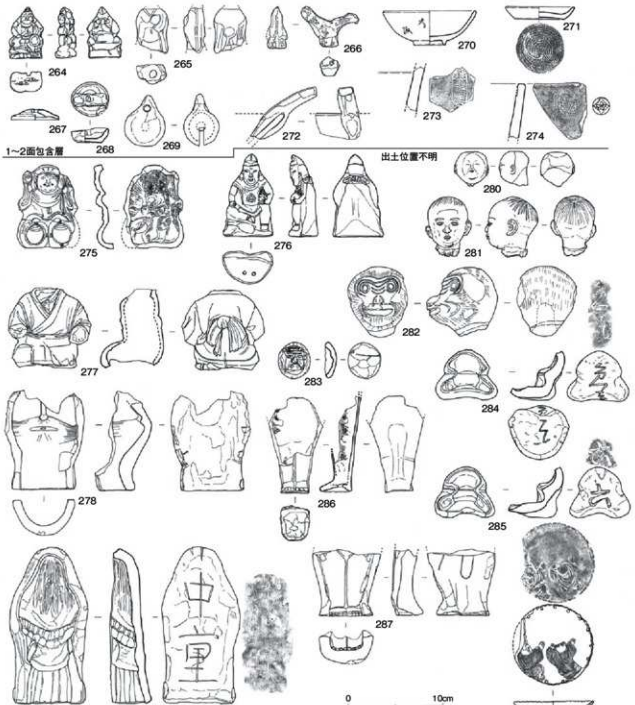


図 30　包含層及び出土位置不明の遺物実測図（1/4）

チーフとしており、合わせ型づくりである。鉢巻姿で日の丸扇を手に持つ。244~251 は建物家屋である。244 は祠で石垣の上に観音開きの扉を設ける。型づくり。245 も祠で草葺屋根を表現している。型づくり。石垣でなく土壇であろうか。246 はお堂の屋根部分で入母屋風となる。草葺きか檜皮葺き。247 は二階建の庵で瓦屋根に棟飾りを載せている。型づくり。底面に一孔を設ける。248 は二階建の民家で型づくりの茅葺屋根とする。庇部分は瓦葺きとしている。249 も民家で型づくり。格子窓に藁葺き屋根を載せる。底面に一孔を設ける。250 は祠で石垣の上に載る。型づくりで入母屋屋根を表現する。251 は入母屋風

の屋根部分で民家用か。型づくりで茅葺きか。底部分を欠損する。252は土師器皿で内型づくり。見込みに鍵を表現する。外底部には「博多／楠崎製造」の刻印を押す。胎土は白い。115と同一窯の製品。在地産。

撹乱土坑（253~263） 253は土師質箱形七輪でサナと一体型になる。火受け部分は円形に三つの受けを設ける。焚口は縁取りし、把手は対面で扇形をなす。外面はヘラミガキ、上面の一隅に「長右エ門」のスタンプを押す。19世紀の在地産。254は陶器皿で、黒釉を施す。体部下半から底面は露胎である。外底面はロクロによる巴ケズリを行う。「残山」？の文字を刻書している。255~258は撹乱土坑10から出土した。255は土野・高取系陶器の把手で、型づくり。若菊文をあしらう。灰釉を施す。19世紀。256は象牙の筒状製品で上部は縁取りする。内面にはケズリがみられ光沢がある。257は土人形の屋根で横板葺きを表現する。黄釉、緑釉で彩色する。軟質施釉陶器。258は土人形の祠で、244、250と同タイプである。型づくり。一部黒絵具が塗られる。259は陶器急須の蓋で黄釉地に褐釉の区画を施し、その中に緑釉を点描している。筑前野間焼か。19世紀。260は染付端反碗の蓋で線書きの雷文帯を巡らす。19世紀前半～幕末期で肥前産。261は染付皿で外面唐草、内面は植物を描く。18世紀の肥前産。262は瑠璃釉の御神酒徳利で、水挽成形。18世紀末~19世紀の肥前産。263は磁器人形で帽子を持つ人物の上半身を作る。台部に4つの円孔を設け、他の部品を装着したものか。淡青釉に帽子部分は濃青色の釉で表現する。内面に「MADE IN JAPAN」の印字あり。昭和期の作品。このほか、撹乱土坑1からは図版2のa・bのような岩場に座す精緻な人物（西行法師？）の塑像が出土している。

(6) 包含層及び出土位置不明の遺物（図30）

包含層（264~274） 264~268は土人形である。264は恵比寿で、表面にキラコを塗る。合わせ型で底面に一孔あり。265はチン抱き人形で合わせ型。底面に一孔あり。266は鶏で合わせ型で台部は五角形をなし一孔あり。267は乗燭の蓋で天井部穿孔。268は乗燭の身で、釣手に一孔あり。269は土鈴で玉入り。270は染付の紅猪口で「大坂」の文字あり。18世紀後半。271は土師器小皿で糸切り。19世紀。272は土師質の焙烙で把手は嘯合わせる。19世紀。273は土師質七輪の胴部で焚口あり。「博多 正木善次」

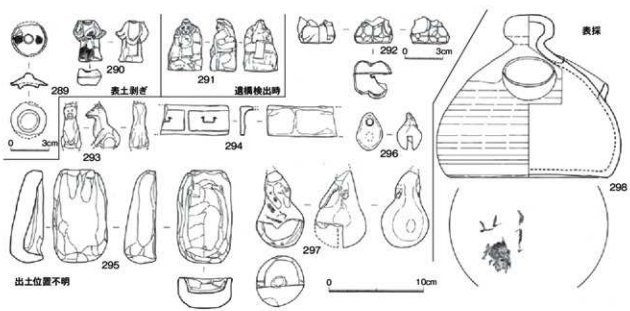


図31 表土及び出土位置不明の遺物実測図（1/3、1/4）

のスタンプあり。19 世紀の在地産。274 は瓦質火鉢で梅文をスタンプする。丁寧なナデ。これらはいずれも各グリッドの 1~2 面で出土している。

出土位置不明(275~288) すべて土人形関連遺物である。275 は大黒の半身で内面は指頭圧痕が著しい。276 は恵比寿で、合わせ型。底面に 2 孔あり。277 は正座人物、278 は人物上半部の土型で内面にキラコを塗る。279 は土型で婦人の後ろ姿である。外面に「中重」の刻書を施す。280 は童子の頭部で中実。281 も童子頭部で中空となる。282 は猿の頭部で瓦質の芯持ち成形。283 は泥面子の型で、鬼面を施す。284、285 は福助の後ろ姿の土型でそれぞれ「□□□」「六」を刻書する。286、287 は一対の人形と土型で脚部はぴたりと適合する。287 の外面には刻書がある。288 は軟質施釉陶器の輪花皿で、踊る唐子をあしらう。

(7) 表土剝ぎ・遺構検出時、出土位置不明、表採遺物(図 31)

表土剝ぎ(289、290) 289 は土人形飯事道具の蓋で、半菊文上に緑釉を点描する。290 は土人形で扇を抱いている。裾部分に緑釉を施す。三番叟か。

遺構検出時(291) 土人形の恵比寿で、脇に抱く鯛は不鮮明。5 と同一の合わせ土型で作成か。

出土位置不明(292~297) 292 は土人形の大黒天の下半俵踏み部分である。合わせ型で作成。293 は土人形の狐で、芯に粘土を巻き付けて作られる。中実。294 は土人形の箪笥引き出しでキラコを少量含む。295 は土師質の舟形であるが祭祀品とは思えない。内面は粗く削っており窯道具のひとつか。296 は土鈴で玉が挿入されたままの完形品。一孔あり。297 は猿付き土鈴で、猿部は挿入して作る。一孔あり。298 は表採品で完形の陶器尿瓶。体部は下膨れをなし排尿口の突出は短い。黄色い灰釉を施す。外底部に墨書を施すが読めない。19 世紀の上野・高取系。

(8) ガラス製品(図 32)

299 は SK1234 から出土した。環状をなし径は 1.5cm程度になるか。幅は 0.9cmで淡黄色の半透明を呈する。300 は SK1144 から出土した。環状をなし外面には花文を陽出している。ターコイズブルーを呈し美しい。幅 0.5cmで径は 1.5cm程度となる。指輪か。301 は SK1014 より出土した。6 角形のボタン状製品で、幅 1.4~1.55cm、高さ 1.3cmをはかる。ターコイズブルーを呈する。302 は SK1239 より出土した。チャンポンで吹き口と体部の境で欠損する。口孔は 0.6cmをはかる。ガラスは表面風化して白色化している。博多名物品。303 は窯 1、4 の東側焼土内から出土した。統制食器の瓶の底で上げ底をなす。底面は花形になり「☆90」と鋳出されている。大日本帝国陸軍 90 式容器(昭和前期)と思われる。

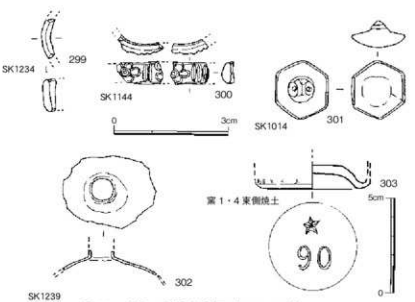


図 32 ガラス製品実測図(1/1、1/2)

表１　出土遺物観察表

挿図番号	地区	出土遺構・層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	成形	装飾 釉薬など	文様など	その他	銘款・印	産地	年代	備考	図版番号
21-1	I	室1掘方内	染付磁器	碗	(11.2)	(4.8)	5.8		呉須	内：圏、[illegible]			肥前	18c末～19c初		5
21-2	I	室2[illegible]	土人形	?	—	—	—	内：[illegible]			内面[illegible]				内面砂付着	2
21-3	I	室2床下床面下	染付磁器	小杯	—	(2.8)	—		呉須				肥前	17c	二次的被熱	5
21-4	I	室2掘り方床下面	青花磁器	皿	—	(8.5)	—		呉須	玉取獅子			明	16c後半	二次的被熱	7
21-5	I	室2連棟抜出遺構	土人形	恵比寿	—	—	—	合わせ型							29-3と同一型か	2
21-6	I	室2連棟抜出遺構	土人形	家事道具膳	2.7	—	1.2	型押し、削付	緑釉、透明	亀甲				江戸後期		2
21-7	I	室3床下床面の下	染付磁器	皿	—	—	—		白泥、呉須	内：唐草	輪花か四方		肥前	17c後半	口縁部は口銹、貫入あり	7
21-8	I	室2～3間連棟抜出時	染付磁器	仏飯	3	—	—	外：はぎ目?	銹釉				肥前	18c末～19c		6
21-9	I	室2～3間連棟抜出時	染付磁器	皿	—	—	—	輪花	濃青色呉須	花唐に梅	口銹		肥前	17c末～18c前半	外面花唐草	7
21-10	I	室2～3間連棟抜出時	染付磁器	鉢	—	—	—		透明、呉須	内：梅、内：菊			肥前	18c中～末		7
21-11	I	室2～3間連棟抜出時	染付磁器	皿	—	(8.2)	—		淡青色呉須	花唐				18c後半	外底部蛇の目釉剥ぎ	7
21-12	I	室2～3間連棟抜出時	陶器	半胴	—	—	—		緑、青、透明	草花	上絵付		京焼系	19c前半	素地は軟質	4
21-13	I	室4室下から1日目下(底下)	染付磁器	碗	(11.0)	—	—		濃紺色呉須	梅			肥前	17c中頃	二次的被熱、室1の破片と接合	3
21-14	I	室4床下床面の下	染付磁器	皿	—	—	—		濃紺色呉須	三方襷				17c後半か	高台は釉剥ぎ	7
21-15	I	室4内部、1137の中	染付磁器	瓶	頸部2.8	—	—		呉須				肥前	17c	内面漆付による剥離	7
21-16	I	室4床下床面の下	陶器	甕	—	—	—		褐釉、黒釉				上野・高取系	19c		5
21-17	I	室2連棟抜出遺構	土師質土器	小皿	把手2.5	—	—	ナデ								3
21-18	I	室4	土師質土器	小皿	把手2.8	—	—	ナデ							[illegible]	3
21-19	I	室4	瓦	軒平瓦	幅4.2	—	—	瓦当貼付け			剥離した漆喰		在地	18～19c	色調は暗茶褐色	7
21-20	I	室4	瓦	軒平瓦	幅4.1	—	—	瓦当貼付け		下向き花文	橘唐草		在地	19c	色調は黒色	7
21-21	I	室1、4床面地上面	陶器	一輪差し	1.8	2.65	7.1		濃青色					19c	外底部露胎で墨書「八海」あり	7
21-22	I	室1、4床面地上面	瓦質土器	[illegible]	(7.3)	—	—								二次的被熱	3
21-23	I	室1、4床面地上	陶器	土瓶	(9.0)	—	—		黄色				上野・高取系	19c	口縁端部の釉拭き取り	5
21-24	I	室5上面	陶器	碗	(9.3)	—	—		淡黄色灰釉				京焼系	19c	細かい貫入あり	4
21-25	I	室5上面	陶器	土瓶	(1.3)	—	—	鉄絵口	淡黄色灰釉				関西系	19c		5
21-26	I	室5下の炭層	土師質土器	窯道具	—	8.3	—	[illegible]			底面糸切り				接合面は中実、上面側面に打ち欠き	3
21-27	I	室7覆土	染付磁器	碗	(8.0)	—	—		呉須、透明	内：雨降り			肥前	18c前半	発色が悪い	5
21-28	III	室8	陶器	碗	—	—	—		白土、灰釉	内：打刷毛目			肥前	18c前半		4
21-29	III	室8燃焼部(西側)	青花磁器	碗	5.3	—	—		呉須、透明	草			明	16c末～17c初か	黒土が内面にこびりつく	5
21-30	III	室8上面	染付磁器	小杯	(6.2)	—	—		化学呉須	内：花	体部沈線		瀬戸・美濃系	幕末～明治初		6
21-31	III	室8燃焼部(西側)	陶器	燈明	8.5	—	—		青釉を上絵付		貫入			19c	京焼系陶器	4
21-32	III	室8上面	染付磁器	碗	—	3.8	—		呉須、透明	外：雪、内：[illegible]			肥前	19c～幕末	端反碗か	5
21-33	III	室8暗渠トレ燃焼部	銅製品	喫煙道具か	径0.82	—	—	[illegible]							[illegible]	7
21-34	I	室付近	青磁染付	碗	14.8	5.9	7.7		青磁、呉須	[illegible]		有47	肥前	1941～45年	統制食器、内面は透明釉	6
21-35	I	室付近	陶器	大鉢?	—	—	—		青緑						内面布目痕、胎質	3
21-36	I	室付近	陶器	鉢	胴部11.2	—	—	水挽き	褐釉				上野	19c	内面はナデ目	5
22-37	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土人形	猫の頭部?	幅5.8	—	5.3	型づくり		頭髪					頭部に一孔あり	2
22-38	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土人形	土鈴	幅(5.6)	—	7.5	型づくり		[illegible]						2
22-39	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土人形	二階屋	幅11.5	—	(11.7)	合わせ型		[illegible]に一孔					胎内黒い	2
22-40	I	SK1075(人形廃棄土坑)	瓦質土器	円形窯道具?	8.5	—	2.5								穿孔あり	3
22-41	I	SK1075(人形廃棄土坑)	瓦質土器	円形窯道具?	8.5	8.3	2.5								底面わずかに上げ底	3
22-42	I	SK1075(人形廃棄土坑)	瓦質土器	円形窯道具?	8.5	8.3	2.5									3
22-43	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	窯道具?	幅4.8	長さ12.4	4.1	ナデ							側面に凹みあり	3
22-44	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	サナ	17.2	—	厚さ1.4	ハケメ								3
22-45	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	十能把手	幅(10.3)	—	径2.8	ケズリ後ナデ		穿孔					焼成の可能性あり	3
22-46	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	トチン	幅7.7	—	16.7	丁寧なナデ							焼成良好	3
22-47	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	トチン	幅8.1	—	(11.2)	丁寧なナデ							焼成良好	3
22-48	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	瓦当付円盤	(26.0)	—	3.2	回転ハケメ				あり	在地		裏面に「◆」の刻書	5
22-49	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	碗(蓋物)	7.1	3.8	3.6		呉須	笹草、流水	口銹		肥前	18c		6
22-50	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	猪口	6.4	4.8	5.2		呉須	草状			肥前	19c	高台は広東碗風	6
22-51	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	猪口	6.0	—	—		呉須	草状			肥前	19c	高台は広東碗風	6
22-52	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	猪口	(6.2)	—	—		呉須	草状			肥前	19c	高台は広東碗風	6
22-53	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	小碗	8.9	3.5	4.6		呉須	梵字くずし			肥前	18c後半	小広東碗	6
22-54	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	端反碗	(9.6)	—	—		呉須	[illegible]	[illegible]		肥前	19c前半～幕末		6
22-55	I	SK1975(人形廃棄土坑)	染付磁器	端反碗	(9.2)	3.9	5.4		呉須	菊、笹	[illegible]		肥前	19c前半～幕末		6
22-56	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	端反碗	—	4.5	—		呉須	山水			肥前	19c前半～幕末		6
22-57	I	SK1075(人形廃棄土坑)	磁器	碗	(11.4)	5.8	(5.6)		白土、青釉	花?				19c	広東碗に近い、内面剥落4分割か	4
22-58	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	蓋(端反碗)	9.0	—	3.1		呉須	雪、花、花弁	蛍文字		肥前	19c前半～幕末	「太明年製」	7
22-59	I	SK1075(人形廃棄土坑)	染付磁器	皿	10.8	6.1	2.5	型押し	呉須	山水	輪花、口銹		肥前	19c前半		7
22-60	I	SK1975(人形廃棄土坑)	染付磁器	火入れ	(8.9)	—	—		呉須	[illegible]	[illegible]		肥前	19c		7
22-61	I	SK1075(人形廃棄土坑)	陶器	碗	(8.8)	3.2	4.7	ロクロ	灰釉、緑釉		[illegible]		関西系	19c	[illegible]	4
22-62	I	SK1075(人形廃棄土坑)	陶器	碗	(8.2)	3.3	4.6		銅緑釉				関西系	19c		4
22-63	I	SK1075(人形廃棄土坑)	陶器	碗	9.4	3.3	4.8		灰釉		貫入	墨書あり	関西系	19c	「○に米」	4
22-64	I	SK1075(人形廃棄土坑)	陶器	碗	(9.0)	3.8	4.9	ロクロ	灰釉、鉄釉	体部は鉄絵	高高台		京	19c	内面に鉄釉を流し掛け	4
22-65	I	SK1075(人形廃棄土坑)	土師質土器	小壺	—	3.4	—				糸切り	墨書あり	在地		「[illegible]」打欠具か	4
22-66	I	SK1075(人形廃棄土坑)	陶器	蓋	6.4	2.3	1.4		灰釉				上野・高取系	19c	内面露胎	5
22-67	I	SK1075(人形廃棄土坑)	陶器	土瓶	胴14.2	—	—	ロクロ	緑褐釉	外面飴釉掛け			上野・高取系	19c		5
22-68	I	SK1075(人形廃棄土坑)	白磁	飲みカップ	—	4.8	—	底面上げ底	緑、透明			あり	波佐見	現代	統制食器「岐761」のスタンプ	6
23-69	I	SK1078	白磁	紅皿	4.2	(1.8)	2.7	型押し	透明	体部白文	花型高台		肥前	18c		7
23-70	I	SK1078	青磁染付	湯呑碗	(6.5)	(4.4)	5.7		呉須、淡青釉	蛸唐草			肥前	19c	内面に炭素付着、焼き継ぎ痕	6
23-71	I	SK1078	白磁	紅皿	(5.9)	2.4	2.0	型押し	白濁釉	菊唐草			肥前	19c		7
23-72	I	SK1078	染付磁器	仏飯器	5.9	3.6	6.2		呉須	蛸唐草			肥前	18c末～幕末期		7
23-73	I	SK1076	染付磁器	油壺	2.0	3.8	7.5		呉須	[illegible]	[illegible]		肥前	19c		7
23-74	I	SK1078	陶器	皿	(8.9)	3.2	2.5		白土、灰釉	梅花、唐草			上野系	18c末～19c前半		5
23-75	I	SK1078	陶器	皿	(9.0)	3.4	2.5		白土、灰釉	梅花、唐草			上野系	18c末～19c前半		5
23-76	I	SK1076	陶器	灯火具	8.1	5.4	6.8		灰緑釉	[illegible]			上野・高取系	19c		5
23-77	I	SK1142	染付磁器	碗	—	—	—			[illegible]、花文			肥前	明治前半	型紙摺り	6
23-78	I	SK1142	青磁染付	碗	(14.6)	5.8	7.6		呉須、淡青釉	花、[illegible]		あり	肥前有田	戦中	統制食器「有67」、内面[illegible]	6
23-79	I	SK1142	染付磁器	皿	—	—	—	型づくり?	透明、緑			[illegible]	肥前有田	戦中	統制食器「[illegible]」	7
23-80	I	SK1142	陶器	灯明皿	5.0	7.9	2.6		灰緑釉		口禿		上野・高取系	18～19c	底面回転ヘラケズリ、重ね焼痕	5
23-81	I	SK1142	陶器	土瓶の蓋	5.8	—	3.8		淡青釉、鉄釉	[illegible]			関西系	19c		5
23-82	I	SK1142	陶器	土瓶	(8.4)	—	—		灰釉、鉄釉、白土	[illegible]			上野・高取系	19c	[illegible]	5
23-83	I	SK1142	土師器	皿	10.8	—	5.5	[illegible]			[illegible]		在地	19c	[illegible]	4
23-84	I	SD1143/SK1144	土人形	帽子?	幅(6.2)	—	(3.8)	合わせ型					在地		胎土は赤い	2
23-85	I	SD1143/SK1144	土人形	内裏?(土型)	幅6.7	—	8.6	合わせ型				[illegible]			「あ」のヘラ書き、内面に刻印	3
23-86	I	SD1143/SK1144	染付磁器	大皿	(16.0)	(4.6)	6.5		呉須	松竹			肥前	18c末～19c前半	内面使用痕顕著	5
23-87	I	SD1143/SK1144	陶器	碗	(9.2)	—	—		[illegible]	[illegible]			瀬戸・美濃系	19c		4
23-88	I	SD1143/SK1144	染付磁器	蓋(端反碗)	9.6	—	2.9		呉須	花唐、蛍文字	松竹梅		肥前	19c前半～幕末期	SD1143の可能性あり	7
23-89	I	SD1143/SK1144	染付磁器	皿	(25.3)	13.6	2.3	[illegible]	呉須	山水文、家屋		[illegible]	肥前	19c前半	外底面「[illegible]」か	7
23-90	I	SD1143/SK1144	陶器	徳利	—	—	—		白土、呉須、灰釉	[illegible]			?	19c	室1に同一個体出土	5
23-91	I	SK1144	染付磁器	碗	—	—	—		合成コバルト	[illegible]、草花			肥前	明治前半	型紙摺り	6
23-92	I	SK1144	染付磁器	碗	—	—	—		合成コバルト	[illegible]、草花			肥前	明治前半	型紙摺り	6
23-93	I	SK1144	色絵磁器	[illegible]	(5.6)	—	—		[illegible]	折り松葉			肥前	明治?		6
23-94	I	SK1144	染付磁器	小杯	(6.3)	2.8	2.7		合成コバルト	[illegible]	口銹		肥前	明治前半	[illegible]	6
23-95	I	SK1144	染付磁器	蓋(端反碗)	9.4	—	2.8		呉須	花唐草、蛍文字	松竹梅		肥前	19c前半～幕末期	焼継ぎ	7
23-96	I	SK1144	陶器	蓋(土瓶)	6.7	—	—		[illegible]	[illegible]			上野・高取系	19c	上絵付	5
23-97	I	SK1145	染付磁器	端反碗	(10.6)	—	—		呉須	[illegible]			肥前	19c前半～幕末期		6
23-98	I	SK1145下層	染付磁器	皿	14.9	8.8	5.1		呉須	山水、木、家屋	輪花、口銹		肥前	19c前半	蛇の目凹型高台	7
23-99	III	SK1329	陶器	碗	(8.6)	(3.6)	4.2		灰釉、鉄釉		体部は鉄絵		京	19c	64と同一タイプ	4
23-100	III	SK1329	染付磁器	広東碗	—	(6.3)	—		呉須	植物				18c末～19c前半	体部は立ち上がる	6
23-101	III	SK1329	染付磁器	碗	(9.4)	—	—		呉須	植物				18c末～19c前半	口縁部は外反する	6

挿図番号	地区	出土遺構・層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	成形	装飾 釉薬など	文様など	その他	銘款・印	産地	年代	備考	図版番号
23-182	III	SK1330	染付磁器	湯呑碗	6.8	—	—		呉須	文字、寿文字			肥前	19c	焼継ぎ	6
23-183	III	SK1330	染付磁器	端反碗	(8.4)	—	—		呉須	鳥			瀬戸・美濃系	19c	口縁部は玉縁	6
23-184	III	SK1330	染付磁器	碗	6.9	(3.6)	3.4		呉須	花			肥前	18c末～19c前半	焼付け時期に利用か	5
23-185	III	SK1330	染付磁器	端反碗	(9.0)	—	—		呉須	寿輪、波	墨書き		肥前	19c前半～幕末期	28-229と同一セット	6
23-186	III	SK1334	土人形	飯事道具(鉢)	2.1	1.2	1.5	型づくり	緑釉、雲	円文					軟質施釉陶器	2
23-187	III	SK1334	土師器	皿(灯明)	(11.8)	3.8	1.7	ロクロ			目跡4か所				糸切り、口縁部は煤が付着	4
23-188	I	SK001	陶器	油差し	2.5	7.8	15.7		鉄釉	受け部上に一孔	注口欠損		上野・高取系	19c		5
23-189	I	SK001	瓦質土器	火鉢	17.2	(10.2)	12.6			菊、花文スタンプ	胴部に一孔	あり	在地	19c	体部に「[illegible]」の文字を型押し	4
24-110	III	SK1014	土人形	子供	幅(4.3)	—	(4.9)	合わせ型					在地	19c		2
24-111	III	SK1014	土人形	鶏	幅3.3	—	(3.9)	合わせ型			頭部欠損					2
24-112	III	SK1014	土人形	鳩笛	長さ8.8	幅4.8	現存2.7	合わせ型	緑釉、黄釉		上面に一孔			19c	軟質施釉陶器	2
24-113	III	SK1014	染付磁器	碗	8.0	3.2	4.9		呉須	草花文			肥前	18c末～19c前半	内面に赤色顔料付着	6
24-114	I	SK1015中層下	土人形	少女	幅4.5	—	11.9	合わせ型					在地		表面に胡粉残す	2
24-115	I	SK1015中層下	土師器	皿	8.6	4.3	2.3	型づくり		大福帳	ミガキ	あり	在地	19c	「[illegible]」	4
24-116	I	SK1016	染付磁器	丸碗	—	3.7	—		呉須	竹			肥前	18c末～19c前半		6
24-117	I	SK1016	染付磁器	丸碗	(9.4)	3.7	5.5		呉須	植物			肥前	18c末～19c前半		6
24-118	I	SK1016	染付磁器	丸碗	(8.2)	—	—		青磁				肥前	18c末～19c前半		6
24-119	I	SK1016	染付磁器	碗	(12.0)	—	—		呉須	蛸唐草、四方襷文			肥前	18c後半		6
24-120	I	SK1016	染付磁器	小杯(紅皿)	(7.7)	2.8	2.7		呉須	梅			肥前	18c後半		6
24-121	I	SK1016	染付磁器	広東碗	(11.7)	5.7	6.6		呉須	花唐草			肥前	18c末～19c前半		6
24-122	I	SK1016下層	陶器	灯明皿	6.2	4.8	2.3		灰釉				肥前か	18c		5
24-123	I	SK1016下層	陶器	甕	19.6	12.1	21.0		褐釉、黒灰釉		波線		上野・高取系	19c	内面ロクロ目が顕著	5
24-124	I	SK1020上層	土人形	恵比寿	幅4.2	—	14.3	合わせ型							顔は欠損	2
24-125	I	SK1020	瓦質土器	火鉢か七輪の脚	—	—	—	貼付け		花菱					器肉は土師質 中空	2
24-126	I	SK1015、1020上層	瓦	軒平瓦	幅3.5	—	—			花菱唐草		あり			「新古土門」	7
24-127	I	SK1026 5層目	染付磁器	碗	10.8	4.2	5.6		呉須	図案化した草	土銘		肥前	18c後半		6
24-128	I	SK1026 4層目	陶器	灯明皿	4.7	3.7	2.2		緑釉						軟質施釉陶器	5
24-129	I	SK1028	陶器	碗	7.1	3.7	5.2		鉄釉、黒灰釉		イッチン掛け		関	19c		4
24-130	I	SK1044	土人形	飯事道具蓋	3.0	—	1.0	貼付け	黄釉、緑釉					19c		2
24-131	I	SK1029	石製品	方形硯	幅6.0	—	2.6				墨付着	あり			「[illegible]」と刻書 [illegible]	7
24-132	I	SK1044	土人形	動物	—	—	—	合わせ型か	青色顔料	鋳物					胡粉残し	2
24-133	I	SK1044	土師質土器	七輪	—	—	—			文字			在地	19c	「鍋」か	4
24-134	I	SE1054	土人形	鯛	幅3.8	2.8	5.4	合わせ型		鱗	一孔あり		在地		表面は丁寧なミガキ	2
24-135	I	SK1054	土人形	子連れ女性	幅4.4	孔径1.5	8.6	合わせ型					在地		孔の深さ5.1cm	2
24-136	I	SE1059掘り方	土人形	鳥	長さ1.7	幅2.5	2.1	貼付け	黄釉、緑釉		脚一つあり			19c	[illegible]	2
24-137	I	SK1081	染付磁器	碗	9.0	3.6	5.4		呉須	植物 鳥			肥前	18c末～19c前半		6
24-138	I	SK1081・1082	白磁	碗	(9.6)	3.6	6.0		青みを帯びた透明				肥前	18c末～19c前半	ロクロ目が顕著	6
24-139	I	SK1081・1082	染付磁器	碗	10.4	3.8	5.5		呉須	草花文、昆虫			肥前	18c後半		7
24-140	I	SK1081	染付磁器	広東碗	(13.4)	(7.5)	7.6		呉須	山水文			肥前	18c末～19c前半	大振り	6
24-141	I	SK1081・1082	陶器	碗	(8.6)	—	—		灰釉				肥前	18c前半	京焼風陶器	4
24-142	I	SK1081	陶器	碗	—	3.6	—		灰釉				京焼系	19c		4
24-143	I	SK1082	土師質土器	窯道具内型	9.0	9.3	6.4	刳り貫あり			カキメ		在地		[illegible]	3
24-144	I	SK1083	土師器	皿	8.3	5.6	1.5	ヘラ切り			四孔あり		在地		焼成後穿孔	4
24-145	I	SK1135下層	土人形	鳩笛	長さ8.2	幅4.2	4.4	合わせ型	緑釉、青釉、褐釉		上面に一孔			19c	軟質施釉陶器	2
24-146	I	SK1135最下層	土師質土器	方角土製品	幅3.5	幅4.1	4.8				二孔あり	あり	在地		「[illegible]」	3
24-147	I	SK1135下層	色絵磁器	小杯	5.2	1.2	2.6		緑色	昆虫			肥前	18c末～19c前半		6
24-148	I	SK1135下層	白磁	小杯	(7.0)	3.8	5.5		透明		内外貫入		肥前	17c後半		6
24-149	I	SK1135下層	染付磁器	碗	8.3	3.2	6.0		呉須	寿字、折松葉			肥前	18c末～19c前半	割れ口に墨が付着	6
24-150	I	SK1135下層	染付磁器	広東碗	11.4	5.6	6.5		呉須	植物、昆虫			肥前	18c末～19c前半		6
24-151	I	SK1135下層	染付磁器	皿	—	(13.0)	—		呉須	蓮弁、唐草			肥前	17c末～18c前半		7
24-152	I	SK1135	陶器	碗	8.9	3.7	5.5		灰釉、鉄釉	小杉文			京焼系	19c前半		4
24-153	I	SK1135下層	陶器	碗	8.8	3.2	5.2		灰釉		内外貫入		京焼系	18c前半		4
25-154	I	SK1135	土師質土器	鋳台付円盤	22.3	—	(2.8)					あり	在地	19c～	「真右衛門」	3
25-155	I	SK1135	瓦質土器	火鉢	27.5	24.4	22.7	ヘラミガキ		花唐草、家紋			在地	19c	文様はスタンプ(型押し)	4
25-156	I	SK1135下層	土師質土器	風炉	8.1	8.8	5.4	丁寧なミガキ		花文スタンプ			在地		脚部三か所に彫り込み	4
25-157	I	SK1135最下層	瓦	軒桟瓦	幅4.3	長さ(23.5)	—	丸部平滑ナデ		花井文			在地	19c		7
25-158	I	SK1153上層	染付磁器	碗	(11.3)	3.7	6.2		呉須	山水、昆虫			肥前	18c後半		6
25-159	I	SK1153上層	色絵磁器	皿	8.3	4.2	1.6		赤、黒、	同心円文			肥前	18c末～19c前半		7
25-160	I、III	SK1154	瓦質土器	羽釜	最大15.4	6.6	16.2	2段ヘラミガキ		5弁の菊花	5孔あり				胴部は中空	3
25-161	I、III	SK1154	土師器	皿	(7.2)	(5.7)	0.9	ロクロナデ			糸切り	墨書あり	在地		「紺仁町」[illegible]	4
25-162	I、III	SK1154	土師質土器	円形土製品	4.4	4.6	2.2	丁寧なナデ		底面線刻風		あり	在地		上面に格と「壽七」スタンプ	3
25-163	I	SK1142	色絵人形	仏像	幅4.0	—	12.7	合わせ型	呉須、褐釉				肥前		中空、底面穿孔あり	3
25-164	I	SK1142	白磁	紅皿	3.9	1.2	1.4	型づくり		貝文			肥前	18c		7
25-165	II	SK1181	土人形	内裏雛	幅3.3	—	4.6	合わせ型	黄釉、緑釉	亀甲	中実					2
25-166	II	SK1183	陶器	碗	9.3	3.7	4.9		淡黄釉、緑釉	見込みに文字状文			肥前	18c		4
25-167	II	SK1183	陶器	色絵皿	(12.0)	3.7	4.1		青、緑	草花文			肥前か関西系	18c		5
25-168	II	SK1185	陶器	土瓶の蓋	天井9.4	5.8	4.1		灰釉、褐釉	流し掛け		墨書あり	肥前	18c後半～	内面に「いろは」の墨し字か	5
25-169	II	SK1185	陶器	土瓶	6.4	体部17.2	—			体部に蝶紋文	そろばん玉形		肥前か	19c	銚口	5
25-170	II	SK1226	陶器	土瓶の蓋	天井5.8	3.5	2.6		鉄釉		円形つまみ		薩摩焼	20c	171とセット、172の上位で発出	5
25-171	II	SK1226	陶器	土瓶	5.4	5.8	8.6		鉄釉			「奥太郎」	薩摩焼	20c	170とセット、172の上位で発出	5
25-172	II	SK1226	土師質土器	七輪	15.0	14.8	10.9	丁寧なミガキ			サナとセット	「[illegible]」	在地	20c	173とセット、底部3か所彫り込み	4
25-173	II	SK1226	土師質土器	七輪の空口蓋	長さ9.1	幅3.8	厚さ0.9	丁寧なミガキ		貼付け把手	サナとセット		在地	19c	172とセット、蓋ははめ込み式	4
25-174	II	SK1231	色絵磁器	急須の蓋	天井5.2	4.3	1.6		瑠璃釉、赤、金	風景、家屋	周囲線文		肥前	18c～19c	つまみは宝珠形	7
25-175	II	SK1229	染付磁器	六角皿	10.1	4.3	1.9	型づくり	呉須	宝尽くし、菊花文			肥前	19c	銅版転写	7
25-176	I	SK1241	白磁	合子	2.7	1.8	0.9		白磁				肥前	19c	内面施釉、受け部あり	7
25-177	II	SK1254	土人形	飾付土鈴	幅3.5	—	(5.3)	手づくね								3
25-178	II	SK1270	染付磁器	皿	8.3	4.4	2.3	型づくり	呉須	丸文	輪花	「光」	肥前	19c	「光」の略字か	7
26-179	II	SK1310	土人形	飾付土鈴	—	—	(5.5)	ナデ								3
26-180	II	SK1310	土人形	猿	幅4.9	—	(8.1)	合わせ型	赤(帽子部分)							2
26-181	III	SK1327	土人形	チン抱き人形	—	—	(4.5)	合わせ型	黄、緑、褐色						軟質施釉陶器	2
26-182	III	SK1327	土人形	チン抱き人形	—	—	(6.6)	合わせ型	黄、緑、褐色						軟質施釉陶器、底面一孔	2
26-183	III	SK1327	土人形の型	チン抱き人形	幅9.2	—	15.0	型押成形					博多			3
26-184	III	SK1327	土人形の型	犬	7.9	—	9.9	型押成形					博多			3
26-185	III	SK1327	土人形	不明	—	—	—	ユビナデ		貼付け文様剥落						3
26-186	III	SK1327	陶器	鉢	15.7	(8.4)	6.1	型づくり	緑釉	4種のスタンプ文	輪花		唐津・源内焼	19c	軟質施釉陶器 [illegible]	5
26-187	III	SK1328	土人形	おぼこ	幅2.3	—	4.1								キラ粉塗り、底面一孔	2
26-188	III	SK1330 1層目(炭層)	陶器	広口花生	(25.0)	—	—		鉄釉、緑褐釉				上野・高取系	17c後半～18c		5
26-189	III	SK1331	土師質土器	土鈴	3.5	—	4.7	ナデ							玉入り	3
26-190	III	SK1331	土師質土器	土鈴	4.3	—	5.8	指頭圧痕								3
26-191	III	SK1331	土師質土器	土鈴	4.8	—	5.9	ナデ							玉入り	3
26-192	III	SK1331	土師質土器	土鈴	5.1	—	5.6	ナデ							玉入り	3
26-193	III	SK1331	土師質土器	土鈴	5.5	—	6.4	ナデ							玉入り	3
26-194	III	SK1331	土師質土器	土鈴	5.2	—	6.4	ナデ								3
26-195	III	SK1331	土師質土器	飾付土鈴	—	—	—	ナデ		亀甲					大型品で握り部に毛	3
26-196	III	SK1331	土師器	皿	(12.4)	—	2.2	ロクロ成形			底面黒色				灯明皿に使用	4
26-197	III	SK1332	石製品	砥	幅11.2	幅11.9	7.6	削り抜き			底面水平				軽石 重量278.5g	7
26-198	III	SK1356	土師質土器	土玉	1.5～1.7	—	—	ナデ							土鈴の玉	3
26-199	III	SK1367	石製品	碁石	2.1～2.2	—	厚さ0.5	丁寧なミガキ				黒色			一部剥落 重量3.37g	7
26-200	III	SK1371	色絵磁器	蓋水滴	—	—	—		赤、黒、緑色				肥前	17～18c	型物	3
27-201	I	SK2068	土製品	泥面子土型	径4.3	—	2.0	手づくね		鬼面		墨書あり	在地		「三」か、表面両面にヒゲワレ	3

（2）中世

1. 中世Ⅰ期

中世Ⅰ期は中国製白磁が突出し越州窯系青磁等を指標とする 11 世紀後半 ~12 世紀前半期である。

検出した主な遺構は井戸 11 基・土坑 165 基・土壙墓 1 基等で、溝は検出されていない。第 1 面近世遺構下から、第 3・4 面を中心に検出される。柱穴を除く遺構全体の約 30% を占めているが後世の攪乱のためさらに数を増すと思われる。遺構は全面に広がっている。柱穴は径 20cm前後のものが多数検出される。大多数は掘建柱建物に伴うと思われるが、攪乱が著しく建物の復原は難しい。

（1）井戸

井戸は稜線寄りの南半部に多く分布する。いずれも木桶を積み上げた井筒と思われる。掘方は 3~4m 弱の円形で、井筒はいずれも径 70~90cmの桶枠と思われるが木質は殆ど遺存しない。

SE2129（図 33 図版 8-1） 2 面目 C-3~4 グリッドで検出され、北を近世近代、西をⅡ期 2125 に切られる径 3.9m 程の不整方形の掘方に径 120cmの木桶を井筒として東寄りに据える。木質は遺存しない。井筒で深さ 1.6m を測り、底面近くに白磁壺・土師器坏等が堆積する。底面レベルは EL=1.65m である。遺物は（図 34）1~4 は広東産白磁。1・2 は碗で、1 は直口口縁で、口径 14.7 器高 5.5cm。2 は小さな玉縁口縁で口径 16.0 器高 6.0cmを測る。3・4 は直口の平底皿。3 は口径 10.8 器高 2.9cmを、4 は口径 10.5 器高 2.4cmを測る。13 は広東産白磁四耳壺。口径 10.3 胴径 23.6 器高 28.0cmを測る。胴外面に 5 本単位の瓜割線を 8 本施す。胴部内面に鉄釉を流し掛けする。5 は在地系瓦器塊。口径 15.3 器高 5.3cmを測る。内面は明灰色、外面は黒色に燻す。6~10 は土師器。6・7 は丸底坏で外底はヘラ切りで、外底に板圧痕が残る。6 は口径 15.0 器高 3.3cmを測る。内面上位にヘラ当て痕が残る。7 は口径 14.9 器高 3.2cmを測る。8~10 は皿。8 は口径 8.8 器高 1.5cm、外底は糸切り。9 は口径 8.9 器高 1.4cmを測る。外底はヘラ切り後板圧痕が残る。10 は口径 9.1 器高 1.9cmを測り、外底は糸切り。11~14 は掘方出土。11 は広東産白磁碗。口径 16.8 器高 7.6cmを測る。体部外面に縦櫛描文を施す。12 は福建産白磁高台付皿。口径 10.4 器高 3.4cmを測る。14 は方柱状の土製品の残欠で、幅 3.1 厚さ 2.6~2.7cmを測る。胎土は砂粒を殆ど含まず明褐色を呈する。一面に灰白色の熔着物が付着し鋳造関連の遺物と思われる。他に銅滓、鉄滓、

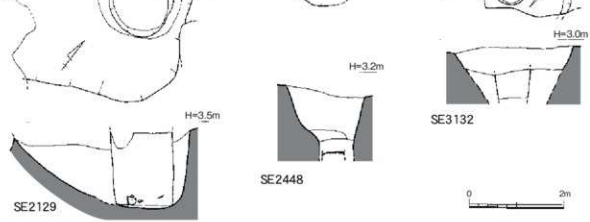


図 33　SE2129・2448・3132 実測図（1/80）

釘等鉄製品、ガラス容器片が出土する。12 世紀初頭 ~ 前半を示す。

SE2448（図 33 図版 8-2） 2 面目 E-7 グリッドで検出される小型の井戸で、西側をⅡ期 2436 に切られる。径 1.68m の正円形の 2 段の掘方に径 62cmの木桶を井筒として据え、最下部の木質が遺存するが、崩落の危険があったため底面まで完掘していない。底面レベルは EL=1.4m から数十cm下である。遺物は（図 34）15 は福建産白磁小碗。口径 10.0 器高 4.1cmを測る。16・17 は土師器。16 は丸底皿で外底はヘラ切り。一部に板圧痕が残る。口径 8.9 器高 1.4cmを測る。17 は丸底坏で口径 15.1 器高 3.1cmを測り、内面上位にヘラ当て痕が残る。外底は糸切り。他に金銅製環状金具が出土する。12 世紀初頭 ~ 前半を示す。

SE3132（図 33） 3 面目 E-5 グリッドで検出され、北半部を近世近代に切られる径 2.5m 程の隅丸方形の掘方中央に径 60cmの木桶を井筒として据える。木質は遺存しない。深さ 1.1m を測り、堀方の法面が急峻で崩落の危険があったため底面まで完掘していない。底面レベルは EL=1.75m から数十cm下である。遺物は（図 34）18・19 は高台付白磁皿。18 は端反り口縁で、口径 11.8cm。内面に沈線と段を有する。19 は直口口縁で口径 12.4 器高 3.2cmを測る。化粧土を施した後施釉する。20 は土師器高台付皿。口径 12.8cmを測る。21 は土師器脚付皿で、灰白色を呈する。ヘラ切りの底面に「大」を朱書きする。他に青磁碗を出土する。12 世紀前半を示す。

（2）土坑

土坑は中心となる遺構で、2~4 面にかけて調査区全面に展開し、165 基を検出した。幅 1~1.5m 前後のものが大半を占める。大部分は廃棄用の土坑である。土器廃棄の SK2232・2452・3322、陶器甕廃棄

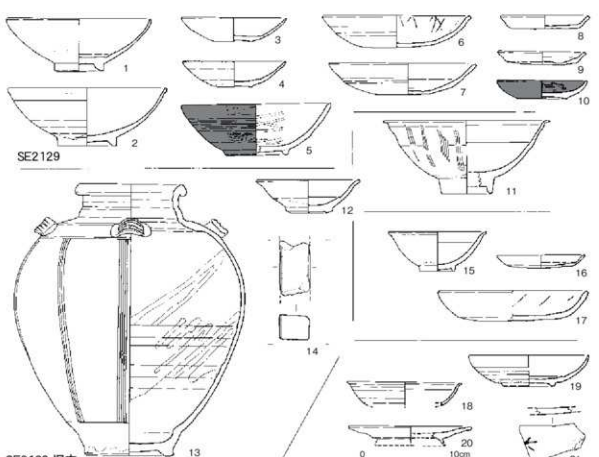


図 34　SE2129・2448・3132 出土遺物実測図（1/4）

の SK2091、白磁碗廃棄の SK2070 等がある。

SK2001（図 35） 2 面目西部 D-2 グリッドに位置し、平面は隅丸長方形で、1.45 × 1.0m、深さ 35cm を測り、平坦な床を呈する。12 世紀前半の埋土で埋め戻される。出土遺物は（図 36）22・24 は福建閩清義窯系白磁で、22 は碗で口径 15.6 器高 7.4cm を測る。24 は高台付皿で口径 9.8 器高 2.9cm を測る。23 は白磁碗底部で外底に「傳」・花押を墨書する。25 は土師器丸底坏で口径 15.7 器高 3.5cm を測る。外底はヘラ切りで板圧痕を残す。灰褐色を呈する。26 は滑石製石鍋 I 類の取手周辺部分の破片を再加工した温石と思われる。縦 8.8 横 11.0cm を測る。全面に研磨を施し両側に径 7~8mm の穴を穿孔する。12 世紀前半を示す。

SK2048（図 35） 2 面目 D-3 グリッドに位置し、平面は円形で西側を攪乱に切られる。1.45 × 1.57m+ α を、深さ 130cm を測る深い土坑である。覆土内に白磁碗等、多くの遺物を含む。出土遺物は（図 36）27~32 は白磁碗。27~31 は福建産碗で 27・28 は玉縁口縁で 27 は口径 17.6 器高 7.0cm を、28 は口

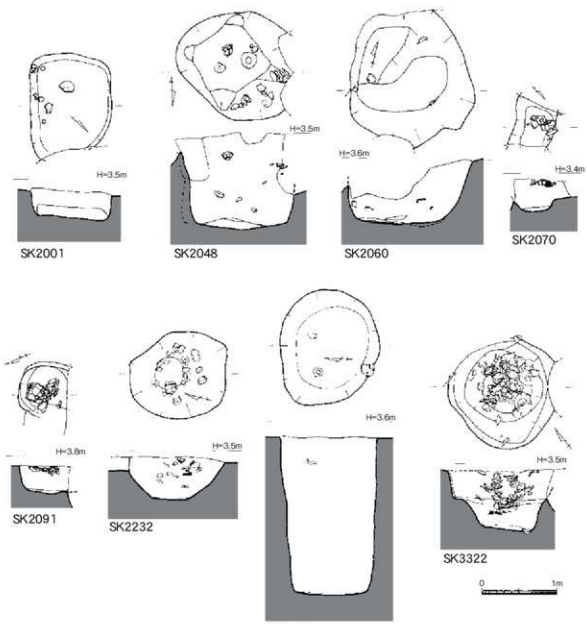


図 35　SK2001・2048・2060・2070・2091・2232・2443・3198・3322 実測図（1/50）

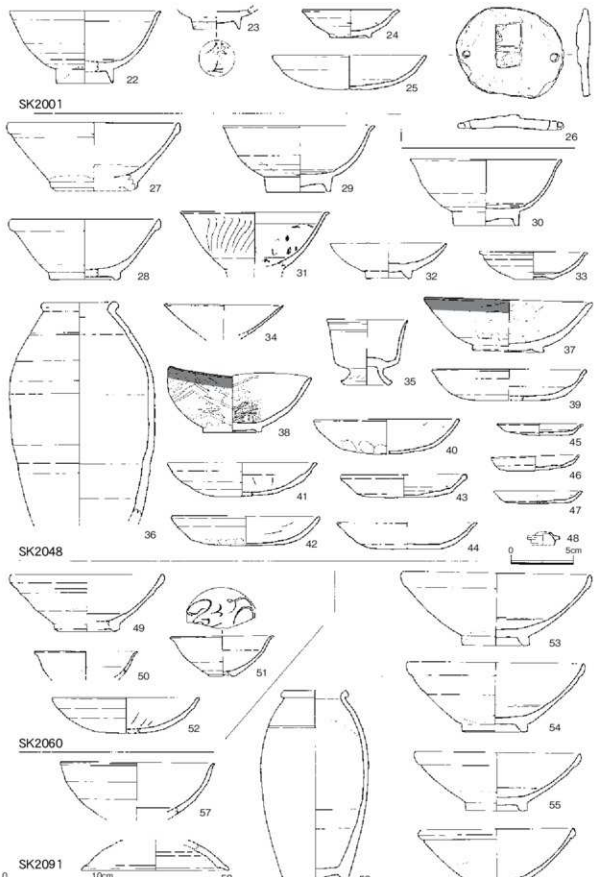


図 36　SK2001・2048・2060・2070・2091 出土遺物実測図（1/4・1/3）

径 15.3 器高 6.2cmを測る。29・30 は端反り口縁で、29 は口径 15.6 器高 6.9cmを、30 は口径 15.3 器高 6.8 cmを測る。31 は水平口縁の碗で口径 15.2cmを測る。外面にヘラ描き縦線文内面に櫛描文を施す。32・33 は白磁皿。32 は高台付で口径 11.8 器高 4.1cmを測り、見込みに蛇の目剥ぎを施す。33 は広東産の平底で釉下に白化粧土を施す。口径 10.7 器高 2.8cmを測る。34 は磁州窯柿釉茶碗で、口径 12.2cmを測る。35 は越州窯系青磁香炉で、口径 8.2 器高 6.7cmを測る。36 は B 群陶器短頸壺で、口径 7.6cm胴径 15.0cm を測る。37・38 は瓦器塊。37 は口径 17.0 器高 5.3cmを測り、外面口縁下 1.5cm程の帯状に黒灰色を呈する。38 は口径 14.0~17.0 器高 5.7~6.8cmを測り焼け歪みが著しい。同じく外面口縁下が 1.5cm程の帯状に黒灰色を呈する 39~47 は土師器。39~44 は丸底坏。いずれも外底はヘラ切りで、41・43 に板圧痕が残る。40・42 は底部際に連続指頭圧痕が残る。43・44 は底部際が稜線をなす。39 で口径 15.8 器高 2.0cm、40 で口径 15.0 器高 3.6cm、41 で口径 15.2 器高 3.6cm、42 で口径 15.0 器高 3.1cm、43 で口径 13.0 器高 2.4cm、44 で口径 14.4 器高 2.8cmを測る。45~47 は皿でいずれも外底はヘラ切りで板圧痕を残す。45 で口径 8.7 器高 1.2cm、46 で口径 9.0 器高 1.6cm、47 で口径 8.90 器高 1.4cmを測る。48 はガラス製容器蓋で、口径 2.6 cmで鍔状の受部が巡る。天井の摘みを欠失する。黄味を帯びる透明な緑色を呈する。他に鉄滓が出土する。12 世紀初頭を示す。

SK2060（図 35） 2 面目北部 D-3 グリッドに位置し、平面は円形で西部を大きく削平される。1.80 × 1.65m、深さ 85cmを測る比較的深い土坑である。出土遺物は（図 36）49 は福建産玉緑口縁の白磁碗で口径 15.5 器高 5.9cmを測る。胎土は精良で、釉はわずかに黄味を帯びて白濁する。50・51 は福建連江窯青磁小碗。50 は口径 10.6cmを測り、外面下半は露胎で、精良な胎土で釉は黄緑色を呈する。51 は口径 10.6 器高 4.2cmを測り、高台は低い輪高台となる。内面沈線下にヘラ描の草花文を施す。胎土は精良で淡緑褐色の釉を施す。52 は土師器丸底坏で口径 15.0 器高 3.7cmを測る。外底はヘラ切り後ナデで、内面にヘラ当て痕が残る。胎土は砂粒を少量含み明灰褐色を呈する。他に鉄滓 4 点が出土する。12 世紀初頭を示す。

SK2070（図 35 図版 8-5） 2 面目北端部 E-2 グリッドに位置し、周囲を切られ一部しか遺存しない。幅 0.53m 以上、深さ 45cmを測る二重土坑で、断面は船底形を呈する。床上 30cm程に破損した白磁碗が密集して出土する。出土遺物は（図 36）53・55・56 は福建産玉緑口縁の白磁碗で、53 は口径 19.2 器高 7.5 cmを測り、胎土は精良で白色透明釉を施す。55 は口径 17.0 器高 6.0cmを測り、胎土は精良で白色透明釉を掛ける。56 は口径 15.6 器高 6.0cmを測る。胎土は黒色微砂粒を少量含み釉は白濁する。54 は広東産の薄い玉緑口縁の白磁碗。口径 18.0 器高 7.2cmを測る。胎土は精良で釉は白色透明である。他に糸切り土師器を共伴する。時期は 12 世紀前半を示す。

SK2091（図 35 図版 8-4） 2 面目北部 C-3 グリッドに位置し、平面は円形で半分近くを削平される。幅 0.75m、深さ 37cmを測る。床上 25cm程に破損した陶磁器がまとまって出土する。出土遺物は（図 36）57 は福建産外反口縁の白磁碗で口径 15.7cmを測る。胎土に黒色砂粒を少量含み、釉は白濁する。58 は洪塘窯黒褐釉陶器の蓋。口径 15.2cmを測る。口縁内面に低い返しを持ち、胎土は粗砂を大量に含む。59 は浙江省産 B 群陶器短頸壺で口径 6.3 器高 19.9cmを測る。断面四角の口縁で、外面肩部に沈線を 1 条施す。胎土は精良で釉は灰緑色を呈する。11 世紀後半 ~12 世紀前半を示す。

SK2232（図 35） 2 面目中央 C-4 グリッドに位置し、平面は円形で 1.27 × 1.15m を、深さ 57cmを測る。底面は船底型を呈する。中位に比較的多くの遺物を含む。出土遺物は（図 37）60 は福建産玉緑口縁の白磁碗で口径 16.2 器高 6.6cmを測る。胎土は精良で釉は白濁する。61~63 は土師器。61 は皿で外底はヘラ切りで板圧痕を残す。胎土は精良で明褐色を呈する。口径 9.3 器高 1.2cmを測る。62・63 は丸底坏。62 は口径 16.0 器高 3.3cmを測り、外底はヘラ切りで板圧痕がわずかに残る。胎土は細砂を少量含み内

面明褐色外面茶褐色を呈する。63は口径15.5cmを測り、内外面に密なヘラ研磨を施す。胎土は細砂を少量含み黄灰色を呈する。64は土師質鍋の破片を用いた瓦玉で、周縁を敲打と摺りで整形する。径2.0×1.9cmを測る。他に糸切り土師器が共伴する。12世紀前半を示す。

SK2443（図35） 2面目稜線側の南端部E-8グリッドに位置し、平面は円形で1.50×1.30mを、深さ21.2cmと深い土坑で、黒褐色粘質土が堆積する汚水桝的な遺構である。出土遺物は（図37）65~67は白磁碗。65は福建産直口口縁で口径17.0器高6.4cmを測る。見込みに蛇の目剥ぎを施す。胎土は精良で灰白色の半濁釉を施す。66は広東産外反口縁で口径15.2器高5.8cmを測る。釉下に化粧土を施し、内面に白堆線を6本施す。胎土は白色微砂を多く含み黄みがかった半濁釉を掛ける。高台内に「上」の墨書がある。67は福建産で高台径5.6cmを測る。胎土は精良で灰黄色の半濁釉を掛ける。高台内に花押の墨書がある。68はガラス坩堝に用いる洪塘窯産陶器水注底部で、底径6.8cmを測る。胎土に白色粗砂を大量に含み暗灰色を呈する。未使用である。69は磁灶窯黄釉鉄絵陶器盤で、口径34.8器高10.0cmを測る。釉下は化粧土で内面に鉄絵で花文を描く。胎土は白色黒色粗砂を大量に含み黄色がかった半濁釉を掛ける。70~72は瓦器。70・71は塊で、70は口径17.0器高5.0cmを測り、外面と内面口縁下の0.5cm程の帯状が黒灰色を他は灰白色を呈する。胎土はやや砂質を帯びる。外底は糸切りで高台内に板圧痕が残る。71は口径16.2器高4.9cmを測り、外面中位以上と内面口縁下の0.5cm程の帯状が黒色を他は淡灰色を呈する。胎土は砂粒を少量含む。高台内に板圧痕と「×」のヘラ記号が残る。72は丸底の皿。口径10.0器高2.1cmを測り、外底際に連続指頭圧痕が残り外底は糸切り。胎土はやや砂質を帯

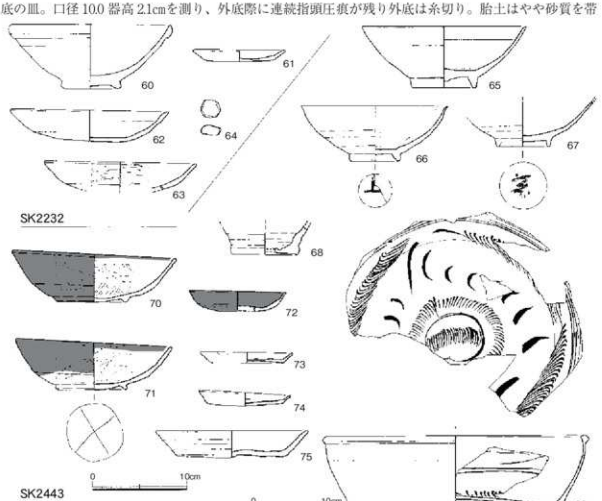


図37　SK2232・2443出土遺物実測図（1/4・1/5）

び灰～黒色を呈する。73~75は土師器。73・74は皿で、73は口径9.6器高1.1cmを測り、外底は糸切り後板圧痕が残る。胎土は砂粒を若干含み灰褐色を呈する。口唇に炭化物が焼着し、灯明皿に用いられる。74は口径9.5器高1.2cmを測り、外底はヘラ切り後板圧痕が残る。胎土は粗砂を少量含み赤褐色を呈する。75は坏で口径15.8器高2.9cmを測り、外底は糸切り後板圧痕が残る。胎土は若干の砂粒を含み橙褐色を呈する。他に輪羽口・鉄製鏃・鉄板小片が出土する。12世紀前半を示す。

SK3322（図35 図版8-5） 3面目南東部A-7グリッドに位置し、平面は円形で1.42×1.33mを、深さ83cmを測る2段土坑で、床上20cm程から上位に牛か馬の獣骨と遺物を多く出土する。出土遺物は初期高麗青磁碗・白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類碗・陶器盤・行平・ヘラ切り糸切り土師器・ガラス小玉・鉄滓・獣骨等がある。12世紀前半を示す。

（3）土壙墓

北端部近く、D-2グリッドで土壙墓1基、**SR2005**を検出した（図38 図版8-6）。墓壙は周縁を攪乱され、中央部分が残るのみで、幅1.0m長さ2.0m以上の長方形であったと思われる。人骨は床上15cm程で検出され、成人骨で、頭位をN-23°-Wにとる伸展葬で葬られている。人骨もかなり攪乱を受け大腿骨以下が原位置を留める程度で骨盤は胸部に上がり、頭蓋骨と副葬品と思われる土師皿は溝SD1149内に流出している。

（4）包含層その他の出土遺物

76~86は白磁。76は四耳壺で、口径10.6胴径18.8cmを測る。胎土は緻密で灰白色、釉は灰色味を帯び透明度は低い。77は景徳鎮産の小型の短頸直口口縁水注。口径5.1cmを測る。胴部外面に型押しの区画線と花文を陽刻する。胎土は灰白色で緻密、釉は淡青色で透明度は低い。78は水滴。直口短頸で口径1.0cmを測る。球形の胴外面に花文を陽印刻する。頸部に幅9mm程の把手の痕跡がある。胎土は灰白色で緻密、釉は白色で透明。79は潮州窯産鶴首瓶の頸部と思われ、径6.2cmを測る。上位に沈線、下位に二重突帯を施す。胎土は白色で粗く、外面釉下に化粧土を施し、釉は淡青色で透明。80~82は福建閩清義窯の碗。外反口縁で外面にタテヘラ花弁文を施す。80は口径11.5器高4.2cmを測る。胎土は灰白色で緻密、釉は灰色を帯び透明度は低い。81は口径10.8器高4.7cmを測る。内面圏線下に細沈線の渦巻文を施す。胎土は細かな気泡を含み、釉はやや半濁し大きな貫入が入る。82は口径10.6器高4.2cmを測る。胎土は細かな気泡を含み、釉はやや灰色を帯び透明。高台内に墨書がある。83は景徳鎮窯の直口口縁碗。6輪花で口径17.8cmを測る。内面にヘラ彫りの花文を施す。胎土は白色で緻密、釉は青味を帯び被熱で劣化する。84・85は浅碗。84は福建産で口径14.8器高3.9cmを測る。内面に細かな櫛描花文を施す。胎土は細かな気泡を含み、釉は薄緑を帯び透明。高台畳付から内面は露胎。85は口径15.3器高3.9cmを測る。内面圏線間にタテヘラ花文、以下に櫛描花文を施す。胎土は灰白で緻密。釉は浅いオリーブで透明。畳付から高台内は露胎で墨書がある。86·87は景徳鎮窯の碗。86は高台径4.8cmを測る。内面にヘラ片彫りと櫛描列点で草花文を施す。胎土は白色緻密で、釉は淡青色で透明。全面施釉で、高台内は回転ケズリで掻き取り褐色を呈する。87は高台径5.9cmを測る。内面にヘラ片彫りと櫛描で水波文を施す。胎土は白色緻密で、釉は淡青色で透明。全面施釉で、高台内は回転ケズリで掻き取る。88~91は越州窯系青磁。88は瓜割型水注片で2条単位の沈線間に注口を設ける。胎土は灰色で黒色微砂粒を若干含み精良。外面に淡灰オリーブ

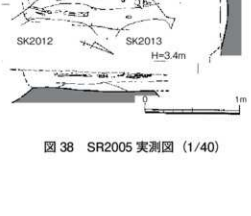


図38 SR2005実測図（1/40）

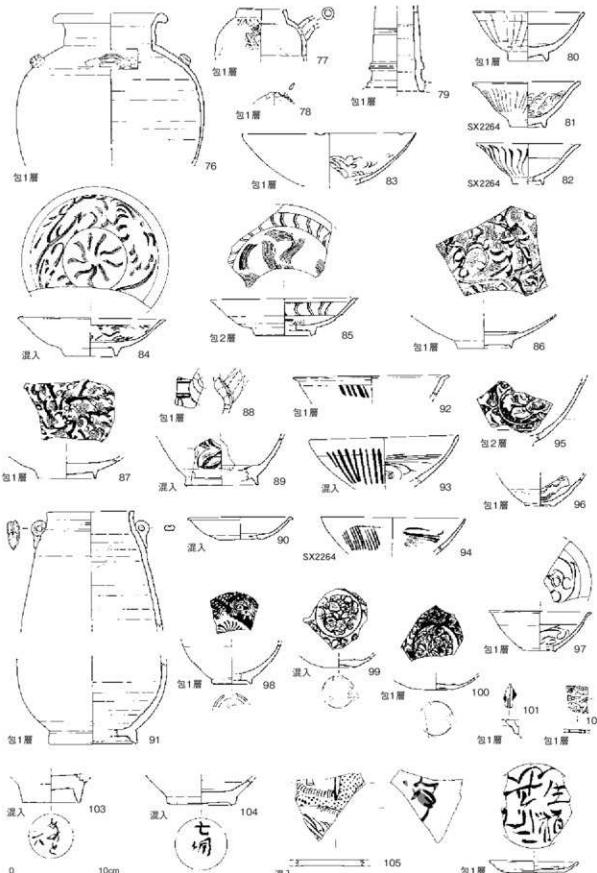


図39　中世Ⅰ期出土遺物実測図1（1/4）

の半濁釉を掛け、内面は露胎で暗橙色を呈する。89は碗で、高台径7.5cmを測る。外面にヘラ片彫りの草花文を施す。全面施釉で見込に胎土目痕が残る。胎土は淡灰色で黒色微粒、微細な気泡をやや多く含む。釉は全面施釉で、淡灰オリーブの半濁。90は屈曲口縁の平底皿。口径10.1器高2.3cmを測る。胎土は精良。釉は全面施釉で灰緑色で透明。91は直口短頸耳壺。口径9.0cm、長胴で径15.4cmを測る。胎土は淡褐灰色で微細な気泡をやや多く含む。釉は内面上位から高台内まで掛けオリーブ褐色で半濁する。92~94・98は初期高麗青磁の碗。92は外反口縁で口径15.0cmを測る。外面に幅広のタテ櫛文を施す。胎土は灰白色で黒色微粒、微細な気泡を多く含む。釉は淡灰緑色で透明度が高い。93・94は直口口縁で、93は口径15.2cmを測る。外面幅広のタテ櫛文を施し、内面にヘラ片彫りと櫛描列点で草花文を施す。胎土は精良で釉は淡緑色を呈する。94は口径15.0cmを測る。外面にタテ櫛文を施し、内面にヘラ片彫りと櫛描列点で草花文を施す。胎土は灰色で精良、釉は緑灰色を呈する。98は高台径4.1cmを測る。内面に陽刻の型押し草花文を施す。胎土は白色黒色微粒、微細な気泡を含む。釉は緑褐色で透明度が高い。全面施釉で畳付と高台内に胎土目跡が残る。95は耀州窯系青磁の碗。内面に陽刻の型押し草花文を施す。胎土は灰紫色で微砂粒を含み、釉は灰緑色で透明度が高い。96・97は連江窯青磁の低高台の小碗で、96は高台径3.1cmを測る。内面に櫛刀で草花文を施す。胎土は淡灰色で黒色微砂粒を多く含み、釉はオリーブ色で半濁する。高台脇から内部は露胎で淡褐色を呈する。97は外反口縁で口径10.4器高4.1cmを測る。内面圏線下に櫛刀で草花文を施す。胎土は灰白色で黒色微砂粒白色粒を含み、釉は黄味がかったオリーブ色で半濁する。99・100は初期高麗青磁の碁笥底皿。内面に陽刻の型押し草花文を施す。99は底径3.2cmで、胎土は灰色で微細な気泡を含む。釉は灰緑色で透明度が高い。外底に胎土目跡が3ヶ所残る。100は底径3.5cmで、胎土は灰色で白色黒色微粒を多く含む。釉は暗灰緑色で半濁する。外底に胎土目跡が3ヶ所残る。101・102は磁州窯系陶器。101は白地鉄絵陶枕片で、板造り。胎土は淡灰黄色で白色黒色微粒を含む。釉下に黒褐色の鉄絵を施し、釉は透明。102は緑釉皿で、内面に細線の陽刻型押し草花文を施す。胎土は淡褐色で褐色微粒を含む。釉は濃緑

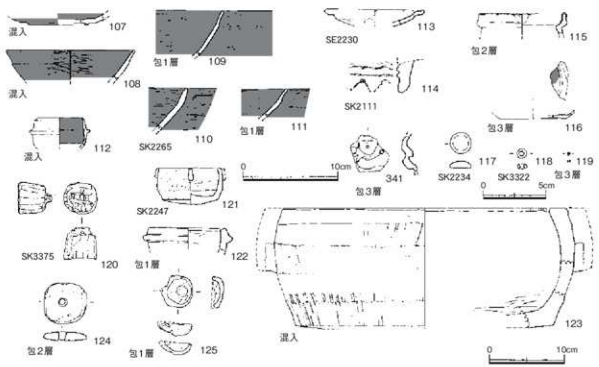


図40　中世Ⅰ期出土遺物実測図2（1/4・1/3・1/5）

色で透明度が高く、両面に施釉する。103・104は墨書白磁碗で、高台内に103は「めのと六」、104は「七綱」と記す。105は磁州窯陶器鉄絵盤の底面に朱書きで「海」？と記す。106は墨書土師器皿で口径9.2器高1.3cmを測る。外底はヘラ切り後ナデ、板圧痕が残る。内面に「生稲」と文様か文字か判別できない模様を描く。107~112は瓦器。107は豊前系の埦。低高台で径6.1cmを測る。内面に1.5cm幅のタテヘラナデを施す。胎土は白色細粒を若干含み灰黒色を呈する。108・110・112は楠葉系。108は埦で口径13.0cmを測る。口唇内面に沈線、内外面に細かなヘラ磨きを施す。暗灰色を呈する。110は埦口縁部片で同様の調整。黒灰色を呈する。112は小型の羽釜型土器で口径7.7cmを測る。胎土は精良で灰褐~黒灰色を呈する。109・111は和泉系の埦小片で、109は口唇内面に沈線、内外面にやや粗いヘラ磨きを施す。灰黒色を呈する。111は同様の調整で、暗灰色を呈する。113は饒内系土師器「て」の字皿で、口径10.0cmを測る。胎土は精良で明褐色を呈する。114は中国系押圧波状文軒平瓦片で、胎土は精良で明灰褐色を呈する。115~119はガラス関係で、115は中国陶器水注を用いた坩場で口径9.0cmを測る。内面に銀化した黄白色のガラスが薄く熔着する。外面は被熱で褐~暗灰色を呈する。116は中国陶器皿で、底径6.8cmを測る。内底に暗緑色の銀化したガラスが薄く熔着する。外底には粘土が熔着する。胎土は精良で、被熱で灰色に還元される。117は平玉で径1.7cm厚6mmを測る。外面は銀化して乳白色を呈する。118・119は小玉で、118は径7mm、緑色で透明。119は径3mmで、透明で緑色を呈する。341は白磁唐人水滴片で残存幅4.0cmを測る。顔の左横に注口がある。胎土は灰白色で黒色微粒を若干含み、釉は緑がかって透明。120~125は滑石製品。120は権で径3.4高さ3.4cm 59gを測り、鶏冠状の把手に径3mmの穿孔をする。121~123は石鍋。121は小型のⅠ類で、口径6.5器高3.8cmを測る。未使用で被熱していない。122は小型のⅡ類で口径8.0cmを測る。123はⅠ類で口径37.0cmを測る。124は紡錘車で径4.3~4.4cm、厚9mm 27gを測る。Ⅰ類の把手周辺部分を再利用する。周縁に研磨を施す。125は匙型小容器で3.1×3.3厚1.2cmを、内面は2.5×2.2×0.8cmを測る。一部に石鍋の口唇面が残る。

2．中世Ⅱ期

中世Ⅱ期は龍泉窯青磁碗Ⅰ・Ⅱ類を指標とする12世紀後半~13世紀前半期である。

検出した主な遺構は井戸18基・土坑219基・溝9条である。第2・3面を中心に検出される。柱穴を除く遺構全体の約40%を占め、Ⅰ期と合わせ「宋人百堂」の時期に該当する。

（1）井戸

井戸は18基検出され、全面に展開する。掘方は2~4m程の円形で、井側はいずれも径65~75cmの木桶を積み上げた井側と思われるがいずれも木質は遺存しない。

SE2189（図41） 2面目中央部C-4グリッドで検出される。径3.25m程の円形の堀方に径75cmの木桶を井筒として東寄りに据える。井筒で深さ1.95mを測る。底面レベルはEL=1.7m。遺物は（図42・46）126~128は白磁。126は福建産香炉で、口径9.1cm。外面に剣頭連弁文を陽刻。釉は淡緑色透明。127・128は福建産高台付皿。127は口径10.7器高2.7cm。釉は緑がかった透明。128は口径9.67器高2.5cm。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。釉は緑がかった透明。129~132は青磁。129・130は龍泉窯系Ⅱ類碗。129は外面に線彫単弁蓮弁文を、内面に片切彫蓮華文を施す。釉は濃緑色で透明。130は複弁鎬蓮弁文の碗で高台径5.8cm。釉は淡青緑色で透明。131は同安窯系Ⅰ類碗で釉は淡青緑色で透明。口径18.2器高8.2cm。外面に片切彫の縦線文、内面圏線下に櫛描と片切彫で花文を描く。釉は緑灰色で透明。132は龍泉窯系の水注の耳。白土で陽刻の文様を描く。133は黒釉天目碗。口径11.5器高5.6cm。釉は黒色、口唇部は茶褐色で不透明。134~136は土師器。134・135は皿。外底は糸切りで板圧痕が残る。134は口径8.8器高1.9cm、135は口径8.5器高1.3cm。136は坏で口径16.2器高2.3cm、外底はヘラ切り後板圧

痕を残す。内面は橙褐色外面は灰褐色。137は「L」字口縁の肥前系土師質鍋。口径40.0cm、胎土は小礫を多く含み明褐色。206は粘板岩製硯。幅8.2残存長11.2cm厚1.4cm。陸部縁に線彫で草花文を施す。黒青灰色に暗黄灰色の縞が入り岡山高田石製の可能性がある。使用で海部が摩耗し、裏面に風字硯を新たに彫刻する途中で放棄。最終的に一孔を穿って温石に転用する。他にガラス片・炉壁・鉄滓・刀子・鉄板片等が出土する。13世紀前半を示す。

SE2199（図41） 2面目西端中央部A-3~4グリッドで検出される。北をⅢ期のSE2198に東をSE2197に切られる。推定径4m程の円形の掘方に径75cmの木桶を井筒として中央に据える。井筒で深さ1.7m以上、底面レベルはEL=1.6mから数十cm下である。遺物は（図42）138は福建産白磁高台付皿。口径9.8器高2.4cm。見込みに蛇の目剥ぎを施す。胎土に気泡を若干含み釉はやや緑味を帯びて透明。139は同安窯系青磁皿。平底で口径9.8器高2.0cm。胎土は精良で釉は灰緑色で透明。140は龍泉窯系平底皿で口径9.6器高2.6cm。見込みに片切彫で蓮華文を施す。胎土に気泡を若干含み釉はやや黄味を帯びて透明。他に天目碗・坩堝・火打金が出土する。12世紀後半を示す。

SE2257（図41 図版8-8） 2面目西端部A-2~3グリッドで検出される。径3.5~2.8m程の楕円形

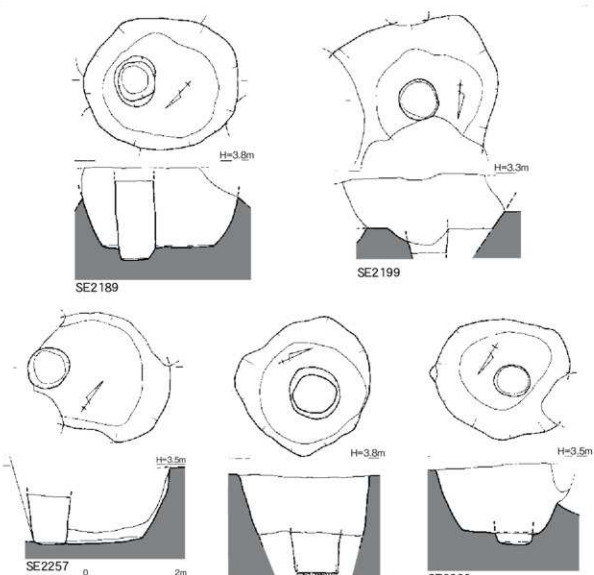


図41　SE2189・2199・2257・2331・2063実測図（1/80）

の掘方に西寄りに径65cmの木桶を井筒として据える。掘方で深さ1.8mを測る。井筒底面レベルはEL=1.85m。遺物は（図42）141~143は白磁。141は合子身で口径6.4器高2.6cm。外面に型押しで菊弁を陽刻する。釉はやや黄味を帯びて半濁。142は小型水注の蓋。口径2.5器高1.5cm。上面に型押しの花文を陽刻し、片側に有孔の耳を貼付する。釉はやや青味を帯びて半濁。143は福建産碗で口径17.8器高6.1cm。見込みに蛇の目剥ぎを施す。釉は灰白色の半濁。144は同安窯系青磁平底皿。口径4.1器高2.6cm。見込みに櫛描花文を施す。釉はやや青みを帯びた透明。145~147は中国陶器。145は宜興窯の急須。蓋受けの口径9.2。胎土は細砂を少量含み、内面から蓋受けに黒褐色の不透明釉を掛ける。露胎部は明褐色。146は平高台の皿で口径10.0器高3.7cm。内外面に黒褐不透明釉。147は磁灶窯小口瓶。口径1.8cm。胎土は細砂を少量含み外面口頸部に褐色不透明釉。148は土師質の円筒形甕炉と思われ、口径25.8cmで器壁は4.4~4.6cmと極めて厚い。外面と上面に丁寧なナデ内面に粗いナデを施す。胎土に粗砂を多く含み、内面は被熱で灰黄褐色外面は暗灰~黒灰色上面は明褐~暗灰色を呈する。口縁外面に砂質土が熔着する。他に鉄滓・豊前系土鍋等が出土する。12世紀後半~13世紀前半を示す。

SE2331（図41） 2面目東端部E-7~8グリッドで検出される。径2.9~2.8m程の円形の掘方の中央に径80cmの木桶を井筒として据え木質が残る。井筒で深さ2.1m以上を、底面レベルはEL=1.35mから

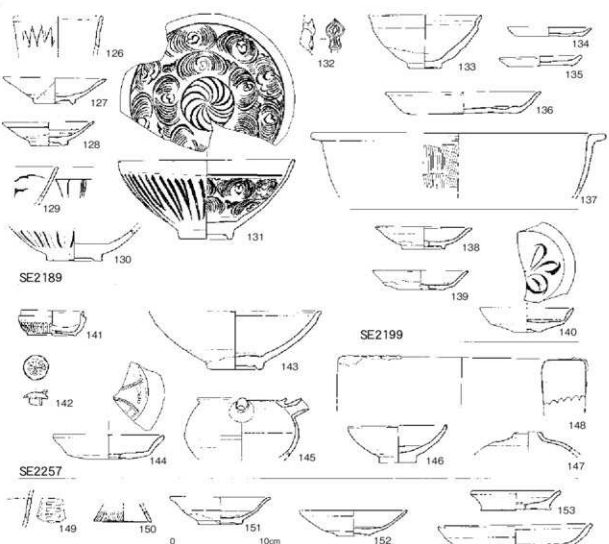


図42　SE2189・2199・2257・2331出土遺物実測図（1/4）

数十cm下にある。遺物は（図 42）149~152 は白磁。149 は筒型香炉。外面に型押しで算木文様を陽刻。釉は透明でやや黄味を帯びる。150 は広東産の灯火具脚部。径 6.0cm。外面に縞縦線を陽刻。やや黄味を帯びた透明釉を全面に施す。151 は福建産高台付皿で口径 10.4 器高 2.9cm。見込みに蛇の目剥ぎを施す。釉は灰白色で半濁。152 は広東産平底皿で口径 11.2 器高 2.7cm。釉は黄味がかった透明。153・154 は土師器。ともに外底は糸切り。153 は豊前系の皿で口径 9.2 器高 2.1cm。胎土に細砂を少量含みは淡明褐～灰白色。154 は坏で口径 11.2 器高 2.8cm。外底に板圧痕が残る。明褐色。他に鉄滓・鉄板小片「元豊通寶」「開元通寶」等が出土する。12 世紀後半を示す。

SE2063（図 41） 2 面目西部 B-3 グリッドで検出される。径 2.85~2.5m 程の円形の掘方の中央に径 65cm の木桶を井筒として据えるが、掘方床近くで井筒痕が検出されるため廃棄時に井筒を抜き取った可能性がある。井筒で深さ 1.85m を、底面レベルは EL=1.8m。遺物は（図 44）163 は龍泉窯系青磁 I

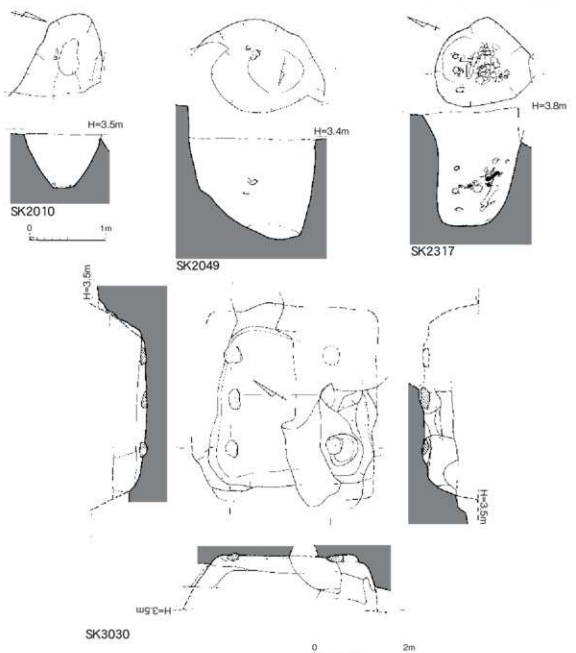


図 43　SK2010・2049・2317・3030 実測図（1/50・1/80）

類碗。高台径6.3cm。内面に片切彫で蓮華折枝文を施す。暗緑灰色の透明釉を内外面に掛ける。164は褐釉陶器四耳壺。口径13.8cm。胎土に白色黒色細砂を含み、口縁内面から外面に明褐色不透明釉を掛ける。165は東張窯の黒釉天目碗。口径10.8 器高5.0cm。胎土に細砂を少量含み釉は黒色、口唇部は柿釉色で不透明。166・167 土師器。ともに外底は糸切りで板圧痕が残る。166は皿で口径8.5 器高1.2cm。内面淡赤褐色外面は明褐色。167は外反腰折れの坏で口径13.5 器高3.3cm。胎土に細砂を少量含み褐～灰褐色。外来系と思われる。他に刀子・土錘・「聖宋元寶」等が出土する。12世紀後半を示す。

（2）土坑

土坑は、2・3面にかけて調査区全面に展開し、219基を検出した。幅1~1.5m前後のものが大半を占める。土器廃棄のSK1309・1318・1397、獣骨廃棄のSK2317等がある。

SK2010（図43） 2面目北部E-3グリッドに位置し、平面は楕円形で東半部を攪乱に切られる。幅1.2m、断面船底型で深さ70cm。底面から獣骨が少量出土する。出土遺物（図44）は155は龍泉窯系Ⅱ類大型盤で外面に単弁鎬蓮弁文を施す。胎土は精良で、厚い釉は淡青緑色で透明。156は陶器合子蓋。口径6.0 器高1.8cm。外側面に櫛歯縦線文を、上面に型押し草花文を陽刻。胎土は精良で釉は緑褐色。157は白磁合子身。受部径7.1 器高2.0cm。外側面に櫛歯縦線文を施す。胎土は精良で釉は透明でやや黄味を帯びる。158は磁灶窯陶器蓋。口径24.0cm。胎土は粗砂を少量含み内外に茶褐色の不透明釉を

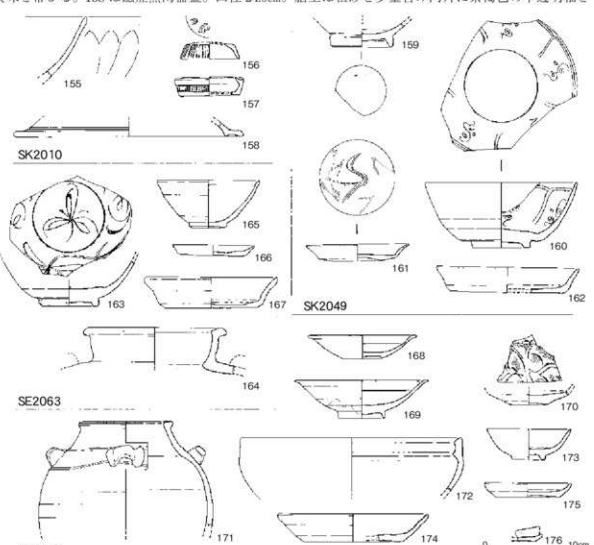


図44　SK2010・2049・2063・2317出土遺物実測図（1/4）

掛ける。他に刀子・鉄滓・土錘等が出土する。13 世紀前半を示す。

SK2049（図 43） 2 面目北端部 E-2 グリッドに位置し、平面は円形で半部は調査区外にある。幅 1.75m、断面船底型で深さ 170cm を測る深い土壙で、中位に遺物がまとまって出土する。出土遺物（図 44）は 159 は白磁碗。高台径 6.6cm。胎土は精良で、乳白色の釉を内面に掛ける。高台内に「荷」? の墨書がある。160 は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。口径 15.8 器高 6.8cm。内面に櫛刀で劃花飛雲文を描く。胎土は細かな気泡を少量含み精良で、釉は黄緑色で透明。161 は同安窯系青磁平底皿。口径 10.6 器高 1.7cm。見込みに櫛描文を施す。胎土は精良で、釉はくすんだ灰緑色で透明。162 は土師器坏。口径 14.8 器高 2.7cm。外底は糸切り後板圧痕が残る。胎土は細砂を含み明灰褐色。12 世紀後半を示す。

SK2317（図 43 図版 9-1） 2 面目東端部 E-7 グリッドに位置し、平面は円形で南半部を Ⅲ期 SE2393 に切られる。幅 1.25m、断面船底型で深さ 155cm。下半から馬か牛の獣骨がまとまって出土する。出土遺物（図 44）は 168・169 は福建産白磁。168 は皿で口径 10.8 器高 2.5cm。釉は若干黄味を帯び透明。169 は碗。口径 13.7 器高 4.1cm。釉はやや緑味を帯び透明。170 は龍泉窯系青磁平底皿。底径 3.4cm。内面に片切彫と櫛歯で草文を描く。171 は浙江産陶器四耳壺。口径 9.9cm。口唇に 5 カ所の目跡が残る。全面に薄い淡緑褐色釉を掛ける。172 は無釉陶器捏鉢。口径 22.8cm。胎土は粗砂を多量に含み黒紫褐色。173 は陶器小碗。口径 8.5 器高 3.2cm。全面施釉で見込みに輪状の目跡が残る。釉は緑灰色で不透明。174~176 は土師器。174 は坏で外底は糸切り。口径 15.4 器高 3.0cm。明褐色。175 は皿で外底は糸切り後板圧痕が残る。明褐色。176 は糸切りの皿底部小片で、内面に厚さ 9mm の砂状のガラス質が、底面には薄く熔着する。胎土は還元焼成で暗灰色の須恵質となる。他にガラス小玉・鉄滓が出土する。12 世紀後半を示す。

SK3030（図 43 図版 9-2） 3 面目中央南寄りの B-5 グリッドに位置し、平面は隅丸方形の縦穴で、大部分を撹乱と近世土坑 SK1154・1155 に切られる。3.9 × 3.9m、深さ 105cm を測る。床面は平坦で南北の壁に沿って径 30cm 前後の扁平割石を 80~100cm 間隔でともに 3 石並べ桁・梁を載せる礎石と思われる。板の痕跡は残っていないが、床面から四壁を板で覆った地下倉と考えられる。出土遺物は龍泉窯系Ⅱ類碗・白磁Ⅳ・Ⅴ類碗・糸切り土師器等がある。13 世紀前半を示す。

（3）溝

溝は北西部の丘陵落ち際の 2·3 面で、地形に沿った大溝 SD1149 と 3001·3058 の 3 条を検出している。以降、この位置で近代まで溝が歴代設けられる。

SD1149（図 5・8 図版 9-3） 2 面で近世溝 SD1006 直下で検出され、方位を N-56°-E にとり、最大幅 2.5m 深さ 1m 程の大溝で底面レベルは EL2.3m 程。遺物は龍泉窯系Ⅰ・Ⅱ類碗白磁Ⅷ類皿・常滑甕・糸切り土師器等で、13 世紀前半を示す。

SD3001（図 5·8 図版 9-4） 3 面 SD1149 直下で検出され、方位を N-57°-E にとり、最大幅 1.7m 深さ 1.6m 程の溝で底面レベルは EL1.8m 程。遺物は龍泉窯系Ⅰ·Ⅱ類碗白磁Ⅷ類皿·天目碗·糸切り土師器等で、12 世紀後半 ~13 世紀前半を示す。

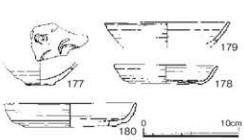


図 45　SD1320 下包含層出土遺物実測図 (1/4)

（4）SD1320 下包含層出土遺物（図 45）

177 は壊安窯系青磁碗。ほぼ平高台で径 3.1cm。内面に櫛刀描の草文を施し釉は淡灰オリーブの透明。露胎部は淡黄灰色。178 は口禿白磁皿。口径 10.9 器高 2.0cm。釉は乳白色で不透明。底面は釉を拭き取り橙色。179・180 は土師器。179 は外来系の坏。口径 13.1cm で強く開く。内面は左上がりの手持ちのナデ、外面は回転ナデ後回転

ヘラナデ。胎土は白色砂を若干含み淡灰橙色。180は坏で口径13.8 器高2.5cm。胎土は白色砂を若干含み黄橙色。13世紀中頃か。

（5）包含層その他の出土遺物（図46）

181~183は白磁。181は福建産浅碗。口径14.3 器高4.9cm。内面に櫛描文を、見込みに蛇の目剥ぎを施し輪状に砂目跡が残る。釉は若干黄味を帯びて透明。182・183は碗高台を転用した瓦玉。182は径3.7cm 16g。見込みに小さな茶溜を持つ高台内に花押の墨書がある。白磁の節高台で、細かな敲打で円形に整形する。183は龍泉窯系Ⅱ類で径5.1cm、高台内に花押の墨書がある。整形の敲打は粗い。184~186は青磁碗。184は龍泉窯系Ⅱ類碗。口径16.1 器高6.4cm。外面に複弁鏑蓮弁を施す。釉は淡青色で透明釉。高台内に「二」の墨書がある。185は福建産の碗で口径14.8 器高5.0cm。内面にヘラと櫛歯で草文を描く。釉は淡灰緑色の透明。186は龍泉窯系Ⅰ類碗の完形品。口径15.9 器高7.6cm。内面に

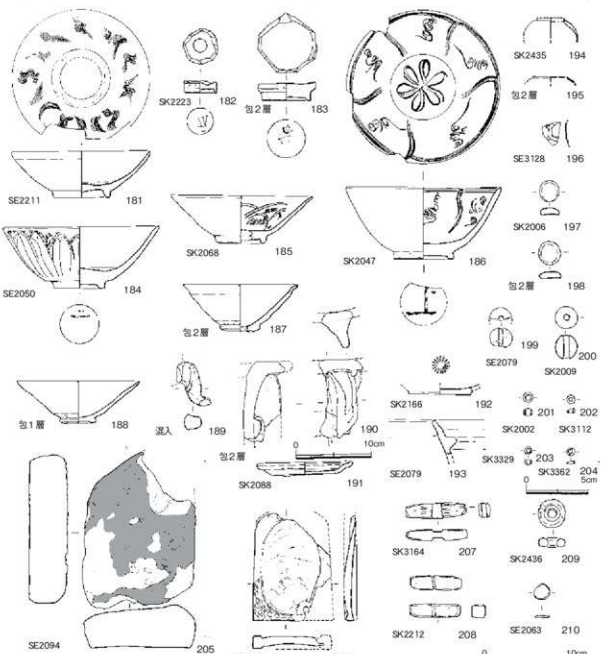


図46　中世Ⅱ期出土遺物実測図（1/5・1/4・1/3）

ヘラと櫛描で劃花飛雲文を、見込みに六花弁文を描く。釉は暗緑灰色で透明。高台内に「上」の墨書がある。187・188は黒釉天目碗で、187は口径12.0器高4.9cm。内外に黒色不透明釉を施す。188は口径12.8器高4.4cm。内外面の褐釉上に黒釉を掛け口縁部は褐釉が見える。189は磁州窯緑釉陶器三足香炉の脚部。胎土は精良で淡緑色釉を掛け表面は銀化する。190は土師質移動式竈口縁・焚口部片。口径50cm以上の大型で口縁を「L」字に屈曲する。全面ナデ調整で白色粗砂を多く含む。180次調査で完形品が出土している。191は京都系土師器皿。口径9.7器高1.3cm。口縁内外面にヨコナデ内底に「8」字ナデ外底に指頭圧痕を多く残す。胎土は精良で明褐色。192は東海系の土師器皿。外底は糸切りで内底に陰刻菊花の印文を押す。胎土は粗い砂粒を多く含み白褐色。193は瓦質の口径25cm前後の羽釜口縁部。細砂を少量含み軟質。黒色を呈する。194~204はガラス製品。194・195は容器で、194は口径2.0cm。緑青色で透明。銀化する。195は口径2.6cm。薄い黄色で透明。196はグラスか、外面に型整形で陰刻の亀甲繋文を施す。緑青色で透明。197・198は平玉。197は径1.6cm厚5.5mm。緑青色で透明。198は径1.7cm厚5.0mm。緑青色で透明、銀化する。199・200は丸玉。199は径1.7cm。緑青色で薄い水色で銀化する。200は径1.7cm。緑青色で銀化する。201~204は小玉。201は径7.5mm。濃緑色で半濁。202は径6.0mm。水色で銀化する。203は径5.0mm。水色で透明。204は径6.0mm。水色で透明。205は扁平礫を用いた金床石。20.7×15.6×5.4cmを測る。上面は敲打と被熱で凹凸が著しく被熱で黄褐色の表面が赤化する。207~209は滑石製品。207は碇石模造品。6.3×1.5×1.2cm 23gを測る。208は方柱状の有溝石錘。5.4×1.0×0.9cm 25gを測る。209は環状石錘。径2.9厚1.0cm 14gを測る。210は蛇紋岩製のおはじきか。全面に研磨を施す。径1.7厚0.3cm 2gを測る。

3．中世Ⅲ期

中世Ⅲ期は龍泉窯青磁碗Ⅲ・Ⅳ類、口禿の白磁ⅢⅨ・Ⅹ類を指標とする13世紀後半~14世紀前半期で、鎮西探題存続期と重なる。検出した主な遺構は井戸16基・土坑149基・溝6条で、第2・3面を中心に検出される。遺構全体の約28%を占め、Ⅰ期と同程度の検出を見る。

（1）井戸

井戸は16基検出され、全面に展開する。掘方は2~3.5m程の円形で、井側はいずれも径50~60cmの木桶を積み上げたと思われる。

SE2178（図47） 2面目西部A~B-3グリッドで検出される。南半部を削平されるが、径2.8m程の円形の二重の堀方に径60cmの木桶を井筒として据える。深さ1.7m、底面レベルはEL=1.65mを測る。遺物は（図48）211は口禿白磁皿で口径9.9cm。内面に細かな陽刻印花文を施す。釉は淡青色で透明。212は白磁筒形香炉。高台径4.3cm。内面は露胎で、釉は青味を帯びた白濁色を呈する。213は直線的に開く黒釉天目碗。口径12.8器高4.6cm。釉は黒色不透明で、釉の薄い口縁のみ茶褐色を呈する。214は中国褐釉陶器鉢。口径20.6cm。全面に褐色不透明釉を掛ける。215は磁灶窯陶器鉢。口径15.7cm。内面から外面口縁下まで灰緑色不透明釉を掛け口唇は拭き取る。露胎部は茶褐色を呈する。216は土師質奈良火鉢口縁片。口縁外面に陽刻菊花文を連続して印花する。胎土は精良で赤灰色を呈する。217は土師器皿。口径9.2器高1.1cm。外底はヘラ切り後板圧痕が残る。暗褐色を呈する。218は器壁の厚いガラス容器。肩が張り、濃緑色で透明。他に緑釉陶器・糸切り土師器・ガラス坩堝・ガラス滓・鉄滓等が出土。13世紀後半を示す。

SE2221（図47） 2面目西中央部A~B-5グリッドで検出される。東半部を削平されるが、径4mの大きな円形の堀方に径60cmの木桶を井筒として据える。井筒は底面近くで検出され、廃棄時に撤去された可能性がある。深さ1.6m、底面レベルはEL=1.7mを測る。遺物は（図48）219は口禿白磁皿

で口径 9.5cm。釉は灰白色で半濁。220 は龍泉窯系青磁Ⅱ類碗。口径 16.4 器高 6.2cm。外面に単弁鎬蓮弁文を施す。釉は濃灰緑色で透明。221 は土師器皿。口径 9.2 器高 1.0cm。外底は糸切り後板圧痕が残る。明暗褐色を呈する。他に龍泉窯系Ⅱ・Ⅲ類碗・白地鉄絵・緑釉陶器・堺場・鉄滓等が出土する。14 世紀前半を示す。

SE2381（図 47） 2 面目南東部 D-6 グリッドで検出される。SD1320 に切られる。径 1.9m 程の小型の円形の掘方に径 60cmの木桶を井筒として据える。深さ 1.2m、底面レベルは EL=1.55m を測る。遺物は（図 48）222・223 は白磁碗。222 は福建浦口窯で高台径 6.7cm。見込に除刻印花で花文を施す。釉は肌色で半濁する。223 は景徳鎮窯で口禿口縁と考えられる。内面に型押しの陽刻草花文を施す。釉は全面施釉で青味を帯びて白濁する。224・225 は龍泉窯系青磁貼花双魚文盤。224 は高台径 7.2cm。外面に細い無鎬蓮弁文を施す。釉は全面施釉で暗緑色で半濁する。225 は高台径 10.0cm。外面に細い無鎬の蓮弁文を施す。釉は全面施釉で淡青色で半濁する。漆継ぎを施す。226 は二彩陶器瓜割壺。肩径 9.4cm。外面に濃緑・黄色の半濁釉を掛け分ける。一部銀化する。227 は中国陶器無頸壺。口径 9.1cm。内外面に濃緑色不透明釉を掛け口唇は拭き取る。228 は石製壺蓋。口径 13.9cm。暗褐色で丁寧に研磨される。229 は土師質火鉢。外面に二重丸に文字を印刻する。明褐色を呈する。230・231 は土師器皿。230 は口径 7.3 器高 1.8cm。外底は糸切り。明褐色を呈する。231 は口径 6.8 器高 1.7cm。外底は糸切りで、口唇に広く炭化物が焼着し、灯明皿に用いられる。明褐色を呈する。232 は 8 角のガラス容器。底部脇に型によるの陽刻蓮弁を施す。他に白磁口禿碗・龍泉窯系Ⅱ類碗・常滑甕・ガラス堺場等が出土。13 世紀後半 ~14 世紀前半を示す。

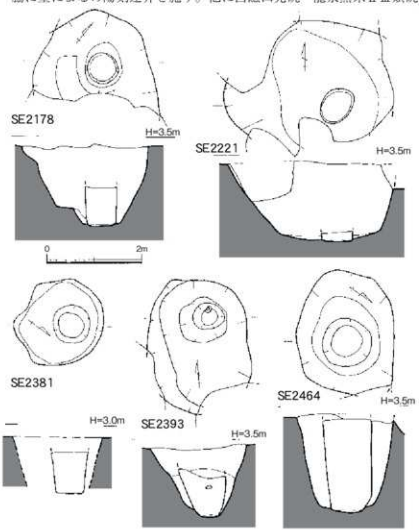


図 47　SE2178・2221・2381・2393・2464 実測図（1/80）

SE2393（図 47） 2 面目南東部 E-6~7 グリッドで検出される。径 2.8~2.2m 程の楕円形の掘方の北寄りに径 50cmの木桶を井筒として据える。深さ 1.55m、底面レベルは EL=1.8m を測る。遺物は（図 48）233 は龍泉窯系青磁坏。屈曲した口縁下に細い単弁鎬蓮弁を施す。釉は緑灰色で半濁する。234 は中国陶器平底皿。口径 10.1 器高 3.0cm。釉は灰緑色で不透明。235 は瀬戸卸皿。口径 14.3 器高 3.5cm。釉は淡灰黄色で薄く透明。卸目は粗い。外底は糸切りで露胎。236 は土師器坏。口径 11.7 器高 2.8cm。外底は糸切りで板圧痕がわずかに残る。明褐色を呈する。237 は瓦器小皿で口径 7.9 器高 2.3cm。外

底は糸切りで、暗灰色で口唇内外が帯状に黒変する。他に龍泉窯系Ⅱ Ⅲ類碗・白磁椅腰香炉・常滑甕・天目碗等が出土。14 世紀前半を示す。

SE2464（図 47） 2 面目南部 C-6~7 グリッドで検出される。径 2.65~2.1m 程の楕円形の掘方に径 65 cmの木桶を井筒として据える。深さ 2.0m、底面レベルは EL=1.25m を測る。遺物は（図 48）238 は龍泉窯系青磁坏。外面に細い無鎬蓮弁文を施す。釉は暗青緑色で厚い。239 は土師器皿。口径 6.8 器高 1.2 cm。外底は糸切りで明褐色。240 は中国陶器壺。口径 11.8cm。外面肩部下に釉を流し掛けする。241 は滑石製六角大鉢で器壁は 3.5cmを測る。破損後素材として鋸引きされる。他に龍泉窯系Ⅲ類碗・天目碗・ガラス小玉・ガラス坩堝等が出土。13 世紀後半 ~ 末を示す。

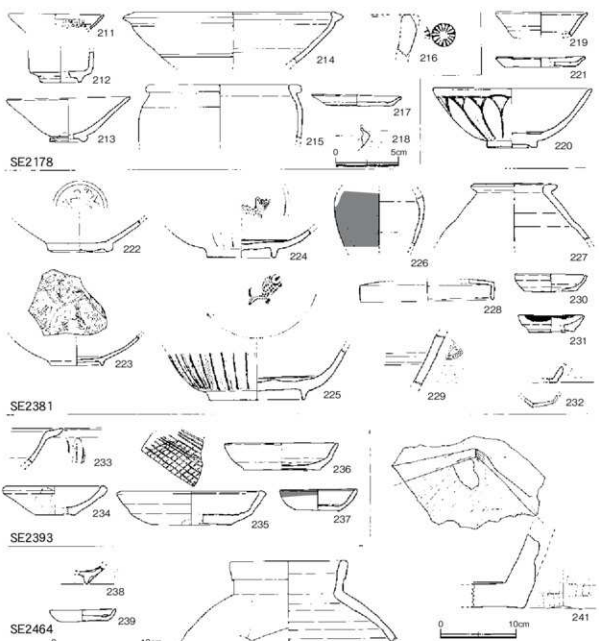


図 48　SE2178・2221・2381・2393・2464 出土遺物実測図（1/4・1/5・1/3）

（2）土坑

土坑は2・3面を中心に調査区全面に展開し、149基を検出した。幅1~1.5m前後から3mを超える大型のものまで多様である。土器廃棄のSK1322・2553・2570、獣骨廃棄のSK2357・3387、石廃棄のSK2508等がある。

SK2026（図43 図版9-6） 2面目中央部のD-4~5グリッドに位置し、平面は不整形の溝状の土坑が2本重なった状態の大型土坑で、長さ5.3幅2.25m、最深部で120cmを測る。横断面は「Y」字状を呈する。土層観察から、半分ほど埋没後一度改削がなされている。出土遺物（図50・55）は242~247は白磁。242・243は外反口縁の口禿碗。口縁内面に圏線を施す。242は口径16.0cm。釉は全面施釉で淡乳灰色で透明。243は口径13.4cm。全面施釉で、黄味を帯びた透明釉を施す。244・245は直口口縁小碗。244は口径10.2器高5.1cm。黄味の強い透明釉を内面から高台際まで掛ける。245は口径10.0器高5.0

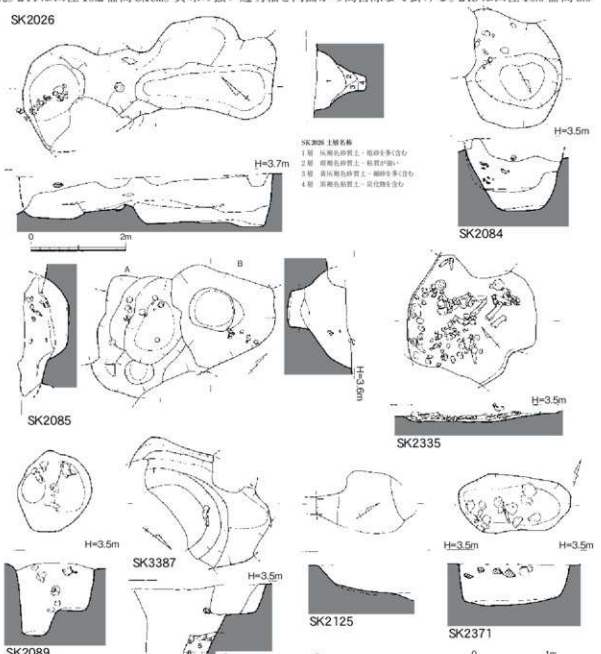


図49 SK2026・2084・2085・2125・3387（1/80）・2089・2335・2371（1/50）実測図

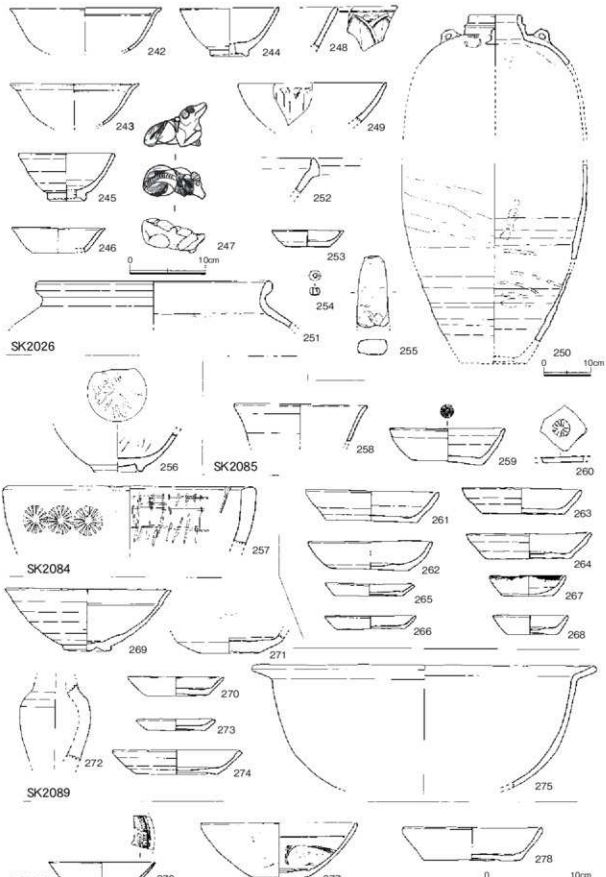


図 50　SK2026・2084・2085・2089・2215 出土遺物実測図（1/4・1/3・1/5・1/8）

cm。橙灰色の透明釉を内面から一部畳付けまで掛ける。246は口禿皿。口径9.6 器高2.6cm。釉は灰白色で白濁し、全面施釉後外底を拭き取る。247は白磁褐彩の犬人形で完形品（巻頭）。4.5 × 2.4cm高さ3.2cm、27.2gを測る。耳と背骨、腰上面に褐彩でブチを、四肢も、伏せから顔を上げた状態も忠実に表現し、首輪には鈴状の中心飾りがある。下面以外に透明釉を掛ける。垂れ耳に割れた額と、中国犬の特徴をとらえている。248・249は龍泉窯系青磁。248はⅡ類碗。外面に複弁鏑蓮弁文を施す。釉はオリーブ灰色で透明。249はⅢ類碗。口径15.5cm。外面に細い単弁鏑蓮弁文を施すが不鮮明。釉は暗緑灰色で透明。250は大型の宜興窯褐釉無頭四耳壺。口径10.4cm、器高は70cm以上。肩部に径4cm程の砂目の重ね焼き痕が3カ所ある。口縁内面から外面に黒褐不透明釉を掛ける。251は備前焼大甕。口径48.8cm。肩部内面にハケメが残り頸部の一部に自然釉が掛かる。外面は黒褐色内面は黒灰色を呈する。252は東播系須恵器捏鉢。胎土に細砂を多く含み暗灰色で口唇外面のみ黒色を呈する。253は土師器皿。口径7.4 器高1.7cm。外底は糸切りで板圧痕が残る。灰褐色。254はガラス小玉。径8mmで巻きの痕跡が残る。緑色透明で一部銀化する。255は滑石製石錘。幅3.4 厚1.7cm。390は石製くさび。3.8 × 3.0cm 厚6mm 11gを測る。黒色泥岩製で刃部以外丁寧な研磨で、先端1cm程に斜めの粗い研ぎで刃部を作る。使用で一部欠損する。風化が浅く中世遺物と判断した。他に鉄滓等が出土する。13世紀後半～14世紀前半を示す

SK2084（図49） 2面目北部D-2グリッドに位置し、平面は楕円形で南東部を攪乱に切られる。2.7 × 2.05m、断面二重の船底型で深さ150cmで比較的深い。中位に遺物が多く出土する。出土遺物（図50）は256は龍泉窯系Ⅲ類碗で、高台径5.0cm。内面に型押しの花文、ヘラ描き文を描くが不鮮明。畳付けのみ露胎で釉は明青色で半濁する。257は土師質奈良火鉢。平面花形で口径26.8cm。内面ヨコナデ後粗い格子状のケンマを施す。外面に径3.1cmの三連の菊花文を印刻する。内面は灰褐色外面は明褐～黄褐色を呈する。他に糸切り土師器・鉄滓等がある。13世紀後半～14世紀前半を示す。

SK2085（図49） 2面目北部D-1~2グリッドに位置し、SK2084に隣接する。大型の平面円形の2基の重複と思われるが切り合い関係は不明。4.0 × 2.25m、断面二重で深さ100~130cmで比較的深い。上半に土師器を中心に遺物が多く出土する。出土遺物（図50）は258は体部が外反する口禿白磁碗で口径13.6cm。釉は若干青味を帯び透明。259・260は東海系土師器。259は坏。口径11.8 器高3.8cmで体部が内湾し深い。外底は糸切り後簾状圧痕が残る。内底に11弁除刻菊花の印文を押す。胎土は細砂を多く含み白褐色。260は坏底部片で、外底は糸切り後簾状圧痕、内底に12弁除刻菊花の印文を押す。胎土は精良で軟質。白褐色を呈する。261~268は糸切り土師器。261から264は坏。261は口径13.8 器高3.2cm。灰褐色。262は口径12.9 器高3.0cm。茶褐色。263は口径12.3 器高2.7cm。灰褐色。264は口径12.9 器高2.7cm。灰茶褐色。262・263は板圧痕が残る。265・266は薄い皿。外底に簾状圧痕が残る。265は口径9.2 器高1.2cm。明褐色。266は口径8.4 器高1.4cm。明褐色。267・268は深い小皿。267は口径7.9 器高2.1cm。茶褐色。口縁内外面に炭化物が焼き付き、灯明皿に用いられる。268は口径7.8 器高2.0cm。茶褐～黒灰色を呈する。13世紀後半～14世紀前半を示す。

SK2089（図49） 2面目北西部B2グリッドに位置する。平面円形の小型の土坑で。1.1 × 1.0m、断面二重で深さ65~100cmを測る。出土遺物（図50）は269は福建浦口窯の青磁碗。口径17.2 器高6.4cm。口唇が小さく波打ち、高台内を兜巾状に刳る。釉は灰青色で透明。270は口禿白磁皿。口径10.0 器高2.0cm。釉は若干青みを帯びて白濁。外底は拭き取り。口唇に炭化物が焼き付き灯明皿に使用する。271は龍泉窯系青磁三足盤で内面に貼付文があるが不鮮明。釉は淡青色で厚い。272は中国黄褐釉灯盞の上部。径7.4cm。内外面に施釉する。273・274は土師器で外底は糸切り。273は皿で口径8.0 器高1.3cm。明褐色。274は坏。口径13.2 器高2.5cm。275は土師質鍋で口径47.6cm。口縁が屈曲し外面に指頭圧痕が残る。

内外面に指ナデを施し外面灰茶褐色で下半は煤が付着し、内面茶褐色で下半は使用で摩滅する。他に滑石製温石・鉄滓などが出土する。13 世紀後半 ~14 世紀前半を示す。

SK2215（図 49） 2 面目中央西寄りの B-4 グリッドに位置する。平面円形のやや大型の土坑で、1.8 × 1.8m、深さ 80cmを測る。出土遺物（図 50）は 276 は景徳鎮窯白磁口禿皿。口径 10.9 器高 2.1cm。内面に細かな型押し陽刻印花文を施す。釉は淡青色で透明。277 は同安窯系青磁碗。口径 16.2 器高 6.5cm。釉は若干黄味を帯びて透明。278 は土師器坏。口径 14.3 器高 3.4cm。外底は糸切り後板圧痕が残る。茶褐色。他に鉄滓・貝殻等が出土。時期は 13 世紀後半 ~14 世紀前半を示す。

SK2335（図 49 図版 9-7） 2 面目南東部の D~E-7 グリッドに位置する。平面不整円形の浅い土坑で南を SD1320 に切られる。1.7 × 1.7m、深さ 10cm。牛か馬の四肢骨がまとまって出土する。出土遺物（図 51）は 279 は白磁合子身。口径 7.6 器高 1.6cm。釉は若干緑味を帯びて透明。280 は龍泉窯系青磁Ⅲ類坏。口径 18.1 器高 3.0cm。釉は暗青色で厚い。時期は 14 世紀前半を示す。

SK2371（図 49） 2 面目中央東寄りの D-5 グリッドに位置する。長楕円形土坑で 1.5 × 0.8m、深さ 55cm。上部に割石が多く堆積する。出土遺物（図 51）は 281・282 は龍泉窯系Ⅳ類青磁。281 は坏で口径 12.4cm。外面に無鎬の細い蓮弁文を施す。釉は明緑色で透明。282 は盤で高台径 12.2cm。内外面に線刻に略化した蓮弁を施し見込みに印花文を施す。釉は灰緑色で全面施釉し高台内に蛇の目剥ぎを施す。露胎部は赤褐色。他に銅製鋲・銅滓・小札・鉄滓等が出土。数少ない 14 世紀中頃を示す。

SK3387（図 49 図版 9-8） 3 面目南西部の B-5~6 グリッドに位置する。隅丸方形で西半部が遺存。長さ 7.0m 深さ 155cmの深い二重土坑で、中位で馬頭骨が出土した。出土遺物は龍泉窯系青磁Ⅲ類碗・白磁碗皿・陶器盤行平・糸切り土師器・鞴羽口・砥石等。時期は 13 世紀後半 ~14 世紀初頭を示す。

（3）基壇状遺構

2 面目南部の一角で 2 基の基壇状遺構を検出した。

SX2485（図 52・巻頭・図版 10-1） 2 面目 A~B-7 グリッドに位置する。攪乱や後代の遺構に切られ北西部の一部が残存するのみであるが、方形で東西で 8.2m 以上南北で 4.2m 以上を測る。高さは 20~30cm程が遺存する。全体を削りだした後、北辺は 4.1 × 2.3m 深さ 70cm程の土坑を掘削（SK2586）、盛り土が滑らないよう内部から上面に礫混じりの黄灰色粘質土を盛土する。周溝は伴わない。上端に沿って、1.5m 程の間隔で 25cm程の扁平礫と径 30cm程の柱穴が並んで検出され、掘立柱建物が設けられたと考えられる。方位を N-41°-E にとる。上面には土師器坏皿が大量に廃棄され（SX2578）、祠堂の様な祭司的建物であったと考えられる。出土遺物は多量の糸切り土師器坏皿の他、龍泉窯系ⅡⅢ類碗・天目碗・ガラス容器・火打金（図 88-24）等がある。14 世紀前半と考えられる。

SX2457（図 52 図版 10-2） SX2485 の北 3m 程に位置する。中央を攪乱に切られるが、同様に、4.0 × 1.8m 深さ 60cm程の土坑内に礫混じりの黄灰色粘質土を厚く盛り上げ、上面が 20cm程高く遺存している。盛土の残りから、4.0 × 2.1m 程の長方形の基壇であったと考えられ、方位も N-50°-E と近い。

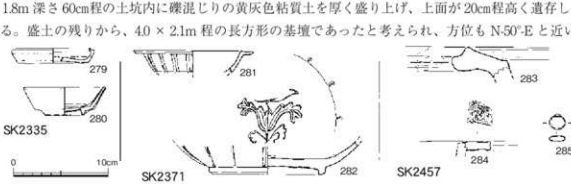


図 51　SK2335・2371・2457 出土遺物実測図（1/4）

SX2485と同時の石塔類の基壇の可能性がある。出土遺物（図51）は283は中国陶器褐釉の大甕。粗砂を多量に含み暗オリーブ不透明釉に乳白色スリップをハケ掛けする。284は肥前系土師質鍋。淡橙色を呈し口縁上面に三巴文を印刻する。285は暗青緑・黒緑色片岩製の碁石。全面に研磨を施す。径1.7厚0.5cm 2.1gを測る。他に口禿白磁皿・龍泉窯系Ⅱ類碗・鉄滓等が出土する。14世紀前半を示す。

（4）柵列SA2593（図52）

調査区南端で区画溝SD1320を切って検出される。SX2487と同じく、1.3~1.4m程の間隔で扁平礫と径30~80cm程の柱穴が、延べ18.5m程並んで検出される。根石を据えるもので打ち込まれたものではない。方位を区画溝に近いN-62°-Eにとる。出土遺物は混入品のみで明確な時期を示すものは無いが、同方向の区画溝と同時期で14世紀前半と考えられる。

（5）溝

溝は、1・2面の主に調査区南の稜線寄りに、地形に沿った「L」字の区画溝、SD1308・1320・

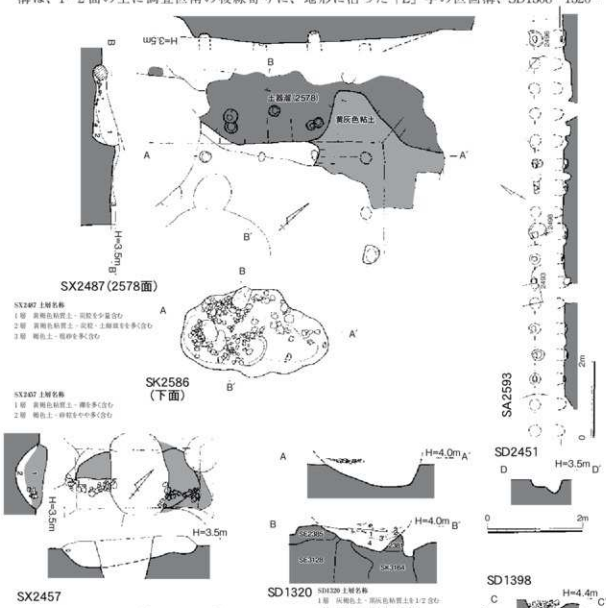


図52　SX2487（2586）・2457・SA2593・SD1320・1398・2451実測図（1/100・1/200・1/80）

1394・1398・2072・2261・2451の7条を検出している。

SD1320（図9･52 図版10-3） 1面目で一部が近世遺構の間で検出されていたが、下面で明確に把握された。「L」字の区画大溝で西で方位をN-22°-Wに、北でN-56°-Eにとり隣地の第172次調査区に延びる。最大幅3.2m深さ70cm程で断面「V」形の薬研掘りである。底面レベルはEL3.3m程。底面上30cm程から焼土粒混じりの灰褐色土中に土師器坏皿が大量に廃棄される。特に南溝に集中する。さらにこの上面を一部2m弱の長さで焼土が覆っている。遺物（図53・54）は286~295は白磁。286は八角壺で肩部径15.2cm、頸部まで八角で径8.4cmを測る。各面を1、2本の沈線で区画し、胴部には区画内にヘラ・櫛描の草花文を施す。外面に淡青灰色の透明釉を掛ける。287は梅瓶の蓋。口径7.2cm。口縁内面から外面に乳灰色透明釉を掛ける。288は大型の合子。蓋で口径8.0器高1.9cm、上面に陽刻印花文を施す。外面に施釉。身は受部径8.0器高1.5cmを測る。外面体部上半と内面口縁以下に淡オリーブ灰色の透明釉を掛ける。露胎部は明橙色を呈する。289は枢府系の高台付皿。高台径4.1cm。見込みに陽刻印花文を施す。釉は淡青灰色で全面に施し半濁する。畳付と高台内を拭き取り茶褐色を呈する。290・291は口禿碗。290は釉は乳灰色で半濁する。露胎部は橙灰色を呈する。291は釉は淡青灰色で透明。露胎部は暗橙色を呈する。292~295は口禿皿。292は内面に型押しの雷文を、釉は灰白色で透明。口唇露胎部は橙色で灯芯痕が焼け付き灯明皿に使用する。293は景徳鎮窯皿。器高1.8cm。内面に細かな型押し陽刻印花文を施す。淡青灰色で透明。露胎部は灰白色。294は釉は橙味がかった灰白色で透明。露胎部は淡橙灰色。295は口径9.5器高3.4cm。全面施釉し外底を掻き取る。釉は乳灰色で不透明。口唇の灯芯痕が熱で爆ぜる。296~298は龍泉窯系青磁。296はⅣ類坏。口唇に刻み目、口縁上面に二重沈線の波文を、体部外面に細かな陽刻鎬蓮弁文を内面にヘラ凹線の印刻蓮弁文を施す。厚い釉は青緑色で半濁。297はⅣ類碗。高台径6.0cm。釉は厚く淡青灰色で半濁。畳付~高台内は露胎で橙赤色を呈する。298はⅣ類盤。口径23.0。口唇に沈線、外面に細い鎬蓮弁文を施す。厚い釉は青緑色で半濁。299~304は陶器。299は磁灶窯緑釉壺で、外面にヘラ描沈線で竜の鱗を描く。外面に暗オリーブ色の薄い半濁釉を掛ける。内面に無文当具痕が残る。300は二彩陶器瓜割壺。胴径15.7cm。8本の縦凹線で瓜割りし、外面に白化粧土後薄い不透明の暗緑色と灰黄色釉を掛け分ける。内面底部に淡青灰~暗褐色不透明釉を掛ける。301は陶器無頸壺。口径7.2cm。褐色釉に口縁以下緑灰色不透明釉を重ねる。302は備前焼の偏壺か。三角高台に稜を成す二段胴で径24.2cmを測る。外面上半は茶褐色下半は淡灰褐色、内面は暗灰褐色を呈する。303は中国陶器皿。口径10.0器高3.2cm。内面から外面上半に暗緑灰色の不透明釉を掛け口唇上面を掻き取る。焼成は磁質。304は底径28.0cmの中国陶器大甕。口縁内外面を回転ナデ内面口縁下に平行弧線当具痕が残る。胴外面下半は縦ヘラナデ。外底以外に灰黄色不透明釉を掛け、畳付に焼付痕が残る。305~340は糸切り土師器。305~319は坏。305･306は大型、310~319は小型、307~309は中間に位置する。305は口径17.1器高4.1cm。淡灰褐~凹灰色。306は口径17.1器高3.7cm。淡灰褐~灰橙色。307・308は器壁が8~10mmと厚く胎土は精良。307は口径15.1器高2.5cm。外底に板状圧痕。淡灰褐。308は口径14.9器高3.1cm。淡灰褐~淡黄褐色。309は口径13.1器高2.7cm。淡灰褐~淡赤褐色。310は口径12.6器高3.1cm。淡灰褐~暗赤橙色。311は口径12.5器高3.0cm。淡灰褐~淡赤橙色。外底に籠状圧痕。312は口径12.4器高2.8cm。淡灰褐~淡赤褐色。外底に浅い板状圧痕。313は口径12.9器高2.8cm。橙灰色。314は口径12.3器高2.9cm。淡灰褐~淡赤褐色。315は口径12.5器高3.0cm。灰褐~暗橙灰色。316は口径11.8器高2.8cm。橙褐色。317は口径11.7器高2.6cm。底部脇に焼成前の径6mmの穿孔がある。黄橙~淡赤褐色。318は口径12.2器高3.0cm。暗灰褐~淡黄橙色。319は口径11.7器高2.6cm。橙灰色。320~334は皿。320~327は浅い皿、328~331は深い皿、332~334は深い小皿。320は口径18.5器高1.4cm外底に浅い籠状圧痕。。灰褐色。321は口径8.1器高1.5cm。淡灰褐色。

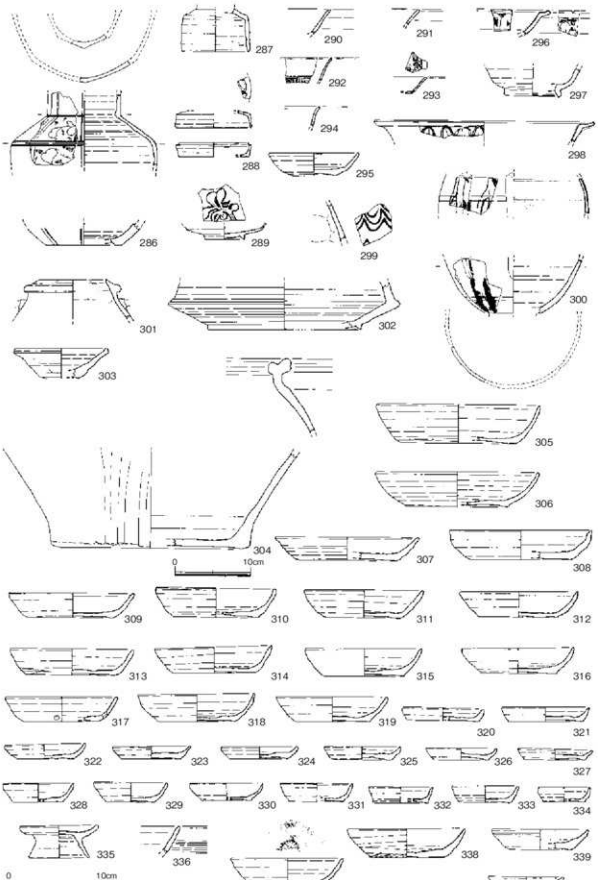


図53　SD1320 出土遺物実測図 1（1/4・1/5）

322は口径8.5器高1.7cm。外底に浅い籠状圧痕。淡灰褐色。323は口径8.2器高1.4cm。灰褐～淡灰褐色。324は口径8.1器高1.3cm。淡灰橙色。325は口径8.0器高1.5cm。外底に幅広の籠圧痕。淡灰褐～淡赤褐色。326は口径7.4器高1.3cm。黄褐色。327は口径7.8器高1.2cm。灰褐～暗赤褐色。328は口径7.4器高2.0cm。底部に径4mmの焼成後の穿孔がある。暗赤褐～黄灰色。329は口径7.8器高2.1cm。内面に油脂付着。暗褐色。330は口径7.7器高1.9cm。暗灰褐～黒灰色。331は口径7.6器高2.0cm。黄橙～淡赤橙色。332は口径6.7器高1.7cm。灰橙色。333は口径7.1器高1.7cm。淡灰褐色。334は口径5.5器高1.6cm。淡灰橙色。335は脚付皿。口径8.3器高3.4cm。淡灰褐色。336～340は外来系。336は坏。外面口縁下にヘラ描沈線5条を施す。胎土は精良で淡黄灰色を呈する。337は東海系坏。口径11.8器高3.2cmで体部が内湾し深い。外底は糸切り後浅い籠状圧痕が残る。内底に除刻菊花の印文を押す。胎土は細砂を少量含み灰白色。やや軟質。他に4個体分出土している。338～340は器壁が1cm近い厚い土器で、338は口径12.4器高3.1cm。体部が内湾し底部脇をヘラ当てで高台様に仕上げる。胎土は精良で黄橙～橙灰色。339・340は皿。339は口径10.2器高2.2cm。外面口縁下に沈線を施す。細砂を多量に含み淡赤褐色。340は口径7.9器高1.6cm。胎土は精良で淡灰褐色を呈する。342～348（図54）は鍋。342・343は鍔口縁の足鍋。342は瓦質で口径28.1cm。外面は指頭圧に手持ちのヨコナデ内面は細かなヨコハケを施す。灰褐色で外面が煤で黒変する。343は土師質で口径24.9cm。外面は回転ナデ内面は左上がりのナナメハケを施す。黄灰色で外面に煤が付着。344・345は肥前系土師質鍋。[L]字口縁で、344は淡赤褐色を呈し口縁上面に三巴文を印刻する。345は上面に粗い擦状圧痕を施す。内面は粗いヨコハケ。暗赤褐～暗褐色を呈する。346は土師質足鍋の足で径3cm程。粗砂を多く含み暗赤褐色で内側に煤が付着し黒変する。347・378は瓦質捏鉢。347は口径21.1器高8.9cm。外面は指頭圧後粗いタテハケと手持ちヨコナデ、内面はヨコ・ナナメハケを施す。外底はタテ板ナデ後板状圧痕が残る。胎土は砂質で灰黄～黒灰色を呈する。348は口径30.4器高11.0cm。調整・胎土・色調は同様。349は平面花形の奈良火鉢。外面はヨコナデ後粗いケンマ内面は回転ナデ後粗いケンマを施す。胎土は砂質で赤色粒を多く含み暗灰褐～黒灰色を呈する。350～354は鋳造関係。350は中国陶器皿を取転に転用。内面に薄い泡状のスラグが熔着し、外面は黒褐色に灰が熔着し幅1cm程帯状に暗褐色の器表が残り輪状の金具を被せたと思われる。351は土師質取瓶。口径13.0cmで器壁は厚さ3cmを越える。籾殻を多く含む粘土の内側に細砂を多く含む真土を1～3mm程薄く引く。被熱で外面は明灰黄～黄橙色内面は暗赤褐～灰褐色を呈する。352・353は内面にガラス質のスラグが熔着した土師質甕底部。352は底部脇の小片で内面と外面上位にスラグが薄く熔着し、外面は高熱で2mm程暗灰褐色に陶質化する。胎土は粗砂を多く含み暗灰褐色でその外側3mm程は黒変する。353は底径35.8cmで内面にスラグが2.5mm程熔着し、胎土は粗砂を多く含み暗灰褐色でその外側3～5mm程は黒変する。外表は赤化する。354は方柱状の土製品で厚さ3.1cm。内外面はタテヘラナデ後ユビナデ、側面はタテハケを施す。粗砂を多く含み黄橙～赤橙色を呈する。355は有溝土錘。6.6×3.7×3.2cm 57.5gを測る。上面に賽子の五目を刺突しヘラで「×」印を描く。356は暗褐色細粒砂岩製の風字硯片。現存で4.1cmを測る。357・358は滑石製有溝石錘。357は5.1×1.7cm、358は3.5×1.3×1.1cm 9.3gを測る。他に揚羽蝶飾金具（図88-1）・飾銅板・鈎金具・刀子・鉄滓等が出土する。14世紀前半を示す。

SD1398（図9・52 図版10-3） 1面目南部A～B-7グリッドで検出された「L」字の区画小溝で南で方位をN-71°-Eにとる。西端は調査区外に北端は攪乱され不明。残存で5.0m、最大幅1.0m深さ30cm程で断面船底型である。底面レベルはEL≒4.1m程。溝内には10cm程の玄武岩を主体とした割石をゆるく詰め、暗渠か倉基礎の可能性がある。出土遺物（図54）は359は吉備系土師器小碗。高台径4.2cm。外面は高台脇に指頭圧、高台内は手持ちのユビナデ、内面はケンマを施す。胎土は精良で明黄灰色を

呈する。他に龍泉窯系Ⅰ・Ⅱ類青磁碗・白磁碗等がある。時期は14世紀前半を示す。

SD2451（図9・52） 2面目南西部B-5~6グリッドで検出された「L」字の区画小溝で、14世紀前半のSK2568に切られる。SD1398の3.5m程西に位置する。南で方位をN-18°-Wにとる。両端は削平され不明。残存で5.0m、最大幅1.0m深さ30cm程で一部2段となる。底面レベルはEL3.7m程。出土遺物（図54）は少量で、361は口径30cm前後の磁灶窯黄釉陶器盤の口縁小片。乳灰色の化粧土に淡黄灰色の透明釉を掛ける。口縁上面は拭き取り目跡が残る。362は龍泉窯系青磁Ⅱ類碗。他に口径15.8器高6.3cm。外面に無鎬片切彫蓮弁文を施す。釉はオリーブ灰色で半濁する。他に糸切り土師器等が出土する。SD1320・1398・SA2593と同方向をとり、同時期と考える。

（6）包含層その他の出土遺物（図55）

363~368は白磁。363は福建産の筒形香炉で口径11.4器高7.8cm。口縁を内折れし口唇から体部外面に化粧土を掛け上に灰色味を帯びた透明釉を掛ける。364・365は口禿碗。364は外面に片切彫で細い無鎬蓮弁文を施す。釉は淡青色で透明。露胎部は茶褐色。365・366は景徳鎮窯。365は高台径3.4cm。見込に陽刻印花文を施し、全面に淡青色の半濁釉を掛ける。366は口禿皿。口径10.4器高2.3cm。内面に型押し陽刻の水草魚文と細かな印花文を施す。釉はやや気味を帯び透明。露胎部は灰白色。367は香炉獣脚。2.6×1.1cm。型作りで内側に指頭圧痕が残る。乳白色の半濁釉を掛ける。368は碗高台を転

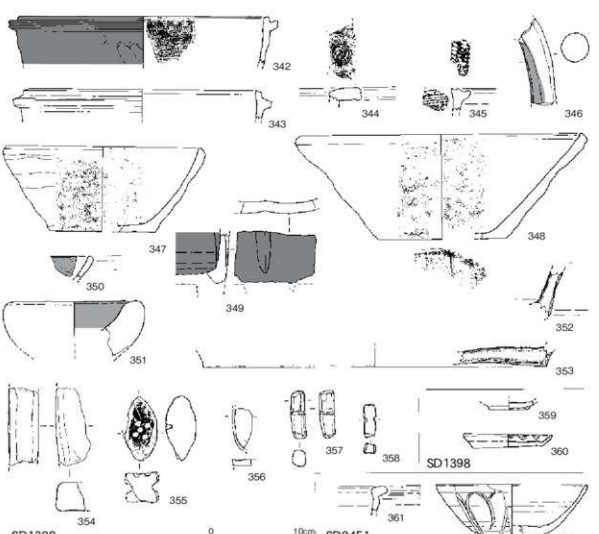


図54　SD1320・1398・2451出土遺物実測図（1/4）

用した瓦玉。径 4.0cm 23g。高台内に花押の墨書がある。細かな敲打で円形に整形する。369~371 は龍泉窯系青磁。369 は Ⅲ 類碗。口径 13.6cm。外面に細い無鎬単弁蓮弁文を陽刻。釉は明青色で半濁。370 は Ⅳ 類坏。口径 10.3 器高 3.6cm。釉は淡緑色で半濁し全面施釉後畳付を掻き取る。371 は鍔口縁の Ⅳ 類盤。口径 29.8cm。外面に細い単弁鎬蓮弁文を施す。釉は緑色で半濁し厚く掛ける。372 は中国陶器褐釉灯盞の下半部。皿径 13.8cm。全面施釉し高台脇に白土胎土目が 5ヶ所残る。373 は洪塘窯肩衝茶入。口径 2.5cm。内面肩部から外底脇まで濃褐色の不透明釉を施釉。胎土は精良で紫褐色。374・375 は瀬戸焼灰釉陶器瓶子。374 は口径 5.4cm。口縁下端が玉縁状になる。内面肩部に指頭圧痕が多く残る。口縁内面から外面に灰緑色透明釉を薄く掛ける。375 は口径 4.0cm。口縁下端が稜を成す。淡灰緑色の透明釉を内外に掛ける。376・377 は土師器。376 は短頸小壺で口径 4.9cm。内外面回転ナデで外面肩部に三輪文を印刻する。胎土は精良で橙褐色。377 は東海系坏。口径 11.7 器高 3.2cm。外底は糸切りで、内底に 14 弁陰刻菊花の印文を押す。胎土はやや粗く黄白色。378~380 は瓦質。378 は高い鍔口縁の足鍋。口径 28.0cm。摩滅で調整は不明。外面鍔以下に煤が部分的に残る。外面暗灰色内面淡灰黄色。379 は奈良火鉢。平面花形で、内面にヨコヘラ後粗いタテケンマを施す。外面に径 3.0cmの三連の 16 弁菊花文を印刻する。灰色。380 は小型の火鉢。口径 17.0 器高 9.7cm。器壁は底は 0.4cm体部は 1.3cmと厚い。外面に 8 弁の花文を連続で印刻する。381・382 は土師質取瓶。381 は口径 6.2 器高 2.9cm、器壁は 1.2 cmを測る。内面には褐色化したスラグが薄く熔着する。胎土は砂粒を多く含み褐灰~明褐色を呈する。382 は口径 17.4 器高 8cm程で器壁は 3.4cmを測る。内面には黒色・褐色化したスラグが熔着し、所々緑青が吹く。胎土にスサ・籾殻を多く含み外面は灰黄色。383~396 は石製品。383~386 は硯。383 は残存幅 10.5 厚 2.6cmを測る大型直方硯海部分。暗赤灰色の赤間石製。384 は残存長 6.8 厚 2.2cm。風字硯と思われ、裏面も再利用する。灰色細粒砂岩製。385 は暗赤灰色の赤間石製。残存幅 5.1cmを測る大型硯で陸部分。暗赤灰色の赤間石製。内面に墨痕が一部残る。386 は直方硯の海部小片。残存長で 3.3 厚 2.2 cm。黒灰色の細粒砂岩製で裏面に線刻で「記録?」と記すか。387~389 は滑石製。387 は石鍋転用の温石。10.7 × 9.1 × 1.7cm 317g を測る。鍋口縁をそのまま生かし外面には鍋使用時の煤が付着する。径 0.9~1.0 cmの 2 孔を穿孔。388 は方柱状の有溝石錘で 2.9 × 1.0 × 1.0cm 6g を測る。389 は扁平な有溝石錘で 4.8 × 3.7 × 1.6cmを測る。391~395 は砥石。391~394 は鋸引きの直方体整形砥石。391 は 14.8 × 2.9 × 0.9 cmを測る仕上砥で、表裏面を使用し鏡面状になる。両側面と端面は鋸引き後緩く研磨する。明黄褐色の泥岩で本山合砥石か。392 は幅 3.8 残存長 8.7 厚 1.3cmの仕上砥石。表裏面を使用し両側面に鋸引き痕が残る。両端部は欠損。淡赤褐色の凝灰質砂岩製。393 は残存長 7.8 幅 7.8 厚 1.3cmを測る中砥。表裏と両側面を使用する。下端は自然面で平行の層理が見れる。上端は欠損。暗緑灰色の頁岩質中粒砂岩製。394 は 4.4 × 2.6 × 1.2cmを測る手持ち砥石で、全面を使用する。灰色泥岩製。395 は自然礫を用いた手持ち砥石。表面と右側面を使用。上端と裏面は自然面が、下端と左側面は粗い敲打調整面が残る。396 は灰茶色敲打礫のチャート製火打石。上・右稜線を使用し、剥離摩耗する。上端は自然面が残る。6.4 × 3.0 × 2.8cmを測る。397 は中国褐釉陶器製の犬人形。立像で、垂れ耳で口を開け尻尾は左に巻く。目は凹点で表現し、造作は粗い。胎土は精良で淡明褐色、上半に濃褐色不透明釉を掛ける。5.9 × 2.7 高さ 3.7cmを測る。398・399 はガラス丸玉。398 は高 10mm。青緑色で透明。巻きの痕跡が残る。399 は径 9.5mm。青緑色で銀化する。

4．中世Ⅳ期

中世Ⅳ期は龍泉窯系青磁碗Ⅴ類、明青花・半島粉青沙器等を指標とする 15 世紀~16 世紀で、14 世紀後半の遺構を欠き、遺構数も激減する。検出遺構は井戸 1 基・土坑 13 基で、第 1・2 面を中心に検

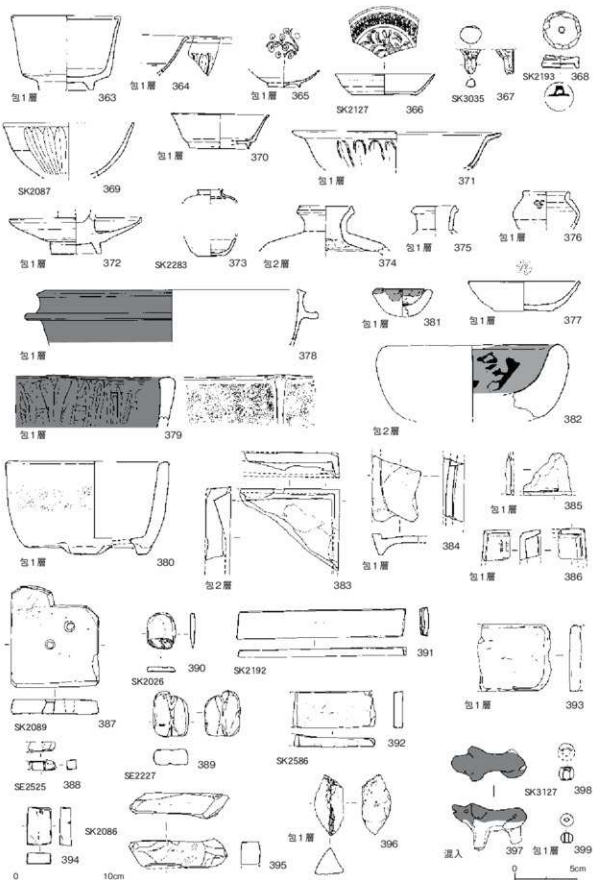


図 55　中世Ⅱ出土遺物実測図（1/4・1/3）

出される。遺構全体の約 2% を占めるのみである。

（1）井戸　SE2382（図 56 図版 10-6） 2 面目中央東寄り D-5~6 グリッドで検出される。径 4.1m 程の円形の大きな掘方で、東寄りに径 120cmの木桶を井筒として据える。深さ 1.0m、底面レベルは EL=1.7m を測る。遺物は（図 58）413 は龍泉窯系 V 類碗。雷文を施す。414 は朝鮮灰青釉陶器碗で口径 12.1cm。415 は中国陶器皿。口径 10.4 器高 3.3cm。416 は備前擂鉢。紫褐色で降灰部は黄灰色。417・418 は管状土錘。417 は長 4.8 径 1.0cm。418 は長 4.6 径 1.1cm。419 はガラス平玉。径 1.2 厚 0.3cm。青色で表面は銀化。他に口禿白磁皿・肥前系土鍋・天目碗・坩堝・銅滓・鉄滓が出土。時期は 15~16 世紀を示す。

（2）土坑

土坑は調査区内に散漫に 7 基分布する。

SK2059（図 57） 2 面目北東部の E-3 グリッドに位置。平面円形で、径 2.5m、深さ 130cm。出土遺物（図 58）は 400 は朝鮮雑釉船徳利の口縁部。口径 5.8cm。胎土は紫褐色。401~405 は糸切り土師器。401~403 は坏。401 は底部が 1cm程で厚い。402 は外底に板状圧痕が浅く残る。403 は口径 10.0 器高 2.0cm。大内系で外底は糸切り後にナデる。404・405 は皿。406 は鋳造関係の土製品で、断面台形で幅 2.3cm。下面に白化したガラス質滓が熔着。他に鉄板片・鉄滓等が出土する。16 世紀を示す。

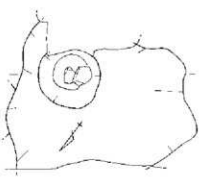


図 56　SE2382 実測図（1/80）

SK2147（図 57） 2 面目 D-5 グリッドに位置する。平面楕円形で、2.8 × 1.6m、深さ 100cm。断面逆台形。出土遺物（図 58）は 407 は景徳鎮窯青磁碗。外面に無鎬蓮弁文。408 は朝鮮粉青沙器の粉引き碗。409 は大内系土師質鍋。口縁下に手持ちヨコナデ。他に坩堝・銅滓が出土する。16 世紀を示す。

SK2201（図 57 図版 10-7） 2 面目 A-3 グリッドに位置する。平面円形で、径 2.1m、深さ 140cmの二重土壙。出土遺物（図 58）は 410 は漳州窯青花碗で呉須で唐草文を施す。411 は球形の有孔土錘。径 3.2cm。412 は三巴文軒丸瓦。径 11.5cm。他に朝鮮陶器・鉄滓等が出土。時期は 16 世紀を示す。

SK3198（図 57 図版 10-8） 3 面目東寄りの D-5 グリッドに位置する。円形で径 80cmの常滑焼の甕を据える埋甕で、径 1.4m、深さ 100cm。埋甕は廃棄時に上半部

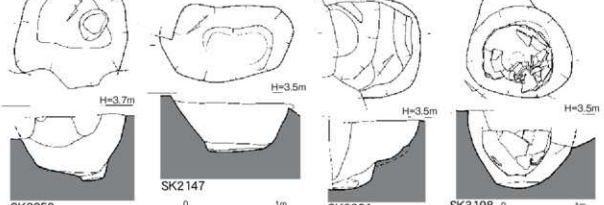


図 57　SK2059・2147・2201 実測図（1/50）

が破壊され、口縁破片等が甕内面直上に堆積する。他に白磁碗等が出土する。時期は 15 世紀を示す。

(3) 包含層その他の出土遺物（図 58）420 は漳州窯明赤絵皿。421~423 は明青花。424・425 は型造り華南青釉・黄釉陶器菊皿。426~429 は朝鮮陶器。426・427 は象嵌青磁壺と皿。428 は白釉陶器碗。429 は刷毛手碗。430・431 は備前焼。432 は土師質湯釜ミニチュアで大内要を印刻する。433 は瀬戸焼卸皿。434・435 は軒平・軒丸瓦である。

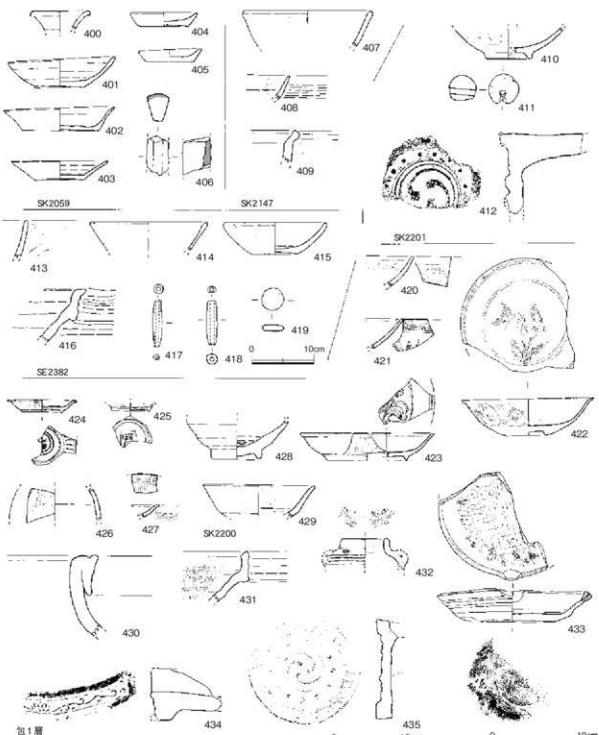


図 58　SK2059・2147・2201・SE2382 他出土遺物実測図（1/4・1/5・1/3）

(3) 古代

1. 7世紀代

(1) 土坑

SK4110（図59）

Ⅲ区C-6・7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.2m、最深部の標高は約2.65mを測る。掘方の北側では底面から約0.1mの高さにステップ上の掘り込みが認められる。出土遺物から7世紀後半～末頃に推定される。

出土遺物（図59）1は須恵器の坏蓋で天井部は欠損する。残存部には回転ヨコナデがみられる。

SK4087（図59）

Ⅰ区D-7グリッドで検出された。堀方の大半は上面の遺構に削平され、東西の掘方の一部が残存する。検出面の標高は約3.15m、最深部の標高は約2.75mを測る。埋土中から完形の須恵器がまとまって出土し、出土遺物から7世紀後半～末頃に推定される。

出土遺物（図59）2・3は須恵器の坏蓋である。ともに天井上部にヘラ記号がみられる。4・5は須恵器の高台付坏である。5の高台内側には「+」のヘラ記号が認められる。6は土師器の底部片である。内外面ともにハケメ調整がみられる。

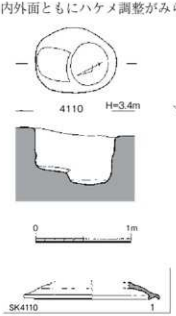


写真20　SK4087（東から）

図59　SK4110・4087実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

2. 8世紀代

（1）住居跡

SC3210（図60）

Ⅰ区D-8グリッドで検出された。遺構の大半は上面の遺構に削平され、方形とみられる掘方の北西隅が検出されたのみである。検出面の標高は約3.4m、床面の標高は約3.35mを測る。土師器・須恵器・製塩土器・弥生土器などが出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末頃に推定される。

出土遺物（図60）7は須恵器の高台付坏である。高台内側は回転ヘラ切り、それ以外では回転ナデがみられる。8~10は土師器である。8は甕で、内面口縁部中位以下にススが付着する。9・10は高坏で胎土や器面の色調・調整などから同一個体の可能性がある。9では内外面ともに回転ミガキが認められる。

SC4137（図61）

Ⅱ区C-5・6グリッドの砂丘面で検出された。遺構の東側はⅠ・Ⅱ区の境界に位置し調査できていない。検出された掘方の平面形は方形を呈し、南北長は約4.6mである。検出面の標高は約3.3m、床面最深部の標高は約2.8mを測る。混ざりこみと考えられる白磁片の他、土師器・須恵器・弥生土器・黒曜石剥片が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末頃に推定される。

出土遺物（図61）11・12は須恵器の坏蓋である。11は天井部で回転ヘラケズリがみられ、口縁付近には自然釉がかかる。13・14は土師器の甕で、ともにハケメ調整がみられる。

SC4163（図61）

Ⅲ区A-6・7グリッドの砂丘面で検出された。遺構の北側は上面の遺構に削平される。西側は調査区外へと続いており、方形とみられる掘方の東側のみ検出された。検出面の標高は約2.8m、床面の標高は約2.7mを測る。土師器・須恵器・弥生土器片が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末頃に推定される。

出土遺物（図61）15は須恵器の坏蓋片である。16は土師器の大坏で高台の脚部を除きミガキ調整が認められる。

SC4177（図61）

Ⅲ区B-7グリッドの砂丘面で検出された。上面の遺構に大きく削平され掘方が不鮮明であるが、やや歪な方形を呈すると推定される。検出面の標高は約3.0m、床面の標高は約2.75mを測る。土師器の坏片が出土しており、8世紀代と推定される。

（2）井戸

SE3058・SE3059（図62）

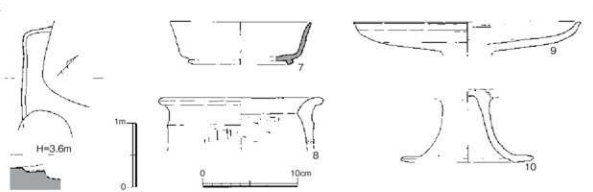


図60　SC3210実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）

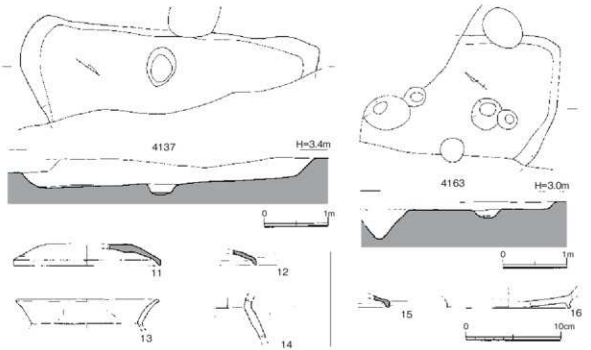


図 61　SC4137・4163・4177 実測図（1/60）
および出土遺物実測図（1/4）

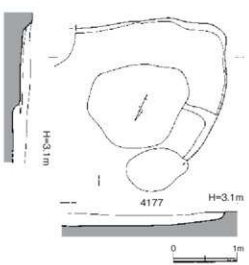


写真 21　SC4137（東から）

Ⅰ区 D・E-4 で検出された。長方形の井筒を有する井戸を 3058、隅丸方形の井筒を有する井戸を 3059 として番号を付した。両者の切り合いは不明瞭であったが、わずかな切り合い関係から 3058 が廃絶した後 3059 が掘り込まれたものと推定される。3059 の井筒の上層（3008 として取り上げ）では須恵器がまとまって出土しており、井戸廃絶の際の祭祀が行われた可能性も考えられる。3058・3059 では須恵器・土師器を中心にパンケース 5 箱以上の遺物が出土し、ともに出土遺物の年代から 8 世紀後半～末に推定され、明確な時期差は認められなかった。

出土遺物（図 62）17~21 は 3058 で出土した。17 は須恵器の坏蓋である。井筒から出土した。18 は須恵器の小鉢である。19~21 は土師器の甕である。

22~29 は 3059 の掘方、30~43 は 3059 の井筒上層（3008）で出土した。22・23 は須恵器の坏蓋、24 は須恵器の高台付坏である。25 は土師器の高坏、26・27 は土師器の甕である。28・29 は製塩土器である。30・31 は須恵器の坏蓋、32~35 は須恵器の高台付坏である。36 は須恵器の坏とみられ、底

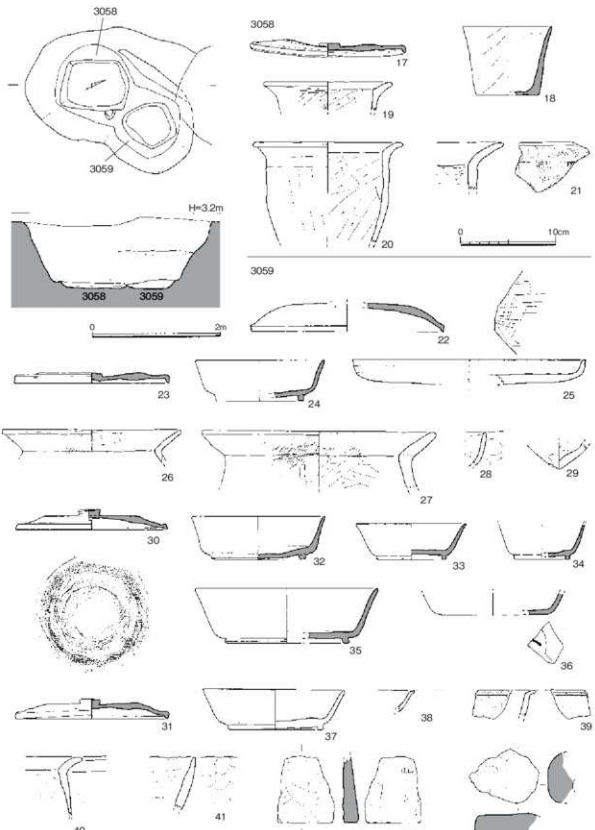


図 62　SE3058・3059 実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）

面ではわずかに墨書が認められる。37は土師器の高台付坏、38は土師器の坏である。39は鉢とみられ、内外面にミガキ調整が認められる。40は土師器の甕である。41は製塩土器で外面にはユビオサエ、内面にはヨコナデ調整がみられる。42は移動式竈の底部付近か。43は鞴の羽口片である。

SE3063（図63）

Ⅰ区D-5グリッドで検出された。Ⅰ・Ⅱ区の境界で検出されたため、調査の安全を考慮し、重機での半裁を行った。全体は把握できていないが、掘方は隅丸方形、井筒は円形を呈すると推定される。検出面の標高は約3.0m、井筒の最下面は約1.5mで、最下面付近で湧水した。須恵器・土師器を中心にパンケース2箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

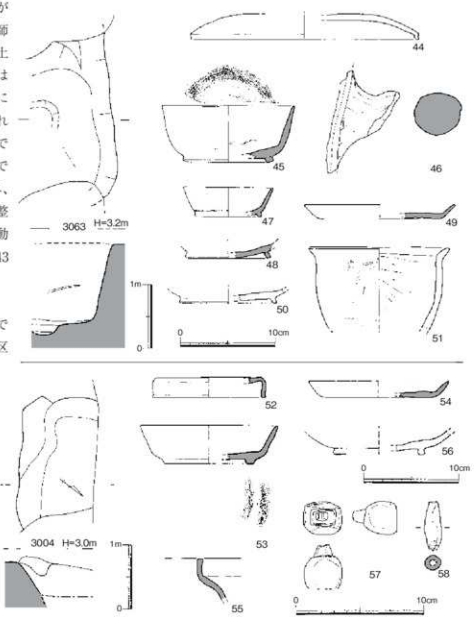


図63　SE3063・3004実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4・1/3）

出土遺物（図63）44~46は掘方、47~51は井筒で出土した。44は土師器の坏蓋で復元口径は24cmを測る。45は須恵器の高台付坏である。内外面に工具によるナデ調整がみられ、内底にはヘラによるキズがのこる。46は土師器の把手である。47・48は須恵器の高台付坏で48は45と同様にヘラ状工具による調整がみられる。49は須恵器の皿で復元口径は15.8cmを測る。50は土師器の高台付坏、51は土師器の甕である。

SE3004（図63）

Ⅰ区D-1グリッドで検出された。検出面の標高は約2.8mを測る。掘方の大半が調査区外へと続くため安全を考慮し、標高約2.3m以下は未掘である。調査範囲内で井筒を検出できていないため、井戸ではなく土坑の可能性も考えられる。土師器・須恵器を中心にパンケース3箱分の遺物が出土し、

出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図63）52~55は須恵器である。52は壺蓋で復元口径は11.8cmである。53は高台付坏で外面の高台付近でヘラ状工具の痕跡がみられる。54は皿、55は壺の口縁部片である。56は土師器の椀で外面では回転ミガキが認められる。57は権で重量は33.2gを測る。全体に丁寧な研磨が施される。粘板岩製か。58は土錘で残存長3.7cm、最大径は1.3cmを測る。

SE3034（図64）

Ⅰ区E-4グリッドで検出された。検出面の標高は約3.3mを測る。北側は上面の遺構に削平され歪であるが、本来は隅丸方形の平面形であったと推定される。円形を呈する井筒は掘方の東側に寄り、直径約1.1m、最深部の標高は約2.3mを測る。須恵器・土師器を中心にパンケース3箱の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図64）59~61は掘方、62~64は井筒で出土した須恵器で59・60は坏蓋、61は高台付坏である。62は高台付坏とみられ、復元高台径は11cmを測る。63は壺の底部とみられ、外面底部には

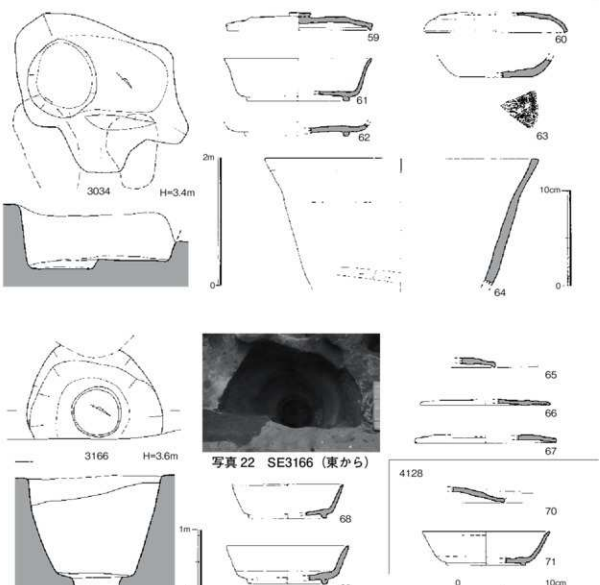


写真22　SE3166（東から）

図64　SE3034・3166実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）

ヘラ記号が認められる。64は瓦質土器の鉢で内外面に回転横ナデ、外面に一部ケズリがみられる。

SE3166（図64）

Ⅱ区E-7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.4mである。掘方の東側は調査区外へと続く。掘方と井筒の平面形はともに円形を呈し、掘方の直径は2.1m以上、井筒の直径は約0.8mを測る。標高約1.7mで湧水し、それ以下は未掘である。須恵器・土師器を中心にパンケース3箱の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図64）65は掘方、66～69は井筒で出土した須恵器である。65～67は坏蓋、68・69は高台付坏である。

SE4128

Ⅲ区A-8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.2mである。東側は上面の遺構に削平され、掘方の大半が調査区外へと続くため安全を考慮し、標高約2.8m以下は未掘である。調査範囲内で井筒を検出できていないため、井戸ではなく土坑の可能性も考えられる。土師器・須恵器を中心にパンケース0.5箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図64）70は須恵器の坏蓋片である。71は須恵器の高台付坏で高台付近にはヘラ状工具の痕跡がみられる。

（3）土坑

SK3091（図65）

Ⅱ区E-8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.45mである。掘方は0.7m×0.8mの円形を呈し、最深部の標高は約3.1mを測る。標高約3.3mの段階で割れてはいたものの、須恵器の高台付坏（図65-73）に坏蓋（図65-72）が被せられた状態で検出された。供献土器の可能性が考えられるが、坏内部の土を洗浄した結果、有機物などは特に検出されていない。出土した須恵器などの年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図65）72は須恵器の坏蓋で口径約21cmを測る。つまみの周囲では回転ヘラケズリがみられる。73は高台付坏で口径約19～19.5cmとやや歪みがある。高台内側ではヘラ切り後ナデ調整がみられる。74は土師器の坏で内外面ともにヘラミガキが認められる。

SK3227（図66）

Ⅱ区D-6・7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.35m、最深部の標高は約2.7mを測る。掘方の西側では底面から約0.2mの高さに平坦面が認められる。須恵器・土師器を中心にパンケース1箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図66）75～78は須恵器である。75・76は坏蓋で75の口縁端部に比べ76の端部はやや鈍い屈曲である。77・78は高台付坏で78の内面底部にはタテナデ調整がみられる。79は土師器

図65　SK3091実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

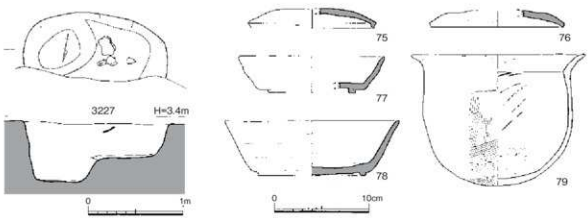


図 66　SK3227 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

の甕で体部下半から底部にかけてススが付着する。

SK3229（図 67）

Ⅱ区 D-5・6 グリッドで検出された。検出面の標高は約 3.4m、最深部の標高は約 2.7m を測る。掘方の大半を上面の遺構に削平されているため平面形は不明で底面から 0.4m の高さに平坦面が認められる。須恵器・土師器を中心にパンケース 2 箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から 8 世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図 67）80~82 は須恵器である。80 は坏蓋で天井上部に回転ケズリがみられ、81 は皿で復元口径は 20.2cm を測る。82 は壺で肩より上部で回転ナデ、下部でタタキ、内面には当具痕がみられる。83 は土師器の甕で体部にはススが付着する。

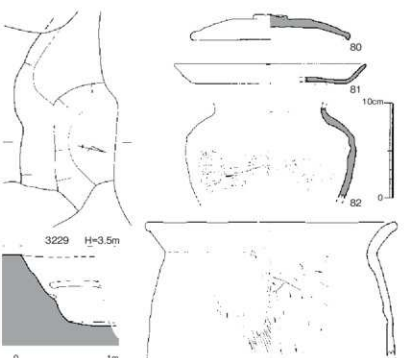


図 67　SK3229 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

SK4064（図 68）

Ⅱ区 D-8 グリッドで検出された。検出面の標高は約 3.2m、最深部の標高は約 2.55m である。隅丸方形の掘方の東側は上面の遺構に削平される。壁面の立ち上がりは緩やかで断面は逆台形を呈する。須恵器を中心にパンケース 3 箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から 8 世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図 68）84~94 は須恵器である。84 は坏蓋でつまみの周囲にはヘラ調整痕が認められる。85~90 は高台付坏である。89 の高台内には浅く細い線刻がありヘラ記号とみられる。90 の高台内には「×」状のヘラ記号が認められる。91 は高坏の坏部、92・93 は高坏の脚部である。94 は壺で内面に自然釉、内底にガラス質の釉が付着する。95~99 は土師器である。95 は大坏で高台内に墨書が認められる。96 は高台付坏で外面にわずかにススが付着する。97・98 は皿でともに底部は回転ヘラケズリ、97 は

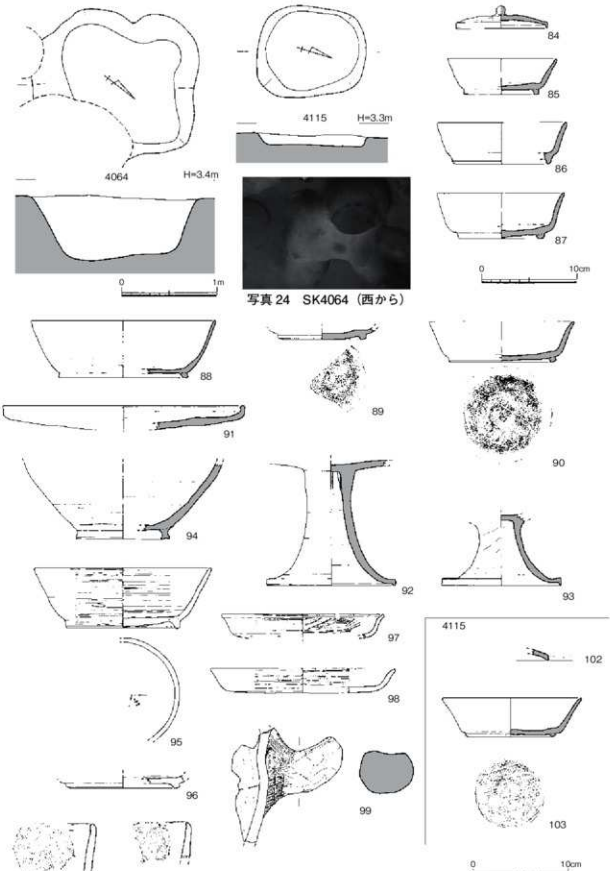


図68　SK4064・4115 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

内面に斜放射暗文、98はヨコナデ後回転ミガキがみられる。99は把手。100・101は製塩土器で内面に布目痕、外面にナデ調整がみられる。焼塩壷Ⅰ類にあたる。

SK4115（図68）

Ⅲ区C-7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.2m、最深部の標高は約3.05mで底面に凹凸はなく平坦である。出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図68） 102は須恵器の坏蓋片。103は須恵器の高台付坏で高台内にはヘラ切りとハケメ状の条痕が認められる。

SK3047・SK3048（図69）

Ⅰ区C-2グリッドで検出された。3047の掘方は上面の遺構に削平されるが楕円形の平面形と推定される。3048は3047と上面の遺構に大きく削平され、掘方の北西側がわずかに残存するのみである。検出面の標高は約3.5m、最深部の標高は3047が約2.7m、3048が約3.1mである。3047・3048ともに壁面の立ち上がりは緩やかで、3047の底面は凸レンズ状を呈する。3047は出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。3048は時期を示す明確な遺物はないものの、3047に切られることから8世紀後半～末以前の古代の土坑と推定される。

出土遺物（図69） 104~107は3047、108は3048で出土した。104~106は須恵器。104は完形の坏蓋で口径15cmを測る。全体的に歪みが大きい。105・106は高台付坏である。106は外面、内面底部、高台内に浅く細い線刻がみられる。また、内面底部には研磨の痕跡がみられることから硯に転用された可能性がある。107は土師器の坏で回転ヨコナデと回転ミガキがみられる。108は須恵器の坏蓋とみられ、上部に墨書が認められる。

SK3182（図70）

Ⅱ区D・E-7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.5m、最深部の標高は約2.8mである。底面は平坦で壁面の立ち上がりは緩やかである。掘方の東側を削平されるが楕円形の掘方と推定される。須恵器・土師器を中心にパンケース1箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図70） 109は須恵器の坏蓋で上部にわずかにヘラ記号の痕跡がみられる。110は土師器

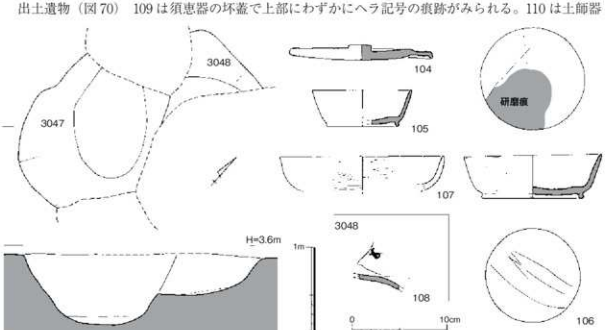


図69　SK3047・3048実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

の坏で底部は回転ヘラ切り、それ以外は回転ナデの調整である。111は土師器の高台付坏で内面にはミガキがみられる。112は須恵器の鉢とみられ、復元口径は30.2cmである。

SK3274（図70）

Ⅲ区C-6グリッドで検出された。検出面の標高は約3.55m、最深部の標高は約2.9mである。掘方は楕円形、底面は凸レンズ状を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかである。須恵器・土師器を中心にパンケース2箱分の遺物が出土し、出土遺物の年代から8世紀後半～末に推定される。

出土遺物（図70） 113は須恵器の坏蓋で口径16.6cmである。114・115は須恵器の高台付坏。114は高台の脚が外側に付き、復元底径は9.8cmを測る。

SK3259・SK3260・SK3342（図71）

3259･3260･3342はⅢ区で検出された獣骨の廃棄土坑である。3259はC-8グリッド､3260はC-8グリッド、3342はB-7・8グリッドに位置し、3基の土坑は東西方向に並ぶ。3259の掘方は調査区外へと続くが､検出された掘方の法量から直径0.9m以上の楕円形の掘方と推定される。検出面の標高は約3.8m、最深部の標高は約3.35mを測る。3260の掘方は0.8m×0.9mの楕円形を呈し、検出面の標高は3.5m、最深部の標高は約3.2m、3342の掘方は0.7m×0.8mの楕円形を呈し、検出面の標高は約3.6m、最深部の標高は約3.1mである。3259・3260・3342は出土遺物の年代から8世紀後半～末の時期に推定される。

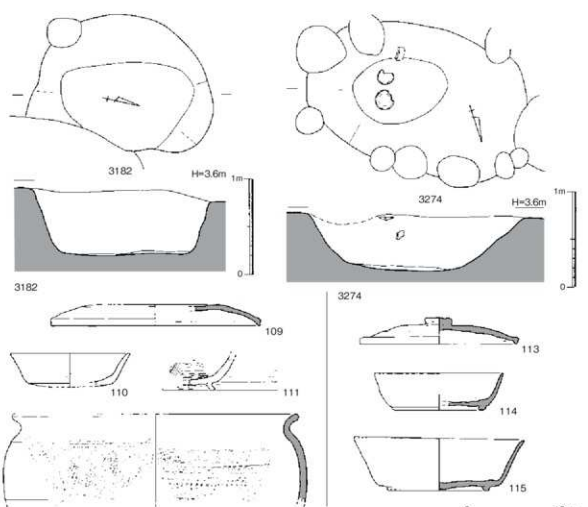


図70　SK3182・3274実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

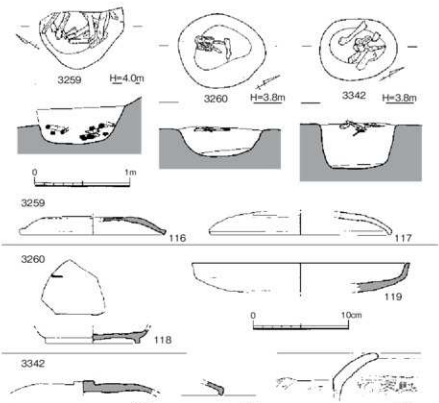


図 71　SK3259・3260・3342 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（図 71）　116・117 は 3259、118・119 は 3260、120~122 は 3342 で出土した。116 は須恵器の坏蓋で復元口径は 15.4cm である。117 は土師器の坏蓋で外面上部の回転ケズリ以外は回転ミガキがみられる。118・119 は須恵器である。118 は高台付坏で内面底部にやや不明瞭な墨書が認められる。119 は高坏の坏部で復元口径は 23.0cm を測る。120・121 は須恵器の坏蓋である。120 の胎土には微砂粒を多く含むが 121 の胎土には微砂粒の混入が少ない。122 は土師器の甕で口縁部外面から端部付近にかけてススが付着する。

（4）墓

SO2136（図 72）

Ⅰ区 D-3・4 グリッドで検出された。蓋石検出面の標高は約 3.5m で蓋石には花崗岩や玄武岩の割石・円礫を用いる。側石には玄武岩の自然石および割石を使用しているが、その中には赤色顔料が塗布されたものも認められる。墓内部に赤色顔料が塗布された面が向けられておらず、箱式石棺などに使用されていた石材を転用したものとみられる。小石室とみられ、石室の床面直上で検出された須恵器の年代から 7 世紀前半に推定される。削平されたとみられる石室の西側では土師器や黒色土器が重ねられた状態で検出されたことから 10 世紀後半 ~11 世紀初頭の段階に石室が削平され、その後祭祀が行われた可能性が考えられる。

出土遺物（図 72）　123 は北壁付近で出土した須恵器の坏蓋である。天井部はヘラ切り後にナデを行い、やや歪な形になっている。124 は須恵器の坏身である。石室の床石直上で出土した。底部にはロクロ右回転ケズリの後ヘラ切り離しの痕跡が認められ、「×」状のヘラ記号がある。123・124 ともに 7 世紀前半と推定される。125 は掘方で出土した須恵器の壺である。126・127・129~131 は石室の西側でまとまって出土した。126 は土師器の坏で口径約 12.9cm、器高 3.5~4.0cm を測る。器面の色調は黄灰褐色を呈する。底部はヘラ切り後に若干調整を行いやや丸底を呈し、板状圧痕が認められる。9 世紀前半 ~ 中頃か。127 は土師器の皿である。口径約 10.3cm、器高 1.7~2.0cm を測る。底部にはヘラ切りと板状圧痕がみられる。11 世紀初頭か。129~131 は黒色土器 A 類椀である。129 の内面上半部にヘラの当たりが残されるが、口縁部付近では丁寧なヘラミガキが施されている。一方外面にはロクロナデのみでヘラミガキは施されない。器面の色調は内面の底部 ~ 体部付近が暗灰褐色、口縁部付近が黒色化する。130 の外面はヨコナデの後一部ヘラミガキが施され、下部には連続指圧痕が認められる。

内面上半部にはヘラの当たりが連続して残され、底部には重ね焼きの痕跡がみられる。131の内面ではヨコ方向の丁寧なヘラミガキ、底部付近では多角形のヘラミガキが認められるが、129と同様に外面にはヘラミガキは施されない。129~131は黒色土器A類の九州系Ⅳ類とみられ、10世紀後半に推定される。

3．古代の遺物（図73・74）

上面の遺構や包含層で検出された古代の遺物のうち、特徴的な遺物を以下で取り上げる。

132は越州窯系青磁花文碗である。内面の文様は毛彫文の花文碗より古い様相と推定され、10世紀~11世紀か。133は越州窯系青磁双層碗である。胎土に細砂粒を少量含み、釉は淡オリーブ色を呈する。11世紀前半。134は越州窯系青磁碗である。畳付に目跡が6ヶ所みられる。胎土は灰茶色、釉は灰オリーブ色を呈する。大宰府編年のⅠ-1類で8世紀末~10世紀中頃。135は越州窯系青磁蓋である。釉は灰オリーブ色を呈し、外面上部に砂目跡が残る。11世紀前半。136は越州窯系青磁水注である。胎

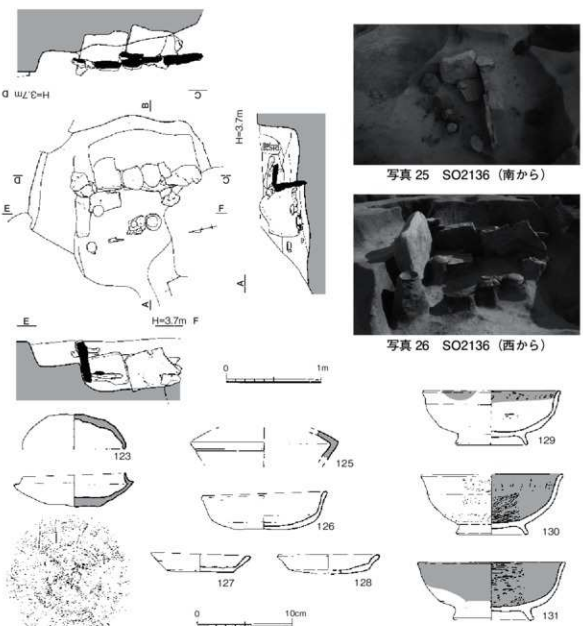


写真25　SO2136（南から）

写真26　SO2136（西から）

図72　SO2136実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

土に砂粒は含まず、釉は灰オリーブ色を呈する。10世紀後半~11世紀前半。137は長沙窯系水注である。胎土に砂粒は含まない。蔓状植物文を貼り付け、黄褐色釉に褐釉を流すように施釉している。9世紀代。138は長沙窯系水注とみられる。胎土に細砂粒をわずかに含み、釉は黄白色を呈する。139~145は緑釉陶器片である。140・141では内面に陽刻文がみられる。142・143は緑釉陶器の皿で内外面に不明瞭ではあるがミガキが認められる。145はⅢ区B-7グリッド1~2面包含層で出土した緑釉陶器の碗である。146~157は墨書須恵器、158~163は墨書土師器である。148は「太□」、149は「家□」、151は「番成」、153・154は「合」、162は「阿□」とある。156・159~161には「大」と書かれ、古代に推定される墨書土器の中では「大」と書かれたものが最も多い。164は都城系土師器坏、165は畿内系土師器坏である。166は土師器の鉢で内面には工具によるナデの後ナデ、暗文が施される。167は黒色土器A類の坏である。168は須恵器の円面硯で透かしがわずかに残存する。169は須恵器の高台付坏の転用硯で内面に研磨痕が認められる。170は移動式竈の焚口部とみられ、内面にはススが付着し、壁面は一部赤褐色を呈する。171は椎先瓦である。胎土に細砂粒を多く含み、色調は赤味を帯びた灰褐色を呈する。裏面には斜格文タタキの痕跡が重複してみられる。172~175は製塩土器の焼塩壺である。176は製塩土器で、内面にはユビナデとヘラナデの調整がみられる。177は丸鞆である。粘板岩製とみられ、最大長3.5cmを測る。紐通しとみられる孔が何カ所か穿たれた痕跡があるがいずれも貫通していない。

(4) 古代以前

1. 古墳時代の遺構

SK4062（図75）

Ⅱ区D-7・8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.15m、最深部の標高は約2.6mである。北西側は上面の遺構に削平され掘方全体の平面形は不明であるが、南北長2.7m以上、東西長2.3mを測り、縦長の楕円形を呈すると推定される。土師器がまとまって検出され、出土遺物の年代から古墳時代前期に推定される。

出土遺物（図75） 178・179は土師器の甕である。178は復元口径15cm、器高は20.7cmを測る。胴部下半には直径11cm大の黒斑が1ヶ所みられる。178の内面ではユビオサエとナデ、ケズリ、179の内面ではケズリの調整が確認できる。180は製塩土器で復元口径は約9cmを測る。器面はユビオサエ

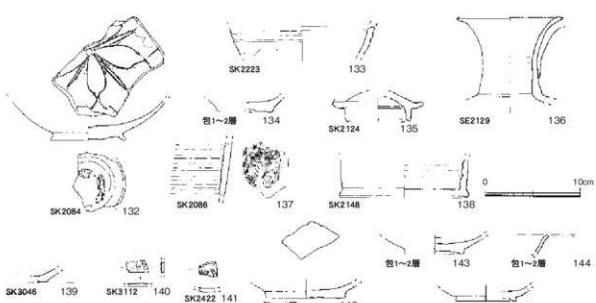


図73 古代出土遺物実測図1（1/4）

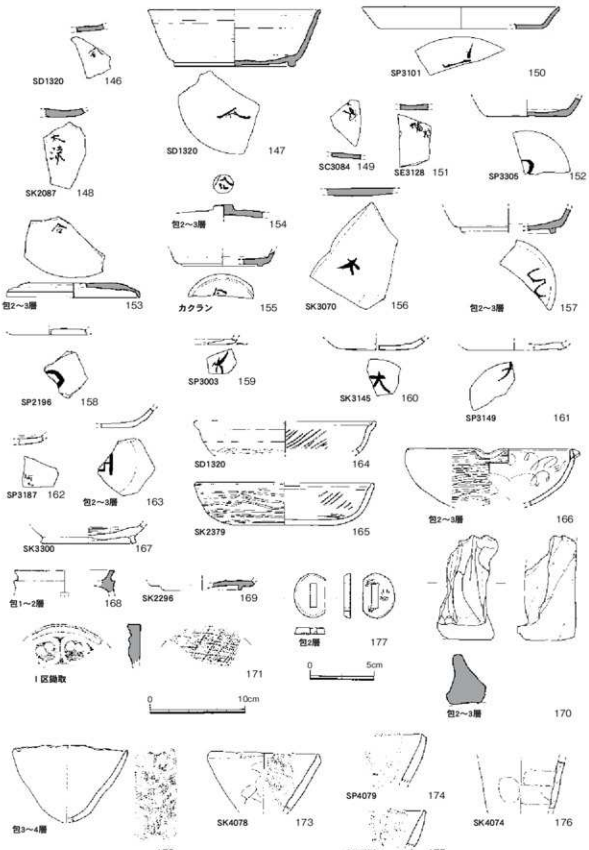


図74　古代出土遺物実測図2（1/4・1/2）

とナデで調整されている。181は完形のタコ壺である。口径は6.8~7.6cmで楕円形に歪む。上部には直径1.2cmの穿孔が1ヶ所穿たれ、外面の穿孔下には2本の線刻がみられる。

SK4077（図76）

Ⅱ区D-7・8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.3m、最深部の標高は約2.75mである。掘方の東側は上面の遺構に削平されるが、南北長1.2m×東西長1.3m以上の楕円形を呈すると推定される。出土遺物の年代から古墳時代後期に推定される。

出土遺物（図76）182は土師器の複合口縁壺の口縁部である。器面の色調はにぶい黄褐色を呈し、口縁端部に一部黒斑がみられる。

SK4114（図76）

Ⅲ区B-7グリッドで検出された。検出面の標高は約2.75m、最深部の標高は約2.35mを測る。掘方の南側は上面の遺構に削平される。出土遺物の年代から古墳時代後期に推定される。

出土遺物（図76）183は瓦質土器の甕とみられる。胎土に砂粒を含まず、焼成はやや軟質である。内面には無文当具痕がみられる。

SK4130（図76）

Ⅲ区B・C-7・8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.1m、最深部の標高は約2.8mを測り、底面は平坦である。円形と推定される掘方の大半は上面の遺構に削平される。出土遺物の年代から古墳時代後期に推定される。

出土遺物（図76）184は土師器の鉢で復元口径は約16cmを測る。内外面ともに器面はハケメによる調整がみられる。

SP4005（図77）

Ⅱ区E-8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.2m、最深部の標高は約2.4mである。掘方は直径約0.8mの円形を呈する。出土遺物から古墳時代後期に推定される。

出土遺物（図77）185は土師器甕の口縁である。器面の色調はにぶい橙色を呈する。186は移動式竈の据口の部分とみられる。外面はタテハケメ、内面はケズリに近いタテナデで、器面の調整は粗い。

SD4017（図77）

Ⅱ区E-7・8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.25m、最深部の標高は約2.85mを測る。

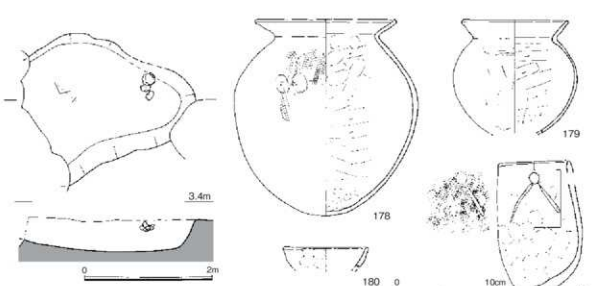


図75　SK4062実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/4）

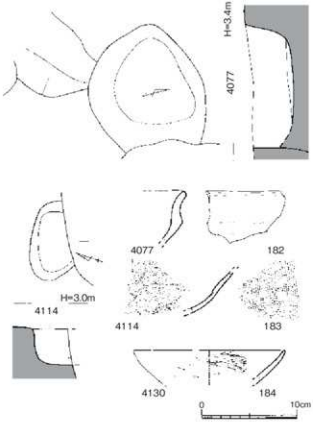


図 76　SK4077・4130・4114 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

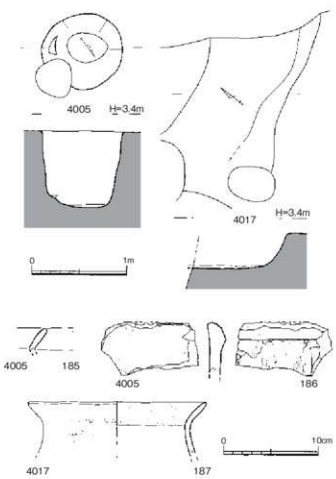
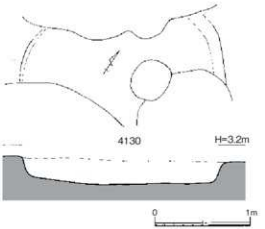


図 77　SP4005・SD4017 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）



壁面の立ち上がりは緩やかである。SD とするが、西側と北側を別遺構と攪乱に削平され、東側は調査区外に続くため、遺構の規模や形態は不明瞭である。出土遺物から古墳時代後期に推定される。

出土遺物（図 77）　187 は土師器の甕である。口縁部内面ではヨコハケのちヨコナデ、胴部内外面ではナナメハケメの痕跡がみられる。器面の色調はにぶい黄褐色を呈する。

2．古墳時代の遺物（図 78）

上面の遺構や包含層で検出された古墳時代の遺物のうち、特徴的な遺物を以下で取り上げる。

188 は軟質土器の甕である。胎土には 1㎜以下の白色粒を多く含む。189 は短頸壺で新羅土器か。190 は陶質土器の高坏坏部である。胎土には 1㎜以下の白色粒をわずかに含む。191 は陶質土器の壺である。192 は陶器の壺で外面には 5 条の沈線が巡り、下部には暗文のような痕跡がみられる。193 は楽浪系瓦質土器の鉢片とみられる。194・195 は瓦質土器の壺片とみられ、胎土に 1㎜以下の白色粒をわずかに含む。196 は瓦質土器の壺で馬韓系か。197 は土師器の壺で外面には櫛描文がみられる。東海系か。198 は土師器の小形丸底壺で口縁端部から内面にかけて赤色顔料が付着する。畿内系か。199 は庄内式土器の甕で復元口径は約 15.0cm を測る。200 と 201 はともに SD3039 で出土した土師器である。200 は甕の内面に工具痕がみられる。201 は高坏

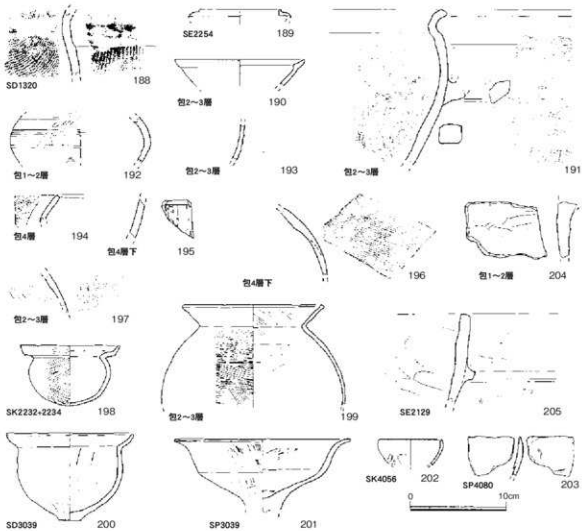


図 78　古墳時代出土遺物実測図 1（1/4）

で内外面に細かなハケメ調整が認められる。202・203 は製塩土器でユビナデによる調整がみられる。204 は形象埴輪片か。205 は円筒埴輪である。突帯より下位にはタテハケの調整が残る。

3．弥生時代の遺構

（1）住居跡

SC3230・4070（図 79）

Ⅱ区 E-6 グリッドで検出され、上層の遺物を 3230、下層の遺物を 4070 として取り上げた。検出面の標高は約 3.4m、最深部の標高は約 2.8m である。掘方の東側は調査区外へと続くため遺構全体の平面形は不明であるが、やや歪な円形を呈すると推定される。出土した遺物の年代から弥生時代後期に推定される。

出土遺物（図 79）　206 は袋状口縁壺の口縁部片である。外面には細かなハケメ調整、内面にはハケメとオサエによる調整がみられる。207 は壺の底部か。

（2）土坑

SK4085（図 80）

Ⅱ区 D-8 グリッドで検出された。検出面の標高は約 2.8m、最深部の標高は約 2.55m で、砂丘面に掘

り込まれた土坑である。遺構の北半は上面の遺構に削平されているが、残存形から楕円形の掘方と推定される。底部南端には深さ約0.1mの浅いピット状の窪みが認められる。出土遺物は弥生土器の甕片のみで、時期は弥生時代前期と推定される。

出土遺物（図80） 208は弥生土器の甕で口縁昏部には刻目が施される。外面にはユビオサエとヨコ・ナナメのハケメ、口縁端部ではヨコナデが認められる。板付Ⅱ式にあたる。

SK4144（図80）

Ⅱ区A-7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.0m、最深部の標高は約2.35mで、砂丘面に掘り込まれた土坑である。長軸約1.3m、短軸約1.05mで、掘方は楕円形を呈する。出土遺物は白磁と弥生土器であるが、白磁は小片1点のみで混ざりこみと判断した。他はすべて弥生時代前期の甕や壺の破片であることから、遺構の時期は弥生時代前期と推定される。

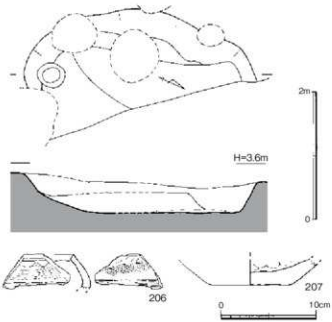


図79　SC3230・4070実測図（1/60）
および出土遺物実測図（1/4）

SK4026（図81）

Ⅱ区D-7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.2m、最深部の標高は約2.9mである。掘方の大半が上面の遺構に削平され全体の平面形は不明であるが、隅丸方形を呈すると推定される。東側の底面はわずかに凹む。出土遺物の年代から弥生時代後期～終末に推定される。

出土遺物（図81） 209は弥生土器の甕である。器面は摩滅により不明瞭であるが、ハケメによる調整痕がわずかにみられる。

SK4031（図81）

Ⅱ区D-7グリッドで検出された。検出面の標高は約3.1m、最深部の標高は約2.95mである。掘方の平面は東西長約1.1m、南北長1.5m以上の楕円形を呈し、底面は平坦である。出土遺物の年代から弥生時代後期～終末に推定される。

SK4055（図81）

Ⅱ区D-8グリッドで検出された。検出面の標高は約3.2m、最深部の標高は約2.95mである。楕円形と推定される掘方の大半が上面の遺構に削平される。出土遺物の年代から弥生時代終末に推定される。

SK4053・4060（図81）

Ⅱ区D-8グリッドで検出された。4053

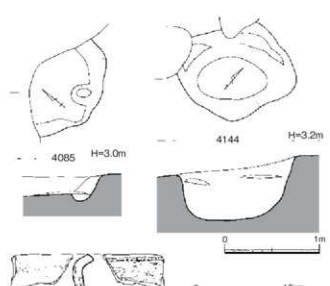


図80　SK4085・4144実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/4）

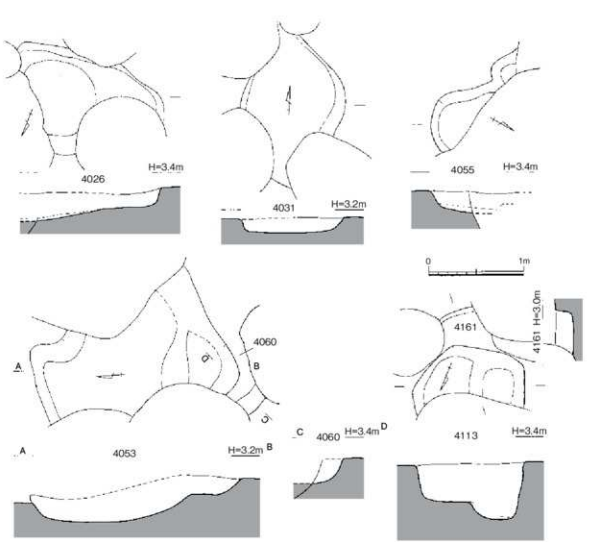


図 81　SK4026・4031・4055・4053・4060・4113 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

の検出面の標高約 3.0m、最深部の標高約 2.5m、4060 の検出面の標高約 3.2m、最深部の標高約 2.9m である。4060 は掘方の大半が 4053 をはじめ上面の遺構に削平される。4053 は掘方の南側に底面から約 0.3m の高さにステップ状の平坦面が認められる。4060 は出土遺物の年代から弥生時代終末、4053 は弥生土器終末～古墳時代前期に推定される。

出土遺物（図 81）　210・211 は 4060 で出土した弥生土器である。210 は甕の口縁部片、211 は壺の肩部で、綾杉文が沈線で施される。

SK4113・4161（図 81）

Ⅲ区 B・C-7 グリッドで検出された。4113 の検出面の標高は約 3.15m、最深部の標高は約 2.5m、4161 の検出面の標高は約 2.9m、最深部の標高は約 2.7m である。4113 の掘方東側には底面から約 0.15m の高さに平坦面がみられる。4113・4161 は出土遺物の年代から弥生時代終末に推定される。

出土遺物（図 81）212 は 4113 で出土した弥生土器の甕底部である。外面には工具によるケズリ状のナデ痕跡がみられる。

（3）甕棺

ST4143（図 82）

Ⅱ区 B-7 グリッドの SP4141 と SK4143 の間に残存する褐色砂で甕棺を検出した。検出面の標高は約 3.3m である。SP4141 では土器が出土していないため時期は不明であるが、SK4143 では弥生時代中期の土器とともに弥生時代終末の土器も認められる。ST4143 の甕棺の出土状態からみても、弥生時代終末の遺構による破壊によって本来の位置は留めていないと考えられる。

出土遺物（図 82） 213 は甕棺で、口径は約 36cmに復元される。口縁は逆Ｌ字状を呈し、内側にわずかに傾斜する。口縁下には三角突帯があり、口縁から突帯にかけてヨコナデがみられる。器面は橙

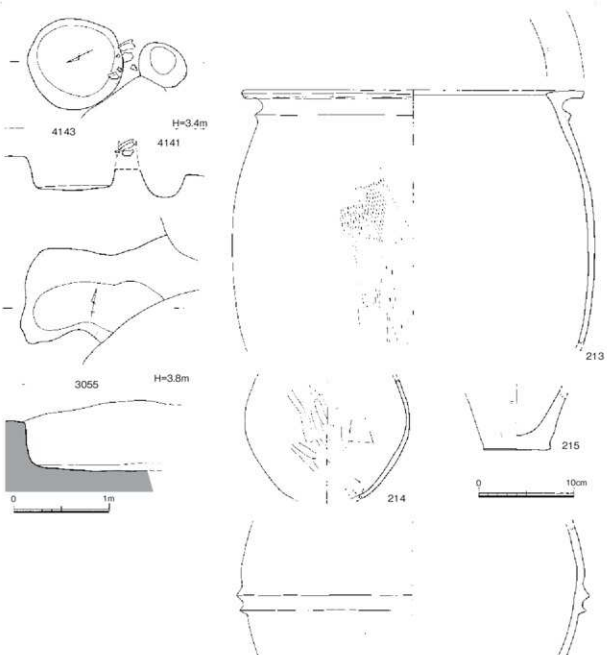


図 82　ST4143・ST3055 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

色を呈し、外面および口縁上面にはハケメがみられる。K Ⅲb式の甕棺で弥生時代中期後半に推定される。214・215はSK4143出土。214は土師器の壺胴部とみられる。器面はにぶい黄褐色を呈し、内面は横方向の強いナデ、外面は0.8cm幅の工具による強いナデツケのような痕跡がみられる。215は甕の底部である。平底を呈し、外面には雑なハケメが認められる。

ST3055（図82）

Ⅰ区C-4グリッドで検出された。検出面の標高は約3.6m、最深部の標高は約1.9mである。東側はSE2189に削平され、東西長1.4m以上、南北長約1.0mのやや歪な隅丸長方形を呈する。甕棺は埋土である褐色砂の中から検出され、本来の位置を留めていない。

出土遺物（図82）　216は甕棺の胴部である。丸味があり、2条の三角突帯を有する。器面は橙色を呈し、外面は突帯を除いてヘラ状の工具によるタテナデの痕跡がみられる。胎土はやや雑で径5㎜以下の粗・細砂粒を多く含む。K Ⅱb式～K Ⅲa式における丸味を帯びた甕棺の胴部とみられ、弥生時代中期前半～中期後半に推定される。

4．弥生時代・縄文時代の遺物（図83）

217~238は弥生土器である。217~220は壺の口縁で218・219は二重口縁を呈する。220は頸部及び胴部下位に刻み目を施す突帯を有する。221~232は甕の口縁部である。225を除き、口唇部に下側から刻み目を施し、内外面にハケ又はナデを施す。225はL字状の口縁を呈し、口唇部に刻み目を施し、胴部には刻み目を施す三角形の突帯を有する。233は甕の底部である。平底で端部が突出する。234は甕の口縁部である。屈曲し口唇部に刻み目を施す。235・236は甕である。235は緩いS字状の口縁を呈し、頸部付近に凹線を施す。237は壺の胴部片で外面にミガキ後線刻を施す。238は縄文時代晩期の粗製深鉢である。口唇部に刻み目を施し、口縁部外面ナデ、他は条痕を施す。

5．その他の石製品・玉類（図84・85）

239~242は二次加工のある剥片である。240・242は原石面を残す。241は下部に使用痕状の微細剥離がみられる。いずれも黒曜石製である。243は打製石鏃である。側縁部及び抉り部に剥離を施し、中央部に主要剥離面を残す。黒曜石製。244は尖頭器か。原石面及び主要剥離面を残す。黒曜石製。245は砥石か。両面及び側面に研磨痕跡がみられる。246・247は磨製石剣である。246は扁平で、247は刃部から茎部中位まで鎬が通り、刃部右側は研ぎ直しの痕跡がみられる。248は石剣未製品か。表面に研磨を施すが、刃部は研ぎ出されておらず、扁平であり、剥離により廃棄したものか。249は砥石である。上面を砥面とする。250は石錘である。中央及び両端に幅5㎜、深さ3㎜ほどの溝を施す。細粒砂岩製。251は不明石製品である。下端には径3㎜の孔が両側から穿孔されており、孔部分で折損している。上部には深さ5㎜ほどの孔があり、穿孔途中でやめたものか。前面に研磨を施す。変成岩製か。252~254は石斧である。252は裏面が研ぎ直しにより大きく研ぎ減りしている。刃部にはわずかに使用痕が残る。上面の割れ面には一部面取りの研磨が残っており、再利用しようとしたものと考えられる。粘板岩製か。253は側面の一部が窪んでおり、紐の痕跡の可能性もある。254は太型蛤刃石斧で、表面には敲打痕がみられる。255は磨石である。表面は中央部がやや窪む。256は不明石製品である。左側に向かって段をもって細くなる。細粒砂岩製。257は不明石製品である。上部に6.5㎜の孔を穿つ。錘状の形態をしているが、孔部分に紐ずれの痕跡等は見られない。滑石製。

258・259は碧玉製管玉である。259は端部が平らでなく、ややいびつである。260は碧玉製管玉の未製品である。穿孔時に欠損し廃棄したものか。断面は現状で八角形を呈すると思われるが、粗い研磨段階であり、本来は円形になるものか。261は土製丸玉である。

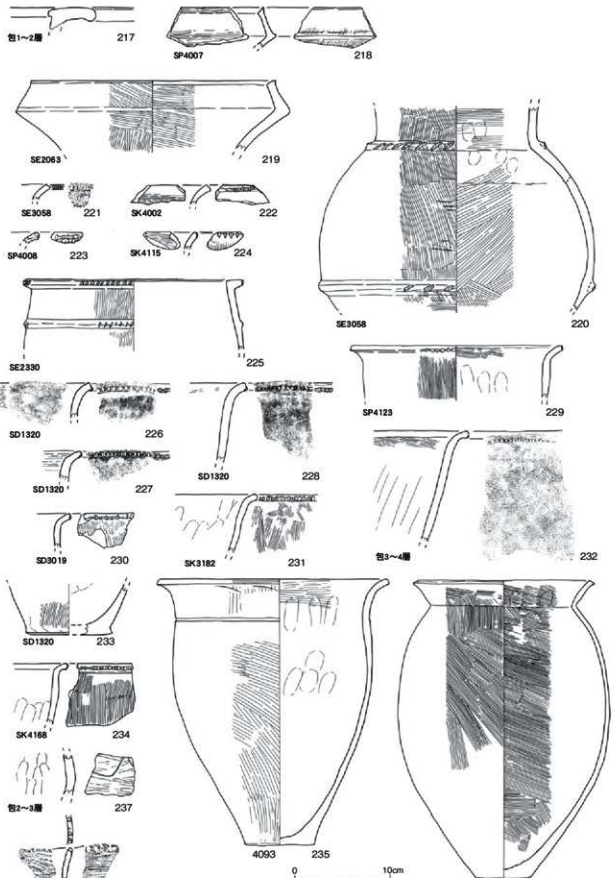


図 83　弥生時代・縄文時代出土遺物実測図（1/4）

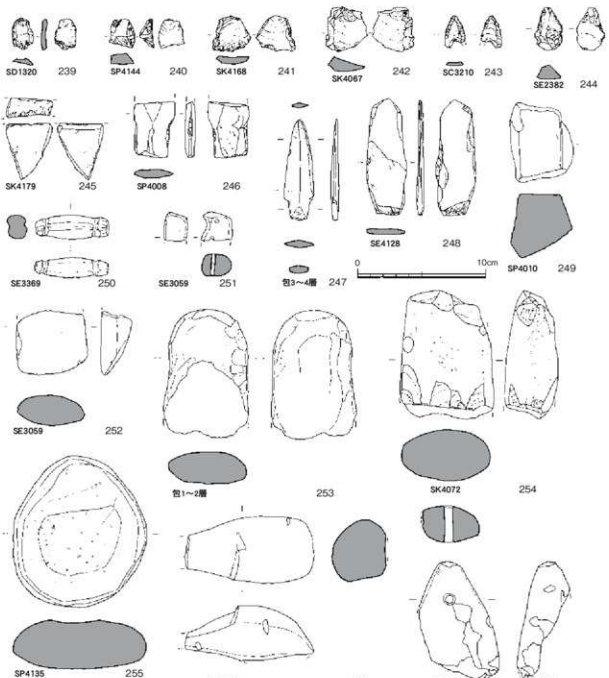


図 84　古代以前出土石製品実測図（1/3）

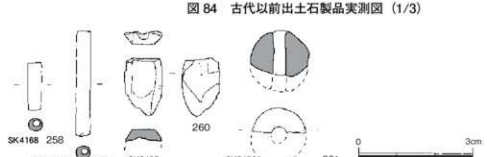


図 85　古代以前出土玉製品実測図（1/1）

（5）特殊遺物

薩摩塔（第 86 図）

Ⅰ区 E-2 グリッド 1 面 SK1150 の床面近くで出土した。

壺型の塔身下位に彫り込まれた尊像部分の破片で、裳裾から頭部までの現存高 8.2cm、現存幅 10.3cmをはかる。尊像の大きさから、総高さはさほど大きくなく、50cm内外であろうか。塔身は屈曲部の円弧の残存状況から平面が正円とはならず、尊像の左右を長軸とする略楕円形に近い。屈曲部は中位よりかなり下にあり、稜をなしている。塔身上半部は反り気味で大きくくびれるようである。屈曲部外面には左上から右下に向かってノミによる簾状加工痕を残す。

合龕は尊像の耳横で屈曲して縁取りされるが、龕高、龕幅は不明で龕深は最大で 2.1cmをはかる。龕の内側壁は丁寧に整えられている。しかし廃仏毀釈によるものか尊顔は故意に割り取られるが、垂れ気味の右眉上部が顔の輪郭を表しており、髪際の表現ともとれる。

尊像はゆったりとした簡素な法衣をまとい跌座する姿で、座した膝頭部分は角度を変えて成形している。裳裾は左右対称に開く。両手は合掌せず膝横に降ろすか、衣下に隠しているとも思われる。各部の彫り込みは片彫り風に仕上げ、石材は砂岩系で白色粒子や扁平な褐色系鉱物を含んでおり、やや軽い量感である。色調は暗灰色を呈し、塗彩痕跡はみられない。現重量 463.2 g をはかる。

背面側、龕下部はほぼ直角に切断され、その後角部をわずかに研磨するなど、意図的に損壊を図ったものと思われる。なお、共伴遺物は鉄釘 1 点のみであった。

薩摩塔は西北部九州を中心に現在まで約 150 例が知られるが[1]、本作品に類似したものとして、発掘資料ではないが堺市西湊町に所在した「旧湊西墓地」という近世の共同墓地で発見され、近年紹介された薩摩塔がある。九州以外の地で確認されたのはこれが初めてであるが、出土品ではないため所属時期や来歴もはっきりしないという[2]。しかし塔身や合龕の形状、尊像の法衣の表現などが酷似している。

本土坑出土品はおそらく中国人商人たちが中世博多に招来した大陸系石造物の残片であるが、首羅山の薩摩塔のように、破損したのちも別の場所で保持されている例があることから[3]、信仰の対象としての薩摩塔が、何らかの理由で近世土坑に混入したものと考えておきたい。なお、本薩摩塔の時期はその特徴から鎌倉後半期ごろに比定できる[4]。

<注>
(1) 久山町教育委員会江上智恵氏からご教示いただいた。
(2) 堺市文化財室嶋谷和彦氏からご教示いただいた。
(3) 久山町教育委員会江上智恵氏からご教示いただいた。
(4) 九州歴史資料館井形進氏からご教示いただいた。

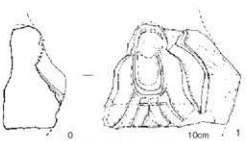


図 86　薩摩塔実測図（1/3）

おはじき状土製品

今回の調査で2点が出土した。

白色系の2はⅢ区の二つの井戸SE2525とSE2530の重複部分からみつかった。直径1.75~1.85cm、厚さ3.5mm、重さ2.1gの円形で周囲は研磨に近いナデにより丸みを有する。両面も研磨され円文の中に組紐状文様と短斜線文を型押しする。円文は径1.4~1.5cmで両面とも中心からややずれている。また図に示すように中心の組紐状文様と短斜線文も表裏一体とはならず施文位置が異なっている。焼成は良好で色調はうすい黄色を帯びた白色を呈する。

SE2525は13世紀後半~14世紀前半、SE2530は19世紀の井戸であり、どちらの遺物かは判別できない。

黒色系の3はⅡ区の二つの柱穴SP2353、SP2354の重複部分から出土した。いずれも12世紀後半の遺構と考えられる。直径1.8cm、厚さ3.5mm、重さ2.2gの円形で周囲はやはり研磨に近いナデが施され丸みを有する。両面も研磨され、白色系のものと同一の文様を型押しする。

円文は径1.4~1.5cmでやはり中心からわずかにずれている。この資料も中心の文様は表裏で施文位置が異なっている。焼成は瓦質だが良好で色調は黒灰色を呈し均一である。

二つの土製品は明確に白黒と分けて焼かれていながらほぼ同一サイズ、同一成形で、全く同じスタンプ文様を有するなど、量産を意識しつつもきわめて規格性が高くかつ丁寧な仕上げであり、土製品ではあるが日本のおはじきに類似する。しかし中央の文様は中世日本ではほとんど例がなく、いわゆるケルト文様にみる四分の一結びに酷似しており、招来品の可能性が高い。

博多でもかつての調査で出土したことがあり、今回の出土とあわせると中世に帰属し、囲碁のように対戦形式で陣取りを競うための遊具の一つと考えられよう。

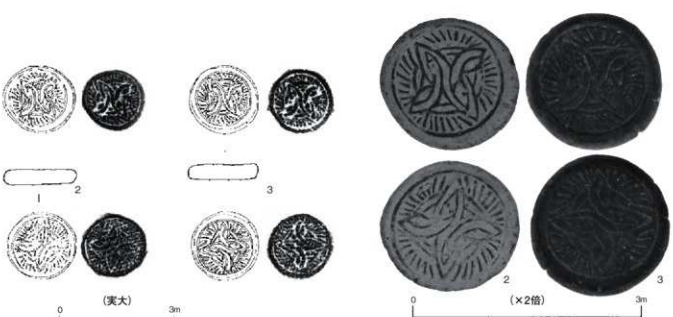


図87　おはじき状土製品実測図

窯関連出土文字資料（図版 8）

出土した文字資料には墨書、線刻による刻書、刻印（スタンプ）の三種がみられた。

墨書は最も少ないが、窯との関連を示すものには土師器壺底面の「治」、土師器小皿底面の「祇□町」、青磁染付底面の「祇□下」、土師質サヤ鉢体部外面に横書きされた「ぎ……」、陶器碗底面の◇形の線刻と「吉」があり、窯の操業場所や人名を記したものと考えられる。

刻書は約 50 点が確認でき刻印約 40 点よりも多く、窯道具である脚台付円盤底面に書かれる頻度が高い。「長右ェ門」を筆頭に「……子吉三郎」・「焼長」・傘形の線刻に「中」などがみられる。また、人形の土型外面にも走り書き風の曲線や「中重」「弐七？」「六」「あ」「免一乙」などの文字が記されている。土師質盤の内外面にそれぞれ「治右衛門」・二重傘形の線刻に「丁」と書かれたもの、方角土製品の隣り合う二面に「祇園町下 寿吉」「祇園町下」とあるもの、瓦質壺の肩部に「弐」と大きく書くもの、土師質煙突状製品や切り株型製品に「上」「前」など位置をしめす一文字を刻むものもみられる。

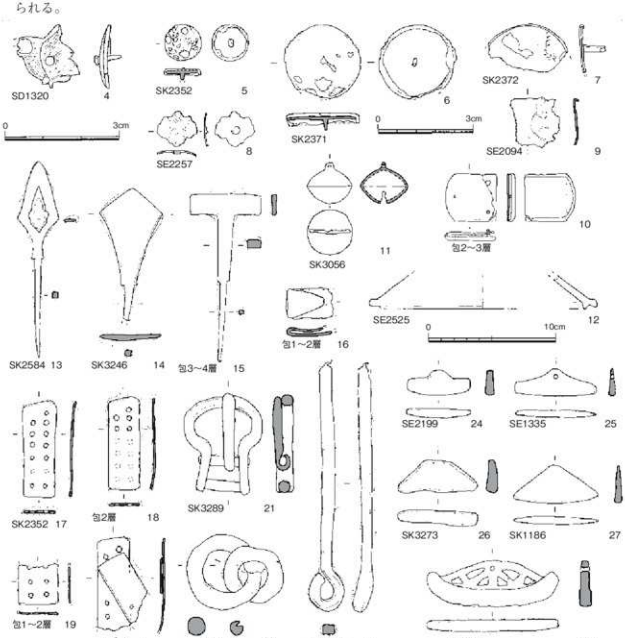


図 88　青銅製品および鉄製品実測図（1/1・1/2・1/3）

刻印は土師質、瓦質の箱形七輪の上面角に押された「長右ェ門」が最も多く、「博多 正木善次」「利三郎」もある。瓦質盤脚部には「博多宗六」、土師質鉢の脚部に「治右ェ門」、土師器皿底面に「博多九 楠崎製造」、土師質円形土製品上面に壺形の刻印に「藤七」、瓦質盤内面に「正 仁七」、丸瓦上面に「喜平」「新右ェ門」、軒桟瓦脇区に「喜兵衛」など、人名や窯元を記したものが多く、中ノ子家や正木家の矜持と製作意欲が感じられる。

青銅製品および鉄製品（図88）

4~12は青銅製品。4~7は飾り鋲である。4は蝶を象っており、中央部に別づくりの鋲で留める。5は木の葉を象り、一部に金のメッキを施す。5・6は鋲の上に別作りの銅板をかぶせる。7は鋲で不明瞭ながらも木の葉状の文様が残る。8は飾り金具である。草花の文様を施す。9は金具で、表面に孔及び文様が残る。10は青銅製蛇尾で3か所に鋲が残る。裏面の一部には黒漆が残り、側面には研磨痕が残る。11は鈴である。中空で内部には玉は残存していない。割れもないことから元々入っていなかったと考えられる。12は盞である。復元径16cmほどで、かえりを持つ。13~15は鉄鏃である。13は中央部に飾り窓が付き、箆被は明瞭に段を持つ。15は飛燕式状の形態を呈するもので、先端にも刃部が形成されていない。16は折り曲げ鉄器である。刃部はなく器種は不明である。17~20は小札並札である。17・18は13個の孔があったと想定される。21は鉸具である。馬具かどうかは不明であるが、馬具であるとすれば大きさから鐙靼のものであろう。22は環である。割れの状況からすると、端部を重ねて鍛接した部分になるか。23は引手か。端部は曲げて、環状を呈する。24~28は火打金である。25は上部に孔を穿つ。28は飾り窓を施す。

銅銭

本調査では、包含層や各遺構内から計150点の銅銭が出土している。なお、一覧表には整理番号を付与したが、その後青銅製品であった1点、欠番の1点も欄を設けた。

銭種の中には近代以降の日本銭（一銭、五十銭など）が11点、近世の寛永通寶が29点（古寛永12、文銭3、新寛永14、鉄銭0）、キセルの火皿部をつぶした雁首銭3点、解読を試みたが摩耗や欠損、錆化、銹着により銭種が不明のもの41点があり、特筆すべき皇朝銭2点も含まれていた。

ここでは、まず上記のもの以外の銭種のわかる、いわゆる渡来銭64点について、その出土傾向や特徴をまとめておきたい。

中国の出土渡来銭には古い順から唐の開元通寶6点、北宋の太平通寶1点、至道元寶1点、景徳元寶1点、祥符通寶3点、祥符元寶2点、天禧通寶1点、景祐元寶1点、皇宋通寶4点、嘉祐通寶3点、熙寧元寶5点、元豊通寶9点、元祐通寶8点、紹聖元寶4点、聖宋元寶2点、政和通寶7点、南宋の嘉定通寶1点、明の洪武通寶2点、清の康熙通寶1点がある。また朝鮮の朝鮮通寶2点も出土している。元豊通寶、元祐通寶、政和通寶、開元通寶の出土量が目立つ点は中世博多の過去の調査事例と同様な傾向を示しており、また備蓄銭における出土頻度にも整合している。渡来銭64点のうち北宋銭が52点（81.3%）を占める点も類似している。

遺構との関連でまとまって出土した事例は近代以降のSK1241しかなく、埋葬人骨にともなう副葬例なども皆無であったが、SK2422、SK1320では3~4点の出土がみられた。また包含層1~2面からの出土も多く、皇朝十二銭である富壽神寶、承和昌寶も包含層から出土している事実は、本遺跡から古代の遺構や遺物も多数見つかっていることから、中世の渡来銭とともに流通したのではなく、古代に官衙など公的機関において何らかの使用形態が存在していたのだろう。

近世の寛永通寶については、古寛永12点、新寛永14点と量が拮抗しており、本遺跡を象徴する人形窯の創業期が江戸中期末~後期を中心とすることからも、違和感はない。

また、雁首銭については、キセルの火皿部分を叩き潰して平らにし、銭の格好に似せたもので、櫻木晋一氏によると単独使用ではなく、銭一緡の中に混ぜて使用していたと考えられており、近年近世城下町での出土例が増えている。特に小倉城下町遺跡でも京町遺跡や室町遺跡などでしばしば出土している。福岡城下町の調査でもみつかっており、近世博多における銭遣いの一側面を物語るものとして注目しておきたい。

以下、主要な銅銭をX線写真で示しておく。

<参考文献>
『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会　1996
櫻木晋一『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社　2015
北九州市教育文化事業団『京町遺跡 3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 147 集　1994
福岡市教育委員会『福岡城下町遺跡 1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1322 集　2017

※番号は表と一致、（ ）は初鋳年を示す

図 89　出土銅銭 X 線写真（1/1）

表2　出土銅銭一覧表

X線No.		区・グリッド	遺構・層位	銭種	書体	初鋳年	備考
33		Ⅰ	2085	不明	—	—	渡来銭
34		Ⅰ	2087 下層・最下層	嘉祐通寳	篆書体	1056	
35		Ⅰ	2129 井戸	皇宋通寳	篆書体	1038	
36		Ⅰ	2135	□符通寳	真書体	—	
37		Ⅰ	2143	不明	—	—	渡来銭
38		Ⅰ	2158	聖宋元寳	篆書体	1101	
39		Ⅰ	2171	政和通寳	篆書体	1111	
40		Ⅰ	2202	永□通寳	真書体	—	
41		Ⅰ	2221	開元通寳	真書体	621	
42		Ⅱ	2330 掘方	不明	—	—	渡来銭
43		Ⅱ	2331 掘方	元豊通寳	真書体	1078	
44		Ⅱ	2332 掘方	政和通寳	篆書体	1111	
45		Ⅱ	2371	祥符□□	真書体	1009	
46	a	Ⅱ	2422	元祐通寳	篆書体	1086	
	b	Ⅱ	2422	□宋元寳	真書体	—	
47		Ⅱ	2422	政和通寳	真書体	1111	
48		Ⅱ	2442	元祐通寳	篆書体	1086	
49		Ⅲ	2457 西	熙寧元寳	真書体	1068	
50		Ⅲ	2532	□□元寳	真書体	—	
51		Ⅲ	2533	□豊□□	—	—	
52		Ⅲ	2570 北東	祥符元寳	真書体	1009	磨輪銭
53		Ⅰ	2147	朝□□寳	真書体	1423	朝鮮通寳
54		Ⅱ	2331 掘方	開□通□	真書体	621	開元通寳
55		Ⅱ	2422	祥符元寳	真書体	1009	
56		Ⅲ	2570床番号下	皇宋通寳	篆書体	1038	
57		Ⅲ	3339 掘方	元豊通寳	篆書体	1078	
58		Ⅲ	3263	元豊通寳	篆書体	1078	折二銭
59		Ⅲ	3112	政和通寳	篆書体	1111	
60		Ⅰ	3058	不明	—	—	渡来銭
61		Ⅰ	3049	寛永銭	—	江戸期	
62		Ⅲ	2570	不明	—	—	渡来銭
63		Ⅲ	2570床番号下	元祐通寳	真書体	1086	
64		Ⅰ	1001	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
65		Ⅰ	1009	洪□通寳	真書体	1368	洪武通寳
66	a	Ⅰ	1009 上層	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
	b	Ⅰ	1009 上層	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
67		Ⅲ	1014	不明	—	—	渡来銭
68		Ⅲ	1014	半銭	—	1876	
69		Ⅰ	1146	元豊通寳	行書体	1078	
70		Ⅰ	1162	×	×	—	青銅製品
71		Ⅰ	1162	政和通寳	篆書体	1111	
72		Ⅰ	1181	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
73		Ⅰ	1182	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
74		Ⅱ	1184	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
75	a	Ⅰ	1241	一銭	—	1916	
	b	Ⅰ	1241	一銭	—	—	
	c	Ⅰ	1241	一銭	—	1916	
	d	Ⅰ	1241	一銭	—	1916	
	e	Ⅰ	1241	一銭	—	1916	
	f	Ⅰ	1241	五十銭	—	1931	
	g	Ⅰ	1241	一銭	—	1916	
	h	Ⅰ	1241	一銭	—	1916	
	i	Ⅰ	1241	不明	—	—	渡来銭
	j	Ⅰ	1241	不明	—	—	渡来銭
76		Ⅱ	1319R37	不明	—	—	渡来銭
77		Ⅱ D-8	1320	元豊通寳	真書体	1078	磨輪銭
78	a	Ⅱ	1320	至道元寳	真書体	995	
	b	Ⅱ	1320	□□元寳	真書体	—	
79		Ⅰ	1320 最下層	□□□寳	真書体	—	
80		Ⅲ	1326 南半部	嘉祐通寳	真書体	1056	
81		Ⅲ	1328	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
82		Ⅲ	1328 最下層	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
83	a	Ⅲ	1328	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
	b	Ⅲ	1328	□□□寳	真書体	—	
84		Ⅲ	1330	寛□□寳	真書体	1636	古寛永
85	a	Ⅲ	1331	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
	b	Ⅲ	1331	不明	—	—	
86		Ⅲ	1331	寛永通寳	真書体	1668	文銭
87		Ⅲ	1331	康煕通寳	真書体	1662	背文字あり
88		Ⅲ	1331	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
89		Ⅲ	1334	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
90	a	Ⅲ	1368	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
	b	Ⅲ	1368	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
91	a	Ⅲ	1398	祥符通寳	真書体	1009	
	b	Ⅲ	1398	天禧通寳	真書体	1017	
92		Ⅰ	2006 3層目	不明	—	—	渡来銭
93		Ⅰ	2006 3層目	不明	—	—	磨輪銭
94		Ⅰ	2009	紹聖元寳	篆書体	1094	
95		Ⅰ	2026	不明	—	—	渡来銭
96		Ⅰ	2051	紹聖元寳	篆書体	1094	
97		Ⅰ	2059 上層　褐色土	開元通寳	真書体	621	
98		Ⅰ	2063 掘方	聖宋元寳	真書体	1101	
99		Ⅰ C-2	2079 井戸	不明	—	—	渡来銭
100		Ⅰ	001 下層	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
101		Ⅰ	1016	祥符通寳	真書体	1009	
102	a	Ⅰ	1024	寛永通寳	真書体	1697	古寛永
	b	Ⅰ	1024	元豊通寳	篆書体	1078	
103	a	Ⅰ	1043	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
	b	Ⅰ	1043	不明	—	—	2枚銹着
104	a	Ⅰ	1083	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
	b	Ⅰ	1083	不明	—	—	2枚銹着
105		Ⅱ	1188	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
106		Ⅱ	1220	□□元寳	真書体	—	
107		Ⅲ	1372	政和通寳	篆書体	1111	
108		Ⅱ	1245	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
109		Ⅱ	1253	不明	—	—	
110		Ⅰ	1272B	寛永通寳	真書体	1697	新寛永「元」
111		Ⅲ	1367 掘方	寛永銭	—	江戸期	
112		Ⅰ A-4	1～2面包含層	開元通寳	真書体	621	
113		Ⅰ A-4	1～2面包含層	富壽神寳	真書体	818	皇朝銭
114		Ⅲ A-6	1～2面包含層	元祐通寳？	真書体	1086?	
115		Ⅲ A-7	2～3面包含層	不明	—	—	磨輪銭？
116		Ⅲ A-8	1～2面包含層	不明	—	—	磨輪銭
117		Ⅰ B-3	1面目包含層	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
118		Ⅰ B-4	1～2面包含層	元祐通寳	篆書体	1086	
119		Ⅰ B-4	1～2面包含層	不明	—	—	渡来銭
120		Ⅰ B-4	1～2面包含層	政和通寳	篆書体	1111	
121		Ⅲ B-6	1～2面包含層	嘉祐通寳	真書体	1056	
122		Ⅰ B-6	1～2面包含層	□□□寳	真書体	—	
123		Ⅲ B-7	1～2面包含層 黄褐色粘質土直上	嘉定通寳	真書体	1208	
124		Ⅲ B-7	2～3面包含層 礎石下	承和昌寳	真書体	835	皇朝銭
125		Ⅲ B-7	1～2面包含層	□□元□	真書体	—	
126	a	Ⅱ E-6	1～2面包含層	元祐通寳	篆書体	1086	
	b	Ⅱ E-6	1～2面包含層	不明	—	—	
127		Ⅰ E-6	1～2面包含層	不明	—	—	
128		Ⅱ D-8	1～2面包含層	□□通寳	真書体	—	
129	a	Ⅱ D-8	1～2面包含層	開元通寳	真書体	621	
	b	Ⅱ D-8	1～2面包含層	開元通寳	真書体	621	
130		Ⅱ D-8	1～2面包含層	不明	—	—	
131		Ⅱ D-8	1～2面包含層	皇宋通寳	篆書体	1038	
132	a	Ⅱ E-6	1～2面包含層	元豊通寳	行書体	1078	
	b	Ⅱ E-6	1～2面包含層	不明	—	—	
133		Ⅱ E-7	1～2面包含層	元豊通寳	行書体	1078	
134	a	Ⅱ E-7	1～2面包含層	元祐通寳	篆書体	1086	
	b	Ⅱ E-7	1～2面包含層	□元通寳	真書体		
	c	Ⅱ E-7	1～2面包含層	不明	—	—	
135		Ⅱ E-7	1～2面包含層	元祐通寳	篆書体	1086	
136		不明	—	朝鮮通寳	真書体	1423	
137		Ⅱ E-8	1～2面包含層	祥符通寳	真書体	1009	磨輪銭
138		Ⅱ E-8	3～4面間包含層	不明	—	—	模鋳銭
139		Ⅱ D-7	1～2面包含層	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
140		Ⅱ D-7	1～2面包含層	寛永通寳	真書体	1668	文銭
141		Ⅱ D-7	1～2面包含層	寛永通寳	真書体	1636	古寛永
142		Ⅱ D-7	1～2面包含層	寛永通寳	真書体	1668	文銭
143		Ⅱ D-6	1～2面包含層	紹聖元寳	行書体	1094	折二銭
144		Ⅱ D-7	1～2面包含層	景徳元寳	真書体	1004	
145		Ⅱ D-7	1～2面包含層	□武通□	真書体	1368	洪武通寳 模鋳銭
146		Ⅱ D-5	1～2面包含層	熙寧元寳	真書体	1068	
147		Ⅲ D-4	1～2面包含層	太平通寳	真書体	976	
148		Ⅲ C-7	1～2面包含層	熙寧元寳	真書体	1068	
149		Ⅲ C-7	1～2面包含層	元豊通寳	行書体	1078	
150		Ⅲ C-6	1～2面包含層	景祐元寳	篆書体	1034	
151		Ⅰ C-2	1～2面包含層	紹聖元寳	行書体	1094	
152		Ⅰ C-2	1～2面包含層	熙寧元寳	真書体	1068	
153		Ⅰ 北側	検出時	一銭	—	—	
154		Ⅰ	—	熙寧元寳	真書体	1068	
155		Ⅰ	カクラン10	一銭	—	—	
156		Ⅲ	排土中	□元□寳	真書体		
157		Ⅲ 南側	試掘トレンチ内	寛永通寳	真書体	1697	新寛永
158		欠番					
159		不明	—	皇宋通寳	真書体	1038	
160		Ⅱ	2330 埋土	寛永銭	—	江戸	

Ⅳ．まとめ

〈近世・近代〉

本調査地は幕末から昭和初期にかけて博多人形の本流を作った「中ノ子」の地所であったことが知られており、素焼き人形や七輪、火鉢といった素焼き製品のほか、人形の型や窯道具など「中ノ子」家に関連する多くの遺物が出土した。窯跡は計7基検出され、素焼き製品や素焼き人形を焼いていたとみられる近世の窯跡が検出されたのは市内で初めてのことであった。窯道具や雑器を廃棄した土坑は調査地全体に広く分布するが、窯跡は調査地の西側に集中しており、当時の窯業の範囲をうかがうことができる。

窯4の復元模式図を図90に示す。窯の土台の平面形はイチジク形を呈し、2本の畔と3方向のロストルが認められる。検出された窯の土台の構造は畔とロストルを有する点ではいずれも同じであるが、畔の長さやロストルの傾斜角度、燃焼部と焼成部の比率など、一つとして同じ窯はなく、試行錯誤が行われていたことが想定される。

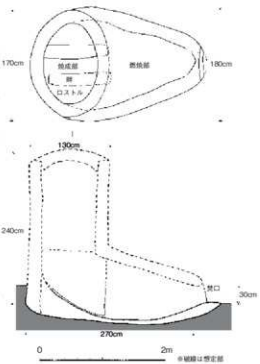


図90　窯4復元様式図（1/60）

窯跡の時期を決定するために、窯同士の切り合い関係やそれと切りあう遺構から出土した遺物、特に江戸後期の時期決定に有力な肥前染付磁器の広東碗と端反碗に注目して整理しておきたい。

まず、窯1、4、7は切り合い関係と、窯形態、主軸方位の差から窯7→窯4→窯1の順に新しくなると考えられる。窯1と窯4は非常に近接しており、検出時の窯1の焼土が窯4の上に一部認められることから（写真2）、窯4→窯1の順に築造されたと考えられる。次に窯4に切られている土坑SK1135は広東碗が出土しており、18世紀末～19世紀前半におけるため、窯4の上限は19世紀前半代とすることができる。この窯の周囲にはSK1081、1082、1016、1329など広東碗が出土する土坑が近接しており、1329は端反碗も共伴している。よってひとつの主たる時期が上記年代にあることがわかるが、同時にこれらの土坑からは近代明治期以降に見つかる型紙刷りの染付や釉下彩磁器が見られないことから、その下限も明治期までは下らず幕末期までにおさまるものと思われる。

また、窯5は前記したSK1081、1016を切っているため、SK1135を切った窯4と近接する時期と考えると、両窯が一定距離に位置すること、窯形態が同様でかつ窯4がロストルを持ち、窯5がロストルを持たないことから、窯の使い分けが行われたともいえるかもしれない。なお、窯5を切る攪乱土坑Ⅰからは合成コバルトを使用した染付やタイル片が出土しており、明治期以降に破壊されていることがわかる。

次に窯8上面からは図21-32に示す端反碗片が出土しているし、それを切るSK1330からも端反碗や瀬戸・美濃系の薄杯がみつかっており、この土坑も幕末期ごろの考えられることから、窯8についても明治期まで下らないと考えておきたい。この窯はロストルを持ち、窯4と同程度の規模に復元できることや、主軸方位がそろっていることから同時併存の可能性もあるが、その距離が22m以上も離れていることから、補完しあう窯ではなさそうである。

窯1、窯2周辺には端反碗を出土する遺構が集中している。灰原1、SK1144、SD1143、SK1145などがあるが、窯2は灰原1を切るが、SK1144には切られ、窯1はSK1145を切っている。SK1145からは型紙刷りの染付碗が出土しているため、窯1は明治期以降操業を開始した可能性が高いし、窯1と窯2は主軸方位が一致するが、2mの距離間しかなくやはり同時併存しないのではないだろうか。そうすると、灰原1からは明治期にくだる遺物がみられないため、窯2のほうが、窯1より古くおけると考えられる。

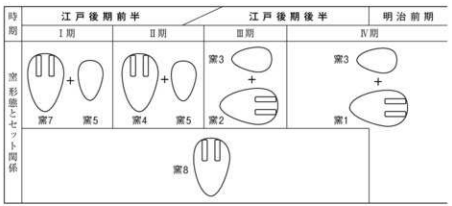


図91　窯跡変遷想定図

窯3は他の遺構とも切り合いがなく、時期を決めかねるが、図21-7、窯3と窯2の間で出土した図21-8～12にも明治期に下る遺物は認められないこと、主軸方位は窯2と同一でありながら、ロストルは持たないことから、ロストル付きの窯とセットになると思われる。したがって、窯3と窯2が同時期併存の可能性が高いであろう。

以上遺構の切り合いと出土遺物の時期、窯形態や主軸方位を勘案すると以下のような窯の変遷が考えられるであろう。

〈中世〉

中世の遺構は第1面から第4面までの全面で検出されが、概ね第1面から2面で15･16世紀代の遺構を、第2面から第3面にかけては12世紀後半から14世紀前半の遺構を、第3面から第4面にかけては11世紀後半から12世紀前半の遺構が中心に検出され、北東隣地の172次調査区と大差無い。

11世紀後半～12世紀前半期の中世Ⅰ期では、井戸11基・土坑165基・土壙墓1基・溝2条等である。井戸はSE3369の方形の井側以外は、木桶を積み上げた井側である。土坑では土器多量廃棄のSK2232・2452・3322、陶器壺廃棄のSK2091、白磁碗廃棄のSK2070等を検出した。土壙墓は成人伸展葬のSR2005の1基のみで、隣地の172次調査東寄りのC区西端で同じく伸展葬の木棺墓SK590、D区北端に土壙墓SK948が出土しており、屋敷墓でほぼ東西方向に20m程の間隔で分布している。柱穴を除く遺構全体の30%を占め、Ⅱ期と合わせ、鴻臚館廃絶後、宋人を中心とした貿易の中心地として繁栄した「宋人百堂」の時期に該当する。「七綱」（図39-104）等の墨書陶磁の多出、磁州窯陶枕（図39-101）・絞胎碗・白磁唐人水滴（図40-341）等の出土もこれを裏付けるが、172次調査区の様に数十点の白磁が一括投棄される遺構はSK2070では十数点程度で、172次調査区と比較すると中心地からはずれている。ガラス製品製造の開始期は12世紀前半で小玉・容器片・坩場等少量出土するが中心地は172次調査区にある。地形が砂丘北西側の緩斜面にあたり、調査区北西端が砂丘間の鞍部となっており、Ⅱ期と近世には区画する大溝が配置されるが、当期ではまだ設けられていない。

12世紀後半～13世紀前半の中世Ⅱ期では、主な遺構は井戸18基・土坑219基・溝9条等で、第2・3面を中心に検出される。遺構全体の40%を占め、最盛期を示している。井戸は中央部に集中する傾向がある。北東鞍部にはN-56°-Eに方位をとる幅2.8mの大溝1149とSD3001・3052・が改削されながら継続して設けられているが、172次調査区では15・16世紀の大溝SD007に切られているのか、延長

は検出されていない。土坑では土器大量廃棄の SK1309・1318・1397、獣骨廃棄の SK2317 が、また、地下倉 SK3030 も検出される。172 次調査東寄りの D 区でも四隅に柱穴を設ける地下倉 SC719・827 が出土する。遺物では遺構出土で 15 点の小玉・平玉等のガラス製品と坩堝が I 期の 5 割増し出土するが、172 次調査区出土量には遠く及ばない。I 期では 203 次調査区で 465 点の小玉等のガラス製品と 123 点の坩堝が、II 期 12 世紀後半には 18 点・35 点と激減する。12 世紀後半にここから 172 次調査区界隈に生産拠点が移行している可能性がある。

13 世紀後半 ~14 世紀中頃の中世III期は、13 世紀末から 1333 年の鎮西探題存続期と重なる。検出した主な遺構は井戸 16 基・土坑 149 基・溝 6 条等で、第 2・3 面を中心に検出される。遺構全体の 28% を占め、I 期と同程度の検出をみる。井戸は南側にまとまる傾向にあり、主要な遺構は稜線寄りの南

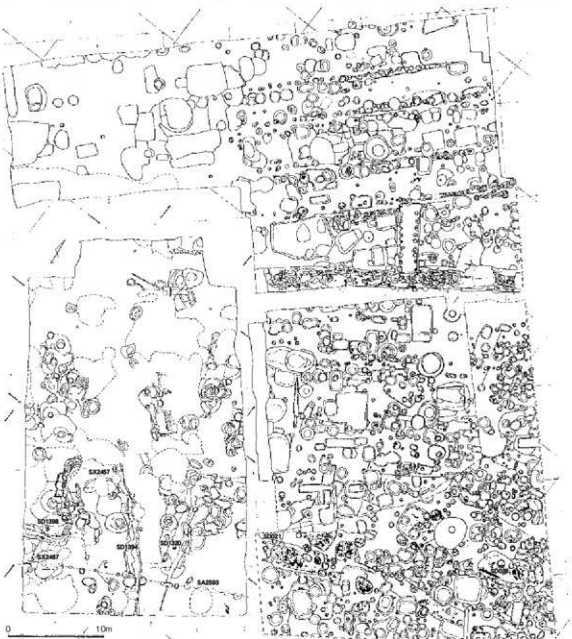


図 92　調査区 III 期と 172 次第 1 面全体図（1/400）

半部に集中する。土坑は土器多量廃棄のSK1322・2422・2553・2570、獣骨廃棄のSK2357・3387、石廃棄のSK2508等があり、鞍部の区画大溝は172次調査区同様検出されず、南の稜線部寄りに地形に沿った「L」字の区画溝SD1320・1398が検出され、さらに東端に同方向N-62°-Eに方位をとる柵列SA2593がある。SD1320は土器の大量廃棄がなされ、東への延長は172次調査区の同じく土器大量廃棄のSD021・028が同方向に配置される。SD1398は礫が詰められるがゆるく、暗渠の可能性もある。特筆すべきはSX2487・2457の2基の基壇状遺構の検出で、SX2487では上端には柱穴・根石が巡って掘立柱建物が建ち、土器の大量廃棄（SX2578）、透かし飾りの火打金（図88-28）出土等と、板葺き掘立柱建物の、祠堂等の祭司遺構と考えられる。SX2457は長さ3.5m程の長方形で、石塔類の基壇として、鎌倉後期に比定される薩摩塔（図86）はこれに設置された可能性がある。遺物としては陶磁犬人形（図50-247・55-397）・華南二彩壺（図48-226・53-300）・白磁八角水注（図53-286）・茶入（図55-374）・灯盞（図55-372）等の希少品嗜好品と瀬戸焼（374・375）・菊花文押圧の東海系土師器坏（192・259・260・337）・石硯・仕上げ砥石のまとまった出土、北条氏一門の家紋であるSD1320出土の揚羽蝶文の飾金具（図88-4）の出土は、172次調査区の遺構の在り方、同じく北条氏一門の家紋である三ッ鱗文土製品と合わせて鎮西探題の故地である証左をより強めている。東海系土師器は当該区では十数点の出土があり、172次調査区では図示は6点のみであり、遺構の内容でもこれを上回っている

15・16世紀の中世Ⅳ期は、14世紀後半の遺構を欠き、遺構数も激減する。検出遺構は井戸1基・土坑13基で、第1・2面を中心に検出される。遺構全体の約2%を占めるのみで、過疎地となっている。172次調査区では当該区西端、鞍部西側のA・B区に多くの区画溝・土坑・墓地等が検出され、遺物も多量に出土し、街区が先代に及ばないまでも復活を遂げている。

〈古代〉

7世紀代に調査地の北東側に箱式石棺などの石材を転用した小石室が築かれる。7世紀代にあたる遺構はこの小石室と土坑のみで遺構の分布としては希薄であり、当該期の様相は不明である。8世紀後半に入ると上面の遺構に削平された場所を除き、調査区全体に広く分布が認められる。検出された古代の住居跡のうち、3軒は8世紀後半～末に推定され、井戸の年代も8世紀後半～末の時期に推定されるものが多いことから、本調査地の範囲ではこの時期に居住域が拡大したものと推定される。

調査区南東側では8世紀代の土坑やピットが多く検出され、墨書須恵器、墨書土師器といった古代の墨書土器が多く出土した。墨書で記された文字の中では「大」が最も多い。調査区全体では墨書土器のほかに、丸鞆や青銅製銙帯、皇朝十二銭、円面硯など一般集落にはみられない特殊遺物も検出されている。本調査地の東側には東西・南北方向の主軸を基本として整備された官衙域とみられる区画が検出され、博多浜の西側ではN-23°-W前後の主軸方向を示す港湾域とみられる区画の存在が想定されている。第172次調査で検出された古代の集落跡については、港湾域の主軸に近い方位で整備されているが、銅製巡方や石帯、墨書須恵器、皇朝十二銭など、官衙域周辺に多く集中する遺物が出土していることから、官衙域に関連する官人階級の居住地である可能性が想定されている。本調査地においては第172次のように古代の集落を明確に捉えられていないが、官衙域との関連を示す同様の出土遺物が認められることから、本調査地まで官人の居住域が広がっていた可能性が考えられる。

9～11世紀前半に関しては遺物が出土しているものの、明確な遺構はほぼ検出できていない。9世紀代に推定される長沙窯系水注をはじめ、越州窯系陶磁器などが出土しており、中国との貿易による輸入品が認められる。

〈古墳時代〉

古墳時代に入ると砂丘面上に集落が広範囲に展開し、集住が開始されることがわかっているが、本

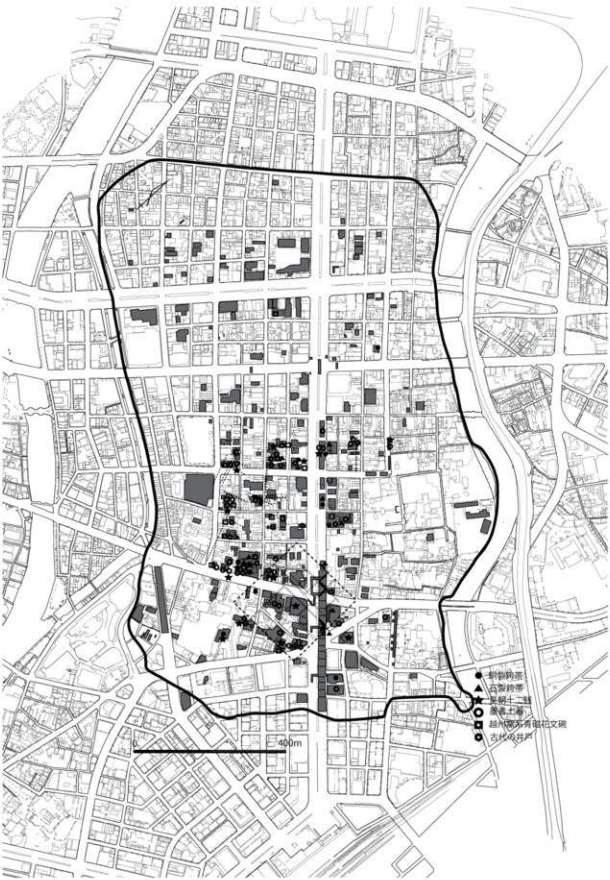


図 93　古代特殊遺物出土分布図

調査地ではその痕跡は認められなかった。古墳時代前期と後期の二時期の遺構が検出され、古墳時代前期の土坑からは土師器の甕、製塩土器のほか、タコ壺が出土した。古墳時代の遺構にともなうものは少ないが、朝鮮半島や近畿に由来する土器が多く検出されており、当時の対外交流の痕跡をうかがうことができる。また、調査地の周辺では前方後円墳である博多1号墳が築造されている。調査地内で古墳の築造は認められないが、円筒埴輪片と形象埴輪片が出土していることから周辺に古墳が築かれていた可能性が想定される。

〈弥生時代〉

本調査地では弥生時代前期後半の土坑が検出された。調査地の東隣に位置する第172次調査においても同時期の遺構が検出されており、博多遺跡群内において最も早い段階の遺構である。弥生時代前期後半にあたる遺構はごくわずかであるが、調査区内では上面の遺構や包含層に混ざりこむ形で、同時期に推定される弥生土器片が数多く出土している。本調査地が立地する博多浜の南側砂丘は縄文時代晩期中頃の黒川式段階に形成されたと考えられている。その北側にある砂丘列は弥生時代前期末前後に形成されたと考えられており、この北側砂丘列の形成により、南側砂丘は海からの風濤や潮汐作用を受けず安定した環境になったと想定される。本調査地の周辺では第172次のほかにも第118次調査で弥生時代前期後半の土器が出土しており、確実な遺構は少ないものの、人々の活動の痕跡が認められる。また、本来の位置を留めた状態での検出ではないが、弥生時代中期前半～中期後半に推定される甕棺が複数出土している。このことから当該期に本調査地の砂丘上に墓地が営まれていた可能性が考えられる。なお､博多浜の北側砂丘では弥生時代後期後半に活動の痕跡が認められるようになるが、本調査地においても弥生時代後期～終末期に推定される住居跡や土坑が検出され、居住空間としての利用がうかがえるようになる。

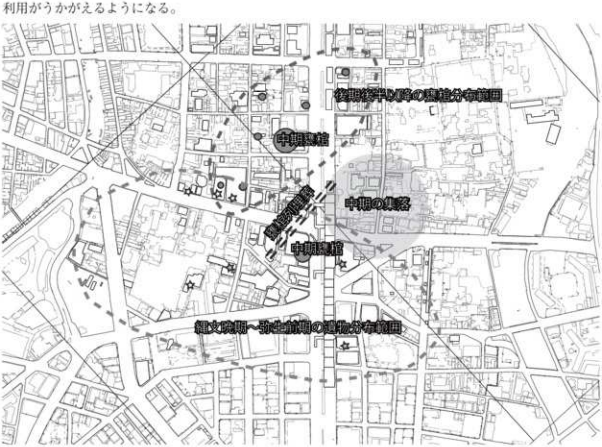


図94　弥生時代出土遺物分布図

博多213次出土の近世窯業関連遺物について

太宰府市教育委員会　山村　信榮

1　遺物の概要と背景

本調査においては近世から近現代に相当する遺構面から7基の窯跡と灰原、窯関連の遺物を廃棄した溜まり状、土坑状の遺構が複数確認された。当該地が江戸後期から近現代にかけて素焼人形（土人形）製造した中ノ子家の地所であったことが知られており、同家が人形製造以前は七輪屋（陶師）として土師質土器の各種を製造していたことでも知られている。取り上げられた遺物を選別したところ、肥前系染付の供伴関係から土坑1075や1145は18世紀後半から19世紀前半の幕末期頃に位置付けられ、1334等他のものはこの時期から明治前期に主体を持つものと考えられる。窯は窯5と8から化学呉須を用いた磁器が出土し近代まで下る可能性があり（廃絶後の混入も排除できない）、他の窯は江戸後期以降から明治期にかけてのいずれかの時期のものであろう。

2　土師質土器

出土した土師質土器には七輪（筒形・方形、単形・重形、平口・波口）、その部品である目皿、送風口の蓋、火鉢（筒形・方形、獣脚・蝶脚付、台付）火消壺、十能、焙烙、缶、槽、植木鉢などがあり、土師器には糸切底で内底面に黒斑が入る小皿。小皿にラッパ状に開く灯芯を付けた灯火具（平灰）などがある。これらには焼き上がりの色で黒、赤（褐色）、白の3種があり、胎土の質に粘土系のものとざらざらした砂地の2種がある。また、各器種にはおおよそ大中小程度の法量の別がある。未使用品や焼成時に破断したものが含まれ、窯場の焼成後に選別処分されたものが大半を占めるものと考えられる。土器の成形の道具として3足脚の付く俯瞰が円形の盆（台）状土器と、平瓦状の断面が弧を描く土師質土器（SK1075、SK1019最下層出土）や切り株を表現した板状のもの（SK1142出土）がセットの外型となり、七輪や風炉を生産したものと考えられる。盆（台）状土器の外底部に「長右衛門」「焼□」「□門」「治右□」「□長」「□番」「平」「中」傘に「丁？」ヘラ描きがあり、「長衛門」「□四郎」「正」「仁七」の印が確認される。

3　窯道具

窯道具と考えられる遺物には円形ないし方形の形状で厚さ1.5cmほどの粘土板で、縁に近い片側の寄った位置に1cmほどの孔があるものである。後者は継嗣家の方々が「メゲ」と呼び習わしているもので、焼き上がりの色相が白、赤（褐色）、黒のいずれかになっている。盆（台）状土器は成形時の型の台ないしは焼台、「メゲ」は窯詰め時点に製品を覆う蓋や炎の通りを調節する添え具として利用されていたもので、黒、赤（褐色）、白の3種があることは製品の色相の違いに合致しており、製品と同時に焼かれたものといえる。棒状の土製品と瓦類もこれらと供伴している。丸瓦や桟瓦には2次被熱を受けていたり、黒色の煤が焼き飛んで白色を呈するものもあり、これらも窯道具として利用されたものと思われる。トチンとサヤも見られ、少量ではあるがレンガが出土している。多量に出土したこれらのものと生活食器との出土量は比較にならず、圧倒的に前者の量が勝っておりほぼ未使用品であることから、先に記述した器物はこの場で焼成、生産されたものと見做される。

4　土人形・土型

人形は肌色を呈す素焼きのもので丸顔の御所人形の系譜をひく伏見系のもの、やや面長な博多系のもの、型を使わないものがあり、肥後・博多系のものには4,50センチを超える大型品が見られる。箱庭道具、ままごと道具は鉛釉が施され低火度焼成の陶器質である。製品としておぼこ、汐汲み、娘、八重垣、鯛車、童子、臼乗り童子、金太郎、恵比須、布袋、俵乗り大黒、笹野才蔵、若武者、鎧武者、義経、騎馬武者、力士 立像、力士 座像、太閤、西行、男雛、女雛、浦島、芥子人形、長太郎人形、袴猿、御幣猿、鯉、鯛、鮎、馬、猩、鶏、鳩、レリーフの鯛、人物、首人形、屋形、燈籠、橋などが見られる。

土型は厚さ3～4cmの橙褐色の硬質なもので、前後2枚の構造であり外面にヘラ描きで文字を入れたものがある。製品として布袋、三味線持ち 大、福助 中、猿、金太郎 後頭部 中、力士 立像 梅ケ谷？ 大、中、頭巾女 小、三番叟 烏帽子童子、娘、鎧武者、加藤清正、首人形などが見られる。

5　各遺構の土人形と土型

（1）江戸期の遺物

一定量の人形関係の遺物が出土した江戸期の遺構には SK1020、1075、SK1145 があげられる。遺物は肥前系染付の組み合わせから 19 世紀前半の遺物群に位置付けられ、明治期のものを含まないと捉えられるものである。土坑SK1075は土師質土器と人形類の廃棄土坑で土人形には伏見系の子ども恵比須、稚児、おぼこ、福助（小）、肥後系の大型の武者（太閤？、加藤清正）、力士（立像）の他、鈴持ち、太閤 大、鎧武者、笹野才蔵？、浦島？、猿、狐、鳩、力士、娘、娘（小）、鯉 or 鯛、悪童子、恵比須、大黒 小 俵乗り、箪笥？、鯉、童子、三番叟、猿、神功皇后？の扇、大黒、大黒（俵乗り小）などがある。土坑SK1145 は窯1の西側にあり窯に切られる形で検出された遺構で、土人形には童子、熊、猿、浦島？、力士、鎧武者があり、土型には金太郎、恵比須面、力士 立像 中、力士 蹲踞、寿老人？、蜘蛛、鯛抱き、福助、子ども三番叟、布袋、力士が見られる。SK1075 には伏見模倣の童子ものの古い系統と大型の武者ものの新しい肥後・博多系統の両者がある。

（2）明治期の遺物

当該前半期の遺構には SE1059、1334、後半期のものに SK1043 などがある。土坑SK1334 は窯8の南西側にある明治前半期の遺構で、土人形には汐汲み 大、娘 大、鯛車、金太郎、布袋、若武者、鎧武者、義経、騎馬武者 40.60cm、太閤、西行、男雛、女雛 新例、御幣猿、鯉、鯛、鮎、馬、狸、鶏、鳩が見られ、土型には三味線持ち 大、福助 中、猿、金太郎 後頭部 中、力士 立像（梅ケ谷？）大、中、頭巾女 小、三番叟 烏帽子、娘、鎧武者が見られる。SK 1059 からは差し首式の学生の頭部が出土している。SK1043 からは乃木希典と東郷平八郎と思われる日露戦争もののレリーフがそろって出土している。

5　中ノ子家と製陶業について

博多 213 次調査の地所には博多人形の創業家とされる中ノ子家が昭和 43（1968）年まであった。中ノ子家は菩提寺であった博多片土居町宗玖寺の過去帳によれば、長子が「長右衛門」の名と陶師を継いできた。八代目長右衛門安兵衛（1765～1830）は大乗寺前町に住したが、次男長四郎吉兵衛（1796～1856）を文化5（1808）年に下祇園町に分家させ、共に人形製作を始めたとされている。製陶道具に残された印に「長衛門」「□四郎（長四郎か）」と見え両家が窯場としたものと理解される。慶応2（1866）年から明治4（1872）年の税台帳である『博多店運上帳』の大乗寺前町の項には陶師の存在はなく、当該地が製陶業者としての中ノ子本家、分家の共同工房とみられる。出土した窯道具としてのハマやトチン、箱庇具などの軟質陶器の存在から、素焼きの他に低火度の陶器生産も行っていたと考えられる。素焼き製品も黒色に燻した瓦焼きの製品も多く、窯は円筒型の窯ではなく一定の火度が得られ、燻しのコントロールができる焼成部に天井がある倒炎式のダルマ窯に近い構造であったことが想定される。窯 1,2,4,7,8 は燃焼部がロストル式の構造であり、これがその窯に該当する可能性がある。ロストルのない窯3と5は円筒形の空吹き窯の可能性があり時期差でなく機能差で使い分けがあったのであろう。化学呉須を用いた磁器が出土した窯5と8からは石炭灰が出土し、周辺には粉炭の堆積層があることから近代以降には積極的に燃料として石炭が利用されていたことがわかる。このような状況から石炭を伴う窯 1,2,5,8 は近代まで利用され、窯 3,4,7 はそれ以前の可能性がある。切り合いから窯7がロストル式では古く、3は空吹き窯で併用されていた可能性がある。その後ロストル式のものは窯 4,1,2,8 と造り替えながら明治前期まで使用された。遺物の出土状況から素焼人形と土師質土器は並行して焼成されたと思われる。その後、長四郎吉兵衛の3男、吉三郎（1838～1911）の代になると窯場の中心は本調査地の西隣地に移り、長男家の当該地は扇屋旅館と4男長六家（後六助家。人形製造）

の地所となった（SK1043から絵皿と日露戦争時のレリーフ人形が出土し、本遺構群が検出されるまでの包含層には近代の素焼人形が含まれており、工房としての終焉は戦前頃まで考慮する必要がある）。西隣地の吉三郎の地所は子の市兵衛（1877 ～ 1946）の代には磁器が焼成できる連房式の本窯と素焼窯、試験窯などが操業され、市兵衛の子勝美（1918 ～ 2008）の代の昭和43（1968）年まで使用された。当該地所で発見された窯場は中ノ子家の安兵衛から吉兵衛、吉三郎（青年期）の代に亘る工房であったと考えられる。（窯の変遷案は本報告とは異なる。詳細はⅣ章まとめを参照。）

明治34（1901）年3月14日の九州日報記事には吉兵衛創業時は「伏見人形に擬して」製造を始め、文化年間に安兵衛の指示で肥後の職人大蔵、甚吉、亀吉を雇い入れており、SK1075に伏見模倣系統と大型の武者や力士ものの新しい肥後・博多系統の両者がある状況はこのような背景を表しているものといえる。

【参考文献】

「近世都市における窯業生産」『博多研究会誌(法哈噠)』第6号 1998年博多研究会

『博多人形沿革史』2001年博多人形商工業協同組合 編

「博多遺跡群117次SX1201の素焼人形について」『博多76』2001年福岡市教育委員会

『熊本城跡遺跡群』2015年熊本県文化財調査報告　第303集熊本県教育委員会（新馬借B調査区とその西側の排水路工事立会）

『伏見人形の原型』伏偶舎・伏見人形窯元丹嘉　1976年六代目丹嘉大西重太郎、奥村寛純

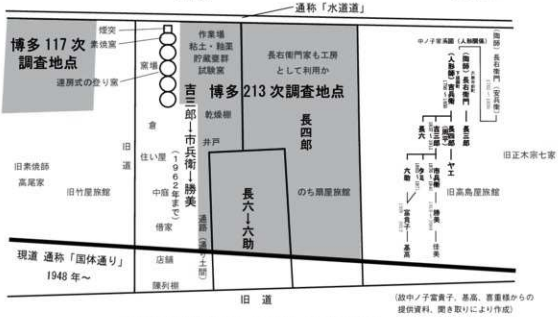
『法性寺跡』2011年京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

人形に関する中ノ子家略年表【江戸～明治期】

1808	文化5年	吉兵衛（長四郎）	父安兵衛（長右衛門）と共に土人形を製作
1822	文政5年		肥後の職人大蔵、甚吉、亀吉を雇用し、作品が大型化する
1850	嘉永3年		節句人形を多量販売
			この頃、吉兵衛が藩の勧業製陶所（須恵）に出仕する
1856	安政3年		吉兵衛没す
1864	元治元年	吉三郎	吉三郎が勧業製陶所に出仕する→白磁風武者人形の作例あり
1868	明治元年		歌舞伎の役者人形を売り出す
1877	明治10年		第1回内国勧業博覧会に吉三郎、白水六衛門、松尾文左衛門らが出品
1877	明治23年		第3回内国勧業博覧会で「博多人形」の名が使用される
1895	明治28年		博多素焼人形同業組合が結成され吉三郎が組合長となる
1970	昭和45年		祇園町の中ノ子家の家屋を解体

清水組

空吹き窯
中ノ子富貴子七隅工房
1998年当時



（故中ノ子富貴子、基高、喜重様からの提供資料、聞き取りにより作成）

博多下祇園町の中ノ子家とその周辺図

遺構	ラベル	地区	遺物		備考
			土器陶磁器類	人形類	
窯1	窯1	1	土師質土器（七輪 黒 口縁、メゲ、焼土塊）、平瓦		
窯1	窯1内部	1	土師質土器（羽釜、メゲ、窯壁、石炭）		
窯1	窯1下	1	陶器（瓦 古瀬戸系碗?）、磁器（肥前系染付 丸碗）、土師質土器（火鉢 黒,赤）		
窯1	窯1 燃焼部 上部窯1面上	1	土師質土器（メゲ?）		
窯1	窯1 燃焼部 上部窯1面下	1	平瓦?		
窯1	窯1 焚口 最下床面の下	1	石炭	土型	
窯1	窯1 焚口 最下床面下	1	陶器（皿）、土師質土器（メゲ 黒、羽釜、皿（台）状 赤）		
窯1	窯1 縦割トレンチ燃焼部	1	陶器（壺?）		
窯1	窯1 焚口縦割ベルト	1	土師質土器（羽釜）、平瓦	土人形類	
窯1	窯1 焚口内壁 シャモット下出土	1	石炭、土師質土器（メゲ 赤、七輪 赤）	陶or磁	
窯1	窯1 焚口外壁 シャモット	1	土師質土器（メゲ 赤 中、火鉢 赤）		
窯1	窯1 南西人形廃棄土坑	1	土師質土器（火鉢 赤、メゲ 赤、皿（台）状 赤）		
窯1	窯1 床面はずとり	1	石炭 大		近代?
窯1	窯1 燃焼部～焚口ベルト	1	中国白磁、青磁碗?、土師質土器（メゲ 黒,赤）		
窯1	1区窯1 上面清掃時		陶器（すり鉢）、土師質土器（火鉢? 黒）、中国陶器（白磁 碗）、磁器（肥前系染付 皿 コンニャク版）	土人形類	
窯1	1区窯1 南西側人形群		磁器（肥前系染付 広東碗）、陶器（甕）、土師質土器（メゲ 赤、火鉢 大型 赤、風炉 赤、焼台 焼成）		
窯1	窯1or4（不明）		陶器（皿?）、土師質土器（火鉢 赤、羽釜）		
窯1	窯1 焚口 内部		土師質土器（火鉢 赤、七輪 赤、メゲ 赤）、陶器（小壷）、中国陶器（白磁 碗皿）、須恵器（供膳具）	土人形類	
窯2	窯2 高師遺構検出		土師質土器（七輪 黒,赤、羽釜 赤）、土師器（皿 内面黒色）、石炭		近代?
窯2	窯2 焚口内		瓦（丸瓦、平瓦）		
窯2	窯2 床（中央）内（最初の面の上）		陶器（碗?）、土師質土器（鉢? 黒）		
窯2	窯2 焚口一燃焼部 最下床面下		磁器（肥前系染付 丸碗）、土師質土器（羽釜 赤）、土師器、中国磁器（白磁、龍泉系青磁）	土人形	
窯2	窯2 燃焼部トレンチ		土師質土器（羽釜、火鉢? 赤）、瓦（丸瓦）、中国磁器（龍泉系青磁 碗IV類）、	土人形	
窯2	窯2 縦割土層ベルト燃焼部		土師質土器（羽釜 赤、火鉢? 黒）、陶器（鉢?）、土師器（皿 白）、瓦、中国陶器、		
窯2	窯2 焚口（最初の床面直上の焼土層）		土製品（円状）、中国磁器（龍泉系青磁 碗）		
窯2	窯2 焚口（北側壁体）		土師質土器（焙烙 赤 把手付、羽釜 赤）、中国磁器（白磁 皿）		
窯2	窯2 焚口（南側壁）		土製品（玉）、中国磁器（白磁 碗IIorIV類）	土人形（頭部?）	
窯2	窯2 焚口一燃焼部 縦割土層ベルト		土師質土器（火鉢? 黒）、磁器（碗?）、陶器（鉢?）、鉄釘	土人形	
窯2	窯2 焚口トレンチ（南東部）		土師質土器（羽釜 赤、灯明皿 平江 三赤）、中国磁器（龍泉系青磁 碗）		
窯2	窯2 焚口トレンチ（南部）		磁器（碗?）、土師質土器（火鉢or七輪）		
窯2	窯2 焚口最下床面下		瓦（平瓦? 被熱）		
窯2	窯2 ベルト下部焚口横断土層 硬化床面より下		土師器（供膳具）、中国磁器（白磁碗V類）		
窯2	窯2 ベルト上部 硬化床面内		土師器（皿 内面黒色）		
窯2	窯2 縦断土層ベルト 燃焼部（北部）		土師質土器（火鉢? 赤）、土師器（皿 白）、石炭、中国磁器（白磁碗）、中国陶器（鉢?）		
窯2	窯2 土管①		瓦（平瓦）		
窯2	窯2 土管②		土師質土器（火鉢 赤,黒）、土師器（皿 内面黒色）、中国磁器（白磁 碗?、龍泉系青磁 皿）		
窯2	窯2 最下床面下（北西部）		肥前系染付（小坏）、土師質土器（火鉢 赤、メゲ 白、羽釜 赤、七輪 赤、火消壷 赤）土師器（皿 内面黒色）、石炭、金属（鉄滓）、	土人形	近代?
窯2	窯2 内壁東		土師質土器（火鉢 赤 被熱）		
窯2	窯2 煙柱①		土師質土器（七輪 赤 方形、メゲ 赤、鋳型 大型円形）、瓦（桟瓦、丸瓦）		
窯2	窯2 煙柱②		土師質土器（羽釜 赤）		
窯2	窯2 煙柱③		土師質土器（火鉢 赤、メゲ 赤,黒、羽釜 赤）、瓦（丸瓦）		
窯2	窯2 煙柱④		土師質土器（火鉢 赤 被熱、メゲ 白、羽釜 赤）、瓦（平瓦）		
窯2	窯2 煙柱 最下面		土師質土器（火鉢? 赤）、土師器（皿 白）、須恵器（甕?）		
窯2	窯2 北柱①		土師質土器（皿（台）状土器 赤、羽釜 赤、メゲ 赤）、瓦（平瓦）、石炭		
窯2	窯2 北柱		土師質土器（メゲ 黒,赤）		
窯2	窯2 北柱 最下面		土師器（灯明皿 ひょうそく、Ⅲa系統中世）、土師質土器（メゲ 赤）、瓦（平瓦）、中国磁器（同安窯系青磁 碗）、石炭		近代?
窯2	窯2 燃焼部 1層		土師質土器（火鉢 黒 玉縁、七輪 赤）、瓦（平瓦）、中国磁器（龍泉窯系青磁 碗）、焼土塊		
窯2	窯2 燃焼部 2層		土師質土器（火鉢 黒 脚付,赤、メゲ 白、羽釜 赤）、中国磁器（白磁 碗?）、鉄釘、石炭 片		近代?
窯2	窯2 周辺 西側		土師器（皿）、土師質土器（羽釜 赤）、陶器（壺?）、瓦（平瓦）、焼土塊		
窯2	窯2 窯片 最下面		磁器（肥前系染付 皿or鉢 江戸末～明治）、土師質土器（メゲ 赤）、陶器（甕、鉢?）、中国磁器（白磁 碗）		
窯2	窯2 窯片 下面上		磁器（肥前系染付 皿）、土師器（皿）、陶器（鉢）、土師質土器（羽釜 赤,黒、七輪 赤、羽釜 白）、中国磁器（白磁 碗、龍泉窯系青磁 鉢?）、石製品（砥石 砂岩）		
窯2	窯2 遺構検出面南		磁器（肥前系染付 筒碗）、軟質陶器（ままごと道具、蓋）、陶器（土瓶 山水、鉢、行平?）、中国磁器（白磁 碗V、龍泉系青磁 碗、明染付 碗）、金属（鉄滓）、骨（馬?）、石炭	土人形（菓子、恵比須、恵比須 小）	近代?
窯3	窯3 窯片		磁器（肥前系染付 丸碗?）、瓦（平瓦）、土師質土器（焙烙? 大）		
窯3	窯3		土師質土器（火鉢 黒）、磁器（肥前系染付 小坏?）、須恵器（鉢 播磨 古代）、鉄滓		
窯3	窯3 トレンチ（中央東西）		土師質土器（火鉢? 黒）		
窯3	窯3 トレンチ（南側東西）		土師質土器（羽釜 赤）、陶器（鉢 播磨）、中国磁器（白磁 碗V類）		
窯3	窯3 窯片 最下面の下		磁器（肥前系染付 皿 輪花 口紅）、土師質土器（火鉢? 黒）、中国磁器（白磁）		
窯4	窯4 西柱 下から2段目		瓦（平瓦）		
窯4	窯4 西柱		瓦（桟瓦）		
窯4	窯4 西柱内		陶器（鉢）、土師質土器（七輪? 赤、火鉢? 赤）、土師器（皿）		
窯4	窯4 柱		瓦（丸瓦）		
窯4	窯4 横砂		土師質土器（火鉢 赤）、瓦器（碗）、中国磁器（白磁 碗IV類）		
窯4	窯4 トレンチ 南西側		土師器 片		
窯4	窯4 トレンチ 西側		土師質土器（火鉢? 黒、羽釜 赤）		
窯4	窯4 トレンチ 東側		土師質土器（火鉢 黒）、瓦質土器（鉢 東播系）、瓦（平瓦）		
窯4	窯4 トレンチ 南東側		磁器（肥前系染付 碗?）、土師器（Ⅲa? 中世）、中国磁器（白磁 皿）		
窯4	窯4 最下面の下 南西側		土師質土器（火鉢? 黒、羽釜 黒）		
窯4	窯4 西柱 下から1段目		土師質土器（メゲ 赤）、瓦（平瓦、丸瓦、桟瓦）		
窯4	窯4 西柱 下から2段目		瓦（平瓦、丸瓦）		
窯4	窯4 西柱 下から3段目		瓦（平瓦）		
窯4	窯4 最下面下 南西側		土師質土器（火鉢 赤,黒、羽釜 赤,黒、七輪 赤）、陶器（鉢 褐色＋ナマコ釉）、瓦（平瓦）、中国磁器（白磁）、石炭 片		
窯4	窯4 最下面下 南西床側		土師質土器（羽釜 赤）、中国磁器（白磁 碗）、中国陶器（天目 碗）、瓦（平瓦）		
窯4	窯4 最下面下 西側		磁器（肥前系染付 碗? 濃色呉須）、土師質土器（羽釜 赤、火鉢 黒）、中国磁器（白磁 碗 Va/VII,VIII類）		江戸末
窯4	窯4 横断ベルト 燃焼部		肥前系染付（丸碗 淡灰色）、陶器（鉢?）、土師質土器（七輪 方形 赤、メゲ? 白,赤、火鉢 黒 桜花スタンプ）、中国磁器（白磁 皿）、土製品（メンコ 中世?）		
窯4	窯4 壁下から1段目下（最下）		肥前系染付（丸碗 淡灰色）		
窯4	窯4 壁体 下から1段目		瓦（平瓦、軒丸瓦 巴文、桟瓦）		
窯4	窯4 壁体 下から2段目		瓦（平瓦）、須恵器（坏a? 古代）		
窯4	窯4 壁体 下から3段目		瓦（平瓦、丸瓦、桟瓦）		
窯4	窯4 壁 2段目		土師質土器（メゲ 赤）、瓦（丸瓦、桟瓦）		
窯4	窯4 壁体		土師質土器（羽釜 赤）、土師器（皿、杯 古代）	土人形	
窯4	窯4 壁体下から1段目 東側		磁器（供膳具）、中国磁器（白磁 碗、龍泉系青磁 碗?）中国陶器（鉢）		
窯4	窯4 壁体下から1段目 南西側		瓦（平瓦）、土師器 片		
窯4	窯4 壁体上から4段目		土師質土器（火鉢? 黒）、瓦（平瓦）		
窯4	窯4 壁体の下		土師器 片、中国磁器（白磁 皿）、石炭塊		
窯4	窯4 壁体 最下段の瓦の下		磁器（片 鉢?）、土師質土器（火鉢 黒）、瓦器（碗?）、須恵器（甕?）、中国陶器（甕）	土人形	
窯4	窯4		陶器（丸碗 色絵）、土師質土器（火鉢 黒,赤、羽釜 黒,赤、十能 赤、皿（台）状土器 赤）、土師器（皿）、瓦（桟瓦、丸瓦、軒平瓦 唐草文）、焼土塊		
窯4	窯4 内部		磁器（肥前系染付 坏?）、陶器（壺 貫入釉）、土師質土器（火鉢 黒、十能 赤、羽釜 凹状 赤）、窯道具（筒状 隅丸方形 赤、その他 砂地）、焼土塊、中国磁器（龍泉窯系青磁 皿）、中国陶器（天目 碗、壷 緑釉IX類）、瓦（丸瓦、平瓦）		
窯5	窯5 下の皮膜 炭層		磁器（碗?、肥前系染付 碗）、陶器（丸碗? 褐釉）、土師質土器（火鉢 黒,赤、七輪 赤）、瓦（丸瓦）、鉄釘、石炭 一括出土	土人形	近代?
窯5	窯5 ベルト		石炭		近代?
窯5	窯5 焚口付近シャモット片		土師質土器（メゲ 円形 赤,方形 赤）、焼土塊		
窯5	窯5 カクラン		タイル（近現代）、磁器（肥前系染付 碗 化学呉須 近現代）、磁器（碗 明治?）、陶器（碗）、鉄釘		明治期

窯5	窯5 上面		陶器（丸碗、土瓶）、磁器（碗？、紅皿）、土師質土器（焙烙 黒）、土師器（灯火具 ひょうそく、小皿a 糸切 中世）、土製品（板状）		
窯5	窯5 内部		磁器（肥前系染付 丸碗）、土師器 片、石炭		近代？
窯5	窯5 焚口横断ベルト		土師質土器（メゲ 板状方形 黒.赤）		
窯5	窯5 焚口縦断ベルト		土師質土器（火鉢 黒、火鉢or七輪 赤）		
窯5	窯5 燃焼部横断ベルトA下層		瓦（丸瓦？）		
窯5	窯5 燃焼部横断ベルト東側A下層		土師質土器（火鉢 ? カキ目）		
窯5	窯5 窯体下から1段目		瓦（平瓦）		
窯5	窯5 下の床層 （窯5の下に敷かれた床）		土師質土器（十能 方形 赤）、土師器（灯火具 ひょうそく）、土製品（[illegible]）		
窯7	窯7 南側壁上部		陶器（鉢）、中国磁器（白磁 碗、青花系青磁 碗）、土師器（小皿 中世）、須恵器（鉢 [illegible]）、土師質土器（火鉢 赤.黒）	土人形	
窯7	窯7 南側壁		土師質土器（メゲ 赤、目皿 赤）、平瓦、須恵器（甕）		
窯7	窯7 南側壁 1段目		土師質土器（メゲ 黒、目皿 赤、七輪 赤）、平瓦、土師器（甕 古代）		
窯7	窯7 覆土		磁器（肥前系染付 丸碗（くらわんか手））、土師質土器（火鉢 赤）	土人形	
窯7	窯7 トレンチ		陶器（すり鉢）、磁器（小皿）、中国陶器（白磁 小碗）、土師質土器（火鉢 赤、メゲ 白）		
窯7	窯7 南側壁 2段目		平瓦		
窯7	窯7 南側壁 3段目		平瓦		
窯7	窯7 南側壁 3段目の下		陶器（[illegible]）、土師質土器（メゲ？）、中国陶器（白磁 碗?、青花系青磁 皿）、須恵器（[illegible]）		
窯8	窯8 上面	Ⅲ	磁器（肥前系染付 小坏 [illegible] 近代）、土師質土器（七輪 砂地 白、涼炉 白）、陶器（[illegible]、灯明皿 ひょうそく、朝鮮陶器 甕）、中国磁器（白磁 [illegible]、同安窯青磁 碗）、中国陶器（鉢）	土人形	明治期
窯8	窯8 燃焼部（西側）最初の床面～灰土の上面まで		磁器（肥前系染付 青磁 コバルト呉須 近代、[illegible]、大皿、皿）、陶器（丸碗、[illegible]、すり鉢、甕）、土師器（小皿 中世）、土師質土器（火消壺、土鍋）		明治期
窯8	窯8 燃焼部（東側）最初の床面～灰土の上面まで		瓦（桟瓦、丸瓦）、石（花崗岩円礫）		
窯8	窯8 窯体（つくり替後）		磁器（肥前系染付 碗）、土師質土器（七輪 赤、目皿 赤）、瓦（桟瓦）、土師器（皿 中世）、中国磁器（青花系青磁 碗）		
窯8	窯8 窯内部（つくり替後）		陶器（[illegible]）、磁器（碗?）		
窯8	窯8 縦断トレンチ 最初の床面より下（燃焼部）		鉄釘、鉄製品（ロート状）		
窯8	窯8 （カクランのため不明）	Ⅲ	陶器（土瓶 瀬戸、大皿 刷毛目 唐津系）、土師質土器（火鉢 赤.黒）、瓦（軒丸瓦 巴文）、中国磁器（白磁 碗Ⅳ類）、土師器（丸坏、小皿a）		
窯8	窯8 燃焼部最終面	Ⅲ	瓦（丸瓦）、土師質土器（メゲ 黒、火消壺 蓋 大）		
窯8	窯8 燃焼部最終面焚口	Ⅲ	土師質土器（メゲ 黒）、焼土塊、石炭 炭化		近代？
窯8	窯8 床土面	Ⅲ	磁器（肥前系染付 小皿、皿?）、須恵器（坏C）[illegible]）		
窯8	窯8 窯体上面	Ⅲ	土師質土器（七輪 赤）		
窯8	窯8 北側壁上面	Ⅲ	土師質土器（七輪 赤）、磁器（小坏）、瓦、石炭 炭化、中国磁器（白磁 皿 Ⅳ類）		
窯8	窯8を切るカクラン			土人形（[illegible]）	
窯8	窯8 下面土	Ⅲ	磁器（肥前系染付 端反碗、丸碗、小坏、Ⅱ 鉢蓋）、陶器（丸碗 白 瀬戸、小皿 唐津系、鉢 瀬戸）、土師質土器（七輪 赤、火鉢 方形 黒 大、火消壺 蓋 黒）、瓦（丸瓦）、須恵器（甕、鉢）、土師器（小皿a 糸切り、坏a 糸切り）	土人形	
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑		陶器（[illegible]、擂鉢、鉢、小碗、土瓶、土瓶 山水）、磁器（肥前系染付 鉢、蓋茶碗、大皿）、土師質土器（火鉢 赤 浅手 方形、七輪 白 波口黒 方形、目皿、メゲ 赤.白、涼炉 赤、焼台 有段）、平瓦、丸瓦（[illegible]）	土人形群（おばこ（大）、金太郎、布袋、猿）、土鈴（[illegible]）	
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑①		陶器（擂鉢）、焼土塊、石炭	土人形群	近代？
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑②		土師器（皿 中）、中国陶器（白磁 碗）、石炭、炭	土人形群（[illegible]）、土鈴	近代？
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑③		土師質土器（火鉢 大 白or黒）		
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑 下層		土師質土器（火鉢or涼炉 黒）	土人形群（[illegible]）	
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑 炉壁（窯の壁体）		炉壁、焼土塊		
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑 燃料		草類、石炭、炭、土		近代？
土坑	第1,2間 人形廃棄土坑 コバルト		土		
灰層	灰層1 上層		中国磁器（[illegible]）、青花系青磁 皿）、窯道具（三方ピン? 赤）		灰層1～窯7
灰層	灰層1 中層		磁器（肥前系染付 碗 端反り 手描、広東碗 手描、蓋物、小坏、猪口 [illegible]）、陶器（土瓶 赤、鉢）、陶器（灯火具 ひょうそく）、土師質土器（七輪 白、火鉢 方形 黒 大、[illegible]、[illegible]）、瓦（軒平瓦）、窯道具（方形 敷板 ...）、土師器（小皿a 糸切 中世）、中国陶器（甕 無土錘）、鉄製品・工具	土人形（[illegible]）、土鈴（[illegible]）	18世紀前半 窯7上層
灰層	灰層1 下層		陶器（碗）、中国磁器（白磁 皿Ⅸ類）、土師器（坏a 糸切 中世）	土人形	
灰層	灰層1		窯道具（トチン、焼台）、土製品（瓦当）、土師質土器（焙烙 赤、火鉢 黒 [illegible]、[illegible] 赤、火鉢 [illegible]）、土師器（小皿 糸切 内面黒色、小皿a 糸切 近世、皿）、陶器（灯火具 平瓦、丸瓶、土瓶 黒色、高坏）、中国磁器（白磁 碗、青花系青磁 碗Ⅲ類）	土人形（三番叟、金太郎？、饅子、猿？、恵比寿、[illegible]）、土鈴（饅子）	
灰層	灰層1 下（古代）		土師質土器（七輪 赤）、中国磁器（白磁 碗Ⅳ類）、中国陶器（甕 無土錘）、須恵器（坏C3）		
灰層	灰層2		磁器（肥前系染付 広東碗、丸碗 高台無釉、蓋茶碗の蓋）、陶器（鉢）、須恵器（坏c）、中国磁器（白磁 碗Ⅳ類、同安窯系青磁 碗）		18世紀前半
灰層	灰層3		磁器（肥前系染付 端反碗、丸碗（くらわんか手））、磁器（広東 金彩、鉢）、陶器（湯土瓶、土瓶蓋）、土師質土器（火鉢 方形 黒、内耳 黒、七輪 平口 白、目皿 黒）、土師器（皿 内面黒色、灯火具 ひょうそく）、瓦（軒平瓦 唐草文）、須恵器（坏a）、中国陶器（天目 碗、甕 無土錘）、中国磁器（白磁 碗Ⅳ類、皿、同安窯系青磁 碗、龍泉窯系青磁 碗Ⅳ類）		
灰層	灰層7 上層下		磁器（肥前系染付 丸碗 高原灰色、皿）、土師質土器（火消壺 蓋）、土師器（皿 内面黒色）、窯道具（トチン）	土人形	
灰層	灰層7	Ⅰ	磁器（肥前系染付 皿）、土師質土器（焙烙 黒）	土鈴	
灰層	灰層7 上層	Ⅰ	土師器（皿 油煙付）	土人形	
灰層	灰層8 下層	Ⅰ	磁器（肥前系染付 蓋茶碗蓋 呉須灰色、鉢）、陶器（小坏）、中国陶器（白磁 碗、同安窯系青磁 碗、龍泉窯系青磁 碗）		
灰層	灰層8	Ⅰ	中国磁器（龍泉窯系青磁 皿、白磁 皿）		
灰層	灰層5	Ⅰ	土師器（坏 糸切）、須恵器（皿）、中国陶器（甕 無土C群）		
灰層	灰層6		土師質土器（焙烙 赤、火鉢 赤 カキ目に刻文）		
灰層	灰層6 上層		陶器（鉢 瀬戸）、土師質土器（十能 赤、焙烙 赤 把手付、メゲ 円形）、土師器（小皿a 糸切 近世、糸切 中世）、石炭 炭化	土人形	近代？
灰層	灰層6 下層		陶器（鉢 瀬戸）、土師質土器（十能 把手 赤、目皿 赤、火鉢 黒）、土師器（灯火具 平瓦）、金属製品（銅製煙管 雁首、銭貨）、石炭 炭化	土人形	近代？
包含層	窯付近	Ⅰ	石綿スレート、磁器（碗、プリント型紙摺、印版手碗、肥前系染付丸碗）、陶器（瓦、土師質土器（火鉢 赤 浅手、七輪 黒 波口赤 方形 白 平口、土錘 瓶円形、メゲ 板状、火消壺 蓋 黒 赤 大、目皿、蓋 白、十能、灯明皿、須恵器 坏C2+3、皿 内面黒色）※メゲは厚さ1～2ｃｍ程の粘土板の裏面のための焼成具。目皿は七輪の鉄製状の穴のある中敷き。	土鈴（陶製大、猿？、レリーフ）、瓦鍋、キ_きりねり	近現代
包含層	窯1-4 断割焼土		土師質土器（十能、目皿 黒 大 黒 小、メゲ 赤 円形 赤）		
包含層	窯1-4 断割焼土 焼土面下面		陶器（鉢？）、中国陶器（甕、青花系青磁 皿）、磁器（肥前系染付 皿）、石炭、平瓦、瓦片		
包含層	窯1-4 断割焼土		陶器（土瓶 赤 山水）、磁器（肥前系染付 皿）、土師器（皿 中、内面黒色 中）、瓦（桟瓦、丸瓦）、土師質土器（火鉢 赤 方形 白 黒、火消壺 白 黒、焙烙 赤、目皿 赤 中、メゲ 白 赤）、焼土塊		
包含層	窯1-4 断割焼土①		中国陶器（白磁 碗）、石炭 灰、土師質土器（七輪 赤、蓋（白）赤 大 赤、メゲ 白）		
包含層	窯1-4 断割焼土②		土師質土器（火消壺 黒、蓋 白 赤 赤 円形、目 円形 「高石屋門」印）		
包含層	窯1-4 断割焼土③		土師質土器（火鉢 方形 「高石屋門」印）		
包含層	窯1-4 断割焼土④		中国陶器（白磁 碗）、平瓦、土師質土器（火鉢or焼火鉢 赤、目皿 中）		
包含層	窯1-4 断割焼土⑤		丸瓦（軒丸）、土師質土器（七輪 方形 赤 「高屋門」印）、メゲ 白		
包含層	窯1-4 断割焼土⑥		ガラス（瓶（150）軍事用瓶）、陶器（鉢、土瓶 赤）、磁器（皿、小坏）、土師質土器（七輪 丸 赤、火鉢 丸 黒、灯明皿、メゲ 白）、トリベ ?、石炭、須恵器 [illegible]	土人形	近代
包含層	窯4 1137の間		陶器（鉢、鉢？）、磁器（肥前系染付 碗杯、碗？）、丸瓦、土師質土器（火鉢 赤、目皿 赤、焙烙 赤、七輪 黒、メゲ 黒）		
包含層	窯4 1146の間		磁器（肥前系染付 小坏（くらわんか手））、陶器（すり鉢）、石炭、土師質土器（火鉢 黒、火鉢or火消壺 赤、メゲ 白）、中国陶器（白磁 碗）		
包含層	窯1,7下と1137間包含層		土師質土器（火鉢 赤）、石炭、中国磁器（白磁 碗）、中国陶器（鉢）、須恵器（鉢）、土師器（小皿a 糸切り）		近代？
包含層	窯1,2間 遺構検出時		磁器（肥前系染付 皿、丸碗、輪花皿、磁器 蓋物）、土師質土器（七輪 白 砂地 赤 方形、火鉢 黒、メゲ 白）、土師器（皿 内面黒色）、陶器（土瓶蓋、鉢？ 近代、丸碗、小碗）、須恵器（須恵器）、中国磁器（白磁 碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁 碗Ⅲ類、無染付 皿）、石製品（硯 砥石）		
包含層	窯2,3間 遺構検出時	Ⅰ	土師質土器（火鉢 黒）		
包含層	窯5 周辺灰層（灰層6）		磁器（碗）、陶器（鉢 鉄釉）、土師質土器（目皿 小 赤）、土師器（小皿a 糸切 中世）、中国磁器（白磁 碗）、石炭 炭化		近代？
包含層	窯4と1146の間（A-4 1面包含層）		土師質土器（火鉢 方形 脚付 黒 「高石屋門」印、七輪 赤、メゲ 黒）		

3001	上層①		瓦質土器（鍔付鉢 菊花文印「外番？」印）		
3009		1	肥前系染付（鷹唐 印竪木、皿、筆軸）、陶器（有 雨色手、鉢 碗蓋）、土師質土器（十能 赤、火鉢 赤、目皿 赤、豆（台）状土器 「口四郎」印、火鉢 赤 灰釉？）、茶炉？小）、鞴羽口、玩具（円盤状）	土人形（武者もの 大閣？、童子もの、馬 小、人物立像 小 一文人形 関西系、重松台？、奴隷形在 黒）	明治期
3010	上層ガラ	1	土師質土器（七輪 卸状 目「利三郎」印）		
3014		10	土師質土器（大皿状 赤 内底部「治？右衛門」印）	玩具（刷版 二印 花人形塊）	
3014	下層	10	鞴羽口		
3015	中層下 上から③層目		土師器（日入り片 軽状火炎文 白 外底「博多柳橋製造」印）染付磁器（化学呉須）		明治期
3018	下層		土師質土器（面取風呂 赤、涼炉 卸状 白）		
3019	中層、下層		磁器（肥前系染付 筒碗、蓋 江戸末）	土人形（武者？ 無）	
3019	中層		土師質土器（七輪 赤、目皿 赤、メゲ 黒）		
3019	下層（炭層）		土師器（皿 外底部糸切 黒色化）		
3019	最下層		土師質土器（目皿 赤）	土錘（平瓦状 面状切り込み 赤 波口七輪の外型？）	
3019	最下層 内部黒色土			土人形（金太郎、猿助、西行 小、組武者、童子、鯛）	
3020	上層（ガラ）	1		土人形（狐 玉咥え）	
3020	上層 ⑤			土人形（長太郎）	
3020	上層		焼土塊	土人形（武者、五人囃子 三味線持ち、烏帽子、童子）	
3020	上層（ガラ）		陶器（土瓶 蓋、行平）、土師器（皿 内底部黒用）、瓦（平瓦 軒用）、磁器（肥前系染付 丸碗、蓋 江戸末）	土人形（狂言猿、馬 小 台付き、大黒 俵乗り、鶏、童子 立膝）、土鈴（手 小）	江戸末
3020	最上層		土師質土器（焙烙）、陶器（鍋）、中国磁器（白磁 碗、景徳鎮系青磁 碗）、須恵器（甕）、土師器（坏a 糸切 中世）		
3021	上層	1	鞴羽口		
3021	中層	1	土師質土器（豆（台）状土器 赤「徳兵」ヘラ描き）		
3021	下層	1	磁器（肥前系染付 広東碗、鉢）、瓦質土器（焼炉 風蓋刀印、涼炉 波口 赤文＋菊葉文印）、鞴羽口		
3021	最下層	1	土師質土器（火鉢 近風口蓋 菊文印）、鞴羽口		
3024		1	鞴羽口		
3026	内ピット	1	石炭塊		近代
3026			肥前系染付（広東碗、丸碗、鉢 稜縁、蓋鉢）、陶器（平瓦、鉢 稜縁）、豆（台）状土器 黒 内底部「三」「ヒセ」印、香炉 黒 小、豆（台）状土器 赤 外底部「徳口」「口門」「治右口」単に「丁？」ヘラ描き、五器 小、火鉢 小 菊文印、七輪？ 火箸）、瓦道具（円盤状焼きあて）、鞴羽口		江戸末
3043		1	磁器（銅プリント 緑色顔料付着 近現代）、土師質土器（七輪 小 卸性 目「木田」文字印）	土人形（饅頭形 乃木希典 レリーフ 赤色顔料、饅頭形 楠木正成 レリーフ、饅 小、饅 小 レリーフ状）	明治～大正
3054			玉（セルロイド）	土人形（饅頭 11個以上）	
3059	井戸の掘方		磁器（肥前系染付 吉原プリント柄、蓋 赤絵、湯呑 小、杯、湯町）、陶器（蓋、土瓶 トビカンナ）、土師質土器（七輪 方形 赤「長右衛門」小印,方形 黒,円形 波口 赤）、土製品（輪状焼土塊 目止めの土？）	土錘（恵比須 小、鍾形 円筒形）、土人形（伊勢 差し扇 武、組武者、力士、恵比須、鯛、狸？ 祭各）、瓶窯道具（焼 素焼 白）	明治
3075	南側 人形廃棄土坑	1	土師質土器（豆（台）状土器 赤 単に「中」ヘラ描き 三足、鉢 赤 三足、風炉 黒）、瓦（軒平瓦、丸瓦「恵?平」印）	土人形（武者 太閤?、鯛、童子、三番叟、狐、神の使い？ 鹿）	
3075	北側	1	土師質土器（メゲ 方形 赤黒、鉢 大 白、火鉢 方形 黒 松ぼっくり把手 波に風印 漆草に花文印,「長右衛門」印、火鉢 箆記 黒、鍔付鉢（焼木鉢） 赤、十能 赤、目皿 赤、豆（台）状土器 赤 上面黒色化「長右衛門」印,「口亀」ヘラ描き、鍔付鉢or風炉 赤、七輪or風炉 銘記 赤、風炉 菊文印、七輪 波口 赤,方形 赤「長右衛門」印）、陶器（土瓶 褐色釉、鉢 雨もち 唐津系、すり鉢、土瓶 かいらげ、瓶、行平？、灯火具（平皿）、鉢 乾の目内出、鉢 褐釉 外底部「三十」墨書）瓦（桟瓦、軒丸瓦 三つ巴文、軒平瓦 唐草文 印「恵兵衛」、梅鉢文）、窯道具（トチン 赤、ハマ、棒瓦状 赤、板状 赤）、土師器（小皿a 糸切 近世、皿 内底黒色、合器 蓋 白（焙烙）、灯火具（平皿） 赤）、磁器（肥前系染付 広東碗、丸碗 くらわんか手 呉須灰色、筒碗、猪口、蓋鉢、湯呑村、紅皿）、雲母塊、石炭塊、軽石（棒状 窯記具）	土人形（子ども恵比須、鯛持ち、土鈴 大、組武者、狩野才蔵？、清島？、猿、狐、鳩、力士、猿 小、おぼこ、鯉or鯛、赤童子、恵比須、大黒 小 俵乗り、筆割?、童子 小 伏見系）、土笛（童子?）、瓶窯道具（窯焼 赤焼 二印 朝貢陶器）	19世紀前半～
3075	1層	1		土人形（鯛 大、狐、童子?）	
3075	2層	1		土人形（馬、鯉or鯛、力士 立像 中、長太郎の手）、土鈴（長太郎の手）	
3075	3層	1	土師質土器（火消壷蓋 黒、七輪 波口 赤,方形 赤、火鉢 大 赤）、土製品（輪羽口）	土人形（力士 立像、権兵、猿助、大黒、猿?、恵良? 手ひねり、童子 小）	
3075	4層	1		土人形（童子もの、金太郎、鯛、狐 下地彩料）	
3075	5層	1	肥前系染付（丸碗、鉢）陶器（鉢 外面に斐に「古」の墨書、土瓶 灰色かいらげ釉）、土師器（灯火具 平皿）、土師質土器（七輪 赤、風炉? 黒 把付き）	土人形（鯉or鯛、恵比須、おぼこ?、鯛持ち、猿 三番叟、童子	
3075	5、6層	1		土人形（鯉or鯛、童子、狐、棒状 手ひねり）	
3075	南側トレンチ	1	土師質土器（焼成テストピース この泥状 中央に円孔）	土人形（組武者、金太郎?）	
3075		1	肥前系染付（猪口碗）	土人形（天狗、恵比須、雛型飾り 大、狩野才蔵orおぼこ、組武者 特大、鯉 赤童子?、大鼓乗り?、猿、猫、狆、大黒 蓋 小、天狗、猿助 大、力士、加藤清正 大、鍔付持ち、花び猫?、お多福?、※ 下地白に胡粉だけのものと着彩含むパールトーンの2種あり）土笛（人物）	江戸末
3078		1	土師質土器（七輪 方形 黒、菊文印、焙烙 赤）、窯道具（方形 棒瓦状）	土鈴（組武者「安」ヘラ描き、童子 青 2つ、雛 蓋 小、ひょっとこ 蓋 小）、土人形（狐、恵比須 小、組武者、加藤清正、鯉or鯛、大黒 俵乗り小 底部穿孔2つ、猿助 小 伏見系）	
3110		1	土師質土器（鍔付鉢「長右衛門」印）		
3128		1	土師質土器（鍔付鉢「博多 治丸」角印付き）	土鈴（加藤清正 特大、猿 立姿 3つ）、焼土塊 窯詰め具? 砂粒	近現代
3132		1	土師質土器（鉢 赤 外底「ギ口上」墨書）		
3135		1	土師質土器（鍔付き鉢 黒 菊花文,宝珠文 内底部魚?ヘラ描き）		
3135	②		土師質土器（豆（台）状土器 外底部「長右衛門」ヘラ描き 赤）		
3135	下層	1	土師質土器（鍔付鉢 黒 菊文印「長右衛門」印 菱文印 獅子頭貼付、火鉢 黒 箆刻 鉄宝文集、風炉 黒、豆（台）状土器 赤 外底部「長右衛門」印、目皿 赤、ミニチュア火鉢 赤）、軟質陶器（焼締 乳鉢,透明釉の土鍋）		粘土サンプル有り
3137	下層①		土師質土器（焼 大型）		
3137	下層②		土師質土器（焙烙 赤 外型）		
3142		1	土師質土器（火鉢 黒 方形 松ぼっくり把手、七輪 卸性 目 厘用品 赤 波口、火消壷 赤 蓋 大 黒）、土製品（付き臼 花簪前髪 赤色顔料付着）、窯道具（板状 白 方形穴穿孔）	土鈴（お多福 蓋 小、童子 大、炉の外型 打り抜状）、土人形（火鉢 外型、布袋、猿助、覆面女、大黒 俵乗り 小）	近現代
3142		1		土鈴（力士 立像 腕ヶ谷?、童子 革先?）	
3145	上層（ガラ）		磁器（紅皿、筒碗、肥前系染付 丸碗 コンニャク印、皿、筒碗 くらわんか手）陶器（火鉢 稜縁、土瓶 刷毛手）須恵器（蓋?）中国磁器（白磁 碗）瓦（丸瓦）土師質土器（火鉢 黒、火消壷 黒、メンゲ 方形 赤、七輪 赤、目皿 赤、豆（台）状土器 鍔付き 円形「長衛門」印,ヘラ描き「平」,ヘラ描き 型に「中」）、土師器（皿）	土鈴（布袋）、土人形	江戸末 寛〇に先行
3145			磁器（肥前系染付 猪口碗、広東碗、小杯）、土師質土器（火消壷 黒、十能 大 赤、目皿 赤 小、黒 小 焼記、豆（台）状土器 円形 印「長衛門」（崩し字）,型に「中」印,ヘラ描き「長衛門」,型に「中」）		江戸末
3145	最下層		土師質土器（メゲ 方形 赤黒、豆（台）状土器 円形 鍔付 ヘラ描き 型に「中」?）、瓦（平瓦）	土人形（童子orおぼこ）、土鈴（武者?）	江戸末
3145	人形型			土人形（童子、狆?）、土型（金太郎、恵比須面、力士 立像 中、力士 裸面、寿老人?、雛雛、猫招き、猿助、）	江戸末
3145			土師質土器（火鉢 黒,赤、瓶 焼型 大、焼木鉢 赤）		江戸末
3145	下層		磁器（肥前系染付 鉢 蛇の目内出、広東碗、仏飯）陶器（蓋）、土師器（皿 糸切 内底黒焼、丸坏a 古代末）、銭瓶	土人形（狐、清島?、力士、組武者）、土鈴（子ども三番叟、布袋、力士、鹿鞘）	19世紀前半
3146	下層		土製用具（鞴羽口 〇印）		
3147		1	土師質土器（豆（台）状土器 赤「口長」ヘラ描き）、窯道具（半円 目皿状 赤,黒）		
3153	③			土型（饅頭形 赤）	
3154		10	土師質土器（風呂 方形 灰釉 赤）、瓦質土器（宝珠形宝珠）	土人形（一文人形 組武者 上方産模倣品、武者 大、鯛、狐 豆 分割型、武者 特大）、土型（円形状 風炉の脚部? 裏面に墨に「勝七」印 赤）	近現代

1158		I	軟質陶器（フラスコ形 [illegible]）		
1142		I	土師質土器（涼炉?切り株 型 黒、七輪 型 赤、すり鉢 ミニチュア 赤）磁器（[illegible]）		
1142	下層	I	土師質土器（涼炉?切り株 型 黒、盆（台）状土器 赤 ひし形ヘラ描き）		
1185	1185-①	II		土人形（鳥 レリーフ? 裏面「[illegible]」ヘラガキ）	
1185	1185-②	II		土人形（首人形 下半身 黒）	
1185	1185-③	II		土人形（獅子 黒 レリーフ?）	
1185	1185-④	II		土人形（鳥 レリーフ? 黒）	
1186		II	土師質土器（内耳付き鉢 赤 [illegible]）、煙管（雁首）		
1188		II	土師質土器（鉢 黒 内面スタンプ 内型）	土人形（[illegible]、金太郎 座位）	
1232		II		土人形（[illegible]子? [illegible]）	
1238		II		土人形（[illegible]? 小 [illegible]）	
1283		II	土師質土器（鉢 赤 内面[illegible]）		
1304		II		土人形（[illegible] 立姿 小 一文人形 [illegible]）	
1327		III	土師質土器（土瓶 白 茶釜,山水図書き）	土型（犬 小 [illegible]）	
1328		III	肥前系染付（広東碗）、土師器（皿 内底部「寿」[illegible]）、土師質土器（[illegible]）、[illegible]		江戸末
1329		III	肥前系染付（端反碗、広東碗）、土師質土器（七輪 赤 方形 刻印「長右衛門」印）		江戸末
1330	1層目（炭層）	III	湯飲（化学呉須の染付[illegible]）	土人形（[illegible] 小）	近代
1330	2層目（粘土）	III		土人形（力士 [illegible]）土型（[illegible]）	
1334		III	肥前系染付（[illegible]）、磁器（[illegible]）、陶器（[illegible]）	土人形（[illegible]）、土型（[illegible]）	明治前半
1019 1020			土師器（[illegible]）、磁器（[illegible]）、陶器（[illegible]）、玉（[illegible]）	土人形（[illegible]）	江戸末
1019 1020	上層		肥前系染付（[illegible]）、軟質陶器（[illegible] ままごと道具）、土師器（[illegible]）、土師質土器（七輪 [illegible]）、[illegible]「おつね [illegible]」[illegible]、玉（[illegible]）	土人形（[illegible]）	江戸末
包含層	掘取り2日目中央よりやや西	I		土型（[illegible]）、土人形（[illegible]）、[illegible]	
包含層	掘取り1日目	I		土型（[illegible]）、土人形（[illegible]）、玉（[illegible]）	
包含層	掘取り 南東陶磁器群		土師器（印入り [illegible] 内底部「博多 [illegible]」印）		近代
包含層	H区1面表土はぎ	II		軟質陶器（皿 ままごと道具 二彩、[illegible] 二彩）	
土坑	人形廃棄土坑（北側）	I		土人形（金太郎?、[illegible]）	
土坑	人形廃棄土坑 3層	I		土人形（[illegible]）	
包含層	b-8 1〜2面包含層	II		土人形（[illegible]人形?）	
包含層	南西隅 カクラン	III		土人形（恵比寿 黒）	
包含層	カクラン①	III		土人形（[illegible] 小、首人形 [illegible]）	
包含層	カクラン1①下層	I	磁器（[illegible]、黄色の[illegible]）	土人形（西行法師?）	
包含層	カクラン2	I	顔料（[illegible] コバルト）		
包含層	カクラン7	I	土師質土器（[illegible] 赤）		

SK1135 盆（台）状土器
長右衛門印

SK1075 南側 盆（台）状土器
笠に中

SK1145 メゲ

SK1142 切り株涼炉型

SK1019 波口七輪型

SK1075 土人形 伏見肥後系土人形

SK1334 中ノ子系土人形

HKT213 SK1334 土人形 中ノ子系 娘顔

SK1334 土人形 中ノ子系 男雛

HKT213 SK1334 土形 中ノ子系 娘（三味線持ち）

SK1334 土人形 中ノ子系 童もの（鯛抱き？）

HKT213 SK1334 土形 中ノ子系 覆面女

SK1334 土型 力士 金太郎

SE1059 差し首式人形 学生（近代）

土型と製品 長太郎人形

童もの 差し首式（近代）

土型 寿老人？（近代）

土型 首人形 老人後頭部

SK1043 レリーフ 乃木希典と東郷平八郎（近代）

1．窯 1・4・7（西から）

2．窯 1・4・7（南から）

3．窯 4 検出状況（南東から）

4．SK1075（北西から）

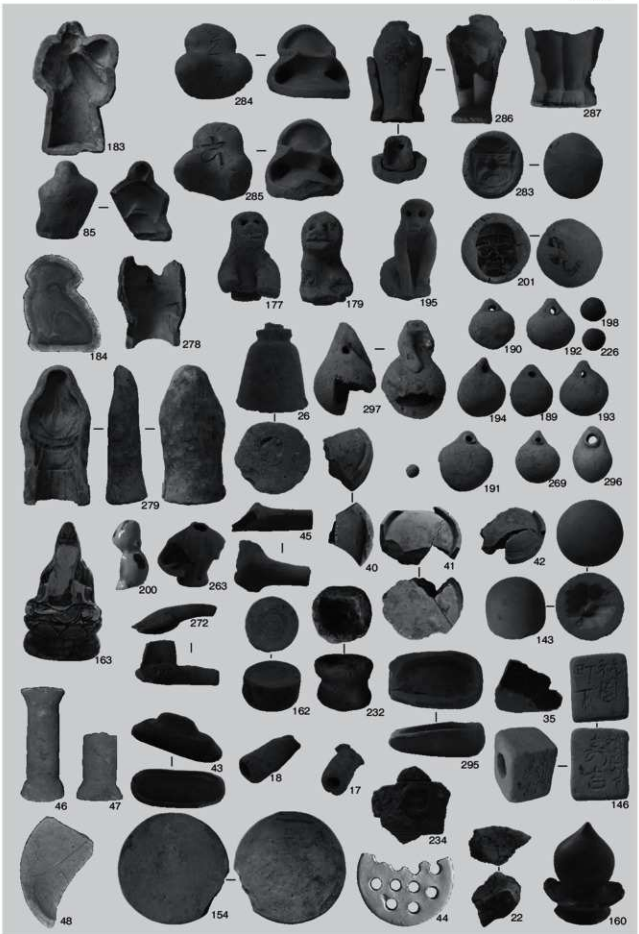
5．灰原 1 土層（南から）

6．素焼き人形検出状況（東から）

7．素焼き人形・雑器検出状況（西から）

図版2

近世の出土遺物1（土人形）



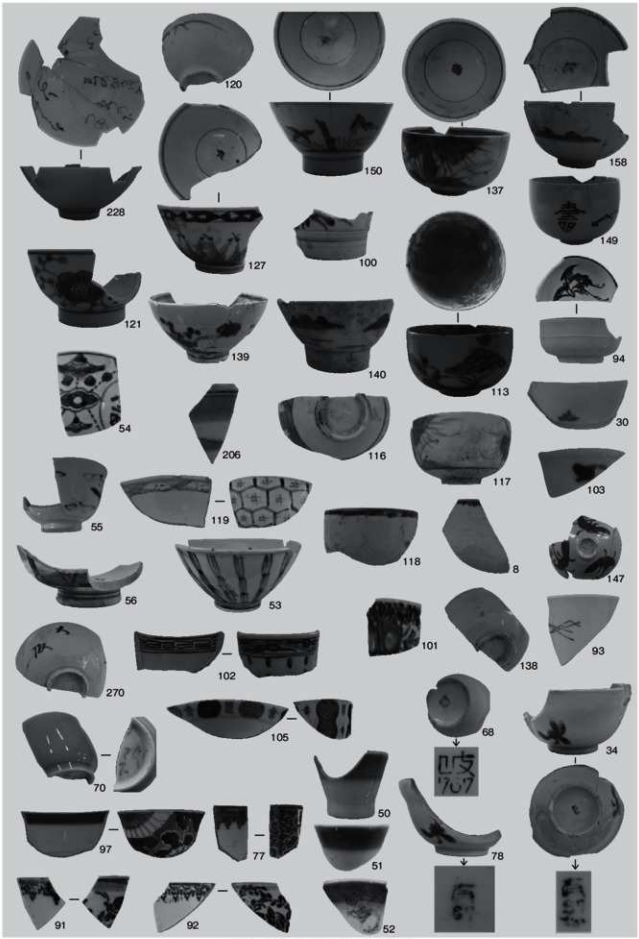
近世の出土遺物２（土人形、土型、磁器人形、窯道具ほか）

図版4

近世の出土遺物3（土師質土器、瓦質土器、陶器）

近世の出土遺物4（陶器、磁器）

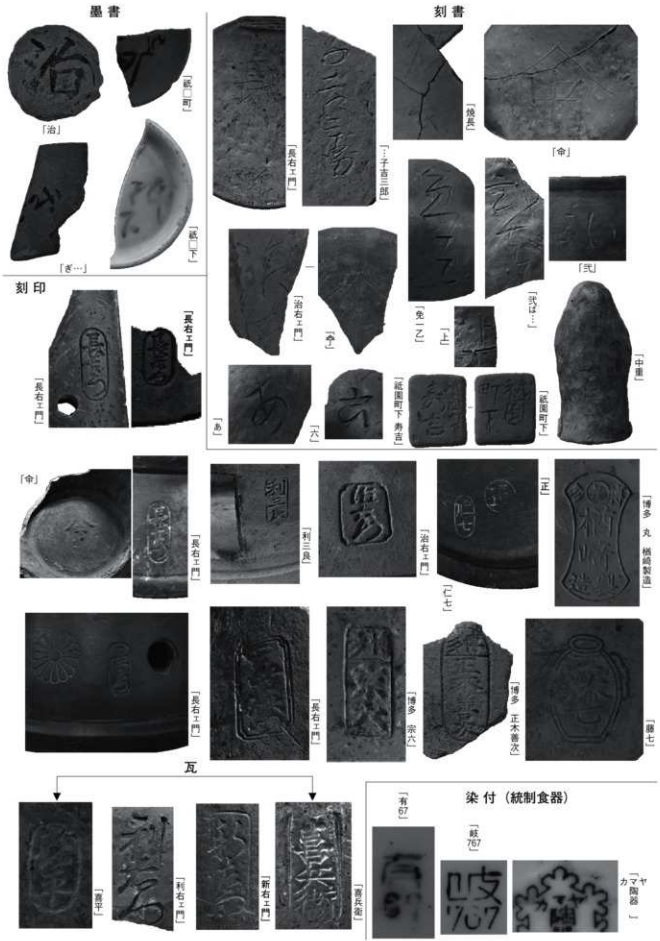
図版6



近世・近代の出土遺物1（磁器）

近世・近代の出土遺物２（磁器、石製品、ガラス製品、瓦）

図版8



窯関連出土文字資料

1.SE2129 井筒内（北西から）

2.SE2448（北から）

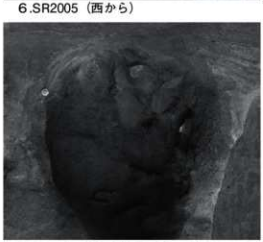
3.SK2070（北東から）

4.SK2091（西から）

5.SK3322（北から）

6.SR2005（西から）

7.SE2189 視出土状況（南西から）



8.SE2257 井筒内獣骨（南から）

図版１０

1.SK2317（北から）

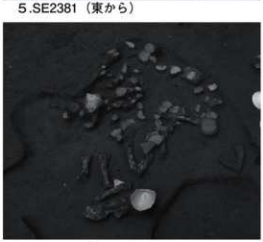
2.SK3030 北半部（西から）

3.SD1149（西から）

4.SD3001（西から）

5.SE2381（東から）

6.SK2026 土層断面（北西から）



7.SK2335（東から）

8.SK3387 馬頭骨出土状況（南東から）

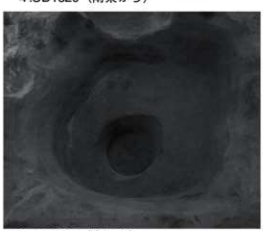
1.SX2487 土器溜まり（北東から）

2.SX2457 西半部（北東から）

3.SD1320（南西から）

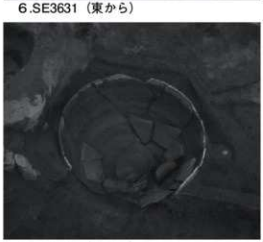
4.SD1320（南東から）

5.SD1398（南から）



6.SE3631（東から）

7.SK2201（東から）



8.SK3198（西から）

図版１２

中世の出土遺物

1.SC4163（東から）

2.SE3059 上層（3008）（南東から）

3.SE3058・3059（北西から）

4.SK3259（西から）

5.SK3342（西から）

6.SO2136（南西から）

7.SK4062 土器出土状況（東から）

8.ST4143（北東から）

図版１４

図 63-57

図 74-148

図 74-153

図 74-160

図 74-177

図 75-181

図 74-171

図 83-232

図 85-247

図 88-6

図 88-7

図 88-10

報 告 書 抄 録

ふりがな	はかた 192
書名	博多 192
副書名	―博多遺跡群第 213 次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1480 集
編著者名	松﨑友理
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号　　TEL 092-711-4667
発行年月日	2023 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群第 213 次	ふくおかけんふくおかしはかたくれいせんまち 福岡県福岡市博多区冷泉町 68 ばん 1、75 ばん 3、75 ばん 4、76 ばん、77 ばん、78 ばん、79 ばん、114 ばん、114 ばん 2 68 番 1、75 番 3、75 番 4、76 番、77 番、78 番、79 番、114 番、114 番 2	40134	0121	33° 35' 36"	130° 24' 44"	20170605 ～ 20180605	871	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群第 213 次	集落	弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世・近代	窯跡・住居・井戸・土坑・溝・墓	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、陶器、素焼き製品、瓦、青銅製品、鉄製品、ガラス製品、人骨、獣骨	縄文土器、甕棺、石剣、青銅製蛇尾、丸鞆、陶磁器犬人形、窟塼塔、素焼き人形

要　約	本調査地は博多遺跡群の南西部に位置する。幕末～明治にかけては博多人形の源流をつくった「中ノ子家」の地所であり、標高 4.0m の暗褐色土（1 面目）では素焼製品を焼いたと考えられる窯跡が計 7 基検出され、七輪や火鉢、素焼人形などの製品も多数出土した。標高 3.7m 前後の暗褐色砂質土（2 面目）では 12~14 世紀代の遺構が多く、南東側では区画溝と考えられる L 字状の溝、南西側では黄褐色粘土による基壇状の高まりを検出した。北東側では赤色顔料が塗布された 7 世紀前半の小石室を 1 基確認した。標高 3.5m 前後の暗褐色砂（3 面目）では、古代の井戸や土坑、住居などを検出した。標高 3.0~3.2m で博多遺跡群の基盤層となる砂丘砂層（4 面目）になり、古墳時代前期の土坑や弥生時代前記後半の甕片や中期の甕棺片、石剣などを検出した。

博多192

－博多遺跡群213次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1480集

2023年3月23日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷　末松印刷株式会社
福岡市博多区東那珂2丁目4-36